佐倉市松向作遺跡

-- 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX --

1992

千葉県土地開発公社財団法人千葉県文化財センター

佐倉市松向作遺跡

--- 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX ---

1 9 9 2

千葉県土地開発公社財団法人 千葉県文化財センター



松向作遺跡周辺の航空写真



千葉県北部に位置する印旛沼の周辺は、豊かな水と肥沃な土地を背景に古代から現代 にいたるまですぐれた文化を育んできました。佐倉市は印旛沼の南に位置し、ここに注 ぐ大小の河川が市内を流れており、自然環境に恵まれた地域といえます。このため、市 内では古くから多数の遺跡の存在が知られていました。

佐倉市はまた臨海工業地帯に隣接し、新東京国際空港にも近く、道路網も整備された地理的にも恵まれた地域で、工業団地の建設地としても有利な条件を備えています。このため、第一・第二の工業団地の建設が行われ、さらに千葉県土地開発公社によって第三工業団地の建設が計画されました。工事に先立ち千葉県教育委員会は予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて千葉県土地開発公社はじめ、佐倉市教育委員会等関係機関と協議を重ねました。その結果、公園等として古墳をはじめとする埋蔵文化財をできる限り保存するよう努力しましたが、やむをえない部分については発掘調査を行って記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は当文化財センターが担当することになり、昭和50年度と昭和54年度から昭和60年度にかけて実施いたしました。

この度、昭和59年度から昭和60年度に発掘調査を実施した松向作遺跡の整理作業を終了し、報告書を刊行することとなりました。松向作遺跡では旧石器時代から古墳時代にわたる遺構・遺物が発見されましたが、その中心は古墳23基と南東斜面に立地する古墳時代の集落で、この地域の古代の人々の文化や生活の解明に貴重な資料を得ることができました。本書が学術資料としてはもとより文化財の保護と理解のため広く活用されることを願ってやみません。

終わりに千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会をはじめとする 関係諸機関の皆様の御指導と御協力に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査から整理 作業にいたるまで御協力をいただいた調査補助員の皆様に心から感謝いたします。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター 理事長 岩瀬良 三

凡 例

- 1. 本書は千葉県佐倉市芳筰 2 丁目(旧地番佐倉市莞辺字松 筒 祚・ 箇弥字笠堂) に所在する松 向作遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は佐倉第三工業団地建設に先立ち、千葉県教育委員会の指導の下に(財)千葉県文化 財センターが実施した。本調査面積は18,700㎡である。また、保存区域となった11,000㎡ については試掘調査を行った。
- 3. 調査で使用した遺跡のコード番号は212-023、212-033(保存区域)である。
- 4. 現地の調査は昭和59(1984)年度と昭和60(1985)年度に実施した。調査の期間は昭和59(1984)年10月3日〜昭和60(1985)年3月26日、昭和61(1986)年1月6日〜3月28日である。

昭和59(1984)年度は調査部長鈴木道之助、調査部長補佐岡川宏道の指導の下に班長矢戸三男、調査員雨宮龍太郎、同蔀淳一、同小畑巌が担当した。また昭和60(1985)年度は調査部長鈴木道之助、調査部長補佐岡川宏道の指導の下に班長矢戸三男、調査員石倉亮治が担当した。

- 5.整理作業は昭和61(1986)年度、平成元(1989)年度から平成3(1991)年度にわたって行った。整理作業及び本書の編集は調査部長堀部昭夫、調査部長天野努(平成3年度)、部長補佐阪田正一、班長谷 旬の指導のもと主任技師山口典子、技師田島新が行った。作業及び執筆分担は山口(第1章、第2章第1節~第4節、第4章第1節1・2)、田島(第1章第5節~第6節・第7節1~2b、第3章、第4章第1節3・第2節)、四柳隆(第7節2a)である。
- 6. 第1図で使用した地形図は国土地理院発行の50,000分の1地形図「佐倉」「成田」「千葉」 「東金」である。
- 7. 図版1で使用した航空写真は(株)京葉測量が撮影(1972年)したものである。
- 8. 発掘調査から本書の作成に至るまで、千葉県土地開発公社、千葉県教育庁生涯学習部文化 課、佐倉市教育委員会の関係各位の御指導と御協力を得た。ここに謝意を表します。

目 次

· 人	
凡例	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 松向作遺跡の立地と周辺の環境	1
第3節 調査の概要	5
第2章 上層の遺構と遺物	7
第1節 はじめに	7
第2節 古 墳	8
1. 遺 構	8
2. 遺 物	28
第 3 節 土壙墓	36
1. 遺 構	36
2. 遺 物	39
第 4 節 竪穴住居	10
1. 遺 構	10
2. 遺 物	53
第 5 節 溝状遺構····································)1
第6節 陥し穴・土坑・炭窯)4
1. 陥し穴)4
2. 土 坑	19
3. 炭 窯10)2
第7節 遺構外出土の遺物10)2
1. 縄文時代以降10	12
2. 縄文時代10	13
a. 土 器 ·······10)3

b. 石 器 ·······113
育3章 下層の遺構と遺物 ·······121
第1節 A地点·B地点·地点外 ······123
9.4章 まとめ ⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯132
第1節 上層の遺構と遺物132
1. 古墳・土壙墓132
2. 竪穴住居135
3. 溝状遺構・陥し穴等137
第 2 節 下層の遺構と遺物 ·······137

挿 図 目 次

第 1 図	松向作遺跡位置図2	第 30 図	竪穴住居00241
第 2 図	遺跡周辺の地形4	第 31 図	竪穴住居00343
第 3 図	グリッド分割図5	第 32 図	竪穴住居00444
第 4 図	遺構配置図6	第 33 図	竪穴住居00545
第 5 図	凡例7	第 34 図	竪穴住居00647
第 6 図	古墳0019	第 35 図	竪穴住居00748
第7図	古墳022 • 024 • 030·····11	第 36 図	竪穴住居008竈49
第 8 図	古墳031 • 033 ······13	第 37 図	竪穴住居00850
第 9 図	古墳032 • 038 • 039······15	第 38 図	竪穴住居009遺物出土状態51
第 10 図	古墳040 • 041 • 050·····16	第 39 図	竪穴住居00952
第 11 図	古墳051 • 052 ······18	第 40 図	竪穴住居01153
第 12 図	古墳054 • 055 • 05619	第 41 図	竪穴住居012遺物出土状態54
第 13 図	古墳06021	第 42 図	竪穴住居012竈54
第14図	古墳060遺物出土状態22	第 43 図	竪穴住居01255
第 15 図	古墳060埋葬施設23	第 44 図	竪穴住居017遺物出土状態56
第 16 図	古墳060遺物出土状態24	第 45 図	竪穴住居01557
第 17 図	保存区域遠景25	第 46 図	竪穴住居01758
第 18 図	001号墳近景25	第 47 図	竪穴住居01860
第 19 図	001・002号墳26	第 48 図	竪穴住居01961
第 20 図	003・004・005号墳27	第 49 図	竪穴住居02362
第 21 図	古墳001・022・024・031・032	第 50 図	竪穴住居002出土遺物(1)63
	出土遺物29	第 51 図	竪穴住居002出土遺物(2)64
第 22 図	古墳033・038・039・050・051・054	第 52 図	竪穴住居003遺物出土状態65
	出土遺物31	第 53 図	竪穴住居003出土遺物66
第 23 図	古墳060出土土器33	第 54 図	竪穴住居004遺物出土状態67
第 24 図	古墳060出土鉄製品・青銅製品…34	第 55 図	竪穴住居004出土遺物(1)68
第 25 図	古墳060出土玉類35	第 56 図	竪穴住居004出土遺物(2)69
第 26 図	土壙墓028・03537	第 57 図	竪穴住居005出土遺物(1)71
第 27 図	土壙墓057 • 058 ······38	第 58 図	竪穴住居005出土遺物(2)72
第 28 図	土壙墓028·035出土遺物 ······39	第 59 図	竪穴住居006出土遺物74
第 29 図	竪穴住居002遺物出土状態40	第 60 図	竪穴住居006・007出土遺物75

第 61 図	竪穴住居008遺物出土状態76	第 93 図	縄文土器拓影図(6)112
第 62 図	竪穴住居008出土遺物(1)77	第 94 図	縄文土器拓影図(7)113
第 63 図	竪穴住居008・009出土遺物78	第 95 図	縄文時代石器分布114
第 64 図	竪穴住居011・012出土遺物79	第 96 図	縄文時代中グリッド出土遺物(1)…115
第 65 図	竪穴住居012出土遺物80	第 97 図	縄文時代中グリッド出土遺物(2)…116
第 66 図	竪穴住居015出土遺物(1)82	第 98 図	縄文時代中グリッド出土遺物(3)…117
第 67 図	竪穴住居015出土遺物(2)83	第 99 図	縄文時代大グリッド出土遺物(1)…117
第 68 図	竪穴住居015出土遺物(3)84	第100図	縄文時代大グリッド出土遺物(2)…118
第 69 図	竪穴住居017出土遺物(1)86	第101図	縄文時代大グリッド出土遺物(3)…119
第 70 図	竪穴住居017出土遺物(2)87	第102図	縄文時代大グリッド出土遺物(4)…120
第71図	竪穴住居018出土遺物(1)88	第103図	旧石器時代A地点遺物出土状況…122
第72図	竪穴住居018出土遺物(2)89	第104図	旧石器時代B地点遺物出土状況…122
第73図	竪穴住居019・023出土遺物90	第105図	旧石器時代A地点出土遺物(1)…123
第74図	溝状遺構010 • 013 • 020······92	第106図	旧石器時代A地点出土遺物(2)…124
第 75 図	溝状遺構010 • 020出土遺物 ·····93	第107図	旧石器時代B地点出土遺物(1)…124
第 76 図	長・幅・長幅比による陥し穴の比較…95	第108図	旧石器時代B地点出土遺物(2)…125
第77図	佐倉第三工業団地内遺跡群の陥し	第109図	旧石器時代地点外出土遺物125
	穴分布95	第110図	佐倉第三工業団地周辺地形及び遺
第 78 図	陥し穴の検出された主な遺跡 …96		跡分布126
第 79 図	陥し穴の長幅分布96	第111図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土有
第80図	陥し穴044A・021・01697		舌尖頭器及び関連遺物126
第81図	陥し穴04398	第112図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖
第82図	土坑026•027•029•034•036100		頭器(1)127
第83図	土坑042 • 059 A • 061 • 062、	第113図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖
	炭窯025・044B・059B101		頭器(2)128
第84図	遺構外出土土器102	第114図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ
第85図	縄文土器分布状況(1)104		イフ形石器(1)129
第86図	縄文土器拓影図(1)105	第115図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ
第 87 図	縄文土器拓影図(2)106		イフ形石器(2)・・・・・・130
第88図	縄文土器拓影図(3)107	第116図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ
第89図	縄文土器分布状況(2)108		イフ形石器(3)131
第 90 図	縄文土器拓影図(4)109	第117図	佐倉第三工業団地内の古墳・土壙墓
第 91 図	縄文土器拓影図(5)110		133
第 92 図	縄文土器分布状況(3)111		

表 目 次

第	1	表	検出遺構一覧140		176
第	2	表	遺構計測表140	第 11 表	縄文時代大グリッド出土遺物属性
第	3	表	古墳060金属製品計測表142		177
第	4	表	土壙墓035鉄鏃計測表143	第 12 表	旧石器時代A地点出土遺物属性…178
第	5	表	玉類計測表144	第 13 表	旧石器時代 B地点出土遺物属性…178
第	6	表	土器観察表145	第 14 表	旧石器時代地点外出土遺物属性…178
第	7	表	出土土器破片数一覧172	第 15 表	佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖
第	8	表	佐倉第三工業団地内遺跡及び関連		頭器179
			遺跡の陥し穴174	第 16 表	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ
第	9	表	陥し穴の長幅比分布175		イフ形石器179
第	10	表	縄文時代中グリッド出土遺物属性	第 17 表	佐倉第三工業団地内検出古墳…180
			w u⊏		
			図版	目 次	
巻	首	図版	1.松向作遺跡周辺の航空写真	図版 10	1.土壙墓035 2.土壙墓057
			2.松向作遺跡全景		3.土壙墓058
図	版	1	松向作遺跡周辺の航空写真	図版 11	1.竪穴住居002 2.竪穴住居002
図	版	2	松向作遺跡全景		3.竪穴住居003
义	版	3	1.遠景 2.近景 3.近景	図版 12	1.竪穴住居004 2.竪穴住居004
図	版	4	1.古墳001 2.古墳001		3.竪穴住居005
			3.古墳001	図版 13	1.竪穴住居006 2.竪穴住居006
図	版	5	1.古墳022 2.古墳032		3.竪穴住居007
			3. 古墳033	図版 14	1.竪穴住居008 2.竪穴住居009
図	版	6	1.古墳038・039 2.古墳040		3.竪穴住居015
			3.古墳041	図版 15	1.竪穴住居011 2.竪穴住居018
図	版	7	1.古墳050 2.古墳051		3.竪穴住居019
			3.古墳052	図版 16	1.陥し穴016 2.陥し穴021
図	版	8	1.古墳054 2.古墳055		3.陥し穴043
			3.古墳056	図版 17	1.陥し穴044A・土坑044B
図	版	9	1.古墳060 2.古墳060		2.炭窯025 3.土坑026
			3.古墳060	図版 18	1.土坑027 2.土坑029

	3. 土坑034	図版 43	竪穴住居015出土土器
図版 19	1.土坑036 2.土坑042	図版 44	竪穴住居017出土土器(1)
	3.土坑059A · 炭窯059B	図版 45	竪穴住居017出土土器(2)
図版 20	1.土坑062 2.旧石器時代A地点	図版 46	竪穴住居017・018出土土器
	3.旧石器時代B地点	図版 47	竪穴住居018・023、溝状遺構020、
図版 21	1.古墳出土土器		遺構外出土土器
	2. 古墳060出土土器	図版 48	竪穴住居018・019、溝状遺構010出
図版 22	1.竪穴住居002出土遺物		土土器
	2.竪穴住居003出土遺物	図版 49	古墳039 · 060 · 051、土壙墓028、
図版 23	1.竪穴住居004出土遺物		竪穴住居002出土玉類•石製品
	2.竪穴住居005出土遺物	図版 50	古墳060出土金属製品
図版 24	1.竪穴住居006出土遺物	図版 51	1.古墳032、土壙墓035、竪穴住居
	2.竪穴住居008出土遺物		008·015出土鉄製品
図版 25	1.竪穴住居015出土遺物		2.竪穴住居004・009・015、溝状
	2.竪穴住居017出土遺物		遺構010出土土製品類
図版 26	古墳022 • 031 • 032 • 033 • 039 • 054	図版 52	縄文土器(1)
	出土土器	図版 53	縄文土器(2)
図版 27	古墳038 · 051 · 060出土土器	図版 54	縄文土器(3)
図版 28	竪穴住居002出土土器	図版 55	縄文土器(4)
図版 29	竪穴住居002出土遺物	図版 56	縄文土器(5)
図版 30	竪穴住居003出土土器	図版 57	1.旧石器時代A地点出土遺物
図版 31	竪穴住居004出土土器(1)		2.旧石器時代B地点出土遺物
図版 32	竪穴住居004出土土器(2)	図版 58	1.旧石器時代地点外出土遺物
図版 33	竪穴住居004・005出土土器		2.縄文時代中グリッド出土遺物(1)
図版 34	竪穴住居005出土遺物	図版 59	1.縄文時代中グリッド出土遺物(2)
図版 35	竪穴住居005出土土器		2.縄文時代大グリッド出土遺物(1)
図版 36	竪穴住居006出土土器(1)	図版 60	1.縄文時代大グリッド出土遺物(2)
図版 37	竪穴住居006出土土器(2)		
図版 38	竪穴住居007・008出土土器		
図版 39	竪穴住居008出土土器		
図版 40	竪穴住居009・011・012出土土器		

図 版 41 竪穴住居012・015出土土器(1) 図 版 42 竪穴住居012・015出土土器(2)

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

松向作遺跡の発掘調査は千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地建設に伴い実施したものである。工事に先立ち、千葉県教育委員会は事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会と慎重に協議を行い、公園用地として遺跡を現状で保存する一方、やむを得ない部分は発掘調査による記録保存の措置を講ずることにした。発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもとに当文化財センターが実施することになった。

発掘調査は昭和50(1975)年度の星谷津遺跡の調査に始まり、一時中断した後昭和54(1979)年度から昭和60(1985)年度まで継続して行われた。発掘作業に並行して整理作業も行い、昭和53(1978)年度に刊行した『佐倉市星谷津遺跡』を1冊目として平成2(1990)年度に刊行した『佐倉市栗野 I・II遺跡』まで、12遺跡について8冊の発掘調査報告書にまとめ、刊行している。

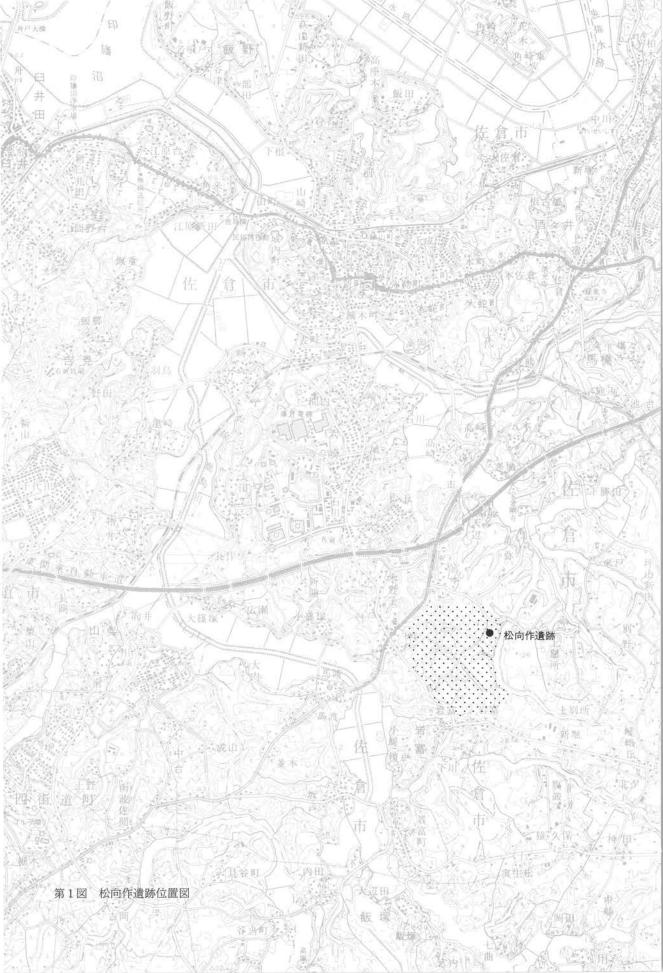
第2節 松向作遺跡の立地と周辺の環境 (第1・2図、巻首図版1)

千葉県北部には下総台地という標高20~30mの起伏の緩やかな広大な台地が広がり、その北には印旛沼や手賀沼、霞ヶ浦等の湖沼が存在する。印旛沼は千葉県内最大の湖沼で、周辺には各時代にわたる多数の遺跡が存在し、特徴ある文化圏を作っている。

佐倉市はこの印旛沼の南岸に位置する。市内を貫流する鹿島川・手繰川といった大小の河川は下総台地を樹枝状に開析しながら印旛沼に注いでいる。そして印旛沼に直接面した台地上にはもちろんのこと、これら河川や支流によって開析された谷に面した台地の上には数多くの遺跡の存在が確認されている。鹿島川はなかでも最大の河川で、水源の千葉市の土気付近から佐倉市内を北上し、富里町を水源とし市内を東から西に流れてきた高崎川と佐倉市街で合流して印旛沼へと注ぐ。鹿島川は水源付近が分水嶺にあたり、東京湾へ注ぐ都川などと接し、東京湾岸と印旛沼周辺地域を結ぶ古代の交通路として重要な位置を占めていたと考えられる。下流には江原台遺跡、吉見台遺跡、大崎台遺跡といった各時代の著名な遺跡が多数存在する。

松向作遺跡は印旛沼から約8.5km南の鹿島川中流の右岸の台地上にある。ここは鹿島川の支流に南を分断され、高崎川の支流によって東西を囲まれた大きな台地の一角にあたる。台地は小支谷によってさらにいくつかの独立した台地に分かれ、旧石器時代から中世に至るまでの各時代の遺跡が確認されて台地ごとに特色ある遺跡を検出している。周辺では現在のところ、鹿島川下流や印旛沼周辺に大集落を形成した時期である弥生時代から古墳時代の前期の遺跡については分布が稀薄である。

松向作遺跡は南北に細長い台地で、南側は立山遺跡である。立山遺跡の西が大作遺跡、大作 遺跡の南東、立山遺跡と小支谷をはさんだ台地上が池向遺跡である。また小支谷をはさんだ西



側は栗野I遺跡で、東西に長い半島状の台地に立地する。このようにこの地域一帯は佐倉第三工業団地建設に伴う発掘調査により、旧石器時代から歴史時代の各時代の遺構・遺物が多数検出され、それぞれの台地ごとに特色ある遺跡が存在することが明らかとなった。これら周辺の遺跡については既に刊行された発掘調査報告書に詳しいが、松向作遺跡で主体となる古墳時代を中心に周辺の調査された遺跡について概要を記しておく。

立山遺跡 松向作遺跡の南に位置する。円墳14基と方墳18基、土壙墓11基を検出した。古墳時代の竪穴住居は検出していない。南北に並ぶ円墳と方墳はそれぞれまとまりをもち、底面に長軸と直交する溝をもつ土壙墓4基、長軸の一方を横穴状に掘り込む土壙墓7基がこの間に点在する。6世紀以降の古墳が中心で、埋葬施設を複数検出したものが多い。埋葬施設は土壙墓が中心で墳丘裾に位置するもののほか周溝外壁を掘り込むものがある。また切石積みの箱形石棺をもつものが1基ある。

大作遺跡 立山遺跡の西に広がる。円墳45基、方墳8基、土壙墓8基を検出した。古墳時代の竪穴住居は検出していない。古墳は台地の中央を南北に並ぶ。6世紀以降の古墳が中心であるが5世紀に溯るものも数基ある。土壙墓は直刀・鉄鏃・玉類を出土したもの1基のほかに、横穴状に掘り込むものが7基ある。

栗野 I 遺跡 古墳 5 基と土壙墓60基を検出した。古墳は円墳 3 基と方墳 1 基、帆立貝形前方後 円墳 1 基である。古墳時代の竪穴住居は 2 軒検出した。古墳は 6 世紀末から 7 世紀の古墳が中 心で複数の埋葬施設をもつものが多く、墳丘裾のほかに周溝に内接または外接する土壙が多い。 帆立貝形前方後円墳の埋葬施設は雲母片岩の板石を使用した箱形石棺である。土壙墓は形態と 内容から大きく 3 種類に分けられる。大作遺跡で検出した古墳の主体部と内容的には変わらな いが外部施設がないもの(3 基)、長方形に掘り込み底面に長軸と直交する溝が数条掘られるも の(2 基)、横穴状に掘り込むもの(55基)がある。周辺の遺跡では土壙墓は古墳の間に点在す るが本遺跡では台地の縁辺部に多数がまとまっていたのが特徴である。

参考文献

『佐倉市星谷津遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1978

『佐倉市立山遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1983

『佐倉市タルカ作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1985

『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1987

『佐倉市腰巻遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1987

『佐倉市向原遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1989

『佐倉市大作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1990

『佐倉市栗野 I・II遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1991



第3節 調査の概要(第3図)

松向作遺跡は佐倉市大作2丁目(旧地番天辺字松向作・直弥字立山)に所在する。発掘調査は昭和59(1984)年度(昭和59年10月3日〜昭和60年3月26日)と昭和60(1985)年度(昭和61年1月6日〜3月28日)の2年度にわたって行われた。本調査面積は18,700㎡である(昭和59年度14,700㎡、昭和60年度4,000㎡)。また、南東の11,000㎡は保存区域で、試掘調査を実施した。調査は北側と南側、保存区域の大きく3つに分けて行われた。

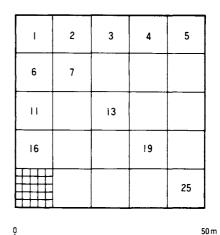
昭和59年度はまず北側の30,800㎡について確認調査を実施した。確認調査では2m×8mのトレンチを設定し、上層10%の確認調査と当初から存在のわかっていた古墳001の本調査を実施した。また下層については2m×2mのグリッドを設定して4%の確認調査を行った。この確認調査の結果に基づき、上層は14,700㎡の本調査をひき続き行い、この結果古墳11基、土壙墓2基、竪穴住居15軒、陥し穴4基、溝状遺構3条、土坑7基、炭窯3基を検出した。また、上層の本調査終了後、旧石器時代についても確認調査で遺物を出土したグリッドを拡張して本調査を行った。この結果、遺物集中箇所2地点を検出した。

翌年度は南側の4,000㎡の本調査を実施し、古墳8基(このうち2基は一部を前年度に調査)、 土壙墓2基を検出した。下層は確認調査を実施したが遺構・遺物は発見されなかった。

またこの調査と並行して東側の保存区域11,000m%について試掘調査を実施した。この結果、 古墳6基の存在を確認した。

mの25個に分割し、西から東に $1\sim 25$ の番号を付して中グリッドとし、これををさらに $2 m \times 2 m$ の25個の小グリッドに分割してやはり西から東に $1\sim 25$ の番号を付した(第 3 図)。中グリッドと小グリッドの名称は大グリッドの名称と組み合わせてイ1-2-3、12-3-4 …とした。

整理作業は昭和61(1986)年度に遺物の水洗・注記等の基礎整理、平成元(1989)年度に図面整理の一部と遺物の復元作業、平成2(1990)年度に原稿執筆までの残りの作業を行い、平成3(1991)年度に報告書刊行までの作業を終了した。



第3図 グリッド分割図



第2章 上層の遺構と遺物

第1節 はじめに (第4・5回、巻首図版2、図版2・3)

検出した上層の遺構は古墳23基、土壙墓4基、竪穴住居15軒、陥し穴4基、溝状遺構3条、 土坑7基、炭窯3基である。古墳は台地平坦部に南北に並んで占地し、南の立山遺跡へと続く。 竪穴住居はいずれも古墳時代後期に属し、東側の台地肩部から斜面にまとまっている。

南東部は公園として保存されるためこの範囲に位置する遺構については本調査を実施していない。したがって古墳23基のうち5基は周溝の試掘調査、また、半分が保存区域にかかる5基は保存区域内は周溝の試掘調査、保存区域外は本調査を実施した。また調査区北端の事業区域外にかかる部分についても一部調査を行っていない遺構がある。調査コードは212-023と212-031(保存区域)を使用した。

遺構・遺物の説明は遺構の種類ごとに古墳・土壙墓・竪穴住居・溝状遺構・陥し穴・土坑・ 炭窯の順で行う。

遺構番号は遺構の種類に関係なく通し番号となっており、調査時に使用したものを使用することを原則としたが、調査時に遺構番号を付していないものについては新たに続きの番号を付した。また、保存区域の古墳は調査時に1号墳から5号墳の名称を北から順番に付けている。これについては検出遺構一覧(第1表)を参照されたい。

遺構の平面規模は確認面で計測したものである。古墳は周溝の内径、土壙墓・竪穴住居・土 坑等は、遺構の中央で交わるよう設定した軸の長さで表した。遺構の計測値は遺構の種類ごと に計測表にまとめた(第2表)。

遺構図の縮尺は竪穴住居1/80、竈1/40、土壙墓1/40、陥し穴・土坑・炭窯1/50で土層断面図・エレベーション図も同じ縮尺である。古墳・溝状遺構は規模により1/50、1/100、1/200、1/300、1/600を用いている。また土層断面図・エレベーション図は平面図の縮尺により違う。

土層断面は黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土 (ローム土混入)・黄褐色土 (ローム土主体)・暗赤褐色土 (焼土混入)・焼土・竈構築材の 7 種類に整理し、これをスクリントーンで区別した (第5図)。この他の混入物については本文中で説明を加えた。

遺物の実測図の縮尺は土器類が1/4、玉類・金属製品が1/2(直刀は1/4)、縄文土器拓影図が1/3、石器類が2/3である。土器は土器観察表、玉類・金属製品は計測表(第3・4・5・6表)を作成した。なお挿図番号は遺物の種類に関係なく遺構ごとの通し番号になっており、出土状況図中の番号、図版番号と一致する。

 黒褐色土
 暗赤褐色土
 ・土 器

 暗褐色土
 焼 土
 ・土製品

 暗黄褐色土
 オマド 構築材
 ・金属製品

 黄褐色土
 *玉 類

 第5図 凡 例

第2節 古 墳

1. 遺 構

検出した古墳は23基である。このうち公園として保存されるものが5基、また保存区域にかかるため一部が保存されるものが5基である。保存されるもについてはトレンチによる周溝の 試掘調査を実施した。

墳丘が遺存し、表土除去前にその存在が判明していたものは古墳001と保存部分の一部の古墳のみで、ほとんどが表土除去後に周溝を検出したことによって確認できたものである。しかし、調査してみると古墳001も旧表土まで削平されており遺存状態が良好な古墳はなかった。

23基のうち円墳は20基、方墳は3基である。また、埋葬施設を検出したのは古墳001(土壙墓) と古墳060(横穴式石室)の2基である。周溝から出土した遺物も僅かで時期が推定できるもの は少ない。

古墳001 (第6図、図版4)

[遺物 P 28]

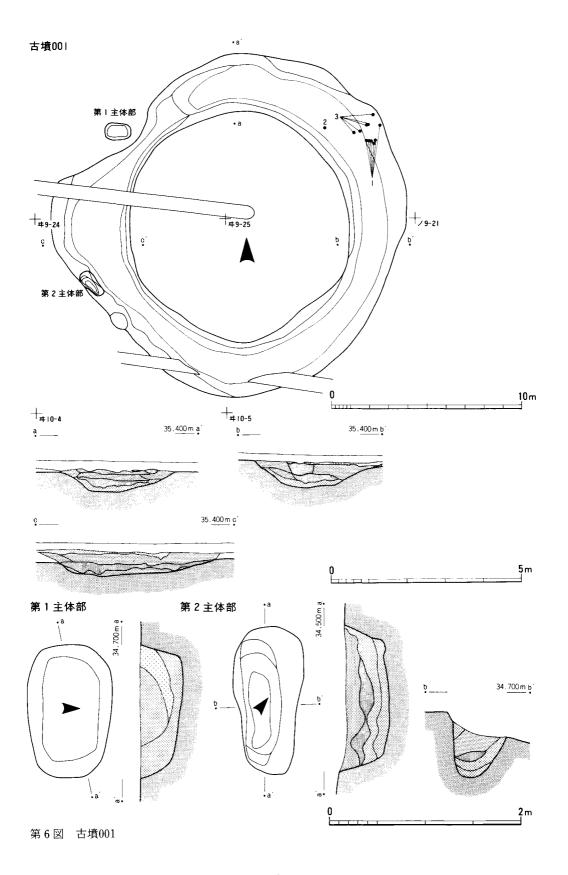
調査区北端で検出した(中9)。僅かな高まりが認められ、当初から古墳の存在は明らかであった。しかし調査した結果、これは耕作の際の二次堆積で、すでにソフトローム面まで削平され盛土は遺存していなかった。中央部と南部に東西に走る溝状の撹乱を受ける。

円墳で内径11.85×11.62mをはかる。周溝の内周はほぼ円形に巡るが、外周は北西部が急に狭くなり不整形である。この部分の外側に土壙墓(第1主体部)を検出し、この制約をうけたものと思われる。周溝の幅は狭いところで1.06m、広いところで4.15mを測る。深さは0.38~0.62m、断面形は高さのない逆台形を呈している。埋土は北東部では下層に暗黄褐色土(ローム粒子が多量に混じる)、その上に黒褐色土(ローム粒子が混じる)・暗褐色土(ローム粒子が混じる)が堆積し、上面に僅かに焼土がのっている。西部では暗褐色土(ローム粒子が混じる)・黒褐色土が堆積している。

遺物は周溝内埋土中より土師器等を約130点出土した。周溝北東部に集中しているが、底面より浮いており、外側から流れ込むような出土状況である。このうち図示できたのは杯1点と甕底部2点である。

埋葬施設は土壙墓2基である。第1主体部は北西部の周溝の外側にある。第2主体部は南西部の周溝内から検出した。周溝外側に接している。

第1主体部は長方形で($1.37\times0.88\times0.45$ m)、長軸は東西を向いている($N-39^\circ-W$)。埋土は暗黄褐色土と黄褐色土を主体としている。第2主体部は不整形な長方形で($1.51\times0.64\times0.45$ m)、長軸が周溝の外周に沿っている($N-102^\circ-W$)。上層に暗褐色土($N-102^\circ-W$)。上層に暗褐色土($N-102^\circ-W$)、下層に暗黄褐色土($N-102^\circ-W$)、下層に暗黄褐色土($N-102^\circ-W$)。が地積する。どちらにも木棺痕は確認できず、副葬品もなかった。



[遺物 P 28]

調査区北東に位置する(オ10)。すでに旧表土面まで削平され、墳丘は遺存していない。表土 除去後周溝を検出し、確認できた。

円墳で内径は10.12×10.40mである。周溝は1.62~2.23mの幅で全周する。内周は正円形に巡るが、外周は西から南西にかけて一部幅が狭くなる。深さは0.15~0.35mで内側の方を僅かに深く掘り込んでいる。壁の立ち上がりは内側、外側とも底面との境が不明瞭である。底面は凹凸があるものの幅がある。上層から中層にかけて黒褐色土(ローム粒子混入、下層ほどローム粒子の割合が多くなる)が堆積し、下層には暗黄褐色土または黄褐色土(ローム粒子主体、しまりがない)が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝内埋土中より土師器が70点余出土した。甕の破片が主体である。いずれも埋土中層から出土しており、底面からは浮いている。このうち杯4点、坩1点、甕底部2点の7点が図示できた。

古墳024 (第7図) [遺物P28]

調査区北東端の台地肩部、古墳022の南東30mの所に位置し(ク11)、東側は谷に面している。 墳丘は確認できず、周溝も、斜面にかかる東半分は遺存していない。

小規模な円墳で周溝遺存部での内径は2.58mである。周溝は浅く、立ち上がりが不明瞭で、幅 $0.43\sim0.47$ m、深さは $0.10\sim0.16$ mである。埋土は1層で黒褐色土(ローム粒子混入)が堆積している。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝内から出土した遺物は2点である。1点は木葉痕を持つ底部の破片で図示した。もう1 点は赤色塗彩した古墳時代後期の土師器の小破片である。どちらも埋土中層から出土し、底面 からは浮いている。

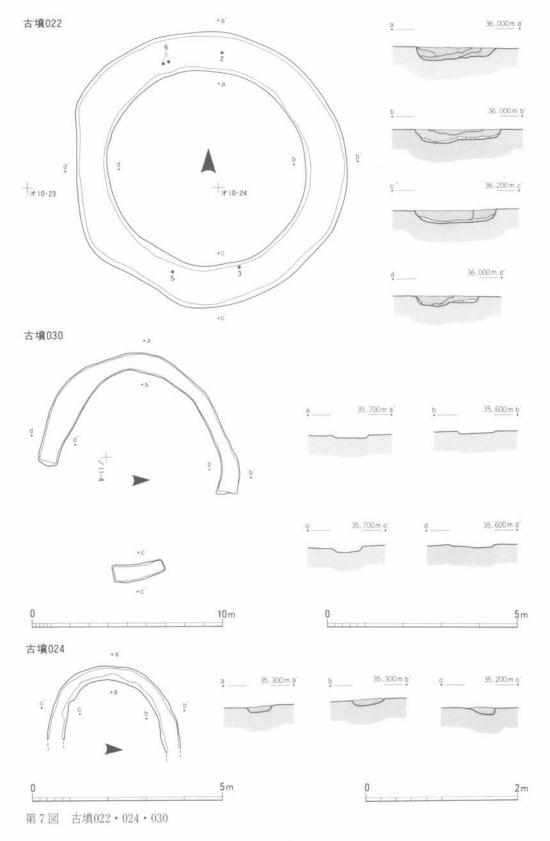
古墳030 (第7図)

調査区北部、古墳022の南西37mに位置する (ノ10・11)。

耕作による撹乱が著しい部分で、墳丘は確認できなかった。検出した周溝は浅く、全周せずに途切れていた。周溝の平面形態は不整形な円形を呈しているが、周溝の遺存状態が悪いため本来の形態を保っているかは検討を要する。規模は確認面で内径 8.51×10.05 mを測る。周溝は立ち上がりが不明瞭で、幅は $0.86 \sim 1.10$ m、深さは $0.04 \sim 0.10$ mである。また、周溝の埋土は再堆積した耕作土である。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝から出土した遺物は50点で $4\sim5$ cm四方の甕の破片が主体であった。底面から浮いており、後世に流れ込んだものと思われる。図示できる遺物はなかった。



古墳031 (第8図) [遺物P28]

古墳030の南東に位置する (ノ11)。南側は保存区域となる。このため北側の周溝は全掘したが、南側は周溝を確認するトレンチをいれた。

円墳で内径は16.20mである。周溝の内周は円形に巡っているが外周は不整形で、特に本調査した南側では幅が最も広いところで9.10mを測る。深さは本調査部分で0.43mである。埋土は最下層に暗黄褐色土(ローム粒子を含む)、中層に黒褐色土(ローム粒子を含む)が堆積する。上層の暗褐色土は表土である。

本調査した部分では埋葬施設は検出しなかった。

本調査部分の周溝内から出土した遺物は多数あり、瓦や陶磁器破片等も混入していた。この ため古墳に伴う遺物がどれであるか判断するのは難しいが、このうち4点が図示できた。

古墳032 (第9図、図版5)

「遺物 P 28]

古墳031の西側に位置する(中11・ノ11)。南側が道路だったため古墳030と同じように遺存状況が悪く、盛土は削平され周溝も浅く、全周しない。平面形態は周溝が遺存する部分では明瞭な角がみられず、不整形な円形であるが検討を要する。規模は推定で内径が7.31mである。周溝は幅0.70~1.29m、深さ0.09~0.23mである。上層に黒褐色土(ローム粒子混入)、下層に暗黄褐色土(ローム粒子混入)が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝内から鉄鏃のほか、須恵器杯身等3点が図示できた。遺存状態もよく底面から出土しており、古墳に伴う遺物と考えられる。この他には土師器小破片2点が出土している。

古墳033 (第8図、図版5)

「遺物 P 30]

古墳032の南側10mの所にある(中11)。墳丘は遺存しないが、周溝は全周する。円墳で、規模は内径が9.62×10.30mを測る。周溝は幅1.30~1.50m、深さ0.29~0.48mである。上層に黒褐色土(ローム粒子・若干のロームブロックが混入)、下層にローム粒子・ロームブロックが混しった黄褐色土または暗黄褐色土が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝内から出土した遺物は少なく4点で、すべて杯である。このうち2点が図示出来た。

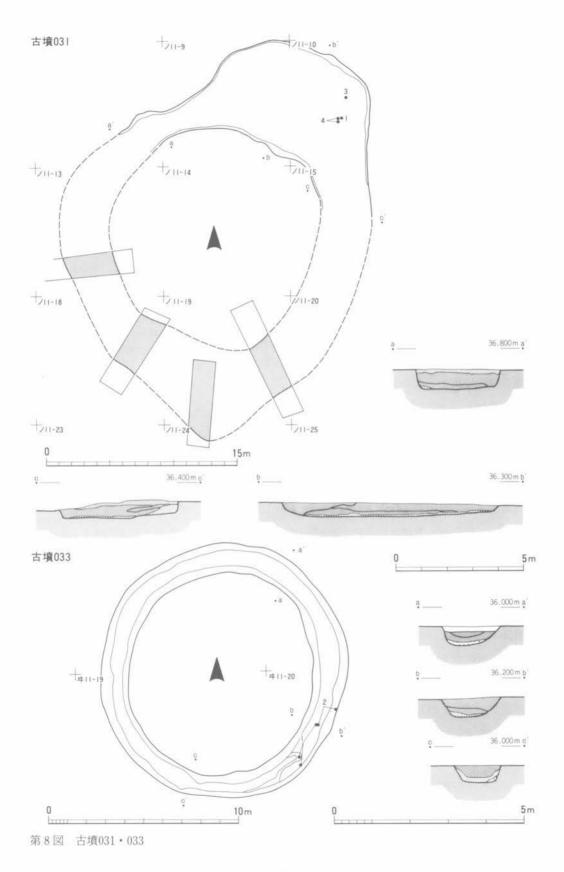
古墳038 (第9図、図版6)

「遺物 P 30]

調査区北西で検出した(ウ10)。古墳001の南西58mの所に位置する。墳丘は遺存しない。円墳で周溝は全周する。規模は内径で 8.95×8.85mである。周溝は幅1.41~1.95m、深さ0.16~0.38mで断面は高さのない逆台形を呈する。黒褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝南東から須恵器杯蓋、周溝北東から底部を穿孔した土師器鉢が出土した。どちらも底面からやや浮いていた。この他に出土した遺物はない。



古墳039 (第9図、図版6)

[遺物 P 30]

調査区の北西、古墳038の北3mに位置する(ウ9・ウ10)。

墳丘は遺存せず、周溝は貯水槽により一部破壊される。円墳で内径11.45×11.30mである。 周溝は全周し、幅2.25~3.20m、深さ0.18~0.41mである。浅い皿状の断面形で、上層に黒褐色土(ローム粒子を若干含む、しまりがよい)、下層に暗黄褐色土(ローム粒子の細粒が混入する、しまりがよい)が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

出土した遺物は少なく、図示したものが全てで、土器4点と土製玉1点である。

古墳040 (第10図、図版6)

古墳038の北西、古墳039の南西で検出した(ウ10)。

小規模な方墳で、墳丘は遺存しない。 4 辺は直線的に巡り、正方形を呈する $(3.47 \times 3.37 \mathrm{m})$ 。 主軸は南北を向く $(N-0^\circ-W)$ 。周溝は幅 $0.55\sim0.62\mathrm{m}$ 、深さは $0.11\sim0.19\mathrm{m}$ である。断面形は高さのない逆台形を呈する。埋土は1 層で黒褐色土(ローム粒子、ローム小ブロックが混入)が堆積する。

埋葬施設は検出しなかった。

また遺物も出土しなかった。

古墳041 (第10図、図版6)

調査区北西端、古墳039から北西14mの所に位置する(ム 9 ・ ウ 9)。北西側は調査区域外の ため、南西半分のみ調査した。

調査部分からは円墳と推定される(内径8.78m)。周溝は幅1.00~1.80m、深さ0.12~0.33mである。黒褐色土(下層へいくにしたがってローム粒子が混入する割合が増加する)が堆積する。

調査した部分からは埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

古墳050(第10図、図版 7)

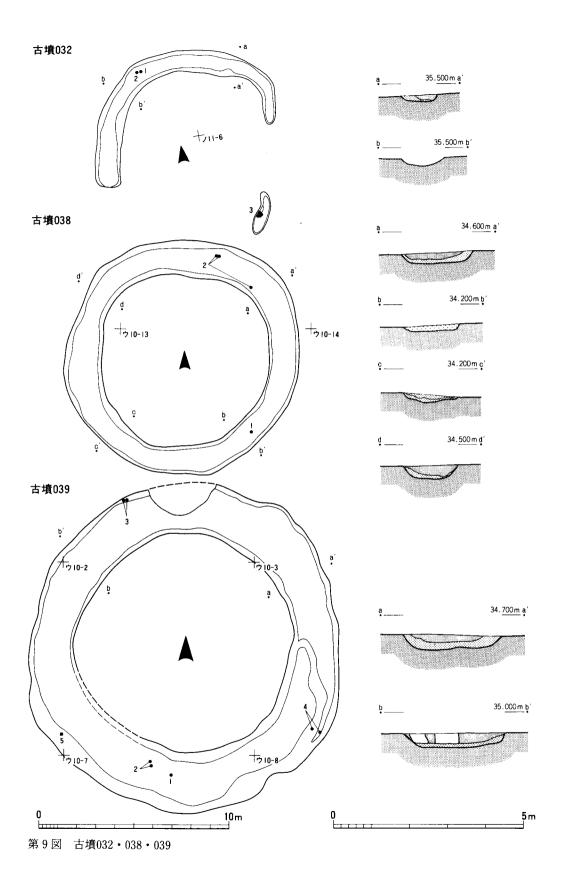
「遺物 P 30]

調査区南端にある(ウ13)。古墳051の南西8mの所に位置する。

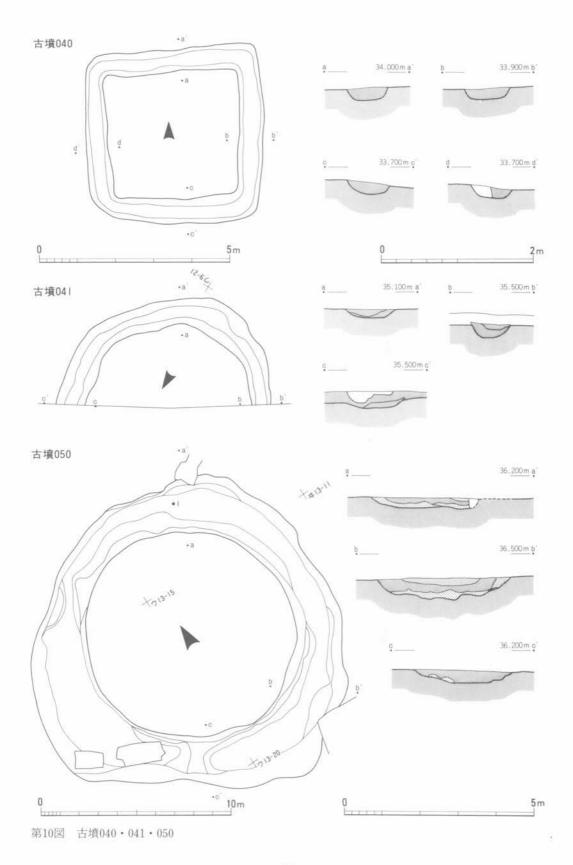
墳丘は遺存しないが周溝が円形に巡る(10.94×11.10m)。周溝は幅2.05~3.72mで南西部でやや広くなり、この部分は高く掘り残してブリッジとしている。内周は円形に巡るが外周はブリッジを意識している。周溝の深さは0.45~1.37mで、上から暗褐色土(ハードローム粒子・ソフトローム粒子混入)、黒褐色土(ハードローム粒子・ソフトローム粒子混入)、暗黄褐色土(ローム粒子が混入、ソフトローム土が多量に混入)が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は図示した杯1点のみである。



-15-



[遺物 P 30]

古墳051 (第11図、図版7)

古墳050の北東にある(ヰ12・ヰ13)。西側は保存区域となるため、東側の半分のみ調査し、西側は、トレンチにより周溝の存在を確認した。調査前に0.40m程の高まりがみられたが墳丘は遺存していなかった。円墳で、検出部分での規模は内径16.52mである。周溝は幅3.60~6.14mで西側で幅広になり、この部分は高く掘り残してブリッジとしている。

調査部分から埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝から40点余り出土し、このうち2点が図示できた。

古墳052 (第11図、図版7)

古墳054・古墳055の西側に位置する(中12)。これより西側は立山遺跡である。

墳丘は遺存していない。円墳である(内径7.10×7.40m)。周溝は全周せず南西部を狭いブリッジ状に掘り残している。周溝の幅は1.05~1.20m、深さ0.24~0.53mである。埋土は上から暗黄褐色土 (ハードローム粒子を含む)、黒褐色土 (ハードローム粒子を含む)、暗褐色土 (ソフトロームを主体とし、ハードローム粒子を多量に含む)である。

埋葬施設は検出しなかった。

周溝内から土師器破片26点を出土した。ほとんどが同一個体と思われるが、接合できなかった。外面を赤色塗彩した小型の坩と思われる。

古墳054 (第12図、図版8)

「遺物 P 30]

古墳051の北に位置する(ヰ12)。耕作による撹乱が著しかった。調査時点では墳丘は遺存しない。東側は保存区域となるため西側のみ本調査し、保存部分はトレンチによる周溝の確認調査を行った。円墳で調査部分での規模は内径5.50mである。周溝は幅0.38~0.58m、深さ0.09~0.19mである。北側の保存区域との境界付近では周溝は徐々に浅くなっていく。黒褐色土(ハードローム粒子、ソフトローム土を含む)が堆積する。

本調査範囲内では埋葬施設は遺存しなかった。

遺物は図示した高杯脚部1点のみである。

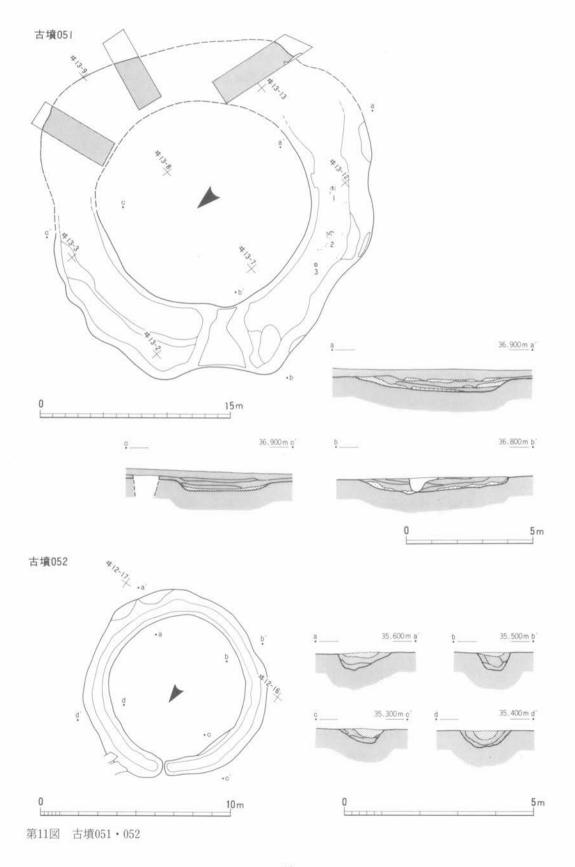
古墳055 (第12図、図版8)

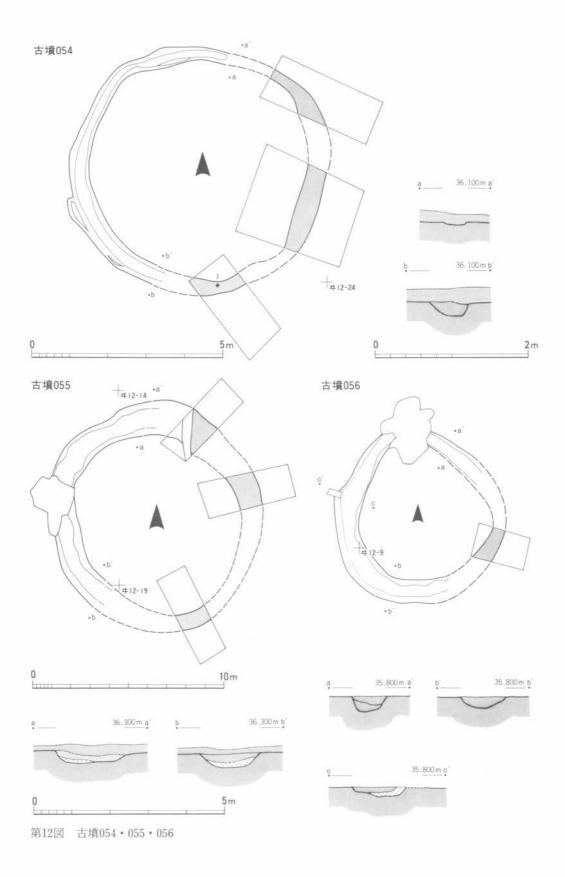
古墳054の北に位置する(中12)。西側は保存区域となるため東側のみ本調査し、保存部分はトレンチによる周溝の確認調査を行った。

円墳で推定内径9.45mである。周溝は幅1.35~1.50m、深さ0.18~0.28mである。埋土は上層から黒褐色土(耕作土、黒色土粒子・ローム粒子・小ロームブロックを含む)・暗黄褐色土(黒色土粒子・ローム粒子を含む)・黄褐色土(ローム粒子・ロームブロック・黒色土粒子が混入)が堆積する。

本調査範囲内では埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。





古墳056 (第12図、図版8)

古墳055の北に位置する(中12)。東側は保存区域となるため西側のみ本調査し、保存部分はトレンチによる周溝の確認調査を行った。北側は木の根により大きく撹乱され、不整形であるが円墳であると思われる。調査部分での規模は内径6.90mである。周溝は幅0.72~1.23m、深さ0.17~0.24mである。黒褐色土(黒色土粒子・ローム粒子・ロームブロック等が混入する)、黄褐色土(黒色土・ロームブロック混入)が堆積する。

本調査範囲内では埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

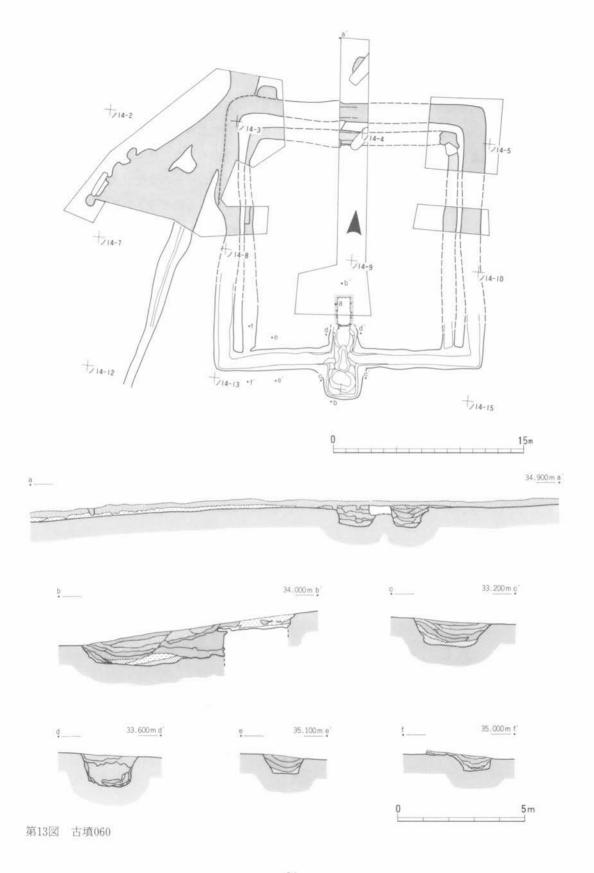
古墳060 (第13·14·15·16図、図版 9)

[遺物 P 32]

南側に開口する横穴式石室をもつ方墳である。保存区域の南東端の台地縁辺部に位置する(ノ13・ノ14)。東側が谷に面し、東辺は等高線と平行になる。北側は石室部分を含めて保存区域となるため本調査したのは周溝南辺のみで、この他は石室内の精査とトレンチによる周溝の試掘調査を行った。15m西には小規模な方墳である005号墳(保存区域内)があり、さらに14m西に土壙墓058がある。またこれより南の台地東縁辺に沿って方墳が並んでいる(立山遺跡)。

墳丘・周溝 墳丘の盛土も旧表土も遺存していない。試掘トレンチは周溝のコーナー部分とそれぞれの辺の中央が確認できるよう設定した。この結果、周溝は 4 辺が直線的で、 4 隅が直角の方形で、南辺をのぞく 3 辺が二重に巡っていることがわかった。また、石室が開口する南辺中央部では周溝は外側に方形に張り出している。墳丘の南北の軸はN-5°-Wを指す。また周溝の北西隅は溝状遺構などと切り合う。周溝の内径は15.15 ~15.55 mを測り正方形を呈する。また周溝の外径も 20.70×20.25 mでやはり正方形を呈している。

周溝の規模は、内側の周溝が幅1.10~1.15m、深さ0.29m、外側の周溝が幅1.15~1.60m、深さ0.53mである(深さはいずれも本調査した南西隅の北側のもの)。南側中央の方形の張り出し部分は幅3.20mで、1.72~2.26m外へ張り出す。周溝の断面は逆台形で掘り込みは内側の周溝の壁の方が垂直である。内側の周溝には下から黄褐色土(ロームブロック・ローム土が主体)、黒褐色土(ローム粒子が僅かに混入)、暗褐色土(ローム粒子・黒色粒子が僅かに混入)、暗黄褐色土(ローム土と暗褐色土が混入)が堆積する。外側の周溝には下から黄褐色土(ロームブロック・ローム土が主体)、暗褐色土、(ローム粒子を若干含む)、黒褐色土(ローム粒子を若干含む)が堆積していた。内側の周溝は南側では浅くなる(f-f')。また石室前の墓道から周溝にかけて設定した土層の断面観察によると石室前の周溝から墓道の部分の下層には暗黄褐色土、黄褐色土(ローム粒子・ロームブロック・白色粘土粒子・白色粘土ブロックを含む)、その上に暗褐色土(ローム粒子・ロームブロックが混入)が堆積していた(b-b'・d-d')。最下層の暗黄褐色土と黄褐色土は周溝底を埋め戻した土と考えられる。また張り出した部分は墓道や周溝より後から埋まった堆

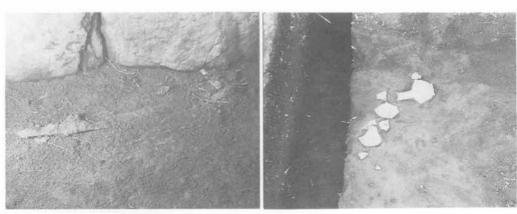


積状態を示しており ($b-b' \cdot c-c'$)、下から暗黄褐色土 (黒色土・ローム粒子・ロームブロックを含む)、黒色土 (ローム粒子混入)、暗褐色土 (ローム粒子・黒色土粒子を含む)、黒褐色土 (ローム粒子混入) が堆積する。

理葬施設 南向きに開口した単室の横穴式石室である。南辺中央の周溝から0.70m、幅0.85m の墓道を設け、墳丘の地山を掘り込み、雲母片岩の板石を立て並べて構築する。遺存状態は良好で入口は閉塞石で閉じられていた。保存区域のため、石室内の精査だけで掘方は検出していないが、入口脇の土層の観察では裏込に白色粘土とブロック状のローム土をつき固めたものを交互に充填している。天井石の上はまず灰白色粘土で被覆し、さらにその上を黄褐色土(ローム粒子・ロームブロック・白色粘土粒子・白色粘土ブロック混入)で埋め戻していた(bーb′)。玄室の床面は長方形で規模は2.35×0.98m、天井部も長方形で1.83×1.02mを測る。長軸はN-5°-Wで、墳丘の南北の軸と同じである。玄室は天井石3枚、奥壁1枚、側壁は4枚ずつで8枚、合計12枚で構築される。床面と天井部の幅はほぼ同じであるため側壁は垂直に近い角度で立っていたと考えられる。また南側小口には左右に1枚ずつ側壁と直交するように板石を立て、その上に細長い板石を渡し、また足下には框石を置いて玄門を構成している。玄門入口の規模は0.51×0.54mである。閉塞石は框石の上にのっていた。玄門の外側には左右に1枚ずつ向かい合わせに板石を立てて、天井石を1枚架している。ちょうど箱形石棺の外側に羨道部を取り付けたような形態である。石室を解体していないため壁を構成する板石の本来の大きさは不明であるが、露出した部分では奥壁0.94×0.98m、側壁0.40~0.69×0.91~1.00m、天井

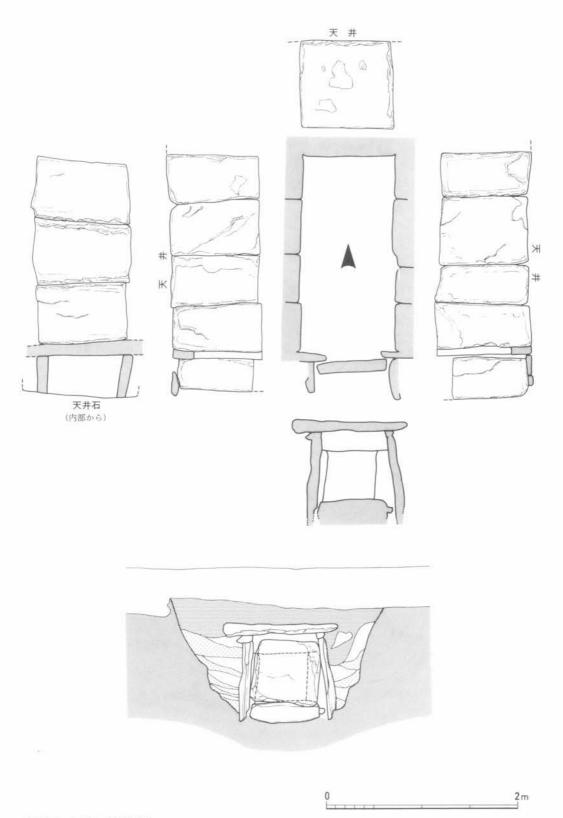
玄室北西隅付近には人骨片が数点あった。遺物は玄室内と墓道、石室前の周溝から出土した。 玄室内の遺物と外の遺物が接合する。

石 $0.62\sim0.64\times0.92\sim1.20$ mである。框石は床面からの高さが0.25m、厚さ0.10mを測る。閉塞石は 0.64×0.70 mで開口部より一回り大きい。壁石の規模からみて石室の高さは $0.98\sim1.20$

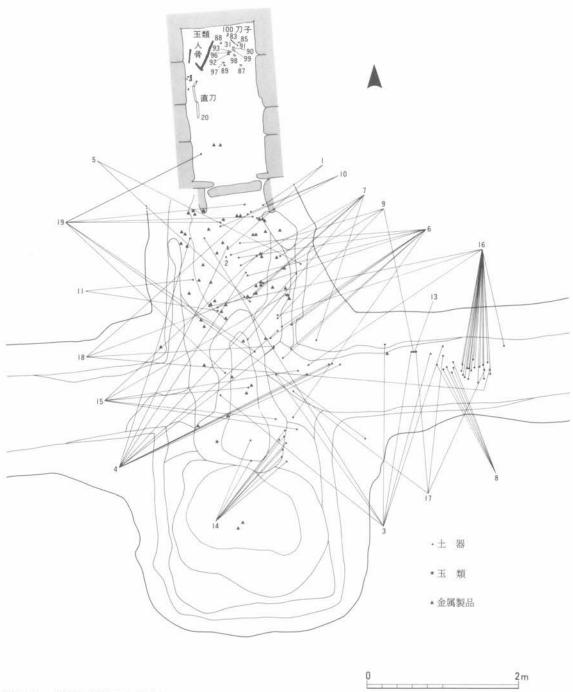


第14図 古墳060遺物出土状態

m程であろう。



第15図 古墳060埋葬施設



第16図 古墳060遺物出土状態

これから記述する5基の古墳は公園として残される保存区域の中央部に位置する。調査は周 溝部分の試掘調査のみで、これにより墳形と規模の概要を把握した。いずれも表面観察でその 存在は確認されてはいたが、001号古墳以外は墳丘は僅かに膨らみが認められる程度のものであ った(第17図)。

001号墳 (第18・19図)

保存区域の北部、古墳031の南に位置する(ヰ11・ヰ12・ノ11・ノ12)。保存区域の中では墳丘の遺存状態が良好な古墳で、裾部は削平されるが墳丘が僅かに遺存している。円墳で規模は内径17.10~18.20mである。周溝の幅は一定ではなく、東側で広くなる。狭いところで4.10m、広いところで8.12mを測る。

002号墳 (第19図)

001号墳の南に位置する($+12 \cdot /12$)。調査前にわずかな高まりが認められた。東側の周溝内壁を確認できなかったが円墳であると思われ、内径は推定で15.30mである。周溝の幅は一定ではなく北側から西側では $3.25\sim3.70$ mを測るが、東側ではこれよりさらに幅があるようである。

003号墳 (第20図)

002号墳の南、古墳051の東に位置する (ヰ13・ノ13)。円墳であると思われ、内径での規模は 14.15~14.65mである。周溝の幅は2.85~5.50mである。

004号墳 (第20図)

003号墳の東に隣接する(213)。やはり円墳であるが周溝は全周せずに、北側をブリッジ状に掘り残している。規模は内径で $15.60\sim15.74$ m、周溝の幅は $2.00\sim5.93$ mである。ブリッジは、内側で幅 1 m、外側で 5 mである。

005号墳 (第20図)

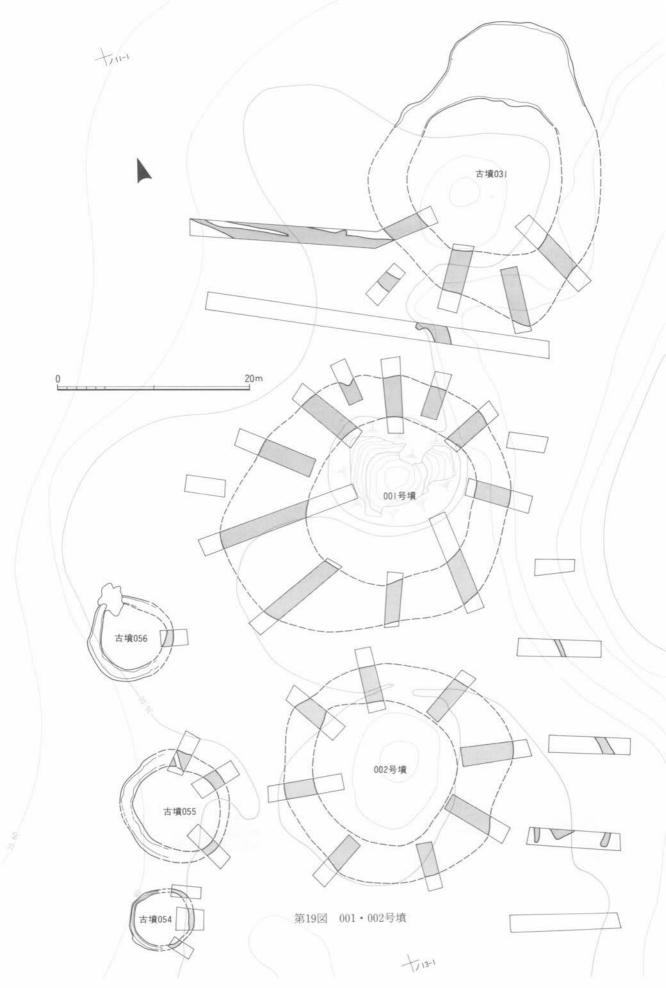
古墳060 (方墳) の西側に位置する小規模な方墳である (ヰ13・ヰ14・ノ13・ノ14)。規模は 6.86~6.95mでほぼ正方形である。周溝の幅は0.78~1.33mを測る。

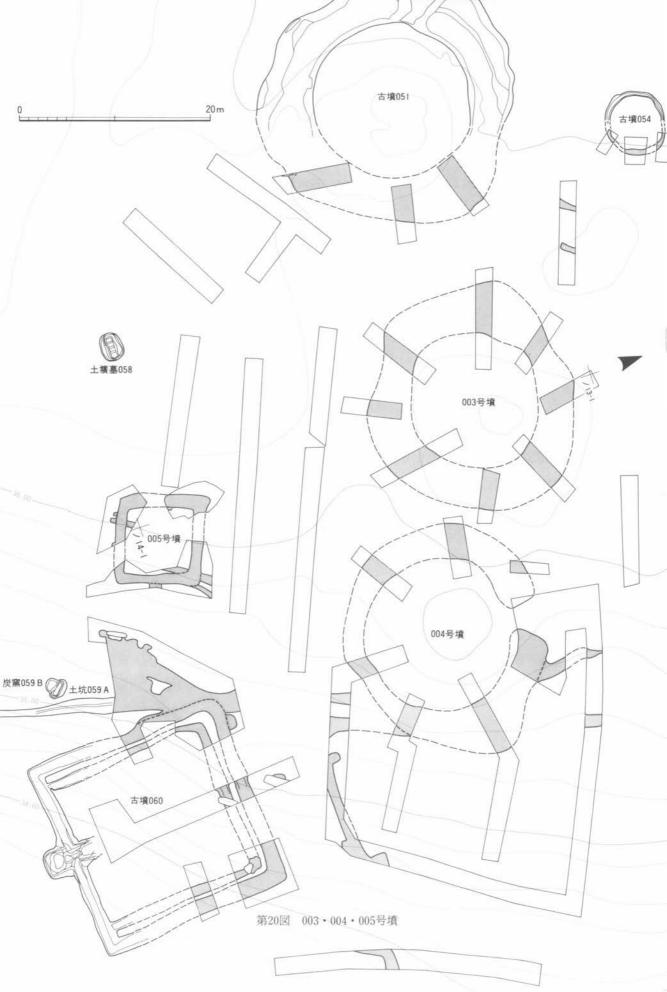


第17図 保存区域遠景



第18図 001号墳近景





2. 遺 物 (図版21)

古墳から出土した遺物には土器類のほか土製品・石製品・金属製品・玉類がある。流れ込みと考えられる遺物が多く、確実に古墳に伴うと考えられるのは僅かである。

古墳001 (第21図)

[土器観察表 P145]

周溝埋土中から土師器等を約130点出土した。周溝北東部に特に集中していたが、周溝底面からは0.10~0.15m浮いている。周溝の外側から流れ込むような出土状態で、古墳に伴うものかどうかは断定できない。このうち杯1点、甕底部2点を図示した。3点とも周溝北東部から出土したものである。床面から浮いており、1と3は周溝外縁の壁際から出土した。遺存状態は良くない。この他の破片120点は杯と甕が主体で、2~5cm四方の破片である。杯の破片は古墳時代後期のものが主体で、赤色塗彩したものが多い。

古墳022 (第21図、図版26)

「土器観察表 P145]

周溝から70余点を出土した。いずれも埋土中から出土し、周溝の底面からは浮いている。このうち杯 4 点、坩 1 点、甕 2 点が図示できた。図示できなかった遺物のうち杯は古墳時代後期に属し、赤色塗彩したものである。甕は $4\sim5$ cm四方の破片である。図示できたものも遺存状態は悪く復原実測したものが多い。2 の杯と6 の甕底部は周溝北部、3 の杯と5 の坩は周溝南部から周溝底から $20\sim30$ cm浮いた所から出土した。

古墳024 (第21図)

[土器観察表 P145]

出土遺物は2点である。図示できたのは1点で木葉痕を持つ甕底部である。残りの1点は赤色塗彩した2cm程度の杯の破片である。

古墳031 (第21図、図版26)

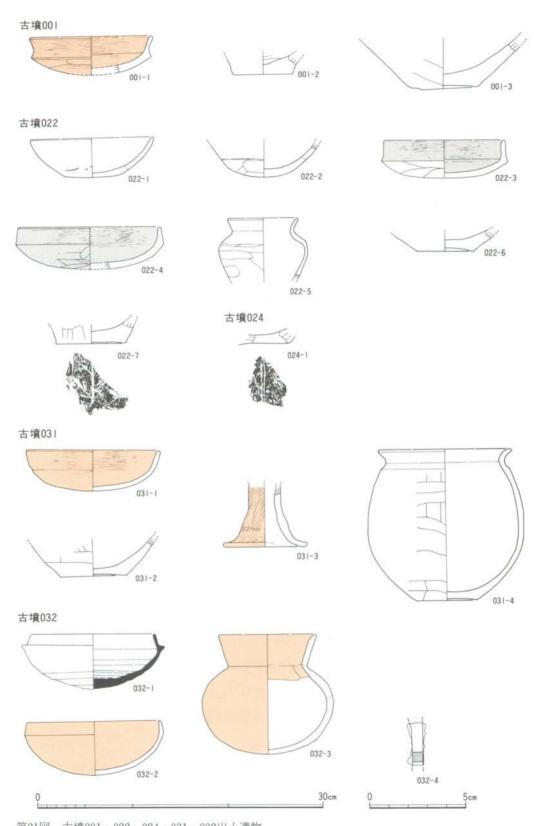
「土器観察表 P146]

本調査したのは周溝の一部であったがここから多数の遺物を出土した。破片数は390点程になる。図示できたのは杯1点、高杯1点、甕2点である。図示できなかった杯破片のほとんどは古墳時代後期のもので赤色塗彩したものが多い。また、甕の破片は5~6cmで多数出土している。須恵器破片は歴史時代以降のもので、また近世以降の物と思われる瓦の破片も混入しており、流れ込んだ遺物を多数含んでいるようである。図示できたものも復原実測したものが多く、遺存状態は悪い。

古墳032 (第21図、図版26·51)

[土器観察表 P 146]

出土した遺物は全部で6点と少ないが、4点が図示できた。このうち1点は鉄鏃である。遺構の遺存状態は悪いが、遺物の遺存状態は良好で、土器類は本古墳に伴う遺物と考えられる。須恵器杯身と杯は周溝の北西の床面から並んで出土した。どちらも口縁のごく一部を欠損するのみである。坩は周溝南東の床面から出土した。胴部の1/2を欠損する。図示できなかった2点は小片で赤色塗彩した杯と思われる。鉄鏃は埋土中から出土した。刃部の形状は不明である(遺存長22.0mm、幅6.0mm、厚さ5.0mm、遺存重量2.17g)。



第21図 古墳001・022・024・031・032出土遺物

古墳033 (第22図、図版26)

「土器観察表 P146]

出土したのは4点で周溝の南東にまとまっていた。このうち杯2点が図示できた。杯は2点とも壁際または周溝底から30~50cm程浮いて出土した。どちらも遺存度は1/2~1/3で、復原実測したものである。残りの破片は杯、または鉢の一部と思われ、このうち1点は体部内面の途中まで赤色塗彩している。

古墳038 (第22図、図版27)

「土器観察表 P146]

出土したのは図示した須恵器杯蓋と鉢の2点のみである。1の須恵器蓋は周溝北東部から出土した。周溝底面から20~30cm浮いている。天井部から体部にかけては一部を欠損するのみであるが、口縁部は2/3周を欠損する。鉢は周溝南東の底面から20cm程浮いた所から出土した。底部は焼成後穿孔している。

古墳039 (第22図、図版26·49)

「土器観察表 P147]

出土したのは図示した杯 3 点・鉢 1 点と土製玉 1 点である。 1 の杯は周溝南部の底面から 4 cm浮いた所から出土した。底部は穿孔している。 2 の杯は 1 の西 1 mの所で底面から 20cm浮いて出土した。口縁部の一部を欠くのみで完形に近い。外面の調整は雑で明瞭な粘土痕を残す。 3 の杯は北部の外壁際から出土した。底部の一部を欠損するが完形に近い。 4 の鉢も底部を穿孔している可能性があるもので南東の外壁際から出土したものである。土製玉は杯(2)の西 5 mの外壁際から出土した。丸玉で、胎土は粒子が細かくよく精選されており、焼成も良好で光沢のある濃い茶褐色を呈する。穿孔は片側から行っている(第 5 表)。

古墳050 (第22図)

「土器観察表 P 147]

出土したのは図示した杯1点のみである。周溝北側の底面から10cm浮いた所から出土した。 1/4周で遺存状態は良くない。

古墳051 (第22図、図版27·49)

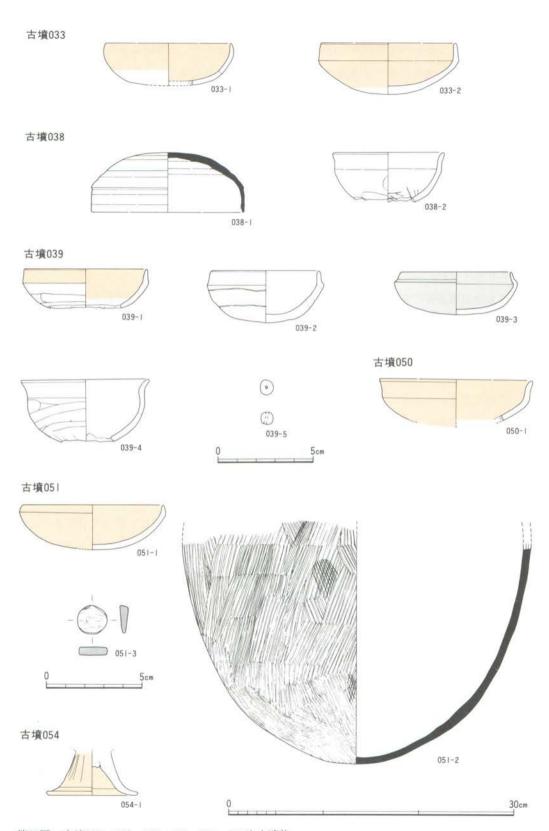
[土器観察表 P147]

土器類は40点余り出土した。このうち杯と須恵器甕が図示出来た。この他石製円板が出土している。ほとんどの遺物がブリッジ南の周溝南西部から出土している。杯と須恵器甕は細かく破砕した状態で底面から30cm浮いた所から出土した。どちらも遺存状態はよくない。須恵器甕は胴下半部の1/4周である。石製円板は須恵器甕の北側から出土した。やはり底面からは50cm程浮いている。滑石製で、光沢のある白っぽい灰色を呈する。直径は15.5×15.5mm、厚さ4.0mm、重さ1.79gである。周縁の整形は雑で磨いた面が面取りしたように残り、横方向の擦痕が見られる。図示出来なかった杯の破片は赤色塗彩した古墳時代後期のもので、甕は2~3cm程の小破片である。須恵器破片は後世の混入品と思われる。

古墳054 (第22図、図版26)

「土器観察表 P147]

出土したのは図示した高杯脚部のみであるが、破損するところはない。トレンチによる確認 の際、検出面から出土した。



第22図 古墳033・038・039・050・051・054出土遺物

遺物は精査した石室内と本調査した周溝の南辺から出土した。土器類のほか金属製品、玉類、人骨などである。遺物の多くは周溝から出土し、石室内から出土したのは玉類のほか直刀と鉄鏃などの一部である。人骨は北西隅から出土したが僅かな破片で遺存状態は良くない。直刀は、石室の西壁中央に石室の長軸に沿って出土した。鋒は南を向く。玉類と刀子は石室の北東隅にまとまっていた。また、羨道部や周溝から出土した土器や鉄鏃等はかなり細かい破片となっており、接合したものもまとまっておらず散っていた。原位置から移動している可能性が高い。

土器は110点余り出土し、そのほとんどが石室の前の周溝から出土したものである。須恵器杯蓋3点、須恵器杯身5点、須恵器長頸壷4点、土師器杯5点、合計17点が図示できたが残った破片もこれと同種のものである。かなり細かい破片で出土したものが多く一部を除き遺存状態はあまりよくない。

 $1 \sim 8$ は須恵器杯である。胎土は類似しており白色粒子や雲母を含んだ砂粒を多量に含む。 $1 \sim 3$ は須恵器杯蓋である。つまみのある形態である。つまみは高さがなく偏平である。口縁 部が遺存するのは 3 だけで、返りが僅かに突出する。天井部はいずれも回転へラ削りする。 $4 \sim 8$ の杯身は体部が外傾して立ち上がり、器高が低く偏平な形態である。底部と体部下端を回 転へラ削りする。

9~13は土師器杯である。平底だが底部と立ち上がりの境は丸みをおび明瞭ではない。やはり器高が低く偏平な形態である。胎土は細砂粒を含み粒子が細かく精選されている。内外面を横方向に丁寧に磨いておりいずれも器面に光沢をもつ。器壁が薄く焼成も良好である。

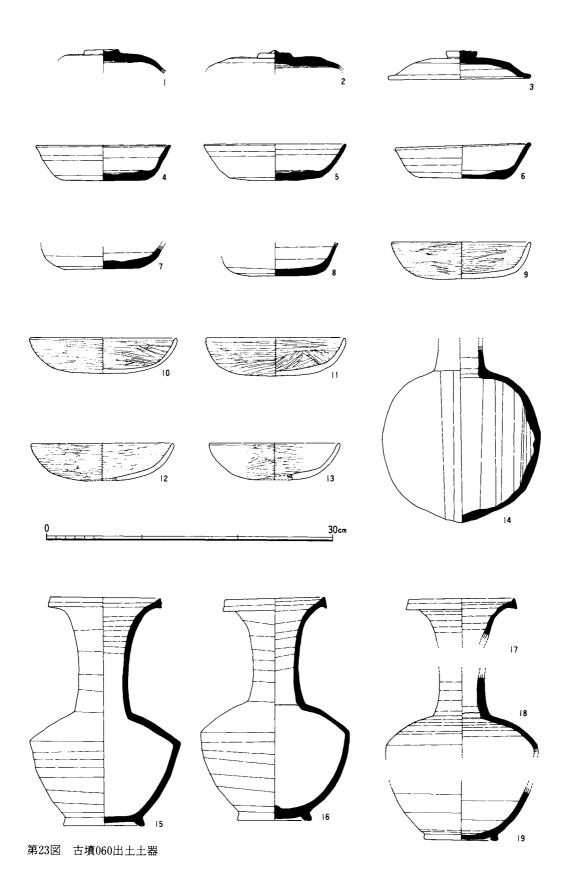
 $14\sim19$ は須恵器長頸壷である。14は丸底で球形の胴部をもつ。復原実測している。口縁部と胴部を別々に作り接合している。 $15\sim19$ は底部に高台をつけ、また肩部が張って稜がある。口縁部はラッパ状に開き口端部は2段になっている。15は口端部の一部を欠損するのみで完形に近い。 $17\cdot18\cdot19$ は直接接合しなかったが同一個体である可能性がある。

20~84は金属製品である(第3表)。22は青銅製品でこれ以外はすべて鉄製品である。

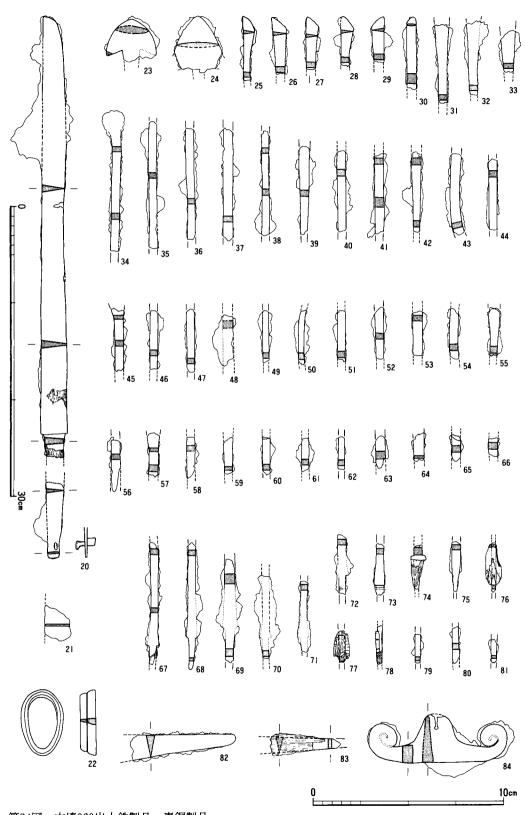
20は直刀で、石室内から出土した。 3片に割れて出土し、刃部と茎部は直接接合しない。一部錆膨れが著しいものの遺存状態が良好である。鋒はふくらがかれ、先端を斜めに切り落としたような形態である。両関で、どちらも直角に切り込んでいる。茎部には目釘穴が1孔あり目釘が残っている。刃部の一部と茎部の一部に木質が付着していた。

21は薄い板状の製品である。内面に木質が付着するため、鎺の可能性がある。

22は青銅製の責金具で完形である。一部に鍍金した痕跡が残る。また内側には木質が付着する。外面が丸みを帯びた卵形の環状品を二段に重ねているが、接合痕はなく、内面と底面は平坦で、鋳型で作製していると思われる。この他青銅製品としては図示できなかったがはと目金具2点が出土している。やはり刀装具の一部であろう。



— 33 —



第24図 古墳060出土鉄製品・青銅製品

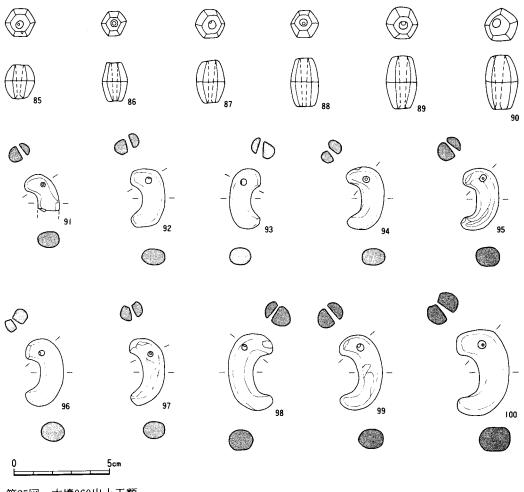
23~81は鉄鏃である。羨道部や石室前の周溝から出土した。全体の形状をうかがえるものはなく、遺存状態はよくない。31~66は断面が方形の棒状品であるがこれらも鉄鏃の頸部であろう。刃部が遺存するものは8本(23~30)である。

82・83は刀子である。どちらも茎部で刃部は欠損する。83は石室内の北東隅から玉類と共に出土した。また木質が遺存する。

84は燧鉄である。両端が渦巻き状にまるめてあり、中央部には穴があく。遺存状態は良い。 85~100は玉類である(第 5 表)。切子玉が 6 点、勾玉が10点ある。このうち86・94・95の 3 点は周溝から、残りの13点は石室北東隅の床面にまとまっていた。

85~90は水晶製の切子玉である。稜が摩耗しているものもあるがいずれも完形である。横断 面が六角形、白色の半透明で穿孔は片面から行われている。

91~100は勾玉である。99は緑色凝灰岩製、この他はメノウ製である。91が2分の1を欠損し、94が頭部のごく一部を欠損するほかは完形である。片面の穿孔部分を浅く窪めた後、反対側から穿孔している。



第25図 古墳060出土玉類

第3節 土壙墓

土壙墓は4基検出した。形態と内容で2種類に分類できる。一つは調査区北部で検出した2基(028・035)である。これらは楕円形に掘り込み、玉類、鉄鏃等の副葬品を伴い内容は古墳の主体部と差がないが、外部施設をもたない。もう一種類は長方形に2段に掘り込み、底面に長軸と直交する浅い溝を数条掘ったものである。副葬品等の遺物は出土しない。やはり2基を調査区南部で検出した(057・058)。

1. 遺 構

土壙墓028 (第26図)

[遺物 P 39]

古墳022の西、古墳030の北東の台地の平坦部に位置する(ノ10)。平面形態は縦長の楕円形を呈し(1.93×1.10×0.21m)、主軸は東西を向く(N-90°-W)。埋土は黒褐色土(ローム粒子・ロームブロックが混入、しまりがよい) 1層で、木棺痕は平面でも、断面観察でも検出しなかった。

遺物は東側の底面から管玉・棗玉がまとまって出土した。

土壙墓035 (第26図、図版10)

[遺物 P 39]

古墳001の南東に位置する(ノ10)。土壙墓028の約37m北西になる。縦長の楕円形で(2.56× 1.53×0.52 m)、主軸は東西を向く($N-73^{\circ}-E$)。埋土は黒褐色土(ローム粒子・ロームブロック混入、しまりがない)と黄褐色土(ローム粒子・ローム混入、しまっている)が交互に堆積する。木棺痕は平面でも断面でも検出しなかった。

遺物は西側の底面から鉄鏃を出土した。鉄鏃は刃を西に向けていた。

土壙墓057 (第27図、図版10)

古墳056の北西に位置する(中12)。縦長の長方形で(2.92×1.56×0.46m)、底面に長軸と直交した3条の溝がある。溝は底面から0.07~0.10mの深さである。埋土は黒褐色土であるが、下層ほどローム粒子、ロームブロックの混入量が多くなり、色調が明るい。

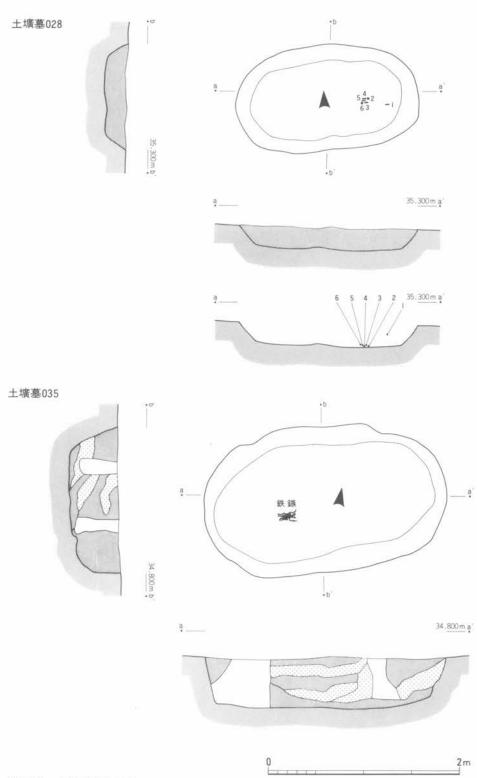
出土した遺物はない。

土壤墓058 (第27図、図版10)

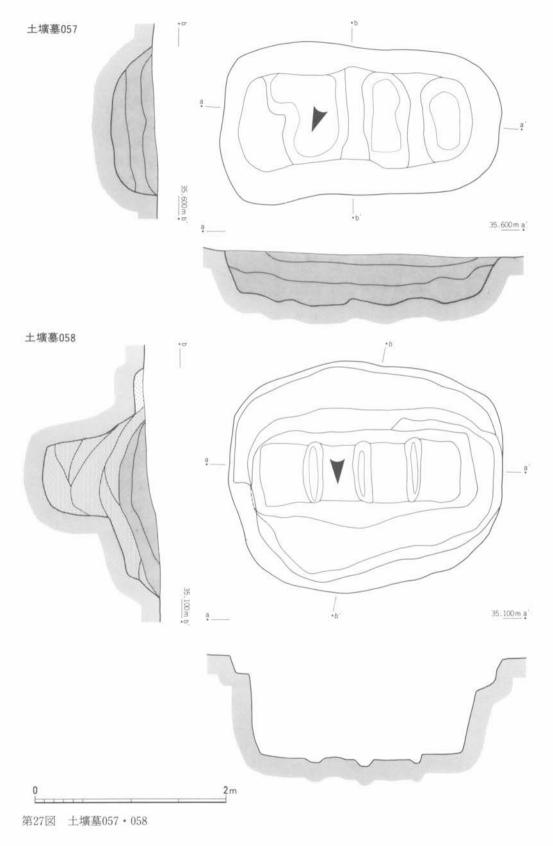
調査区南端にある(ヰ13)。005号墳(方墳)の西に位置する。南は立山遺跡となり、立山2号方形周溝が南東にある。また、南25mには同じ形態の2・6号土壙が存在する。

2段に落込み、上段は不整形な長楕円形(2.90×2.35 m)、中段は長方形($2.35m\times1.00$ m)で、底面に 3条の溝を持つ。深さは確認面から1.04m、中段からは0.80mである。また溝の深さは底面から $0.03\sim0.06$ mである。長軸は東西を向く $(N-90^{\circ}-W)$ 。上層には黒褐色土(ローム粒子を混入する)、中層から下層にかけては暗褐色土(ローム粒子・ローム土を混入する)が堆積する。中段から下の層は特に混入物が多い。

出土した遺物はない。



第26図 土壙墓028・035



- 38 -

2. 遺 物

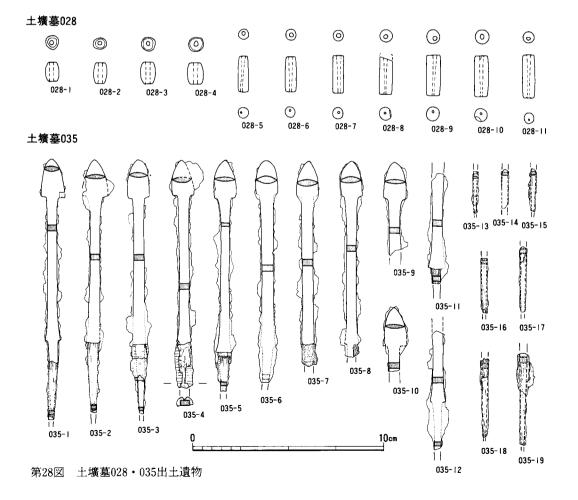
土壙墓028 (第28図、図版49)

棗玉4点、管玉7点が中央よりやや東によった所からまとまって出土した。この他には図示しなかったが2cm四方の甕胴部破片1点が出土している。

棗玉は埋木で作られていると思われる。僅かにひびが入るものがあり、断面に繊維状の筋が 観察できる。色調は黒褐色で光沢をもち、遺存状態は良好である。孔径はどちらも同じで片面 穿孔か両面穿孔か不明である。管玉は、緑色凝灰岩で作られ、光沢のある淡緑色を呈している。 丁寧に研磨され研磨痕はほとんど残らない。横断面径は中央部が僅かに大きい。いずれも一方 の孔径が大きく、穿孔は片面から行われている(第5表)。

土壙墓035 (第28図、図版51)

鉄鏃は中央よりやや西によった所からまとまって出土した。刃は西に向ける。19点を実測したが、刃部が遺存したものは10本である。いずれも小形三角形式で、箆被と茎との境はハの字状に広がる(第4表)。



第4節 竪穴住居

1. 遺 構

検出した竪穴住居は15軒である。調査区東側は南北にのびる谷に面しているが、所々に台地が浅くU字形にえぐられた部分があり、この部分の台地肩部から斜面を中心にまとまって立地している。台地平坦部の標高は35.00m、現在の水田面の標高は18.00m程であり、竪穴住居が立地するのは35.00mから19.00mの間で16m程の比高差がある。主軸は等高線に直交するものが多い。

斜面に立地するものが多いため、遺構の遺存状態は良好とはいえない。しかし、出土した遺物の量は多く、実測できた土器は15軒で308点を数える。また15軒中6軒が焼失住居であった。いずれも竈を持つ竪穴住居で古墳時代後期に属する。

竪穴住居002 (第29・30図、図版11)

[遺物 P 63]

調査区北東の台地肩部に立地する(オ10・ク10・オ11・ク11)。西12mの所に竪穴住居004、 北西14mの所に古墳022がある。

4 辺が直線的で歪みのない正方形($3.47 \times 3.77 \times 0.50$ m)を呈する。竈が北壁中央よりやや東に寄った所に位置し、主軸は北西($N-32^\circ-W$)である。柱穴はなく、南壁寄り中央に遺構中心に向かって斜めに掘り込んだ出入口施設と思われる P1($0.26 \times 0.25 \times 1.38$ m)を検出した。この他、中央と北西寄りに性格不明な P2($0.19 \times 0.18 \times 0.17$ m)・P3($0.67 \times 0.71 \times 0.17$ m)の 2 本のピットを検出した。壁溝は竈部分を除いて全周する。

埋土は中央部に堆積する黒褐色土 (下層ではローム粒子を含む) が主体で、このほか壁際に 暗黄褐色土 (微細なローム粒子を含む)、壁溝に黄褐色土 (微細なローム粒子多量と焼土粒子を 少量含む) が堆積する。

竈は北壁の中央よりやや東に寄って構築される。北壁を外側に0.40m掘り込んで煙道としている。上層に暗褐色土(焼土粒子を含む)、その下に焼土、下層に暗赤褐色土(焼土粒子・ロームブロックを多量に含む)が堆積する。火床部は床面より僅かに窪んでいる。





第29図 竪穴住居002遺物出土状態

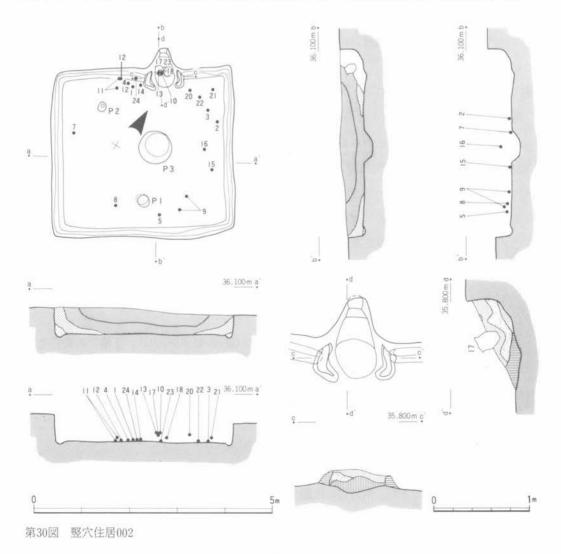
遺物は遺存状態が良好なものが多く、主として竈周辺から出土している。杯13点、鉢1点、小型土器2点、甕5点、甑1点の他土製玉、土製支脚が図示できた。竈には甕が2個体かかったままの状態で出土し、竈脇から甑が出土している。

竪穴住居003 (第31図、図版11)

[遺物 P 65]

調査区北東端に位置する (ク10)。竪穴住居002から台地縁辺部に沿って北東に約25mの所である。

横長の長方形を呈する。北東隅は調査区外のため調査していない。規模は $4.17 \times 8.03 \times 0.40$ mで、横軸の長さが主軸の長さのほぼ倍になる。竈は北西壁中央より東によって構築される。主軸 $(N-31^{\circ}-W)$ と直交する中軸線上に3本のピットがほぼ等間隔に並び $(P\ 1\ E\ P\ 2\ m$ 、 $P\ 2\ E\ P\ 3\ m$ 1.8m離れている)、これが柱穴になると思われる。両脇の $P\ 1\ (0.36 \times 0.37 \times 0.76m)$ 、 $P\ 3\ (0.36 \times 0.47 \times 0.83m)$ が深く、中央の $P\ 2\ (0.46 \times 0.44 \times 0.49m)$ はやや浅い。西隅の $P\ 4\ (0.36 \times 0.39 \times 0.17m)$ は貯蔵穴と思われるが一部破壊される。この他に小ピット



— 41 −

を多数検出した。直径は大きいもので0.13mだが0.10m以下のものが多く、深さは0.13~0.42 mである。縦軸上や横軸上に並んでいるもの、北西隅を囲うように並ぶものがある。間仕切りまたは床板等の施設に付随するピットである可能性も考えられる。壁溝は北西から南西にかけて巡る。床面から焼土・炭化材を検出した。焼土は西半分に多く堆積していた。焼失住居である。

埋土は上層中央部に暗褐色土、壁際に黒褐色土、下層に暗黄褐色土(ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む)が堆積する。暗黄褐色土は竪穴住居全体に同じ厚さで均一に堆積しており、埋め戻し土である可能性がある。

竈は北西壁の中央より東に寄った所に壁を掘り込んで構築される。焼失住居のためか袖部は外側も赤褐色に変色し硬くしまっている。上層にかぶった粘土層は天井部が流れたものと思われ、燃焼部には上層にローム粒子が混入した黄褐色土、下層には炭化粒子が混入した黒色土が堆積していた。またここからは3点の小型土器が出土した。

遺物は須恵器杯 2 点、杯 1 点、小型土器15点、甕 1 点、甑 1 点が図示できた。小型土器が多いのが特徴である。また、須恵器杯 2 点は完形品である。竈内、竈周辺の床面から出土したものが多い。

竪穴住居004 (第32図、図版12)

[遺物P67]

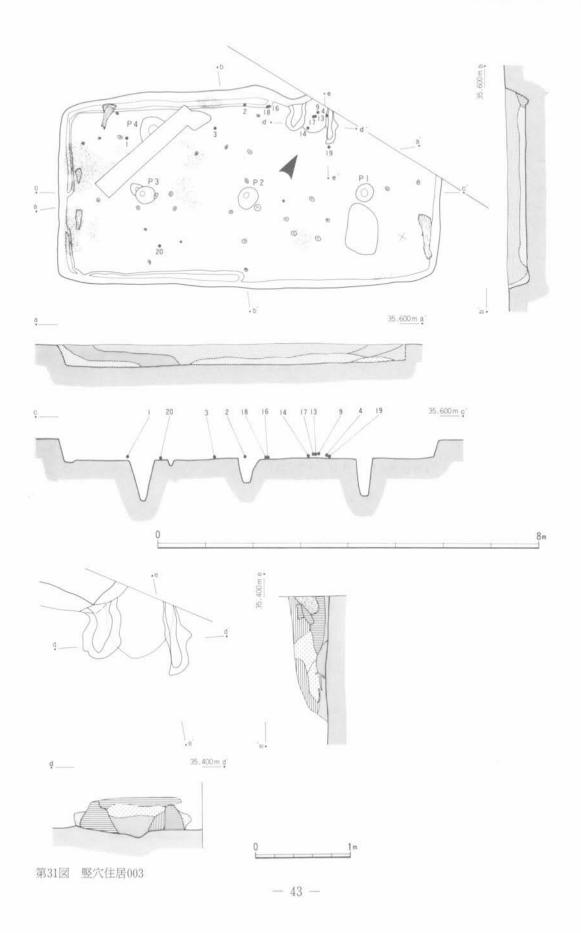
調査区東、古墳022の南東の台地肩部に位置する(オ10・オ11)。

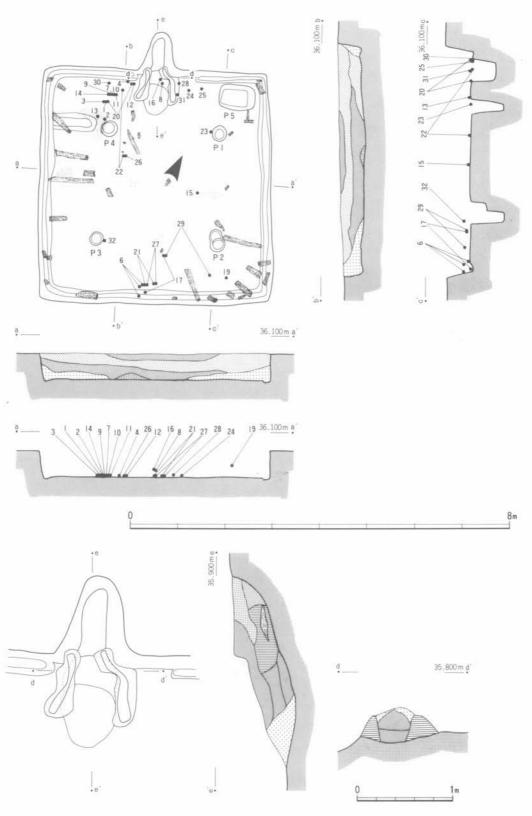
4 隅が直角で歪みのない正方形を呈している $(4.88 \times 4.85 \times 0.50 \,\mathrm{m})$ 。 竈は北壁中央に位置し $(\pm \mathrm{mN} - 28^\circ - \mathrm{W})$ 、4 隅の対角線上に柱穴を配する。柱穴と柱穴の間隔は $2.00 \sim 2.20 \,\mathrm{m}$ である。柱穴の規模は $0.28 \sim 0.32 \times 0.29 \sim 0.34 \times 0.67 \sim 0.76 \,\mathrm{m}$ で $4 \,\mathrm{m}$ 本に大きな差はない。このうち P 2 は 2 段に掘り込む。 竈右側の北東隅に横長方形の貯蔵穴がある($0.56 \times 0.74 \times 0.54 \,\mathrm{m}$)。また、柱穴 P 4 の西側に東西にのびる高さ $0.03 \,\mathrm{m}$ 程の土手状の施設がある。壁溝は竈部分を除き巡っている。焼失住居で床面から焼土・炭化材を検出した。炭化材は壁際を中心に残っていた。 遺存のよいものの中には直径 $0.10 \,\mathrm{m}$ 、長さ $0.80 \,\mathrm{m}$ の丸太状のものが何本かあり、いずれも長軸を中心部に向ける。

上層中央に黒褐色土、その下に暗黄褐色土(微細なローム粒子を含む)、下層に黒褐色土(粒の粗いローム粒子を含む)、下層から壁際にかけて黄褐色土(ローム土)が堆積する。また所々に焼土ブロックがある。

電は北壁中央を0.85m外側に掘り込んで構築している。燃焼部には黒褐色土(微細なローム 粒子・焼土粒子)が堆積する。竈内からは杯と鉢を出土した。

出土した遺物の量は多くしかも完形品が多い。杯17点、高杯1点、鉢6点、甕5点、甑1点、 土製支脚1点が図示できた。竈周辺の床面から出土したものがほとんどである。竈脇に杯や鉢 類が数点重ねてあり、その脇に甑が伏せて置いてあった。

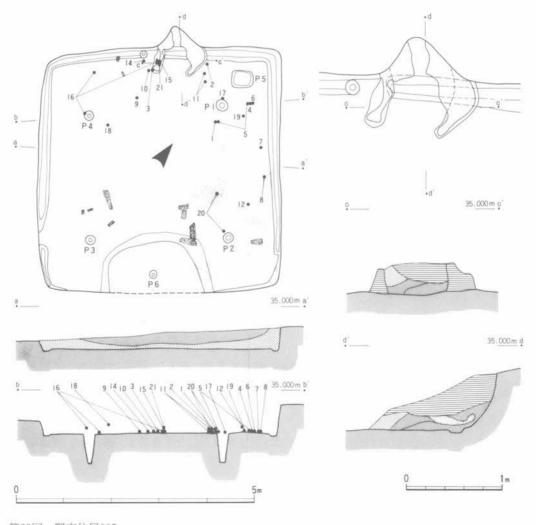




第32図 竪穴住居004

調査区西の谷に面した台地肩部に位置する (オ11)。竪穴住居004の南西20mの所である。

南壁中央は遺存しないが 4 隅を検出した。正方形で $(5.06\times5.07\times0.45\mathrm{m})$ 、竈が北壁中央にあり、主軸 $(N-41^\circ-W)$ は等高線に直交する。柱穴は 4 隅の対角線上に配する。規模は $0.19\sim0.25\times0.21\sim0.25\times0.60\sim0.74\mathrm{m}$ で、大きな差はない。柱穴の間隔は $2.45\sim2.60\mathrm{m}$ である。貯蔵穴は横長の方形 $(0.35\times0.54\times0.40\mathrm{m})$ で竈右側の北東隅にある。この他竈の左脇に性格が不明の小ピットが 1 本ある $(0.15\times0.16\times0.47\mathrm{m})$ 。また竈の反対側の壁際 (南壁) の中央に馬蹄形 $(1.25\times2.35\mathrm{m})$ の高まりがあり、この中にピットがある $(0.17\times0.15\times0.42\mathrm{m})$ 。壁溝は一部を除き巡っている。焼失住居で焼土・炭化材を検出した。埋土は上層に黒色土、下層に暗褐色土(ローム小ブロック混入)が堆積する。竈は北壁中央を $0.35\mathrm{m}$ 掘り込んで構築する。上層に流れた天井部と思われる粘性のある山砂が堆積し、その下に黒色土(下層ほど焼土粒子が多く混入する)が堆積する。遺存状態がよい遺物が多い。



第33図 竪穴住居005

竪穴住居005の西13mに位置する(オ11)。古墳031の西5mの所で、間に溝状遺構013が南北にはしる。

4 隅が直角のやや縦長の方形(5.47×5.24 m)である。竈は北壁中央に位置し、やはり等高線に主軸($N-29^{\circ}-W$)を直交させている。柱穴 4 本は 4 隅の対角線上にある。柱穴の形態は不整形で規模は $0.40 \sim 0.68 \times 0.47 \sim 0.64 \times 0.54 \sim 0.82$ mである。平面の規模に大き差はないが、P1が最も浅く、P3が最も深い。P2 (0.68m)・P4 (0.70m) はほぼ同じ深さである。P3 内から完形に近い鉢が出土しており、抜柱していたものと思われる。柱穴平面形態が不整形なのはこのためであろう。貯蔵穴は横長の方形($0.50 \times 0.71 \times 0.70$ m)で、竈右側の北東の隅にある。また南壁際中央に小規模なP6 ($0.16 \times 0.20 \times 0.16$ m)がある。出入口施設と考えられる。壁溝は竈部分を除いて巡る。

埋土は上層から黒褐色土(粒の粗いローム粒子を含む)、暗黄褐色土(粒の粗いローム粒子を含む)が交互に堆積している。

竈は北壁中央を0.50m掘り込んで構築する。火床部は僅かに窪み、煙道部の傾斜は緩やかである。暗褐色土・黒褐色土(下層は焼土粒子が混入する)・暗黄褐色土が堆積する。

遺物は杯9点、鉢3点、甕3点、甑1点、支脚1点を図示した。竈や貯蔵穴周辺を中心に出 土している。一通りの器種は揃っており、遺存状態が良好なものが多い。

竪穴住居007 (第35図、図版13)

「遺物 P 73]

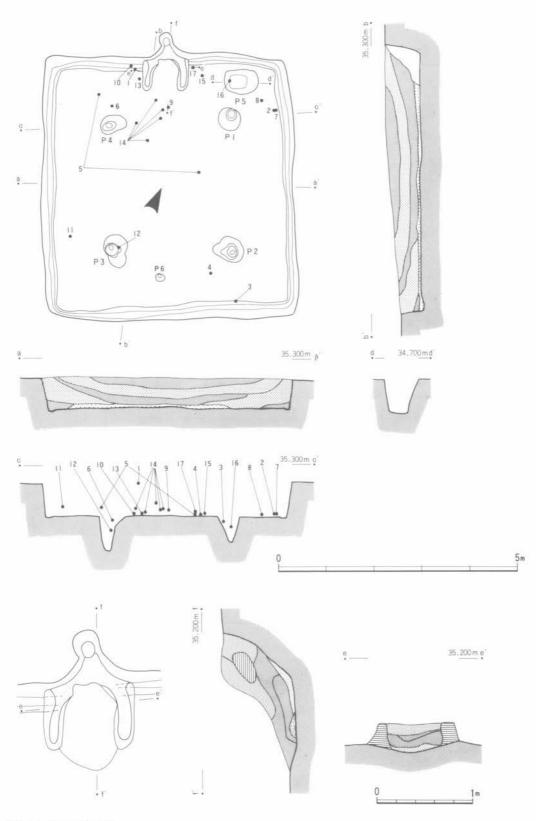
竪穴住居005の 2 m南西に位置する(オ11)。等高線に沿って南西 5 mの所は竪穴住居008である。

斜面に立地するため南壁中央は遺存が良くない。4 隅が直角の横長の方形 $(5.70\times7.00\times0.70\,\mathrm{m})$ で 4 隅の対角線上に柱穴、竈の東側に横長の方形の貯蔵穴 $(0.35\times0.46\times0.47\mathrm{m})$ がある。柱穴の規模は $0.18\sim0.27\times0.19\sim0.30\times0.44\sim0.60\mathrm{m}$ である。 P 4 が浅いがこの他は規模に大きな差がない。柱穴の間隔は $3.35\sim3.85\mathrm{m}$ である。壁溝はなく、壁の立ち上がりは垂直に近い。焼失住居で焼土・炭化材を検出した。特に北半部に多く検出したが、南側のものは流れてしまった可能性がある。

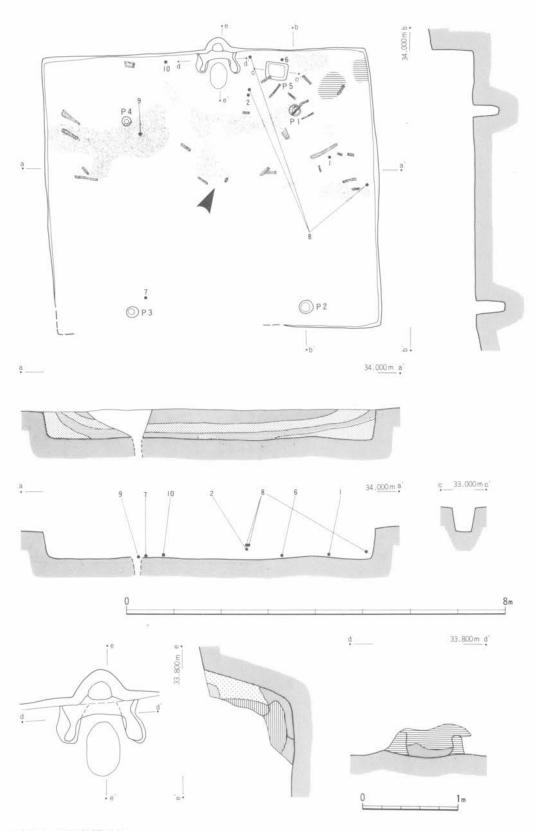
埋土は上層から黒褐色土、暗黄褐色土 (ローム粒子を多量に混入)、暗褐色土 (ローム粒子を 少量混入)である。また壁際には中層と同じ暗黄褐色土が堆積している。

竈は北壁中央を0.25m掘り込んで構築している。火床部は僅かに窪んでいる。また、煙道部の傾斜は急である。崩落した天井構築材の下には焼土が混入した黒褐色土が堆積し、煙道部分には黄褐色土(ローム粒子主体)が堆積する。

遺物は杯 6 点、鉢 2 点、甕 1 点、土製支脚 1 点が実測できた。他の竪穴住居と比べると数が少なく、遺存状態が良好な物も少ない。



第34図 竪穴住居006



第35図 竪穴住居007

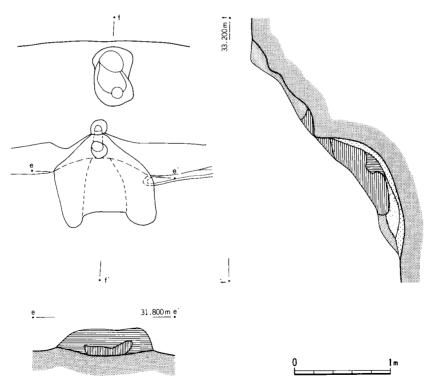
竪穴住居007の南西 5 mの所に位置する (オ11)。

上層中央部は大きく撹乱を受け、また斜面のため南壁の遺存がよくないが壁溝が残っていたので規模は推定できる。北壁は 2 段に立ち上がっており、下部は垂直に近い角度で立ち上がるが、上部の立ち上がりの角度が大きいので縦長の長方形(7.77×6.74×1.25m)に見える。しかし、床の平面形態で見ると正方形である(下場 6.10×6.10 m)。北壁中央に竈を設けている。主軸($N-40^\circ-W$)はやはり斜面に直交する。柱穴は対角線上に 4 本配し、竈右側の北東隅に貯蔵穴がある。柱穴は $0.13\sim0.31\times0.15\sim0.29\times0.50\sim0.73$ mで直径が小さい。貯蔵穴は不整形な円形である($0.94\times0.91\times0.61$ m)。P 2 の南側の壁際に性格が不明なピットが 1 本ある($0.55\times0.53\times0.41$ m)。焼失住居で焼土・炭化材を検出した。竪穴住居全体に散っている。

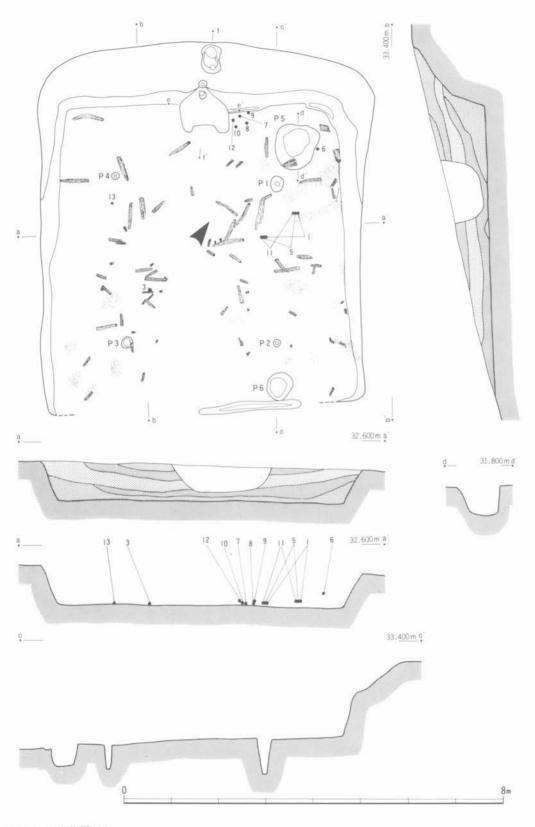
埋土は上層から暗褐色土 (ローム粒子混入)、黒褐色土、暗黄褐色土 (ローム粒子主体)、黒褐色土、暗褐色土 (ローム粒子混入上層より多い) の順で北から流れ込むような堆積状況を示している。

竈は天井部が流れている。上部の窪みには暗褐色土が堆積していたが竈に伴う施設かどうか は不明である。

遺物は杯 2 点、小型土器 1 点、鉢 2 点、甕 5 点、甑 1 点、土製支脚 1 点の他、鉄製刀子が図示できた。



第36図 竪穴住居008竈



第37図 竪穴住居008

竪穴住居007の南東に位置する(オ11)。南に7mの所に竪穴住居015がある。

南西は溝状遺構010に破壊され、また南壁は斜面のため遺存しない。遺存する壁は直線で、隅は直角に曲がり、方形を呈している。東西は5.07mを測る。壁の高さは遺存のよいところで0.50mである。竈は北壁中央にあり、主軸 $(N-14^\circ-W)$ は等高線に直交する。柱穴は3本検出した $(0.36\sim0.41\times0.36\sim0.40\times0.14\sim0.28m)$ 。平面規模には大きな差はないがP2 は深さ0.14mで浅い。この他柱穴P2 の南にP4 $(0.36\times0.36\times0.14m)$ があるが、性格は不明である。

南側の埋土は流れているが、北側では上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積する。

竈は北壁中央を0.30m掘り込んで構築している。そこからさらに外側に0.35mの所に煙道口を検出した。燃焼部には焼土が堆積し、煙道部には黄褐色土(ローム粒子を主体とし焼土粒子が混入)が堆積する。

遺物は杯3点、高杯1点、小型土器1点、鉢3点、甕4点の他、土器片を利用した砥石を図示した。土製支脚破片も多数出土したが遺存状態が悪く図示できない。



第38図 竪穴住居009遺物出土状態

竪穴住居011 (第40回、図版15)

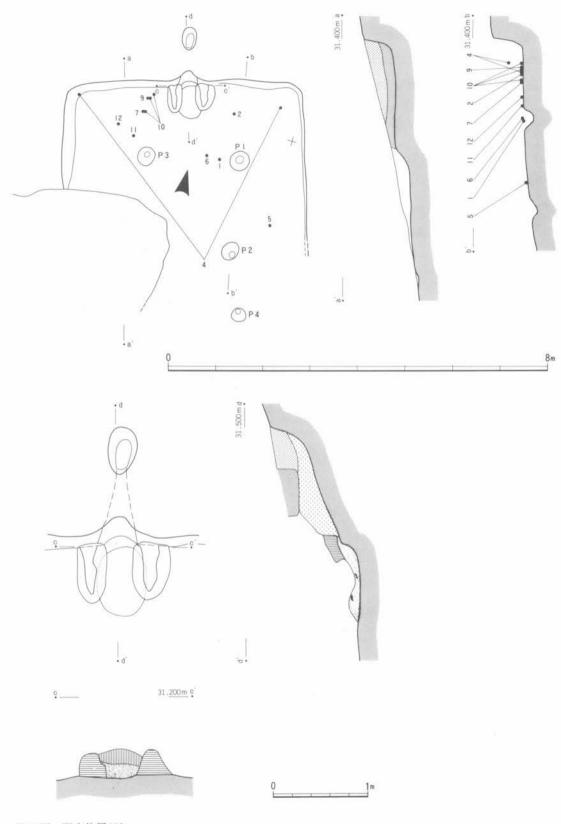
遺物 P 79

調査区中央部の斜面に竪穴住居012と並んで立地する(オ12)。竪穴住居008の22m南西になる。僅かに縦が長い方形 $(5.22 \times 4.82 \times 0.40 \mathrm{m})$ で、主軸 $(N-24.5 - \mathrm{W})$ は等高線にほぼ平行している。このため西側の壁は1.30mを測るが、東側は0.20mしか遺存しない。柱穴と思われるピットを 4 本検出した $(0.34 \sim 0.47 \times 0.34 \sim 0.51 \times 0.56 \sim 0.61 \mathrm{m})$ 。このうち $\mathrm{P}\,1$ を除く 3 本は対角線上に位置し、それぞれの中心を結ぶと遺構と相似形の方形になるが、 $\mathrm{P}\,1$ はこれらより中心に寄った所に位置する。 $\mathrm{P}\,4$ が僅かに平面規模が大きいが、深さなどには大きな差はない。壁溝は西壁と南壁に巡る。竈脇と西壁際の床面から焼土を検出した。

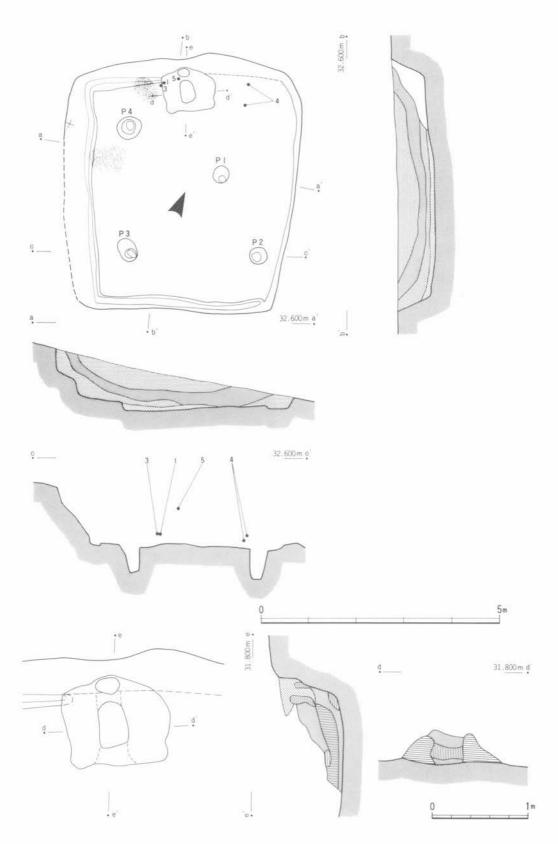
埋土は上層から暗褐色土 (ローム粒子混入)、黒褐色土、暗褐色土 (漸移層)、暗黄褐色土 (ローム粒子が主体)、黄褐色土である。

竈は北壁中央に構築される。遺存状態が良好で掛け口、煙道口が残る。燃焼部には上層に黒色土、中層に暗赤褐色土(焼土粒子が混入)が堆積する。

図示できる遺物は杯 5 点、甕 2 点である。いずれも竈周辺から出土している。他の竪穴住居と比べ、混入する遺物は140点余で必ずしも少なくないが遺存状態が良いものは少なかった。また、器種がそろっていない。



第39図 竪穴住居009



第40図 竪穴住居011

竪穴住居011の1.70m南に並んで位置する (オ12)。主軸 (N-122°-W) は等高線と直交しており、主軸が等高線と平行になる竪穴住居011とは主軸を90°異にする。

東壁は遺存しないが、 4 本の柱穴の配置から推定すると僅かに横長の方形を呈していたと思われる。南北の軸は6.44m (床面では5.24m)を測る。柱穴の規模は $0.52\sim0.60\times0.47\sim0.60\times0.15\sim0.55$ mである。平面規模には大きな差はないがP1が0.27m、P2が深さ0.15mと浅く、 $P3 \cdot P4$ はそれぞれ0.53mと0.54mである。壁はなだらかに傾斜して立ち上がり、壁溝はなく、壁高は遺存の良い西壁で1.00mである。

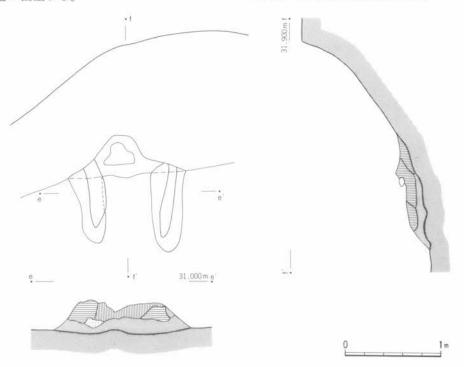
中央部には黒褐色土 (ローム粒子が混入) が堆積し、壁際には暗黄褐色土 (ローム粒子が多量に混入) が堆積する。

竈は西壁中央を掘り込んで構築している。床 面の上に黒褐色土(しまりが良い)を敷き、床 より一段高くして袖を構築している。煙道の立 ち上がりは緩やかである。竈内には暗赤褐色土 が堆積する。

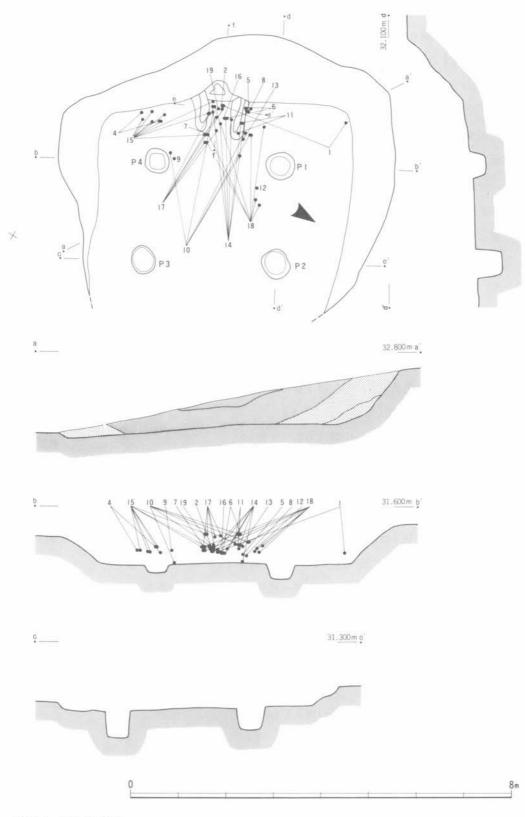
遺物は杯7点、高杯2点、鉢1点、甕6点、 甑2点、支脚1点が図示できた。竈内と竈周辺 を中心に出土する。



第41図 竪穴住居012遺物出土状態



第42図 竪穴住居012竈



第43図 竪穴住居012

竪穴住居009の南6mの所に位置する(オ12)。

斜面に位置するため南隅付近は壁が遺存しない。しかし3隅を確認できたので規模は推定で きる $(5.75 \times 6.05 \times 1.00 \text{ m})$ 。竈は北壁中央部に有り、主軸(N-33 - W)は等高線と直交する。 対角線上に4本の柱穴を配し、竈右側に横長方形の貯蔵穴P5(0.52×0.75×0.67m)がある。 柱穴の規模は0.48~0.77×0.41~0.45×0.35~0.48mである。北西側の2本(P1・P4)が 0.45m・0.48mとやや深いが、南東側の2本(P2・P3どちらも深さ0.35m)は0.10mほど 浅い。柱穴P1の底面から鉢(47)が出土しているため抜柱している可能性がある。壁は垂直 に立ち上がり、壁溝は壁が遺存する部分では竈を除いて全周している。北西隅の床面には焼土 が多量に堆積しており、焼失住居であったと思われる。

埋土は上層から黒褐色土、暗褐色土(粘性がある)、暗黄褐色土(焼土粒子・粘土粒子が混入) である。

竈は北壁中央を0.20m掘り込んで構築するが右袖は遺存しない。

出土した遺物の量は竪穴住居017についで多く破片数は831点を数える。また、実測可能な遺 物の数は本遺跡の竪穴住居中もっとも多く、須恵器杯5点、杯33点、高杯1点、小型土器4点、 鉢 5 点、甕20点、土製品 1 点、鉄製鎌 1 点の合計70点が図示できた。

竪穴住居017 (第44·46図)

[遺物 P 85]

竪穴住居012と竪穴住居015の中間にある(オ12)。

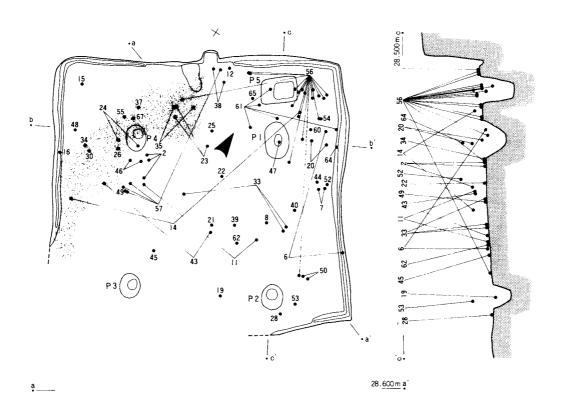
僅かに横が長い方形を呈する(6.08×6.52×0.60m)。竈は西壁中央にあり、主軸(N-69"-W) は等高線に直交する。柱穴は対角線上に4本配する。規模はP1(0.62×0.66×0.32m)・ $P = 2(0.65 \times 0.64 \times 0.27m)$ がほぼ同じであるが $P = 3(0.75 \times 0.85 \times 0.53m) \cdot P = 4(0.92 \times 0.73 \times 0.75 \times 0.85 \times 0.64 \times 0.27m)$ 0.45m) が大きい。P 5 は小型であるが貯蔵穴と思われ方形を呈している(0.50×0.54×0.62 m)。壁は垂直に近い角度で掘り込んでおり、壁溝はない。

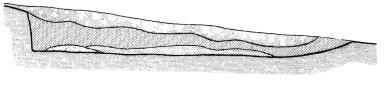
埋土は黒褐色土(ローム粒子・焼土粒子・竈構築材が混入)である。

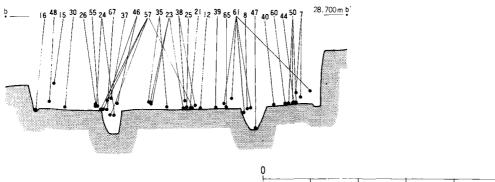
竈は、設置場所を僅かに掘り窪めて黒色土(締 まりが非常によい)で埋め戻し、その上に袖を 構築している。燃焼部には流れた天井部の構築 材(黄褐色砂質粘土)が堆積し、その下に暗赤 褐色土 (黒色土・構築材・焼土粒子が混入) が 堆積する。袖の内側は火熱により焼土化する。

出土した破片数は本遺跡の竪穴住居中もっと も多い。須恵器 2 点、杯15点、高杯・小型土器・ 壷各1点、鉢2点、甕・甑12点を図示した。 第44図 竪穴住居017遺物出土状態

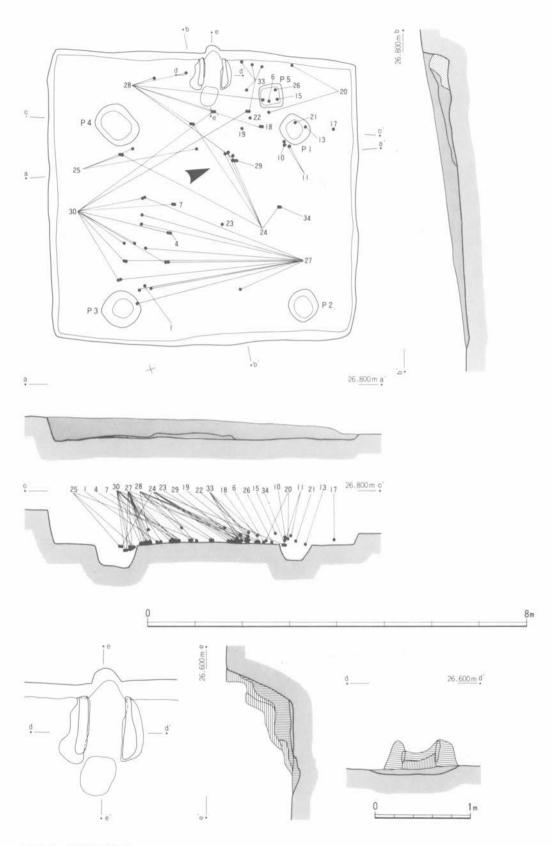








第45図 竪穴住居015



第46図 竪穴住居017

[遺物 P 85]

竪穴住居018 (第47図、図版15)

竪穴住居017の30m(直線距離)東、斜面のさらに下に位置する (ク12)。

竈は西壁中央よりやや南に寄った所にあり、主軸($N-60^\circ-W$)は等高線に直交する。やや横長の方形($4.65\times5.46\times0.58$ m)を呈する。柱穴を 4 本配し($0.32\sim0.47\times0.32\sim0.49\times0.36\sim0.53$ m)、東壁の竈と向かい合う位置に出入口施設と考えられる P 5($0.38\times0.37\times0.47$ m)がある。

黒褐色土・暗褐色土(焼土細粒を少量含む)が堆積する。

竈燃焼部には暗赤褐色土(焼土ブロック・粘土粒子混入)が堆積しその上に構築材がのっている。

遺物は須恵器杯蓋・高杯・小型土器が各1点、杯8点、鉢2点、甕11点が図示できた。

竪穴住居019 (第48図、図版15)

[遺物 P 90]

竪穴住居018のさらに下に位置する(ク12)。標高19.50mである。

正方形を呈する $(4.71 \times 4.90 \times 0.45 \text{m})$ 。竈は西壁中央にあり、主軸 $(N-64^{\circ}-\text{W})$ は等高線に直交する。柱穴は 4 本配するが、対角線上からはずれたものもあり、特に東の P $2 \cdot 3$ は壁に近いところに位置する。このため柱と柱を結んだ線は不整形な方形となる。また規模も色々で、P 1 $(0.37 \times 0.35 \times 0.66 \text{m})$ 、P 2 $(0.32 \times 0.33 \times 0.18 \text{m})$ が小型で、P 3 $(0.48 \times 0.50 \times 0.33 \text{m})$ 、P 4 $(0.58 \times 0.56 \times 0.47 \text{m})$ がやや大きく、P 1 が最も深い。また、P 1 は中心に向かって斜めに掘り込む。竈右脇に方形の貯蔵穴 P 5 $(0.82 \times 0.60 \times 0.42 \text{m})$ がある。

埋土は黒褐色土で、上層には焼土が若干混入し、下層には褐色土が混じる。

竈は西壁中央を0.40m掘り込んで構築しているが、右袖は一部破壊される。燃焼部には赤褐色土(焼土粒子・焼土ブロック混入)が堆積する。

遺物は全部で6点が図示できた。他の竪穴住居に比較すると少ない。

竪穴住居023 (第49図)

「遺物 P 90]

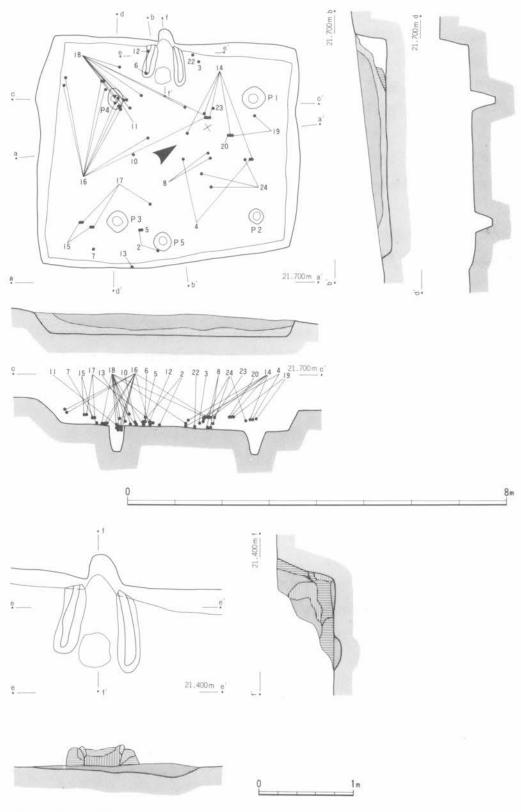
調査区東端に他の竪穴住居とは離れて位置する(ク11・ヤ11)。

竈は西壁中央にあり、主軸は等高線と直交する。東半分の壁は遺存しないが、柱穴を方形に 4 本検出し、正方形を呈していたと思われる。遺存する南北は5.20mである。壁高は遺存の良いところで0.70mである。柱穴の規模は色々で、 $P1(0.44\times0.38\times0.50\text{m})$ が深く、 $P2(0.26\times0.28\times0.38\text{m})$ ・ $P3(0.30\times0.31\times0.14\text{m})$ が小型で、 $P4(0.48\times0.50\times0.35\text{m})$ が大型である。壁溝は西から東壁の一部を除き巡っている。

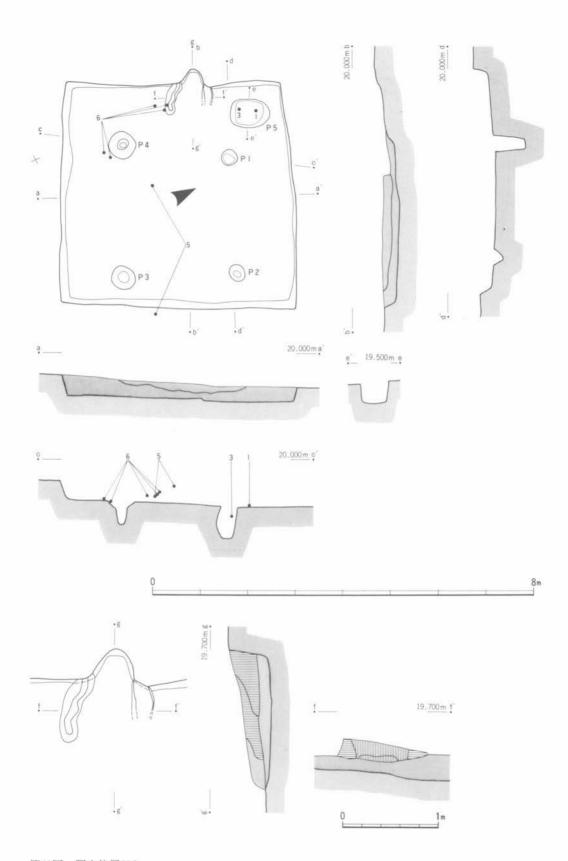
埋土は黒褐色土(ローム粒子混入)を主体とする。

竈は西壁中央を0.15m掘り込んで、構築する。暗赤褐色土(焼土ブロック・砂質粘土混入)が堆積し、その下に暗黄褐色粘土(上面は火を受け焼土ブロック化する)が堆積する。

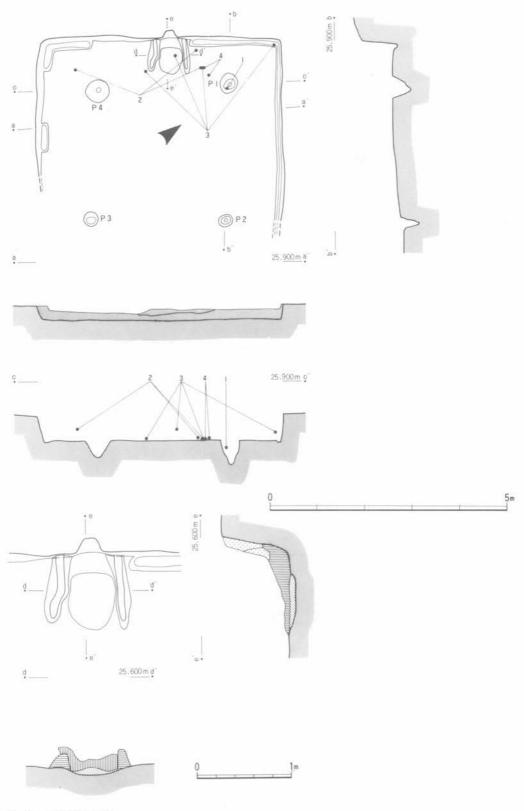
遺物は須恵器杯身、杯、鉢が図示できたが、煮沸容器がなく、他の竪穴住居に比べ少ない。



第47図 竪穴住居018



第48図 竪穴住居019



第49図 竪穴住居023

2. 遺 物

竪穴住居から出土した遺物には土器類の他、土製品(支脚、玉他)、鉄製品(刀子、鎌)等がある。遺存状態の良好な遺物が多く、15軒の竪穴住居から出土した土器類のうち実測できたのは総数 308個体を数える。実測可能な土器が最も多かったのは竪穴住居015で68個体、最も少なかったのは竪穴住居023で4個体である。

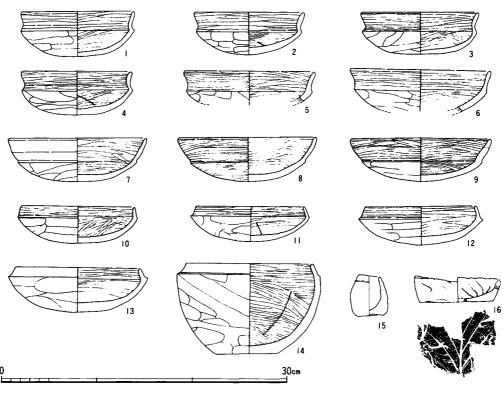
竪穴住居002 (第50・51図、図版22・28・29・49)

「土器観察表 P 149]

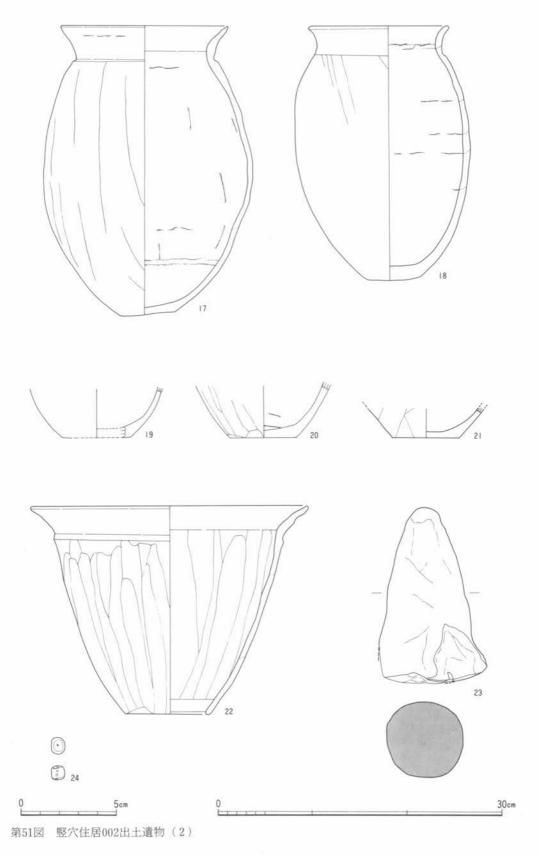
杯13点、小型土器 2 点、鉢 1 点、甕 5 点、甑 1 点、土製支脚 1 点、土製玉 1 点が図示できた。 一通りの器種が揃っている。この他の破片は 120点程で杯と甕が多い。

遺物は竈周辺を中心に各壁際から出土している。床面から出土した遺存状態の良好なものが多い。竈には甕(17・18)が2個体並んで掛かり、甕の下からは土製支脚(23)が出土した。左の甕(17)の中には杯2点(10・13)が入っており、土はほとんど入っていなかった。口径から考えて杯(10)が蓋の役割をしていたと考えられる。右の甕(18)には土が充満していた。竈の左側の床面からは甑(22)が出土し、その周辺からは杯(2・3)、甕底部を出土した。また、竈右側には鉢(14)、杯(1・4・11・12)が並んでいた。この他の杯5・8・9は南壁周辺、7は北西の壁際にあった。小型土器(15・16)は東の壁近くから出土している。

杯 $1\sim 4$ は丸底で体部外面に突出する明瞭な稜を作り、口縁部が強く外反する形態で口縁部と稜の部分の径がほとんど同じである。 4 点とも調整技法、法量とも大きな差がなく丁寧な作



第50図 竪穴住居002出土遺物(1)



- 64 -

りである。 $7\sim9$ は体部中位に稜を作り、口縁部が大きく外方に開く形態である。やはり法量もほぼ同じである。 $10\sim13$ は稜が上半部に有り、口縁部が短く内傾する形態である。13はやや大きいが、 $10\sim12$ は法量にほとんど差がない。また、図示した杯は全て内外面黒色処理をしている。しかし、ほとんどのものが剝げており、特に外面の遺存状態が悪い。この中で、2 は比較的遺存が良い。

鉢(14)は完形である。15の小型土器は壺形、16は器高が低い偏平な箱形の形態で、体部には手指で成形した痕跡が残り、底部には木葉痕が残る。

甕は17のほうが火熱による器面の荒れが著しい。18の底部中央に特に付着物が多いところが あり、これは土製支脚のあたっていた痕跡である可能性がある。

土製支脚は底面の一部が剝がれ落ちているのみで、遺存状態は良い。裾が大きく広がった安定した形態のものである。径は上端部で2.0cm、下端部で11.0cmを計る。高さは18.0cmで、甕(18)の底部の床からの高さと同じである。土製玉は竈脇の床面から出土した(第5表)。

竪穴住居003 (第52·53図、図版22·30)

「十器観察表P150]

須恵器杯身2点、杯1点、小型土器15点、甕と甑がそれぞれ1点ずつが図示できた。一通りの器種は揃っているが小型土器が多いのが特徴である。これらは竈内から出土したもの以外床面から出土している。また図示できなかった破片は65点と少なく、このうち48点が小型土器であった。焼失住居ではあるが煮沸容器以外の土器に特に火熱を受けた痕跡は認められない。

須恵器杯身2点(1・2)と杯(3)は完形である。須恵器杯身は1・2とも口縁部が短く 内傾する形態で、1の底部には線を2本並べた箆書きがある。3の杯は体部外面の中位よりや や上に突出した稜を作り口縁部が内傾する形態で、丁寧な作りである。内面の黒色処理の遺存 もよい。1は貯蔵穴P4脇、2は竈西側の北壁際、3はこれら2点の間から出土した。

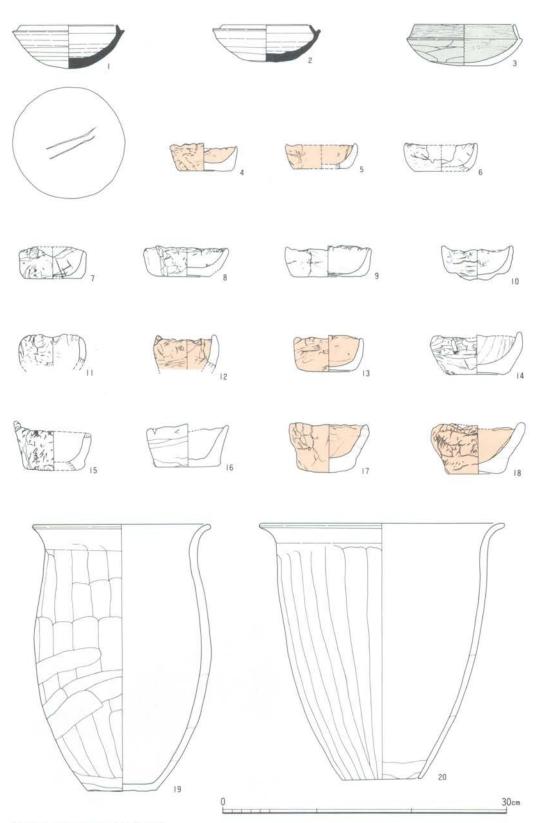
小型土器は立ち上がりがあまり傾斜せず、器高が口径の半分以下で高さがない偏平な箱形の 形態のもの($4\sim9$)と立ち上がりが内彎気味で小型のもの($10\sim13$)、やや大型で立ち上がり が外方へ開く形態のもの($14\sim18$)がある。内面をナデ、外面を雑なヘラ削りで仕上げている

ものが多い。このうち 4 ・ 9 ・ 13 ・ 14 ・ 17の 5 点が竈内から出土した。また16 ・ 18は竈左側の 壁際から18に16を重ねた状態で出土した。内外 面を赤色塗彩しているものもあるが 4 と13を除 くと遺存状態が悪い。

甕(19)は竈右袖前に横倒しの状態で、甑(20) は南壁際西寄りの所から出土した。どちらも遺 存状態は良い。土製支脚は図示できなかったが 破片は出土している。



第52図 竪穴住居003遺物出土状態



第53図 竪穴住居003出土遺物

杯17点、高杯1点、鉢6点、甕5点、甑1点のほか土製支脚、土製品を出土した。土器は豊 富で、器種も揃っている。完形品、また完形に近いものなど遺存状態が良好なものが多い。遺 物は竈周辺と南壁際中央に集中し、ほとんどが床面から出土している。特に竈左側には甑(30) が伏せて置かれ、この脇に杯類が5枚(上から14・9・7・10・11)と杯(1・3)・鉢(20) が重ねて置かれ、この他にも杯(4・12)、鉢(22)が並んでいた。また竈右袖脇には甕(25) と鉢(24)が並べて置かれていた。この他竈内からも杯(8・16)が出土している。

 $1 \sim 17$ は杯である。 $1 \sim 4 \cdot 7 \sim 11 \cdot 13 \sim 15$ は口端部の一部などを欠損するが完形に近い。 すべて外面に稜をもつタイプであるが、稜の高さや口縁部の形態で何種類かに分けられる。1 ~7は稜が中位にあり、口縁部が外反する。この中でも1~4は稜が横方向に突出している。 また、8~11も稜が中位にあるが口縁がやや外傾しており、底面も偏平で器高が低い。13・14 は稜が中位よりやや上にあり、口縁部が短く外反する。底部は偏平で器高が低い。15も稜が中 位よりやや上にあり、口縁部は真っ直ぐ立ち上がって深さがある。16・17は口縁部が短く内傾 する形態である。ほとんどが内面から口縁部外面をヘラ磨きし、外面体部から底部はヘラ削り で整形する。15のみ体部外面もヘラ磨きし、底部には金属を使用したような細い溝状の擦痕が 残っている。 $1 \sim 7$ 、 $10 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 17$ は内外面を黒色処理し、15は内面のみ黒色処理して いる。また、8 · 9 · 12は内外面赤色塗彩し、16は外面のみ赤色塗彩する。2 · 13は P 4 脇の 焼土下の床面、15は中央の床面から、6・17は南壁際から出土した。

19~24は鉢である。口端部の一部などを欠損するのみで遺存状態は良好である。23はP1脇、 19・21は南壁際から、20は竈の左脇から出土した。

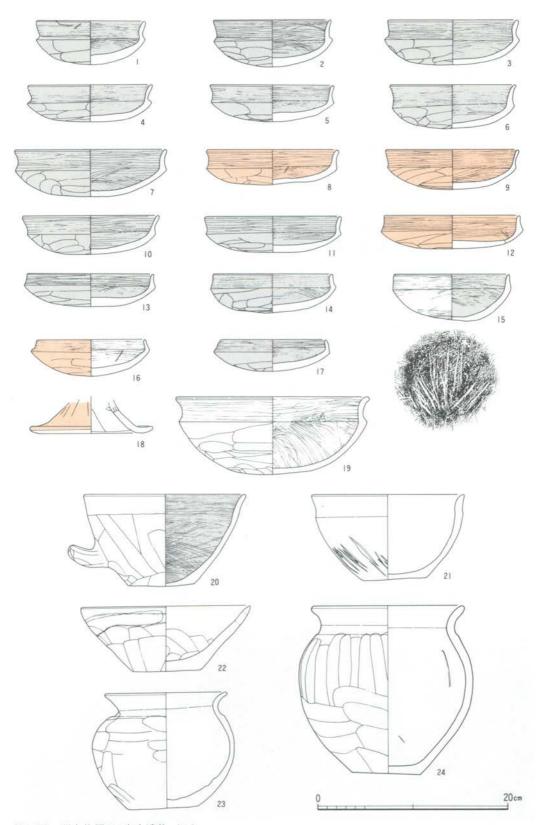
25~29は甕である。25以外は遺存状態がよくない。甑(30)は口縁部の一部を欠損する。

土製支脚は竈右袖脇から出土した。下端部を欠損する (遺存長14.7cm、径7.5cm)。胎土には 砂粒・小石を含む。

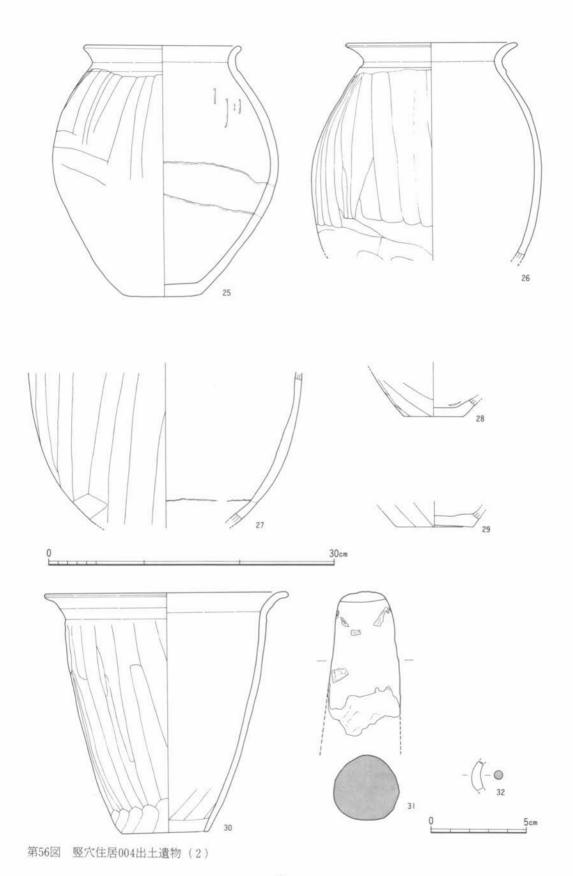
32は弓なりに曲がった棒状の土製品である。遺存長15.5mm、径4.5mm、重さ0.43gである。



第54図 竪穴住居004遺物出土状態



第55図 竪穴住居004出土遺物(1)



- 69 -

出土した遺物は杯・小型土器・鉢・甕・土製支脚で、このうち杯 7 点、小型土器 1 点、鉢 5 点、甕 7 点、土製支脚 1 点を図示した。一通りの器種は揃っており、鉢と甕の割合が多いのが特徴である。これらは竈周辺の床面から多く出土している。とくに竈左袖脇には甕(14・15)が並んでおり、更にその隣には土製支脚(21)が置かれていた。またその前には杯(3)と鉢(10)が重ねて伏せてあった。焼失住居であるが甕などの煮沸容器以外で火熱を受けた痕跡が認められるのは11の鉢のみである。復原できなかった破片は甕胴部の大型の破片が多い。

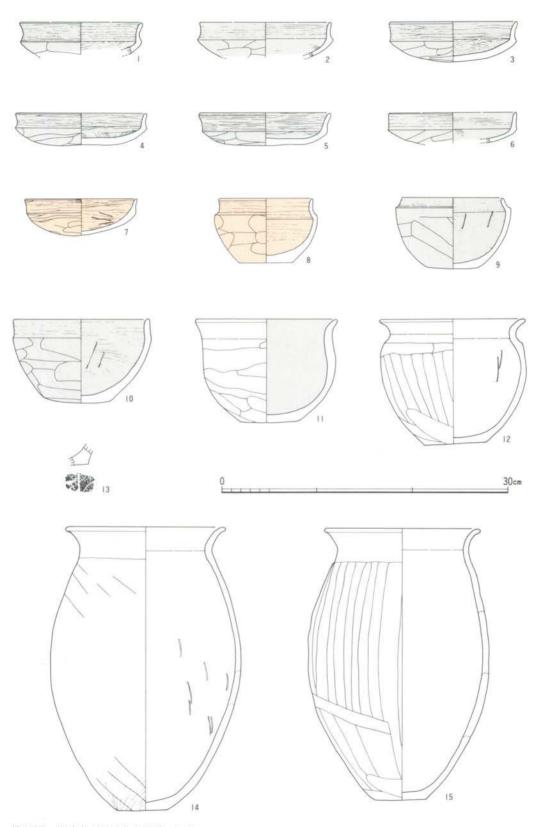
 $1\sim 7$ は杯である。 3 と 7 は完形に近く、 $4\cdot 5$ は 2 分の 1 程度遺存する。また $1\cdot 2\cdot 6$ は破片による復原実測である。鉢に比べると遺存状態が良好なものは少ない。いずれも丸底で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ形態であるが、口縁部が強く外反し、稜が突出するもの($1\sim 3$)、口縁部が緩やかに外反し、底面が偏平で器高が低いもの($4\sim 5$)、小型で口縁が緩やかに外反するもの(7)がある。 $1\sim 6$ は内外面を黒色処理し、いずれも黒色処理の遺存状態がよい。 7 は内外面を赤色塗彩している。 2 は竈右袖脇から、 3 は竈左袖脇に伏せて置いてありその上に鉢がやはり伏せて重ねてあった。 $1\cdot 4\sim 6$ は P1 周辺、 7 は東壁中央部から出土した。

8~12は鉢である。口縁部や胴部の一部を欠損するのみで遺存状態がよく、焼成も良好である。8・9が小型で、形態は5個体それぞれ違う。8~10は、胴部が内彎して立ち上がり、外面に明瞭な稜をもつ形態だが口縁部の形態が違う。8は口縁部が強く外反し、9は内傾する。10は直立して立ち上がる。また、11は稜がない形態で口縁部が外反する。鉢のうち9・10は内外面を黒色処理しいずれも黒色処理の遺存状態はよい。11も内面は黒色処理している。外面にも行っていた可能性はあるが火熱により器面が荒れ不明瞭である。9~11は竈の周辺の床から、8と12は東壁中央部付近から出土した。12は床面からやや浮いており、8は焼土の下から出土している。

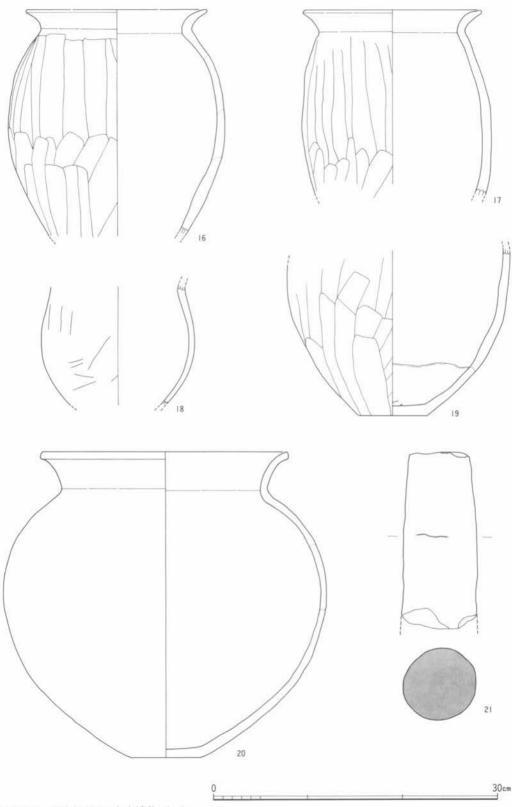
13は小型土器の破片と思われる。底部外面に木葉痕が残る。埋土中から出土した。

 $14\sim20$ は甕である。 $14\sim17\cdot19$ は長胴形、20は球胴形である。このうち竈脇から並んで出土した $14\cdot15$ は比較的遺存状態が良いが、 $16\sim19$ は口縁部または胴下半部を欠損し、16と20は復原実測している。いずれも火熱を受けて煤が付着したり色調が変色したりする。14は内面をなでて仕上げ、外面もへラ削り後なでており、内外面に工具痕が観察される。 $15\sim17\cdot19$ は内面をなでて、外面をヘラ削りする。20は火熱による器面の荒れが著しく調整は不明瞭である。16はP4から竈周辺にかけて、17はP1 脇、18はP4 脇、20はP2 脇からそれぞれ出土した。

土製支脚(21) は竈脇から出土した。そのすぐ隣には甕(15) が置かれていた。上端部の一部と下端部を欠損する(遺存長18.20cm)。上端径(6.60cm)と下端部径(8.00cm)の差が少ない円筒形を呈しており、胎土には砂粒を多量に含む。色調は橙色で焼成は良好である。



第57図 竪穴住居005出土遺物(1)



第58図 竪穴住居005出土遺物 (2)

杯 9 点、鉢 3 点、甕 3 点、甑 1 点、土製支脚 1 点が図示できた。遺存状態が良好なものが多い。竈左袖脇に杯 (1)・鉢 (10)・甕 (13) が並んで出土し、右袖脇には土製支脚 (17) と甕 (15) が並んでいた。また甑 (16) は貯蔵穴 P 5 から、鉢 (12) は柱穴 P 3 から出土した。

 $1\sim 9$ は杯である。 1 は口縁部と体部の境に稜がない形態で、口端部が厚くなる。 $2\sim 9$ は外面に稜をもつものである。これらは稜の位置、口縁部の形態でさらに幾つかに分類できる。 $2\sim 6$ は中位に稜がある。このうち $2\sim 4$ は口縁部が外反し、 $5\cdot 6$ は外方に広がって立ち上がる。 7 は稜が上位にあり短い口縁が外反する。 $8\cdot 9$ は稜が上位にあり、口縁部が短く内傾する。 9 点の杯のうち 4 以外はすべて内外面を黒色処理する。 4 は内面は黒色処理するが、外面は赤色塗彩している。 $2\cdot 7\cdot 8$ は貯蔵穴 P 5 周辺、 3 は南壁際、 4 は柱穴 P 2 の周辺、 6 は柱穴 P 4 のそばから出土した。

10~12は鉢である。10·11は口縁部と胴部の境が不明瞭で、12は口縁部が強く外反する。10· 12は遺存状態が良好である。

13~15は甕である。13は完形に近く、底部中央部には直径 1.5cm程の範囲で火を受けていない部分があり、この周囲は黒褐色に変色している。支脚があたっていた痕跡であるかもしれない。13・15は竈の袖の脇から、14は竈の前から出土した。

16の甑は口端部を欠損するが完形に近い。

土製支脚(17)は上端部の一部と下端部を欠損する(遺存長14.0cm、径7.5cm)。

竪穴住居007 (第60図、図版38)

[土器観察表 P156]

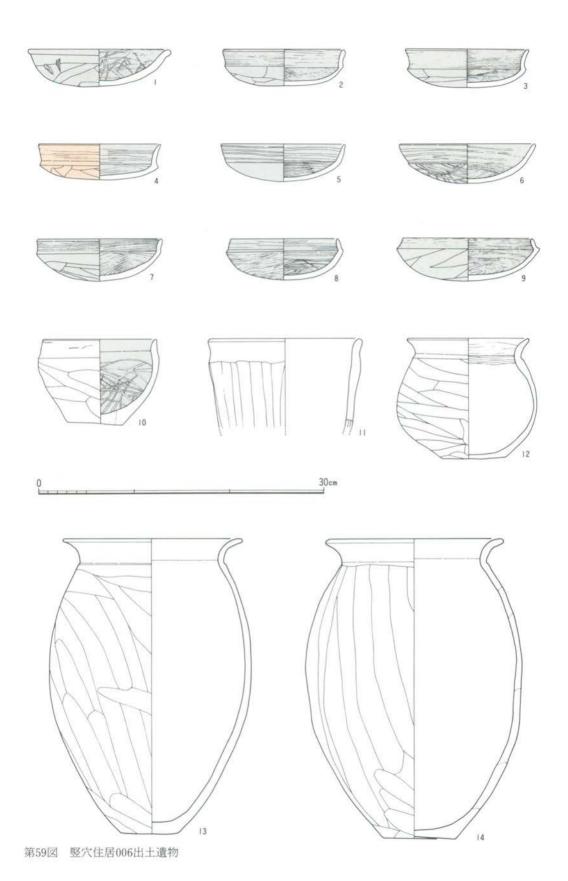
杯 6 点、鉢 2 点、甕 1 点、土製支脚 1 点が図示できた。他の竪穴住居の状態と比べると遺存 状態はあまりよくない。また床面ではなく、埋土中から出土したものも多い。

杯は $1 \cdot 2$ が口端部の一部を欠損するのみで完形に近いが、 $3 \sim 5$ は復原実測している。外面に明瞭な稜がないもの($1 \sim 3$)と外面に稜をもつもの($4 \sim 6$)の大きく二つの形態がある。前者のうち $1 \cdot 2$ はそのまま口縁部が弧状に開くが、3 は口縁部が短く直立する。後者のうち $4 \cdot 5$ は口縁部が緩く外反し、6 は外方に開く形態である。 $2 \cdot 4 \sim 6$ は内外面を黒色処理し、3 は内面のみ黒色処理している。 $4 \cdot 6$ は床面から出土したが、これ以外は埋土中から出土した。

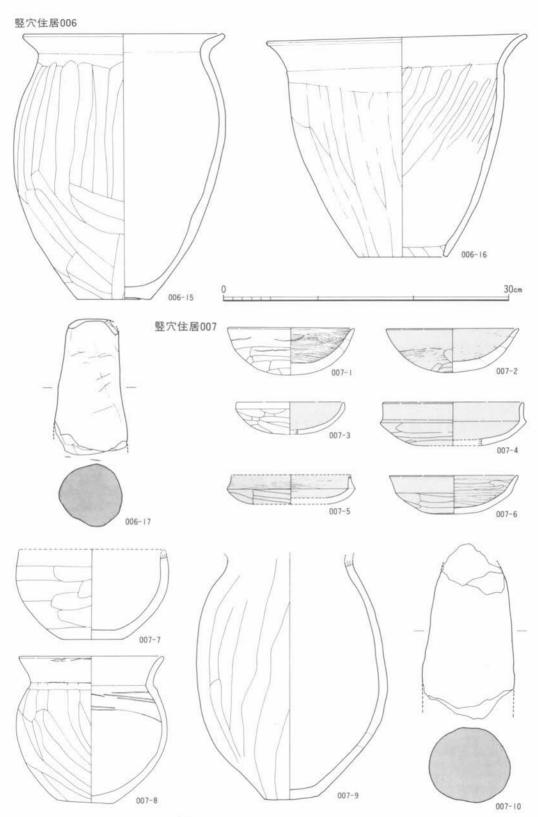
鉢は口縁部と胴部の境が明瞭でないもの(7)と、口縁部が強く外反する形態(8)がある。 7は柱穴P3脇、8は埋土中から出土した。

甕 (9) は P 4 周辺に堆積した焼土の下から出土した。火熱を受け器面の荒れが著しく遺存 状態も良くない。

土製支脚は上端部と下端部を欠損する(遺存長18.0cm、径9.6cm)。橙色で砂粒を多量に含む。 竈の左脇から出土した。



- 74 -



第60図 竪穴住居006·007出土遺物

杯 2点、小型土器 1点、鉢 2点、甕 5点、甑 1点、土製支脚 1点、鉄製刀子 1点が図示できた。竈右脇の床面には土製支脚(12)、甕 3点($7\sim9$)、甑 1点(10)が伏せて並べてあった。また、10)を 11 と 12 の間の床面から多数の土器片を出土し、この中から鉢(12)、甕(11)などが復原できた。これらの破片の一部は炭化材や焼土の下から出土した。焼失住居であるため、煮沸容器ほど明瞭ではないものの遺物はどれも火熱を受けている。

杯は2点とも外面に稜がある形態である。1は内外面、2は内面の底部以外を赤色塗彩する。 小型土器 (3) は完形でP3とP4の間の床面から出土した。明瞭ではないが赤色塗彩する。

4 · 5 は鉢で、どちらも遺存状態が悪い。 5 は内面を黒色処理して丁寧に磨いている。外面 も黒色処理している可能性はあるが器面が荒れ明瞭ではない。

甕7~9は長胴形である。火熱により器面が荒れたり付着物が多かったりするが遺存状態は よい。11は大型の甕であったと思われる。同一個体と思われる破片は周辺から多数出土したが、

口縁部と上半部の一部しか復原できなかった。

土製支脚は下端部を欠損する(遺存長16.3cm、 径8.5cm)。 橙色で砂粒を多量に含んでいる。

刀子 (13) は P 4 脇の床面から出土した。刃部の一部と茎尻を欠損する。遺存刃長112.0mm、刃幅 20.0mm、背厚3.6mm、遺存茎長25.0mm、茎幅12.0mm、遺存重量18.76gである。欠損面は新しい。鋒は斜めに切り落としたような形態で、両関である。



第61図 竪穴住居008遺物出土状態

竪穴住居009 (第63図、図版40·51)

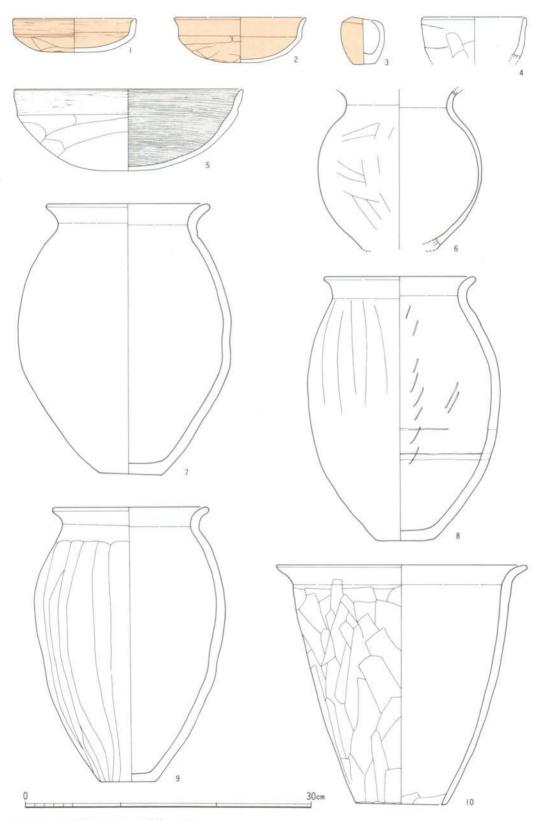
「土器観察表 P158]

杯 3 点、高杯 1 点、小型土器 1 点、鉢 3 点、甕 4 点のほか土器転用砥石 (13~15) を図示したが、いずれも遺存状態はよくない。

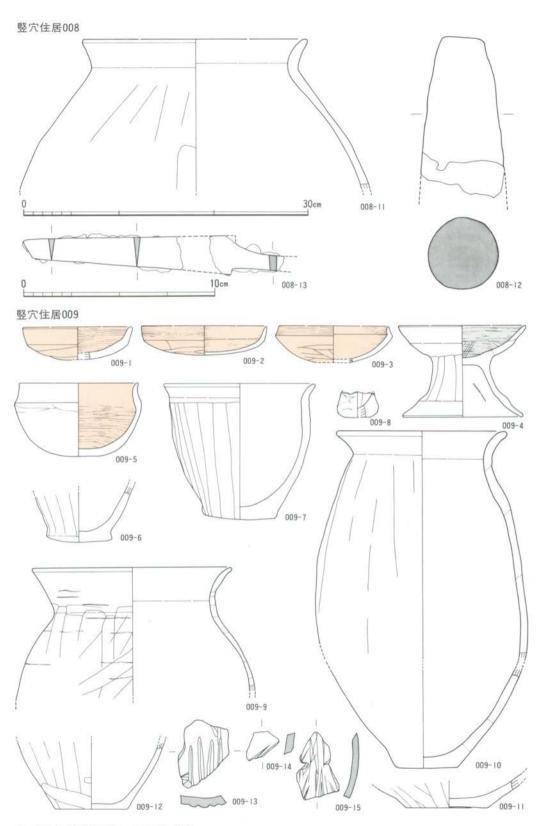
杯は3点とも復原実測した。外面に稜を持つ形態で、 $1 \cdot 2$ は口縁部が外傾するが、3は短く内傾する。 $2 \cdot 3$ は内外面赤色塗彩する。高杯(4)は北東隅と北西隅から出土した。杯部の遺存が悪く、杯部は復原実測した。 $5 \sim 7$ は鉢である。5は口縁部の一部を欠損するのみで完形に近い。P2脇から出土した。小型土器(8)は埋土中から出土した。

10は長胴形の甕である。上半部と下半部は直接接合しないが同一個体であろう。

13~15は土器を転用した砥石で外面に溝状の擦痕がある。埋土中から出土した。13・14は同一個体である。鉢を利用したものであろう。深く明瞭な溝がみられる。砂粒を多量に含み、橙色である。15は甕胴部を転用したものである。細く浅い擦痕が多数残っている。砂粒を含んだ胎土で内面は黒褐色、外面は赤褐色を呈する。



第62図 竪穴住居008出土遺物(1)



第63図 竪穴住居008 • 009出土遺物

竪穴住居011 (第64図、図版40)

図示できたのは杯5点と甕2点である。甕は口縁部と底部でどちらも復原実測したものである。煮沸容器の遺存が悪い。

杯は外面に稜がないもの(1)と稜を持つ形態のもの(2~5)がある。稜をもつ形態でも口縁部の形態により3種類に分けられる。火熱により器面が荒れているものが多い。 $1 \cdot 3 \cdot 5$ は竈左袖上から出土し、4 は竈右側から出土した。

竪穴住居012 (第64・65図、図版40・41・42)

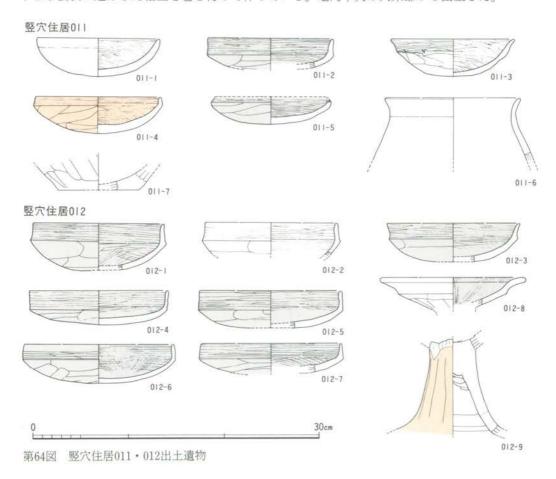
[土器観察表P159]

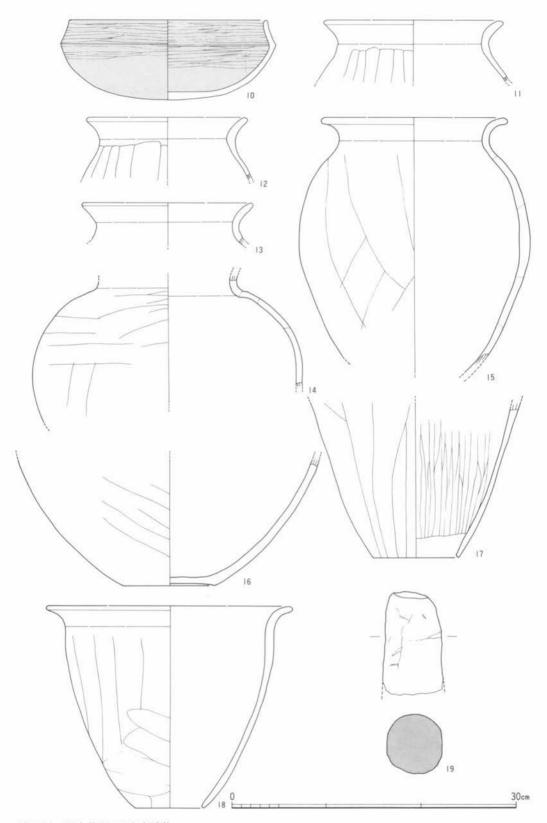
出土した遺物は多いが遺存状態はよくない。割れて竈周辺の埋土中に散って出土したものが 多い。実測できたものは杯7点、高杯2点、鉢1点、甕6点、甑2点と土製支脚1点である。

杯は外面に稜を持つ形態である。 $1 \cdot 2$ は口縁部が外反気味に内傾し、3は外反する。 $4 \cdot 5$ は直立する。 $6 \cdot 7$ も内傾するが内彎気味で、また $1 \cdot 2$ より口径が大きく器高が低い偏平な形態である。 $1 \cdot 4$ は遺存状態がよいほうで、残りは復原実測している。

甕は口縁部の一部、底部の一部がほとんどで比較的遺存状態のよい15も復原実測した。

土製支脚は頭部の一部と下半部を欠損する(遺存長10.4cm、径6.3cm)。芯を作り、その上に 平らな板状に延ばした粘土を巻き付けて作っている。竈内中央の火床部から出土した。





第65図 竪穴住居012出土遺物

実測できた遺物が最も多い竪穴住居で全部で70点を数える。混入していた破片の数も多く831点ある。実測できたのは土器類の他、土製品 1点、鉄製鎌 1点である。土器類は須恵器杯蓋 1点、須恵器杯身 4点、杯33点、高杯 1点、小型土器 4点、鉢 5点、甕20点である。器種は一応揃っており、杯・甕の量が多い。しかし遺存状態が良好なものは少なく、杯の半分以上は復原実測したものであり、甕も胴上半部や底部しか遺存していないものが多い。

遺物が特に集中して出土した所はなく竪穴住居全体に散っている。床面や床面から僅かに浮いた最下層の暗黄褐色土層から出土した遺物が多い。復原した遺物も破片がまとまっておらず、各所に散っている。このなかで鉢(47)は口縁部を欠損するが完形に近く、柱穴P1の底面から出土し注目される。焼失住居であるために煮沸容器以外でも火熱を受けており、器面が荒れたものが多い。また焼土周辺で出土した遺物は焼土中または焼土下の床面から出土している。したがって使用時からは移動しているものの、遺物のほとんどが焼失前から竪穴住居内にあったことになろう。

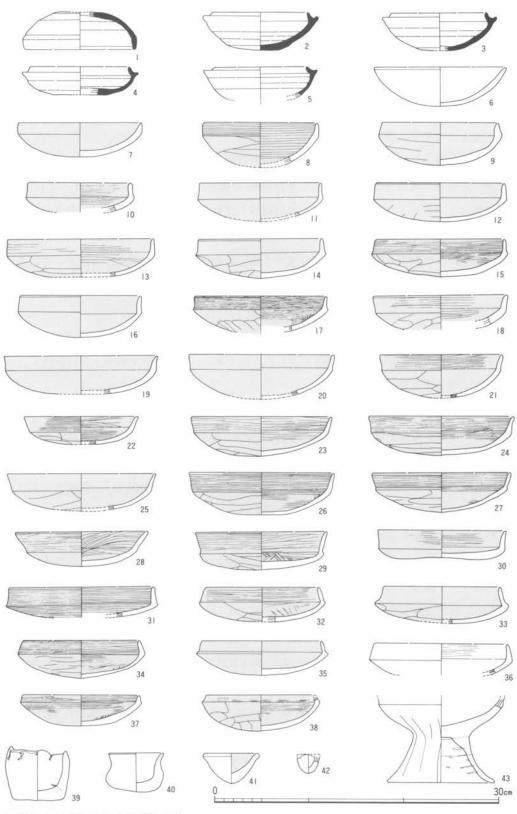
須恵器は杯蓋1点(1)、杯身4点 $(2\sim5)$ である。点数は多いが2以外は4分の1から3分の1の破片で遺存状態が悪く、復原実測したものである。身は受部が斜め上方に突出し、口縁部が短く内傾する形態のものである。

杯は先述したように 3 分の 1 周や 4 分の 1 周を復原実測したものが多く、これらのほとんどは割れ口が古く摩耗している。このなかで14・16が口端部を欠損するが比較的遺存状態が良好である。また、割れ口だけでなく口端部が摩耗しているものも多く見られる。6 と36以外は内外面黒色処理してしているが、36も内外面を黒色処理していた可能性が高い。形態は6・7が外面に稜を持たない形態で、この他は外面に稜を持つ。稜の位置が中位にあるもの、下位にあるもの、上位にあるものがあり、また口縁部が直立するもの、外傾するもの、内傾するものがある。整形・調整は火熱で器面が荒れているため不明瞭なものが多いが、内面から口縁部外面をへう磨きし、体部外面をへう削りしているものが主体である。体部外面をさらに磨いて仕上げたものもある(31・35・37)。

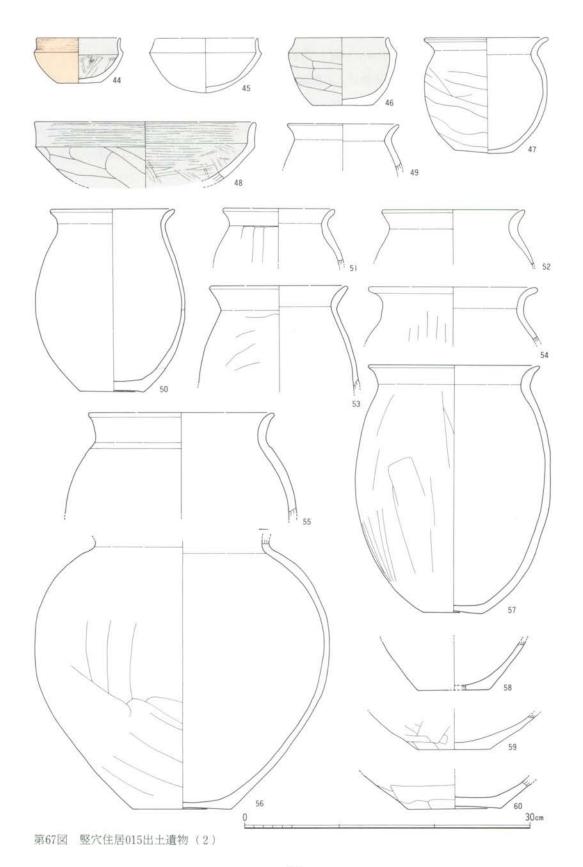
小型土器は4点出土した。39は完形で、平底で体部が直立する。手指で成形した痕跡が残っている。竪穴住居中央部の床面から出土した。40は丸底で口頸部が僅かにくびれ、41・42は底部が尖り外方に広がって立ち上がる形態である。

高杯(43)は1点のみで口縁部を欠損する。竪穴住居中央部と西壁付近の床面から出土した。 火熱を受けている。

鉢類は他の器種に比べて遺存状態が良好なものが多い。47以外は外面に稜をもつ形態で口縁 部が外反または内傾している。47は柱穴P1底面から出土した。口端部の2分の1を欠損する のみで遺存が良好である。44は外面を赤色塗彩、内面を黒色処理する。46・48は内外面を黒色



第66図 竪穴住居015出土遺物 (1)



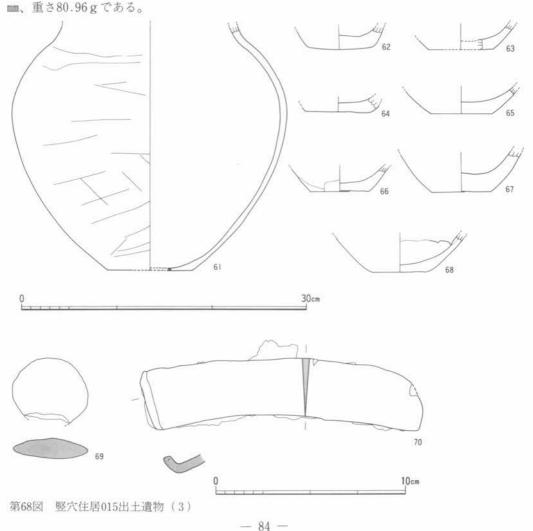
— 83 —

処理する。48の内面の黒色処理の遺存は良好で器面に光沢がある。

甕は多数出土したが、20点中 6 点が胴上半部の一部、10点が胴下半部から底部の一部でいずれも遺存状態が良くない。また火熱による器面の荒れが著しく調整などが不明瞭なものが多い。このうち比較的遺存状態が良好なのは $50 \cdot 57$ である。50は南東隅付近の床面から出土し、57は床面から割れて出土したが破片は散らばりまとまっていなかった。56は貯蔵穴P5の周辺を中心に割れて出土した。 $49\sim51$ は比較的小型の甕で、57は長胴形の甕、56と61は肩部が大きく膨らむ大型の甕である。

69は偏平な円形の土製品で用途は不明である。橙色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。火熱を受けたためか焼成があまく器表面がざらつく。直径39.5mm、厚さ11.0mm、重さ11.02gである。

70は鉄製鎌で、東壁付近の床面よりやや浮いた所から出土した。緩やかなカーブをもつ曲刃鎌である。先端部のごく一部を欠損するのみで遺存状態は良好である。刃を下、基部を左にして置いた場合、基部は手前に折り曲げている。全長150.0mm、刃幅28.0~32.0mm、背厚3.9~5.0



竪穴住居017 (第69・70図、図版25・44・45・46)

出土した破片の数は本遺跡の竪穴住居の中で最も多い。実測できた遺物も須恵器高杯1点、 須恵器甕1点、杯15点、高杯1点、小型土器1点、鉢2点、壷1点、甕10点、甑2点の合計34 点と竪穴住居015についで多い。煮沸容器が比較的多いのが特徴である。しかし、復原実測した ものが多く、遺存状況が良好なものは少ない。出土状態は特に集中する所はなく、竪穴住居全 体に散っており、竪穴住居015の状況と似ている。また復原した大型の甕類等の破片もまとまっ ておらず、竪穴住居内に散っている。

1は須恵器高杯の杯部の破片である。埋土中から出土した。

 $2\sim16$ は杯である。 $2\sim4$ は器高があり、球形を半截したような形態のもので、 $2\cdot3$ は内外面を赤色塗彩する。 $5\sim8$ は外面に明瞭な稜を作らない形態で、口縁部と体部の境が丸みをおびて緩やかである。口縁部が直立または内彎する。 $9\sim16$ は外面に明瞭な稜を作る形態である。12は内面のみ、 $5\sim11$ 、 $12\sim16$ は内外面を黒色処理する。器面が荒れて調整が不明瞭なものもあるが、ほとんどが内面から口縁部外面をヘラ磨きし、外面をヘラ削りしている。

21は壷で、口縁部を欠損するが胴部は破損していない。柱穴 P 1 の上面から出土した。外面の赤色塗彩は僅かに痕跡が残るのみでほとんど剝げている。

22~31は甕である。25・30は比較的遺存状況が良好である。25は柱穴 P 4 の脇から出土し、30はその東側を中心に破片が竪穴住居内各所に散っていた。

甑は大型(33)のものと小型(34)のものがある。どちらも比較的遺存状況がよい。大型の33は竈右袖脇、小型の34は柱穴P1とP2の間の床面から出土した。

竪穴住居018(第71・72図、図版46・47・48)

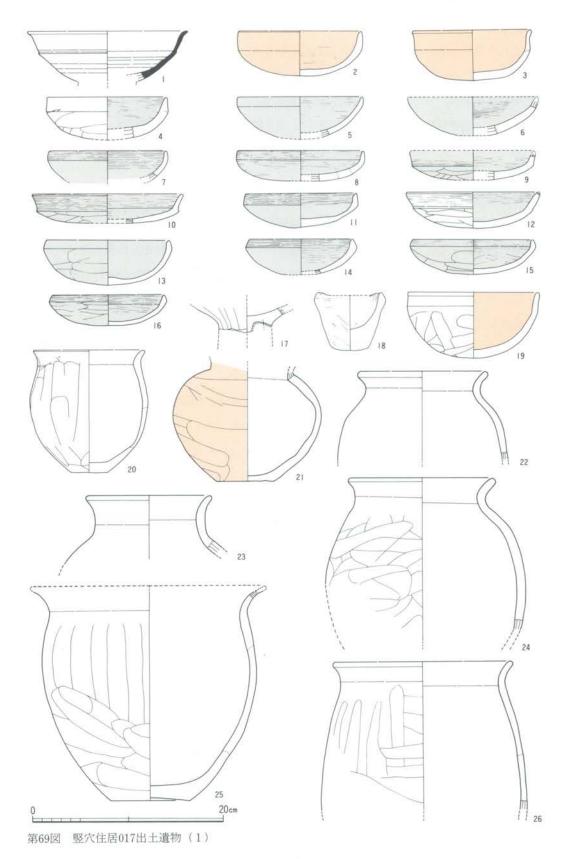
[土器観察表 P 167]

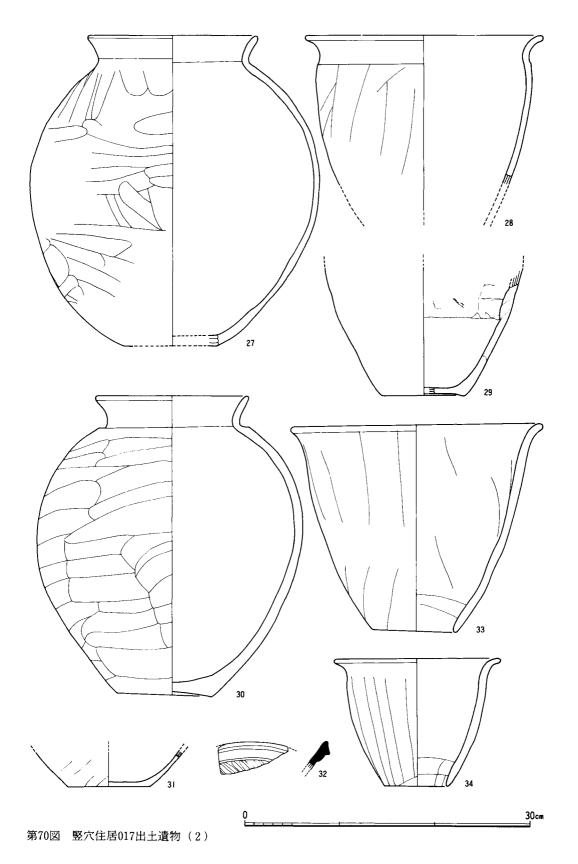
須恵器杯蓋1点、杯8点、高杯脚部1点、小型土器1点、鉢2点、甕11点の合計24点を図示した。煮沸容器が多いが遺存状態はあまりよくない。甑は出土しなかった。図示できなかった破片は400点余りを数える。特に集中して出土する所はなく、竪穴住居全体に散っており、床面から下層にかけて出土した。

須恵器杯蓋は6分の1周ほどの破片である。埋土中から出土した。

 $2 \sim 9$ は杯である。 $2 \sim 6$ は口縁部と体部の境が丸みをおびて緩やかである。口縁部の形態は3種類ある。 2 は内傾し、 $3 \cdot 4$ は直立、 $5 \cdot 6$ は外傾する。 $7 \sim 9$ は外面に明瞭な稜をもつ。口縁部は7 は外傾し、8 は外反し、9 は短く内傾する。 $6 \cdot 7 \cdot 8$ は内外面を黒色処理している。8 は内面を黒色処理しているが外面は不明瞭である。これらのうち $3 \cdot 6 \cdot 7$ は口縁部の一部を欠損するのみで、遺存状態が良好である。この他は復原実測した。 3 は竈右袖脇の床面からやや浮いた所から出土し、6 は竈左袖の上から出土した。また7 は南東隅付近の床面から出土した。

高杯(11)は脚部の破片である。埋土中から出土した。



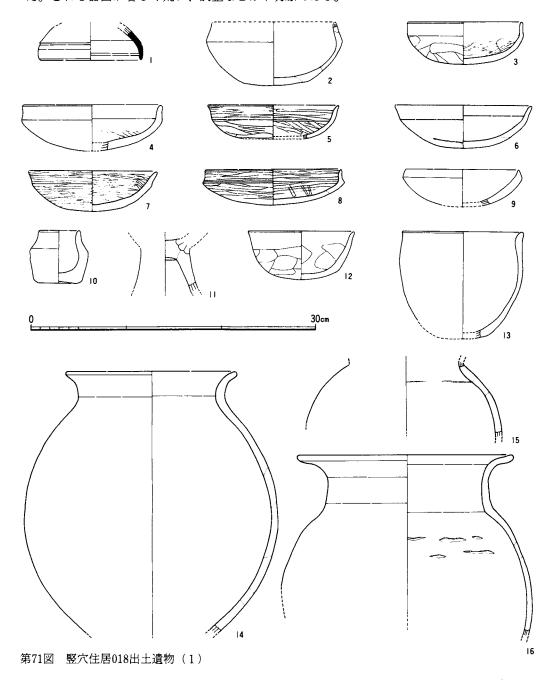


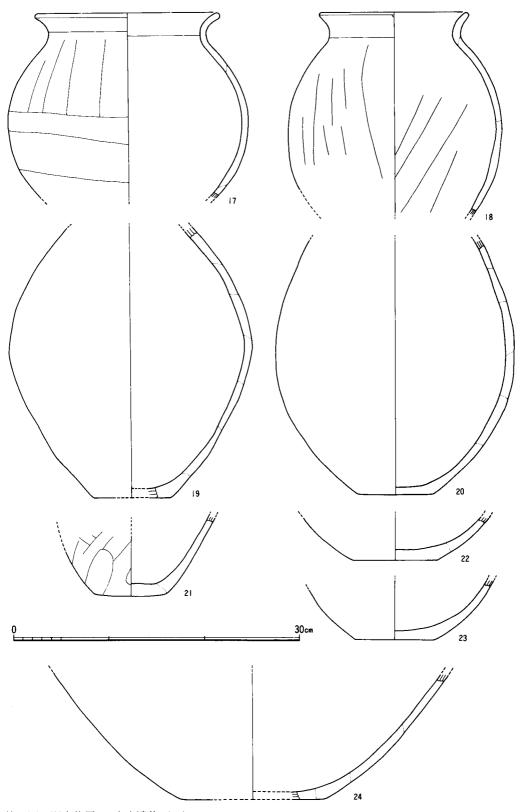
- 87 -

小型土器(10)は竪穴住居のほぼ中央、床面からやや浮いた所から出土した。

鉢は2点出土した。小型のもの(12)は完形で、竈左袖上に杯(6)と並んでいた。中型で 寸胴な形態の鉢(13)も遺存状態は比較的良好で南東壁際の床面から出土した。

甕はいずれも遺存状態が悪く上半部または下半部しか遺存していない。最大径が胴部中位にある、長胴気味の形態のものが多いようである。24は底部付近のみしか遺存しないが復原によるとかなり大型の甕になると思われる。16・18等は細かく割れて出土し、破片が各所に散っていた。どれも器面が著しく荒れ、調整などは不明瞭である。





第72図 竪穴住居018出土遺物 (2)

出土した遺物は少なくないが、図示できた遺物は6点である。杯2点、高杯1点、鉢1点、 甕1点、甑1点で、一通りの器種は揃ってはいるが遺存状態が悪い。

杯は2点で、1は貯蔵穴中位から出土した。どちらも内外面を黒色処理している。 鉢は埋土中から出土した。内外面を黒色処理しており、内面は器面に光沢がある。

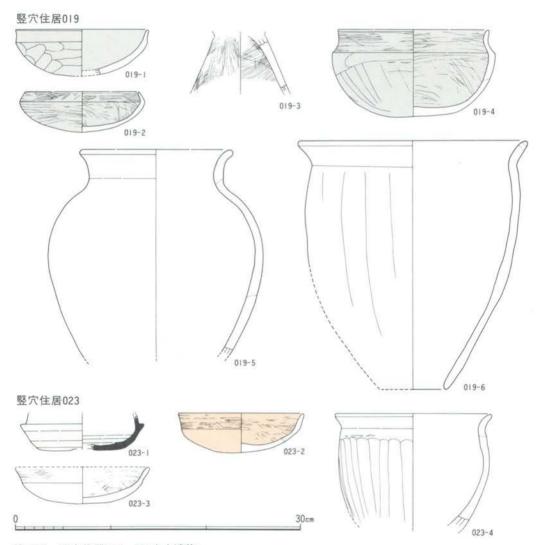
竪穴住居023 (第73図、図版47)

[十器観察表 P170]

出土した遺物は比較的少ない。図示できた遺物も4点で、本遺跡の竪穴住居の中で最も少ない。杯のうち1点(2)が完形に近いが、他の遺物の遺存状態はよくない。

1は須恵器杯身で5分の1周の破片である。胎土に黒色粒子を多量に含むのが特徴である。 柱穴P1の埋土中位から出土した。

杯は2点とも火熱により器面が荒れる。2は完形だが割れて出土し、破片は散っていた。



第73図 竪穴住居019·023出土遺物

第5節 溝状遺構

松向作遺跡では3条 (010・013・020)の溝状遺構を検出した。このうち、いわゆる溝としては013が相当するようである。また、調査時の所見によれば、010は古道跡、020は道路状遺構となっており、それぞれ遺物を伴出している。

溝状遺構010 (第74・75図、図版48・51)

[土器観察表 P170]

長さ17m、幅2.3mの北東から南西にのびる古道跡か。南に若干傾斜しており、深さは0.2m ほどで底面は平坦ではないが、鍋底状を呈する。また、直径0.5mから1mの小ピットあるいは 落込み部を伴うようであるが、性格は不明である。

土層の堆積状況は、2層に分層される。上層が風化ローム主体の褐色土層で、下層が微細なローム粒の混じる暗褐色土層となっている。

伴出した遺物は、第75図にのせた。

溝状遺構013 (第74図)

長さ115m、幅 $2\sim3$ mのほぼ南北にのびる溝である。深さは、深いところで0.7m、浅いところでは0.2mほどである。基本的に2ないし3のU字状あるいはV字状の底面を有し、平坦ではないようである。

土層の堆積状況は、2層に分層される。上層が風化ロームが粒状に混じる暗褐色土層で、下層がローム粒が多く混じる暗黄褐色土層となっている。

遺物は出土しなかった。

なお、溝状遺構013は隣接する立山遺跡の1号溝(015)に相当する可能性がある。第2図参照のこと。

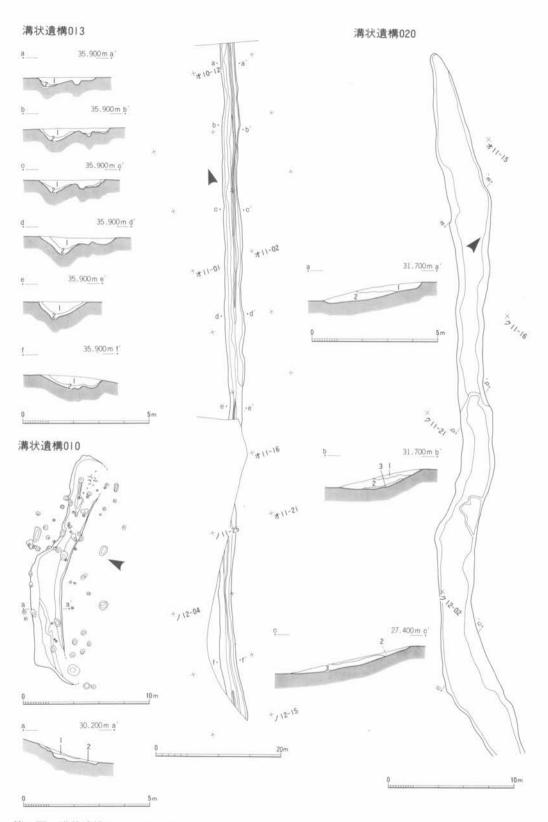
溝状遺構020 (第74·75図、図版47)

「土器観察表 P 170]

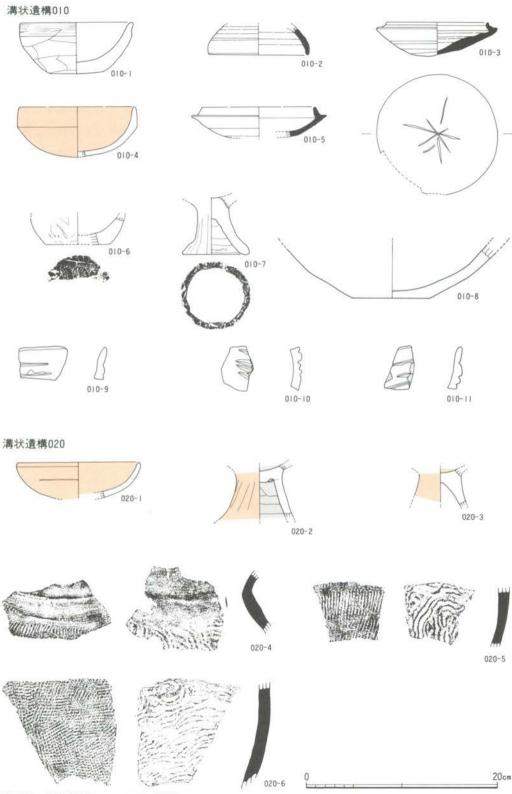
長さ53m、幅3mの北西から南東にのびる道路状遺構か。南に若干傾斜しているようである。 深さは0.3m~0.5mほどである。底面はほぼ平坦で、鍋底状ないしは緩いU字状を呈する。

土層の堆積状況は、2層ないし3層に分層される。1層がしまりのやや良い黒色土層で、2層がローム粒の混じる黒褐色土層、3層が粘土を若干含むしまりの良い暗黄褐色ローム層となっている。

伴出した遺物は、第75図にのせた。



第74図 溝状遺構010 · 013 · 020



第75図 溝状遺構010·020出土遺物

第6節 陥し穴・土坑・炭窯

松向作遺跡では 4 基(016・021・043・044 A)の陥し穴、 9 基(026・027・029・034・036・042・059 A・061・062)の土坑、 3 基(025・044 B・059 B)の炭窯を検出している。これらの遺構の性格の決定については、調査時の所見等から判断した。陥し穴は小ピット等の下部施設を持つもの、あるいは検出面からの深さ(ここでは検出面からの深さが 1 m以上あるものとした)があり、長楕円形ないし長方形を呈すものとした。また、土層の堆積状況もいわゆる自然堆積と呼ばれる状態を示すもので、図面上からは土坑、炭窯、土壙墓とは異なる堆積状況を示していることが読み取れる。ところで、平面形態および検出面からの深さからすると059 A などは陥し穴のはんちゅうに入るものと考えられるが、調査時の土層の堆積状況に関する所見では、人為的な流入が考慮されていることから、土坑とした。あるいは陥し穴を埋め戻したものか、土壙墓かもしれない。また、土坑061についても、上部ではあるが覆土に白色粘土粒を含むことから、土壙墓の可能性もあるかもしれない。炭窯は近年の炭焼き窯の跡で炭・焼土などを多量に含むほぼ正方形の遺構で、深さも浅い。一見して分かるものである。土坑はこれら陥し穴、炭窯、土壙墓以外の明確な掘込みを有するものとした。調査時には遺物は検出されていない。

1. 陥し穴

陥し穴については先に触れたが、これらはさらに大きく2種類に分けられるようである。楕円形を呈し、2ないし3の小ピット等の下部施設をもつもの(044A・021)と長楕円形ないし長方形で検出面からの深さがあるもの(016・043)である。後者の場合、検出面からの深さは1mを大きく超える。

陥し穴044A (第80図、図版17)

長さ $2 \, \text{m}$ 、推定幅 $1 \, \text{m}$ 、深さ $0.7 \, \text{m}$ の楕円形の陥し穴である。直径 $0.3 \, \text{m}$ 、深さ $0.2 \sim 0.4 \, \text{m}$ ほどの小ピットを $2 \, \text{つ底面に有する。底面はほぼ Y U なようである。}$

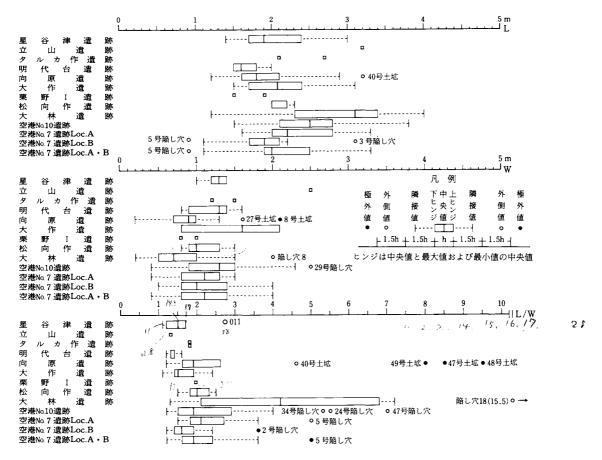
土層は4層に分れるが、あらい網のスクリーントーンで示した軟質のローム主体のピットに 充満する土層および同じくあらい網で示した側面に残る汚れていないソフトロームにハードロ ームがブロック状に混じる黄色土層を除くと、大きくは3層に分層されるようである。上層が 褐色土層、中層が褐色土がシミ状に混じる暗褐色土層、下層が汚れていないソフトロームを主 体とする暗黄褐色土となっている。

遺物は出土していない。

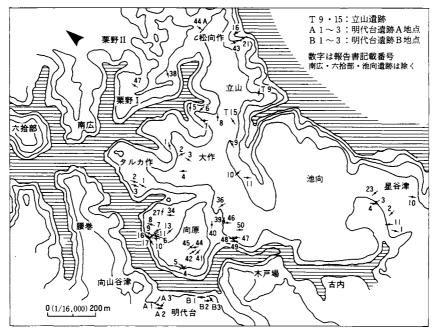
陥し穴021 (第80図、図版16)

長さ2.5m、幅 1 m、深さ0.7 mの楕円形の陥し穴である。直径0.15 m、深さ0.1 mほどの小ピットを3つ底面に有する。底面はほぼ平坦なようである。

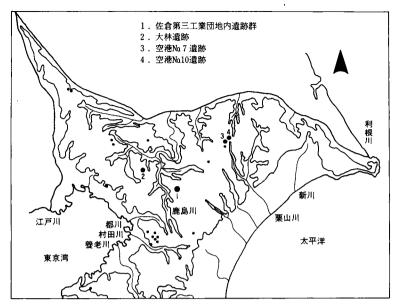
遺物は出土していない。



第76図 長・幅・長幅比による陥し穴の比較



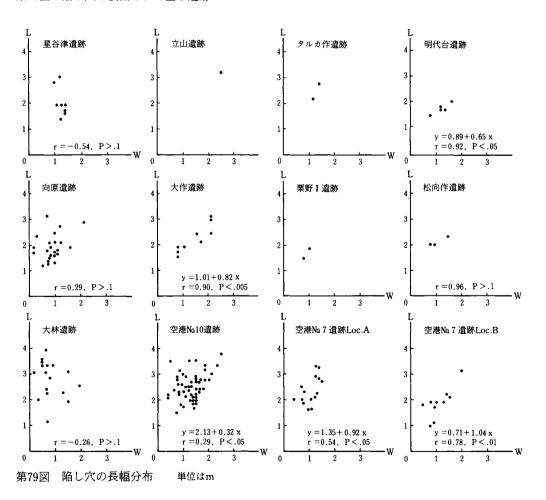
第77図 佐倉第三工業団地内遺跡群の陥し穴分布 既報告分完形以外も含む



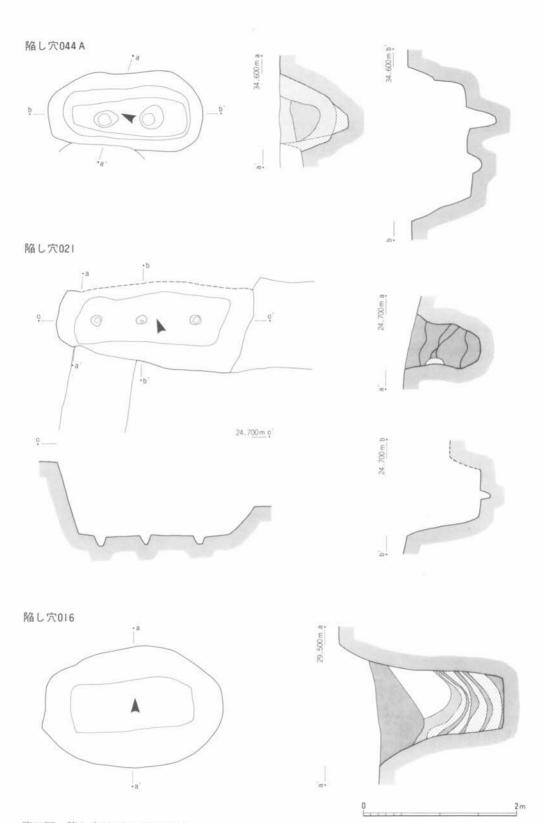
- W - L

陥し穴の計測は検出面での開口部で行った。なお、計測に用いた資料は完形のみである。しかし、当然のことながら開口部の形態は原形をとどめていない。

第78図 陥し穴の検出された主な遺跡



- 96 **-**



第80図 陥し穴044A・021・016

陥し穴016 (第80図、図版16)

長さ2.3m幅1.6m、深さ1.7mの楕円形の陥し穴である。底面はほぼ平坦で、下部施設は検出されていない。底面はほぼ平坦なようである。

土層は細かくは11層に分かれるが、大きくは4層に分かれそうである。上から順に、粘土粒が混じる黒色土層、粘土粒が多く混じる灰色土層、少量の粘土粒を含む暗色土層が堆積し、さらに下に、やや厚めの粘土主体の黄色土層と黒味が強く柔らかい黒色土層が交互に堆積している。

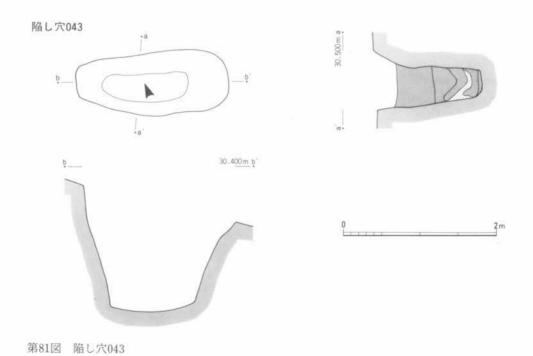
遺物は出土していない。

陥し穴043 (第81図、図版16)

長さ $2\,\mathrm{m}$ 、幅 $0.8\mathrm{m}$ 、深さ $1.4\mathrm{m}$ のほぼ長方形の陥し穴である。底面はほぼ平坦で、下部施設は検出されていない。

土層は6層に分かれるようである。上から順に、黒色土層、上層よりもしまりの悪い黒色土層、ローム粒・ロームブロックを含むしまりのあまり良くない黒褐色土層、ロームブロックを含む黄褐色土層、上層の黒褐色土層よりロームブロックの少ないしまりのあまり良くない黒褐色土層、若干ローム粒を含む黒色土層が堆積している。

遺物は出土していない。



2. 土 坑

形態等については表を参照してもらうこととし、ここでは主に土層の堆積状況にふれておく ことにする。大体において単純な堆積状況を示しているようである。遺物は出土していないよ うである。

土坑026 (第82図、図版17)

本来1つの土坑であったものが、埋没後、断面図上右側の土坑が掘り込まれ、再度埋没したものである。断面図左側の土層(つまり026本来の土層堆積)はソフトロームを主体としたもので、後から掘り込まれた土坑の土層はローム粒や焼土粒を混入する黒褐色土を主体とするものである。

土坑027 (第82図、図版18)

ローム粒を若干含むしまりの良い黒色土層の均一な堆積状況を示している。

土坑029 (第82図、図版18)

断面図上右側の白ぬき部分の撹乱を除く3層から構成される。基本的には左側から混入する 黄褐色土層を除くとロームブロックの多寡およびしまり等から区別される暗黄褐色土層を主体 とする。

土坑034 (第82図、図版18)

細粒のロームが混入するしまりの良い黒褐色土層と上層よりもローム粒の混入の多いしまりの良い暗黄褐色土層からなる。

土坑036 (第82図、図版19)

ゴボウのトレンチャーにより撹乱を受けているようで、ローム粒を含むしまりの悪い黒褐色 土層の単一層である。

土坑042 (第83図、図版19)

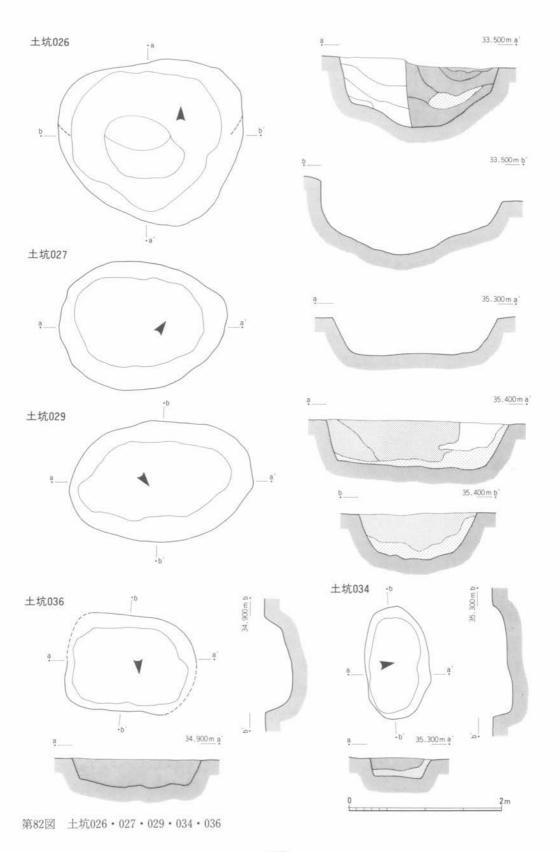
ローム粒を含むしまりの良い黒褐色土層を主体とし、焼土粒を多量に含むしまりの良い暗赤 褐色土がレンズ状に堆積する。下部に混入する層はロームを主体にした層である。

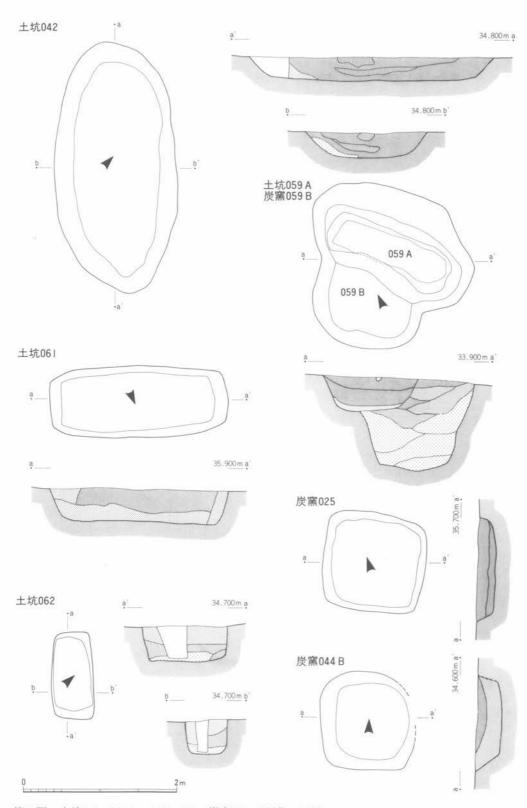
土坑059 A (第83図、図版19)

先にもふれたように、南の炭窯(059B)に切られている。大きく3層に分けられそうである。 断面図上、最上部の黒色土層、こまかい網のスクリーントーンで示したローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土層、同じくあらい網の暗褐色土を含む黄褐色のローム主体層の3層である。 調査時の所見によれば「各層とも混入物の混合度がやや不自然であり、人為的な流入土かと思われる」とあり、形態からは陥し穴とも考えられるが、ここでは土坑として扱った。

土坑061 (第83図)

壁際に流入する層を含めて、おおきく2層に分けられるようである。上層は黒色土・ローム 粒・小ロームブロック・白色粘土粒を含む黒褐色土層、下層は黒色土・ローム粒・ロームブロ





第83図 土坑042・059A・061・062、炭窯025・044B・059B

ックを含む暗黄褐色土層である。上層ではあるが白色粘土粒を含むことから土壙墓の可能性もあるかもしれない。

土坑062 (第83図、図版20)

おおきく3層に分けられるようである。それぞれハードロームブロック・ローム粒等を含むが、上層に褐色土層、中層に暗褐色土層、下層に黄色土層が堆積している。土坑061に比べ、土坑062は一回りほど小さいが、平面形態・土層堆積状況とも共通性が多い。

3. 炭 窯

炭窯025 · 044 B · 059 B (第83図、図版17 · 19)

059Bも含めてほぼ正方形を呈し、おびただしい量の炭・焼土を含んでいる。 なお、炭窯044Bは陥し穴044Aを切っている。

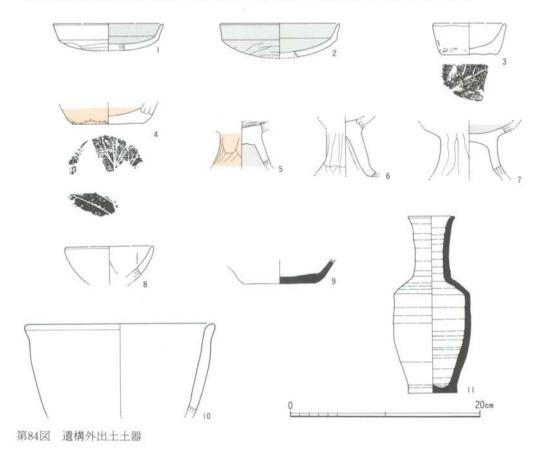
第7節 遺構外出土の遺物

1. 縄文時代以降 (第84図、図版47)

「十器観察表P171]

縄文時代以降の遺物で、遺構外から出土したものを集めた。 3、4の杯の底部には木の葉の 文様の跡が見られる。

なお、遺構外出土の遺物としては鉄製品もあったが、破片のため図示しなかった。



2. 縄文時代

a、土 器

松向作遺跡では、縄文時代に帰属する遺構としては陥し穴が4基確認されたのみにとどまっているが、その他に土器包含層が存在する。比較的出土量が多く、明確に包含層と認められる範囲のみを調査の対象とし(第95図)、小グリッド単位で一括して取り上げることとした。なお、調査区のほぼ全域にわたって古墳の封土下や新しい時代の遺構覆土中からも少量ながら縄文土器の出土が認められる。これら全てを含めて包含層出土の土器として扱ったが、後者の遺構中出土のものについては遺構の存在する小グリッドの一括遺物とし、複数グリッドにまたがる遺構については最も面積の広いグリッドに帰属するものとした。便宜上次の5群に大別して紹介する。

第Ⅰ群	早期初頭の撚糸文系土器	1300点
第II群	早期後葉の条痕文系土器	151点
第III群	前期の土器	67点
第Ⅳ群	中期の土器	224点
第Ⅴ群	後期の土器	434点

第1群 (第85・86・87図、図版51・52)

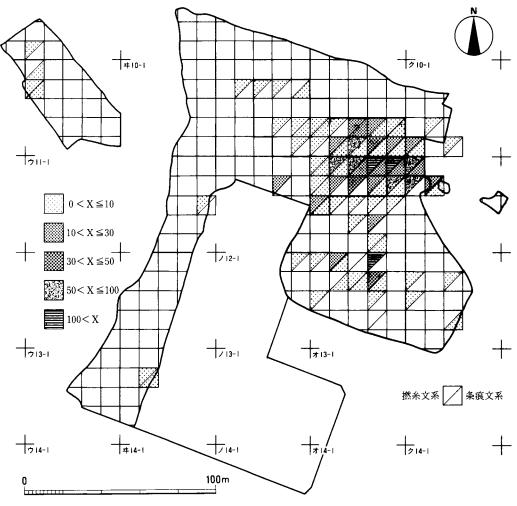
早期初頭の撚糸文系土器群を一括した。破片総数は1300点で全体の約60%を占め、当包含層の主体をなす。施文手法や口縁部形態により4類に細別することができる。なお文様の比率は、撚糸施文34%、縄文施文57%、無文9%となっており、従来言われてきた「北総地方では縄文施文の比率が高い」という点と合致する

第1類(1・2) 1個体分の破片を持つ。口縁部はやや肥厚しながら外反し、縦位の細かい撚糸文が密に施される。色調は灰褐色を呈し、焼成は良い。口縁部形態から従来大丸式と呼ばれているものに比定したい。

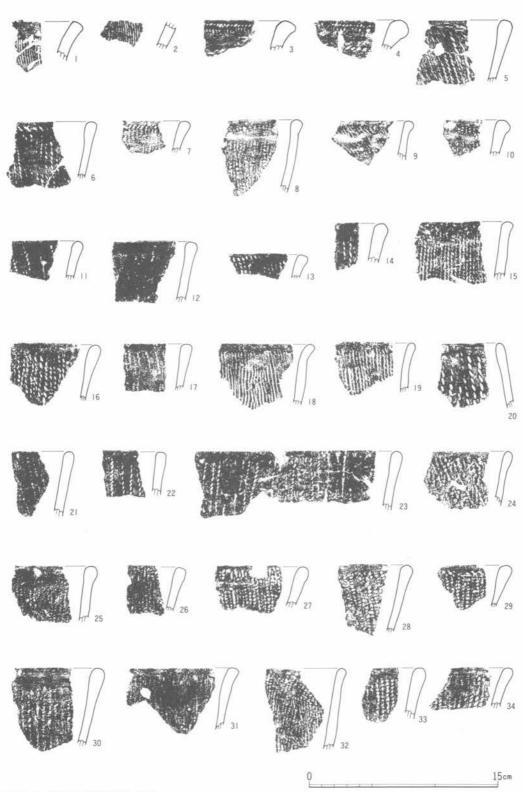
第2類($3\sim10$) 口縁部形態は極端に肥厚して外反するもの($3\cdot4$)、緩やかに肥厚するもの($5\sim7$)、外折するように肥厚するもの($8\sim10$)の変化があるが、口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる点で共通する。胴部文様帯は縦位の撚糸文か縄文で共通するが、口縁部文様帯は縄文原体の押捺によるもの($3\sim5$)、縄文原体の横位回転圧痕によるもの($6\cdot7$)、口縁部から縦位の施文を行った後に口縁部直下をナデることによって無文帯を作出するもの($8\sim10$) 等のバラエティがある。8のように細く深くナデられ、沈線のようになるものもある。口縁部が外折するように見えるのは、このナデが深く入っているためかと思われる。従来の井草II式に比定されよう。

第3類 (11~44) 口縁部文様帯と胴部文様帯の区別が消滅し、口唇部から胴部全体にわたって縦位の施文がなされるものを一括した。撚糸施文と縄文施文の比率はほぼ1:1である。撚糸文はR (13・14・15・16・19・20等)・L (22・23・34等)とも存在するが、Rのほうがやや多い。縄文はRL単節縄文 (27・28・29等)が大半を占めるが、LR単節縄文 (26)や無節縄文 (57)も少量ながら出土している。口縁部形態は緩やかに肥厚するもの (11・12・16・25・27・29・30等)、外反するもの (18・19・24・32・38等)、直立するもの (21・22・23・35・36・37等)のほかに20のような内傾する例もある。焼成は概して良好である。

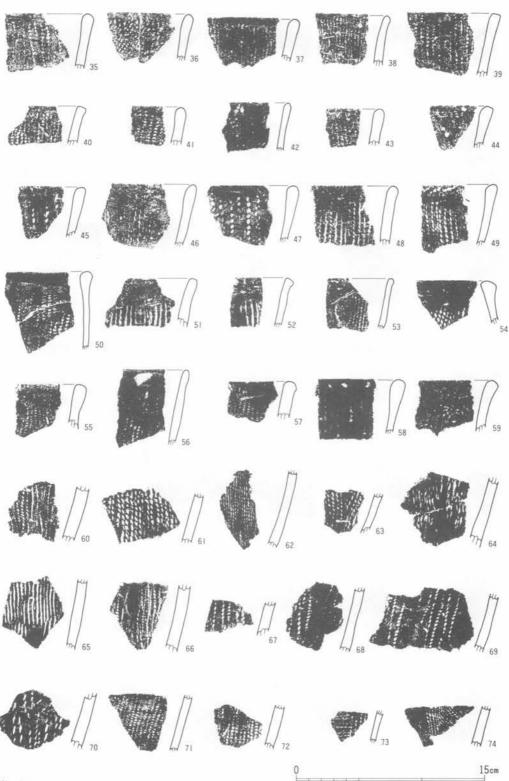
第4類(45~59) 文様構成は第3類に類似するが、口縁部に丁寧なナデ整形を施すことによって無文帯を作出するものを一括した。胴部の文様や口縁部形態は第3類と変わるところはない。当類の特徴である口縁部のナデ整形は口縁部内面から口唇部、口縁部外面まで及んでおり、中には光沢を持つほどにナデ(ミガキというべきか)られているものもある。



第85図 縄文土器分布状況(1)



第86図 縄文土器拓影図 (1)



第87図 縄文土器拓影図(2)

一応第3類を夏島式、第4類を稲荷台式と考えたいが、22や23(同一個体)のように稲荷台 式の特徴である条間の広いものや、52や53のように第2類的な様相を持つものもあり、一概に 比定することはできない。量的には第3類と第4類が圧倒的多数を占める。

胴部破片(60~74) 62のように古い様相を持つもの、68や69のように新しい様相を持つものという程度の分類ができるに過ぎず、帰属ははっきりしない。大多数はごく一般的な撚糸文や縄文が施されたものであるが、73や74のように格子目状や鋸歯状に施文されたものも存在したようである。

第II群 (第85·88図、図版55)

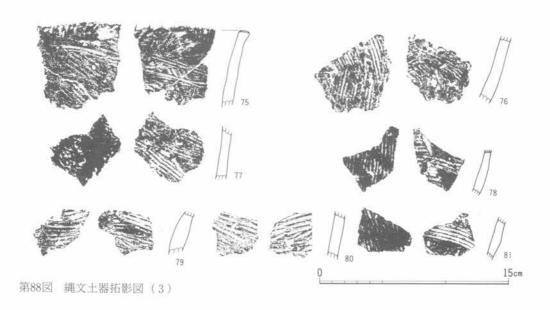
早期後葉の条痕文系土器を一括した。総数は151点あるがいずれも表裏条痕文土器の細片であり帰属型式はわからない。口縁部破片1点を含む7点を図示したが、いずれも条痕文以外の主文様は見られない。胎土は非常に脆く、大量に繊維を混入する。

第III群 (第89·90図、図版53)

前期に属する土器を一括した。総数は67点と少ないが、ほぼ全型式が存在したようである。 以下の4類に細別できる。

第1類(82~84) 黒褐色の胎土中に大量の繊維を混入し、焼成は悪く非常に脆い。胴部の 文様にはアナダラ属の貝殻腹縁の押捺が見られるのみである。前期初頭の黒浜式に属する。

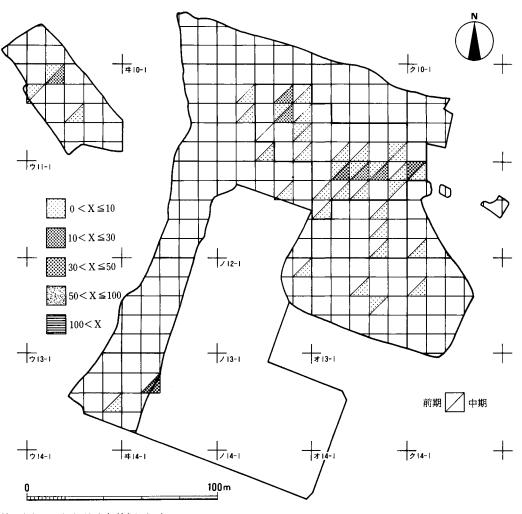
第2類 (85) 1点見られるのみである。胴部破片で、胎土中には大量の雲母や石英を混入する。文様としては当破片で見るかぎり全面にR $\{^\ell_r$ 異節縄文が施される。前期初頭の関山式に属するものと思われる。



第3類 (86~90) 前期の最終末に見られる綾絡文を有する土器を一括した。86は口縁部破片で、口唇部には縄文原体の押捺が見られる。綾絡文は縦位のもの (86・87・88) と横位のもの (89・90) がある。胎土中には微細な砂粒を大量に含み、焼成は良好である。

第4類 (91) 1個体分の破片で細片も含めるとかなりの量があったが、とりあえず器形のわかるものをピックアップして図示した。文様帯は口縁部と胴部の2帯あり、施文具は半割竹管のみである。口唇部は背面の押捺、口縁部文様帯は平行沈線と切断面の背面側の刺突を交互に行い、胴部文様帯は縦位と横位の深い平行沈線で器面を画した後、斜位に浅い沈線を条線状に施す。焼成は良好で、内面はかなり丁寧に整形されている。前期終末の興津式に比定されるものである。

上記の4類のほかに諸磯式に属すると思われる破片も数点あったが、いずれも細片であり図示することができなかった。

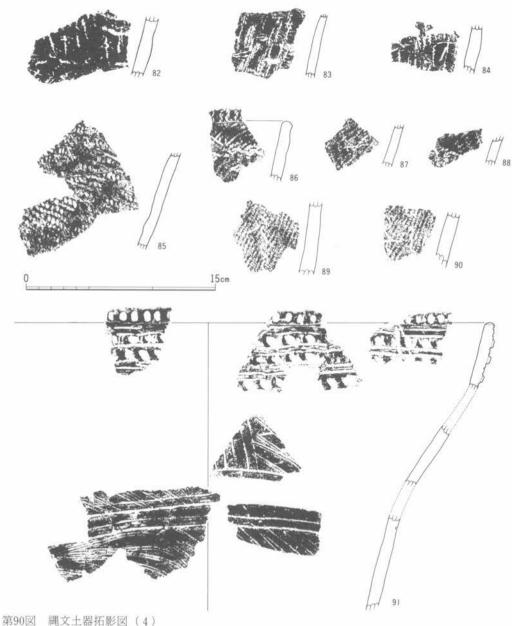


第89図 縄文土器分布状況(2)

第Ⅳ群 (第89・91図、図版55)

中期に属する土器を一括した。総数224点としたが、縄文のみの胴部破片が多く胎土や縄文の イメージから中期としたものも多いため、実際にはもっと少ないかもしれない。4類に細分で きる。

第1類 (92·93) 口縁部を包みこむように貼付を施し肥厚させる。文様はRL単節縄文のみ であるが、肥厚部とはやや向きを変えて施している。胎土には雲母や砂粒を大量に含み、焼成 はかなり良い。中期初頭の五領ヶ台式期のもので、一部で下小野式と呼ばれている。



第2類 (94) 口縁部文様帯の破片で、貼付による突起が認められる。文様は連続刺突による結節沈線を用いて、4本1単位で口縁部の区画文を構成し、その中も同様の結節沈線で充塡する。中期前葉の阿玉台式の古い様相を持っている。胎土には雲母を大量に含んでいる。

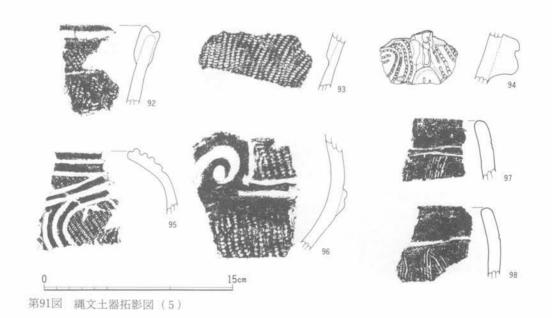
第3類 (95・96) 加曽利E式のいわゆるキャリパー形土器の破片である。95は口縁部のみの破片で、RL単節縄文を地文に2本1単位の隆帯で主文様を描く。隆帯はかなり丁寧にナデられており、また内面の整形も光沢を持つほどに念を入れている。96は口唇部を欠損する口縁部文様帯から胴部文様帯にかけての破片である。RL単節縄文を地文に隆帯によって口縁部文様帯を画し、渦巻文が見られる。加曽利EII式であろう。

第4類 (97・98) 同一個体である。やや内傾する口縁部に横位の沈線で無文帯を作出し、 その下を条線で充塡する。整形は丁寧であるが文様の施文は大変粗雑で、沈線は1条と2条が あり、また条線も縦位のものと波状のものがある。これは文様を雑に施した結果であり、別個 体ではない。加曽利E式終末期の粗製土器である。

第 V 群 (第92 · 93 · 94 図、図版54 · 55)

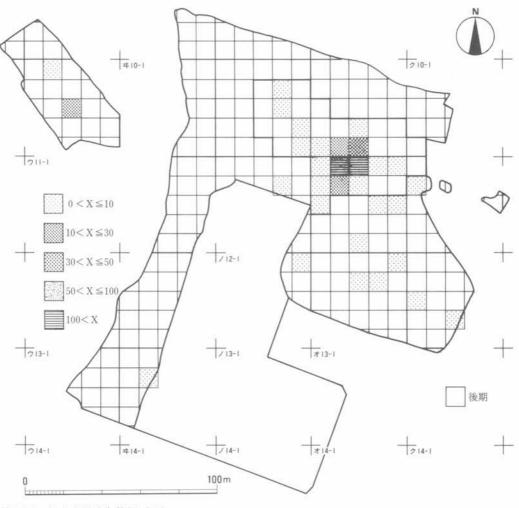
後期の土器を一括した。総数434点である。従来の型式細分により3類に細別した。

第1類 (99~109) 称名寺式土器を一括した。器面に2本の沈線で文様を描き、沈線間に刺突文を充塡する例 (99・100・107~109) や、縄文を施した後に同様の手法で文様を描き、磨消する例 (103・104)、両者を併用する例 (101・102) がある。

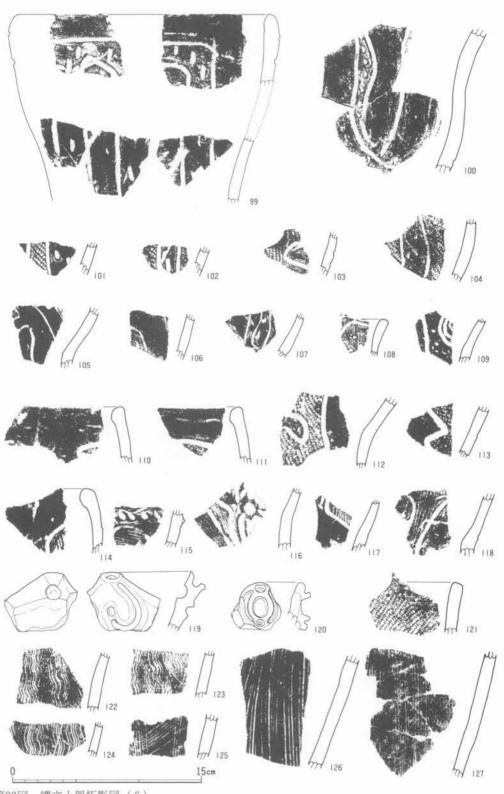


第2類 (110~127) 堀之内式土器を一括した。110と111は称名寺式の可能性もあるが、114と類似する個体ということで一応当類に含めた。縄文を施した後に沈線により主文様を描き、磨消している。口縁はやや内傾し、内面が肥厚する。112と113は胴部破片で、沈線による懸垂文が見られるが、やはり磨消手法が用いられている。114~118は同一個体である。沈線と隆帯を併用して幾何学的な文様を描き、非常に細かい条線を充塡する。これらの他に119や120のような堀之内式に特徴的な突起も見られ、また、縄文のみを施した波状口縁の粗製土器 (121)も見られる。122から127は条線を持つ胴部破片である。条線には縦位の波状のもの(122~124)、縦位で直線的なもの(126・127)の他に125のような格子目状のものが見られる。いずれも当類に属するものであろう。

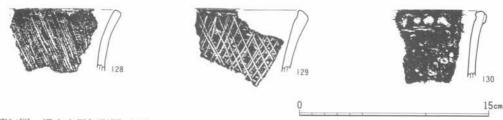
第3類($128\sim130$) 128 & 129は加曽利B 2 式の精製土器の口縁部である。口唇部から内面は大変丁寧に整形されている。129は口縁内面に沈線が1 条巡るが、128でも沈線は施されないもののその部分が丁寧にナデられている。文様は、128では単純に斜位の沈線(条線に近い)が



第92図 縄文土器分布状況 (3)



第93図 縄文土器拓影図 (6)



第94図 縄文土器拓影図 (7)

施されているが、129は地文に縄文を施した後に格子目状に沈線を施している。両者とも焼成が 大変良く、硬質である。130は加曽利B式から安行式にかけて見られる、紐線文土器と呼ばれて いる粗製土器である。表面の風化が激しくはっきりしないが、口縁内面に沈線が巡り、条線の 下に地文として縄文を施しているため当類に含めた。

小 結

松向作遺跡の縄文土器包含層には、早期初頭の撚糸文系土器群から後期の加曽利B式までの諸型式が、量的な差はあるもののほぼ切れ間無く含まれており、その主体を為すものは撚糸文系土器群である。松向作遺跡については、今回の調査では残念ながらこれ以上のことはわからない。しかし遺跡の分布を見てみると、佐倉第三工業団地造成地内だけでも松向作遺跡と腰巻遺跡は撚糸文系土器群主体、タルカ作遺跡は条痕文系土器群主体、大作遺跡では前期黒浜式主体、向原遺跡では条痕文系土器群及び前期主体の包含層を持っており興味深い。集団の移動等を考える上で良好な資料となるであろう。

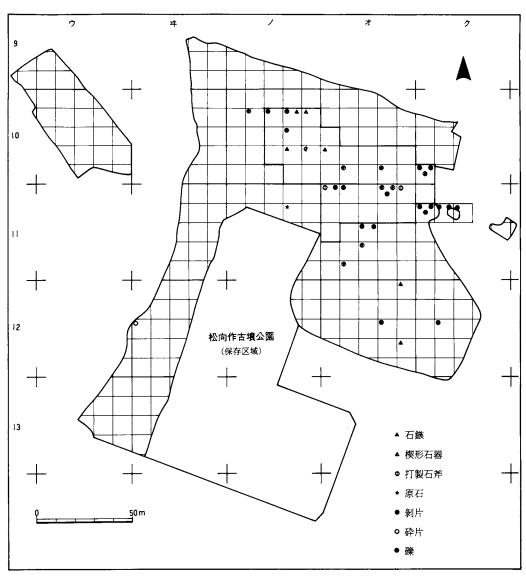
b. 石 器 (第95~102図、第10·11表、図版58~60)

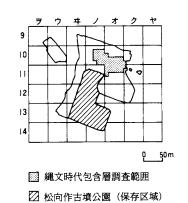
松向作遺跡では、縄文時代早期の土器の分布する範囲を中心に包含層の調査を行っており、 土器については早期初頭の撚糸文系が主体となるようである。あるいは石器についてもほとん どがこの辺りの時期のものかもしれない。

分布については、絶対量が少ないことから何とも言えないが、大体において散漫な状況を示すのであろうか。

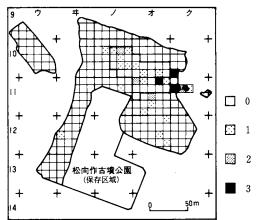
遺物については、今回も中グリッド・大グリッド毎に砕片と礫を除く石器の実測図を載せた。また、属性表は全てについて作成している。なお、長・幅・厚の計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15、重量の計量には島津製作所㈱のデジタル秤LIBROR EB-330Dを使用した。

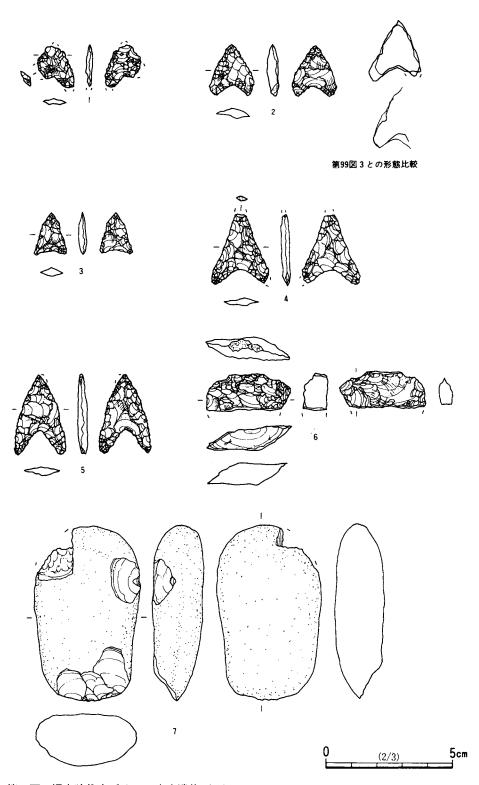
全体の石器組成は石鏃12点、U-fl1点、楔形石器1点、打製石斧4点、磨製石斧1点、磨石 3点、原石1点、剝片8点、砕片1点、礫24点となっている。



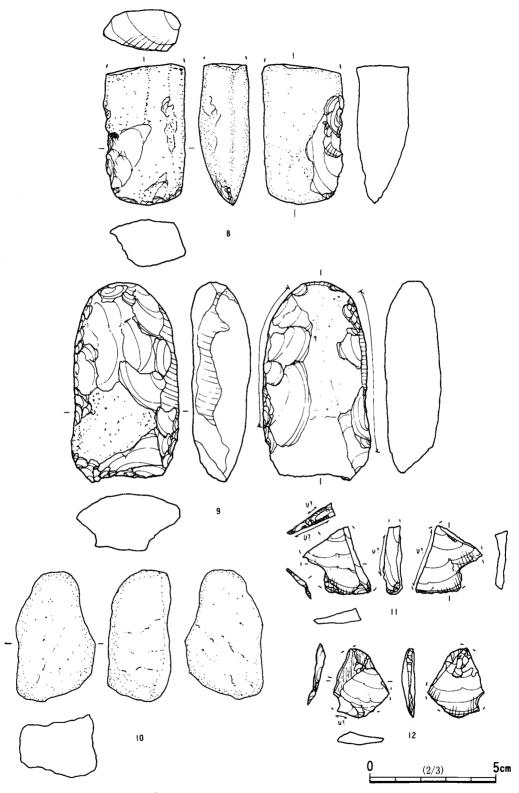


第95図 縄文時代石器分布

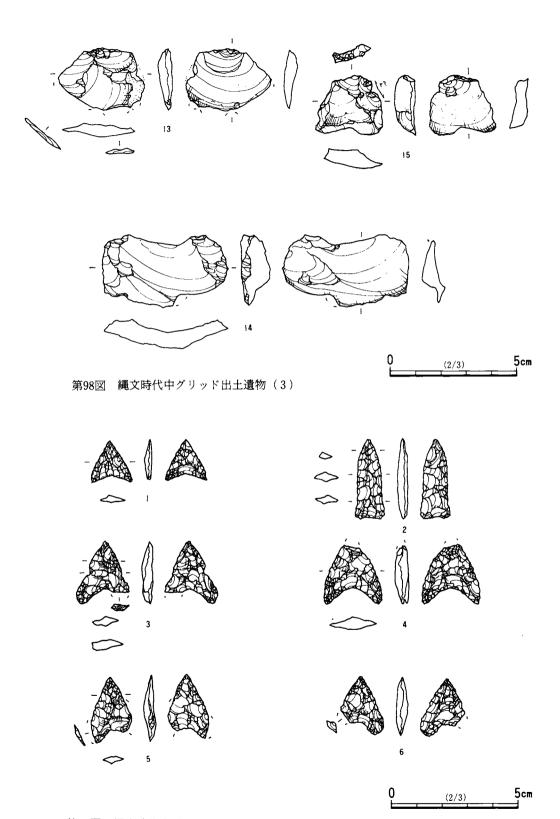




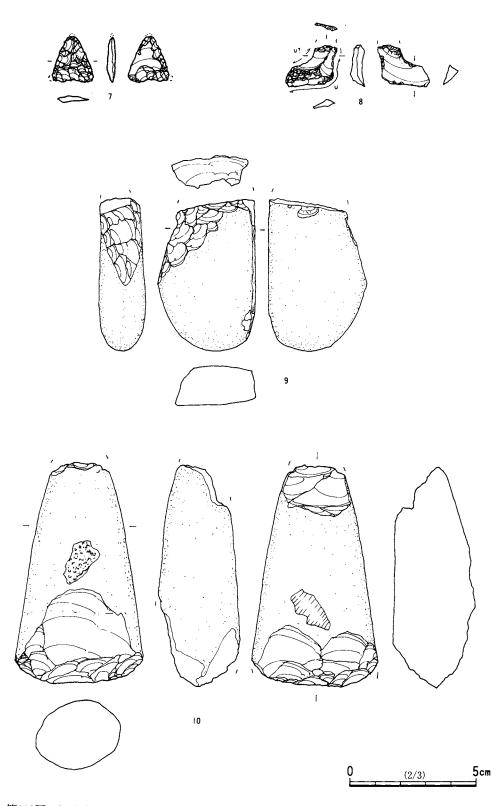
第96図 縄文時代中グリッド出土遺物 (1)



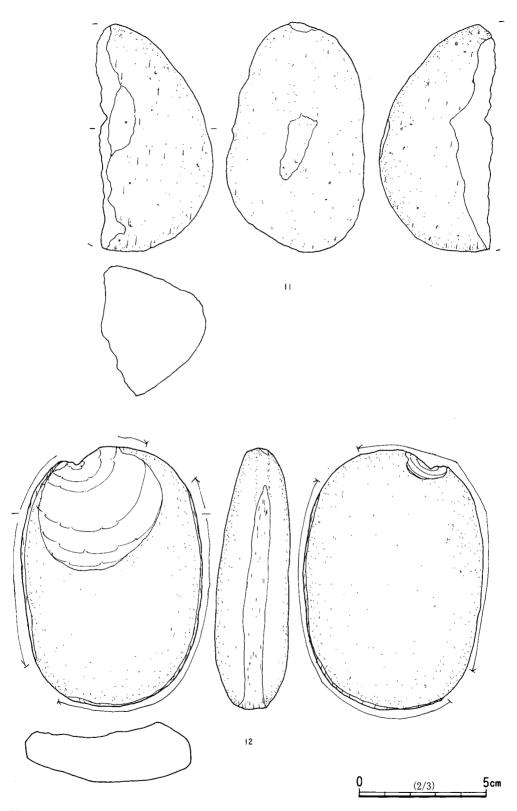
第97図 縄文時代中グリッド出土遺物 (2)



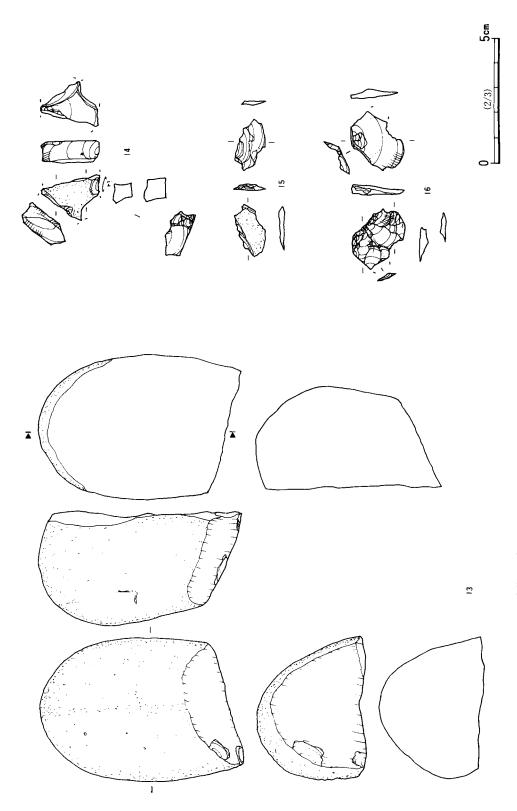
第99図 縄文時代大グリッド出土遺物 (1)



第100図 縄文時代大グリッド出土遺物 (2)



第101図 縄文時代大グリッド出土遺物 (3)



— 120 —

第3章 下層の遺構と遺物

第1節 A地点·B地点·地点外

松向作遺跡では2箇所(A地点・B地点)の旧石器時代の集中地点を検出している。両地点ともU-flや楔形石器、剝片等が主体で、明確に時期を決定する遺物を産出していない。

遺物については、今回も砕片と礫を除く石器の実測図を載せた。また、属性表は全てについて作成している。なお、長・幅・厚の計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15、重量の計量には島津製作所㈱のデジタル秤LIBROR EB-330Dを使用した。

また、石材の鑑定については、千葉県立中央博物館高橋直樹氏の協力を得た。縄文時代の石材についても同様である。

A地点(第103·105·106図、第12表、図版57)

A地点は、かなり急な斜面部で検出されており、投影図からは黄褐色ソフトロームの最上部ないし、おそらく表土層と思われる黒色土層に分布の中心が読み取れる。ところで、仮に黄褐色ソフトロームがいわゆるソフトロームで、かつソフトローム化がそれほど深部まで及んでいない、あるいはプライマリーな状態であるとすれば、縄文時代の遺物の可能性もあるかもしれない。

また、斜面部方向への移動は多少なりともあるだろうが、上下にはそれほど移動していないようである。

黒曜石を主体にした石器群で、石器組成はU-fl1点、楔形石器3点、剝片6点、砕片1点となっている。

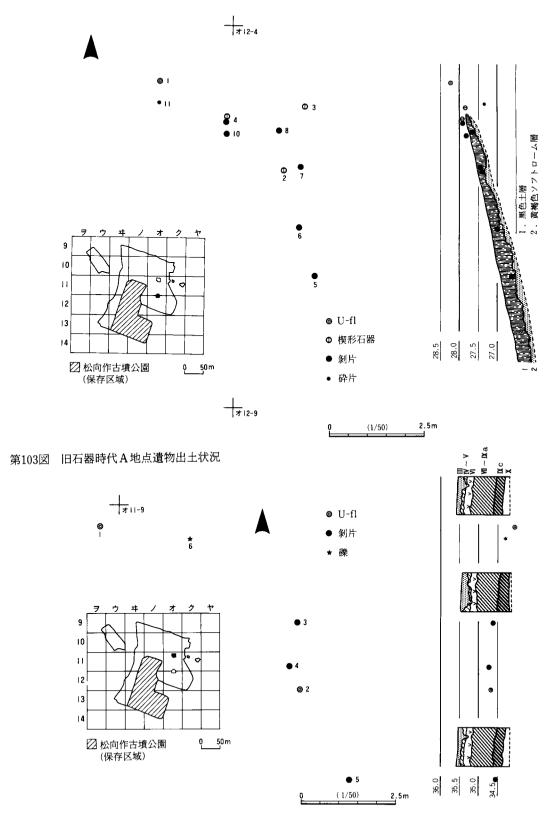
B地点(第104・107・108図、第13表、図版57)

B地点はA地点とは異なり、谷部の肩口のほぼ平坦な台地上に位置する。第2黒色帯の中部から下部にかけて遺物が集中するが、遺物から細かい時期を決定するのは困難かもしれない。

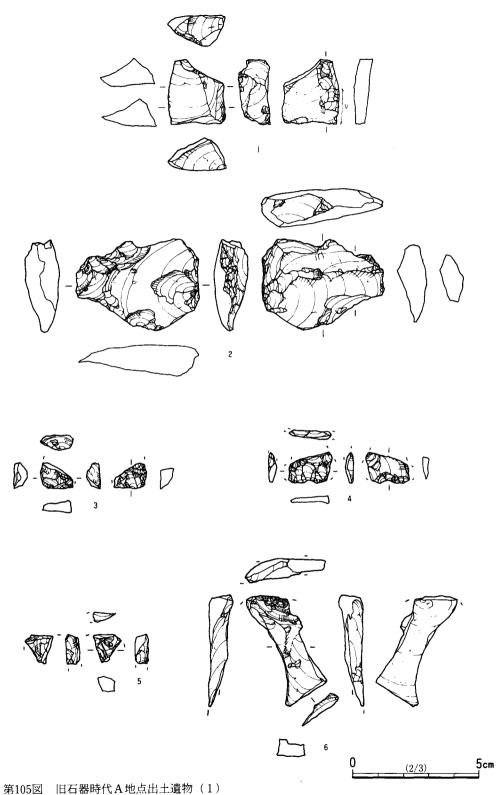
珪質頁岩を主体とした石器群で、石器組成はU-fl2点、剝片3点、礫1点となっている。

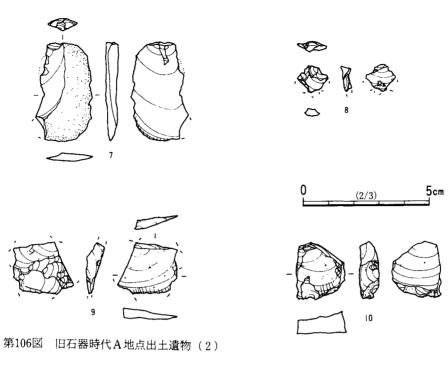
地点外(第109図、第14表、図版58)

上記地点外からはナイフ形石器 2点、尖頭器 1点が出土している。



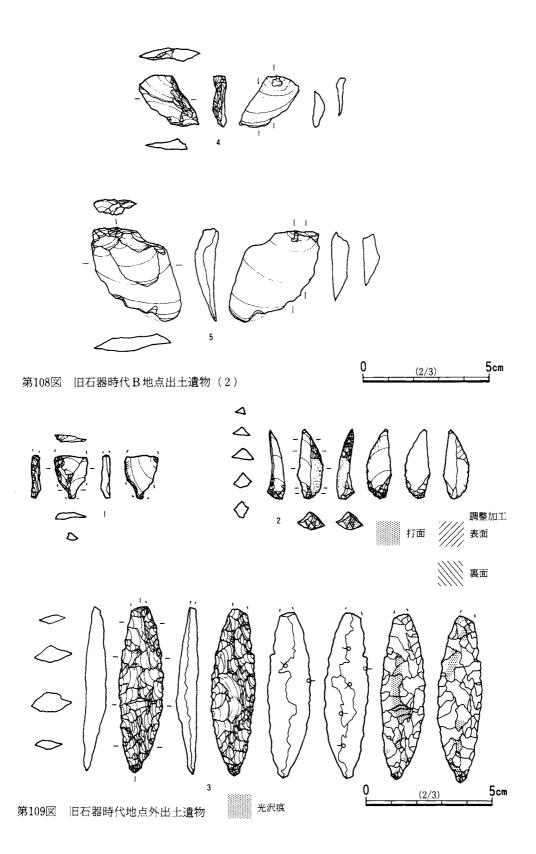
第104図 旧石器時代B地点遺物出土状況



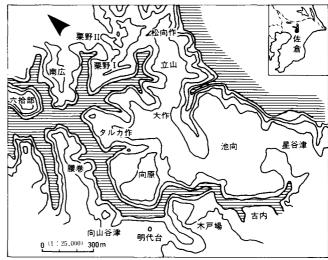




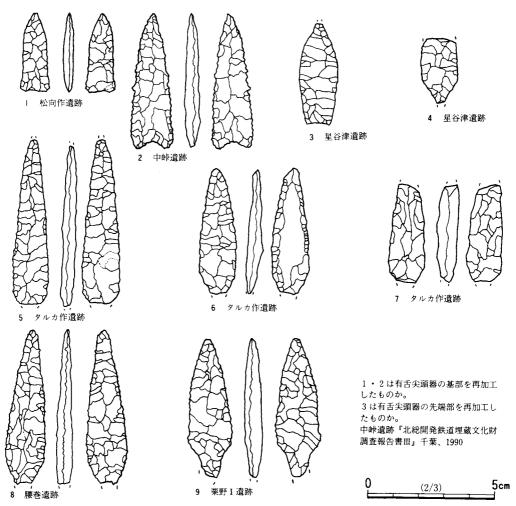
第107図 旧石器時代 B地点出土遺物 (1)



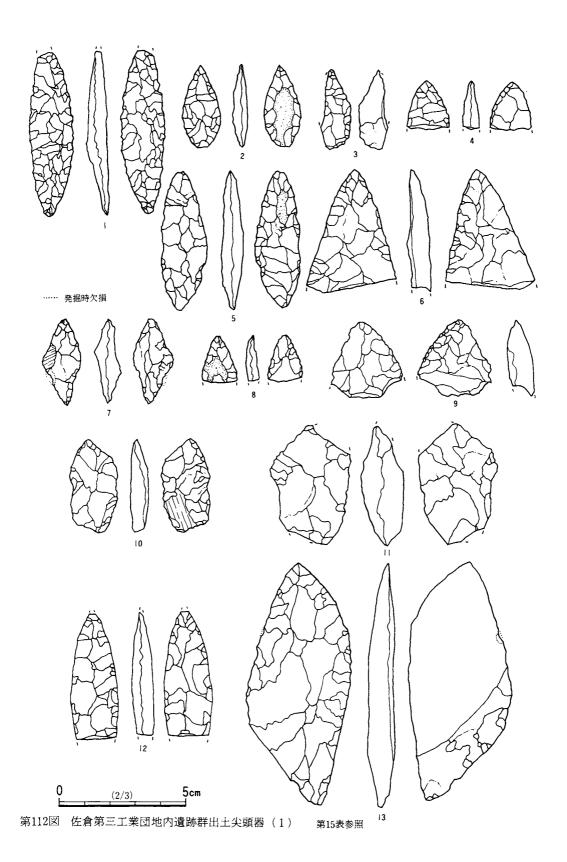


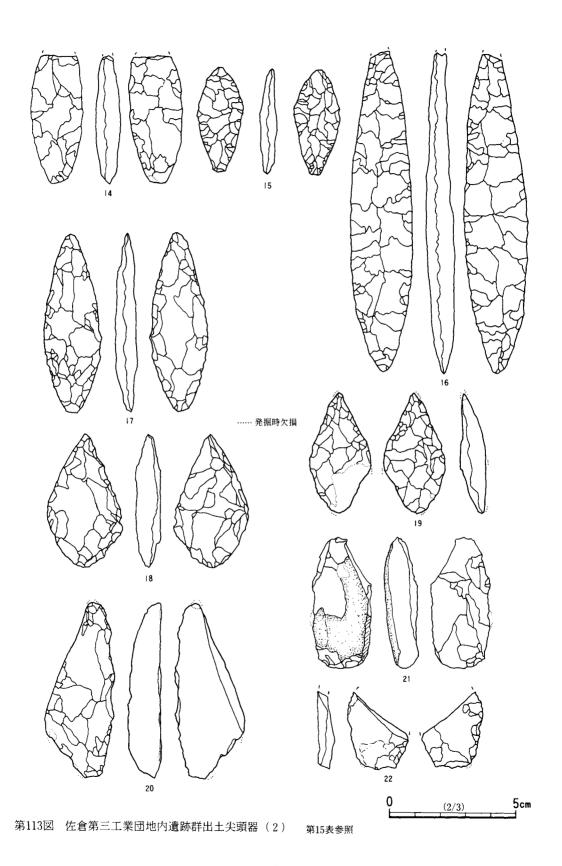


第110図 佐倉第三工業団地周辺地形及び遺跡分布

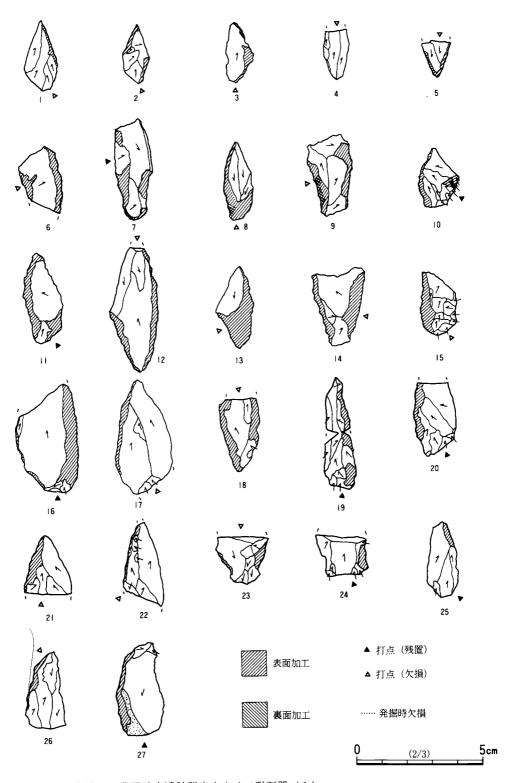


第111図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土有舌尖頭器及び関連遺物

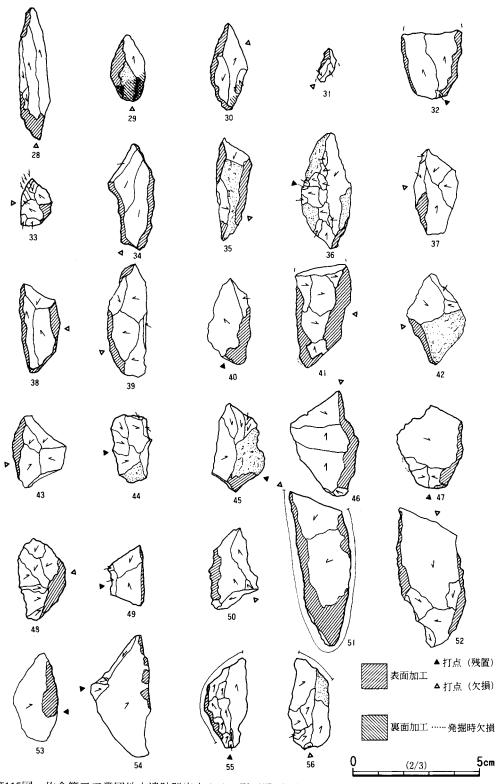




-128 -

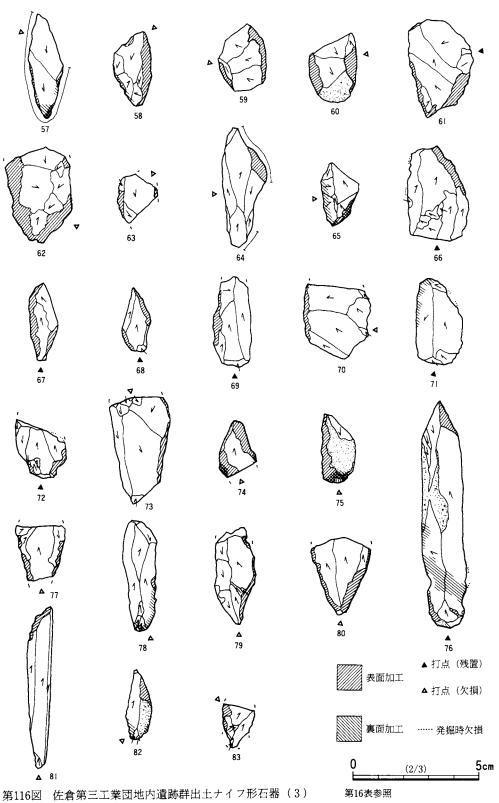


第114図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器(1) 第16表参照



第115図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器 (2)

第16表参照



-131 -

第4章 ま と め

第1節 上層の遺構と遺物

1. 古墳 • 土壙墓 (第117図、第17表)

佐倉第三工業団地内の古墳は鹿島川中流の右岸の台地に立地する岩富古墳群に含まれる。事業地内では集落も検出されており、墓域と集落は台地ごとに明瞭に画されている。古墳時代後期の集落は西の鹿島川寄りの台地とその斜面に立地するほか(タルカ作遺跡・腰巻遺跡・南広遺跡)、東側の台地東端から斜面にかけて検出した(松向作遺跡・池向遺跡)。これら集落の間の台地奥の平坦部は墓域となっており、栗野遺跡、松向作遺跡、立山遺跡、大作遺跡、池向遺跡、向原遺跡等の各遺跡で方形周溝等と呼ばれる小規模なものも含め200基以上の古墳を検出した(第17表)。また古墳の間に土壙墓も100基以上検出している。調査した古墳のうち現在のところ最も早い時期に築造されたと考えられるのは5世紀末と考えられる大作1・2号墳でこの後古墳時代後期から終末期までの古墳と土壙墓が存在する。

本地域は印旛沼に注ぐ鹿島川によって印旛沼周辺の地域と関わりをもつとともに、鹿島川が水源付近で東京湾に注ぐ都川に接するために東京湾岸の文化の影響も受け、両地域の影響が混在している。本地域の古墳の埋葬施設の主体は木棺直葬土壙墓で、古墳時代後期の常総地域に特徴的に見られるように墳丘裾部に位置するものが多い。同様に常総地域に分布の中心をもつ箱形石棺を埋葬施設とする古墳もあり、これは雲母片岩の板石を使用したものと砂岩系の切石を使用したものとが見られる。また立山4号墳のように蓋石は雲母片岩、他は砂岩系の切石を使用する場合もある。この他、地山を横穴状に掘り込む地下式土壙墓や底面に溝をもつ土壙墓は現在のところ印旛沼周辺から東京湾沿岸を中心に分布していることが知られている。。

松向作遺跡では23基の古墳と4基の土壙墓を検出した。

古墳は円墳が20基、方墳3基である。墳丘の遺存状態は悪く、調査前から所在が確認されていたのは古墳001と保存区域の5基のみである。規模は20m以下の中小規模のものばかりで、円墳は内径が5m以下2基、5m以上10m以下7基、10m以上15m以下6基、15m以上20m以下5基である。また方墳は5m以下1基、5m以上10m以下1基、15m以上20m以下1基である。このようにばらつきはあるが、大きさによってそれぞれある程度のまとまりをもって占地している。10m以下の小規模な円墳は西側縁辺部に並び(北から南に古墳056・055・052・054)、並行して立山遺跡の小規模な円墳(北から南に9・8・7号円形周溝)が連なっている。また規模が15m前後の古墳は東側縁辺部を中心に占地する(北から南に古墳031、1・2・3・4号墳、古墳051)。円墳のうち050、051、052の3基はブリッジをもつ。050は周溝の一部を掘り残しており、残りの2基は周溝が全周するが一部を高く掘り残してブリッジとしている。また、試掘調査した004号墳も周溝が全周せず一部を掘り残している。方墳は二重周溝の古墳060の西側に



005号墳、この南に立山遺跡で調査した小規模な方墳群が並び(北から南に2・4・3・1・5号方形周溝)、松向作遺跡の058をはじめ、立山遺跡で検出した土壙墓がこの間に点在している。松向作遺跡で検出した土壙墓は028・035のように玉類、鉄鏃を副葬品とし、内容は古墳の埋葬施設と変わらないが墳丘や周溝などの外部施設を伴わないものと土壙墓057・058のように長方形に掘り込み、低面に長軸と直交する溝を3条掘り込むものの2種類がある。

古墳のうち埋葬施設を検出したのは古墳001 (円墳) と古墳060 (方墳) の2基である。古墳001は周溝内と周溝外から検出した土壙墓2基を主体部とするが副葬品は出土しなかった。古墳060は南に開口する横穴式石室をもつ。石材は雲母片岩の板石で、床面と天井部の幅に大きな差がないため側壁は垂直に近い角度で立っていたものと思われ、同じ石材を使用した箱形石棺と類似した構造である。しかし、一方(南側)の小口部分に玄門を設け、玄門の外側に板石を立てて羨道部を設ける点が箱形石棺と相違する。天井石は羨道部にも架している。床石はなかったようである。また規模(2.35×0.98×1.00m)は当地域で検出した箱形石棺より一回り大きく、横穴式石室より小規模である。本遺跡の南西に位置する大作遺跡の46号墳、47号墳は石材が抜き取られているが、遺存する掘方から雲母片岩を構築材として使用しているようで、石室の掘方は周溝の南辺中央につながっている。どちらも方墳で、埋葬施設の形態は古墳060と同じものであった可能性が高い。

この様な特徴ある埋葬施設は印旛沼東岸の成田市・印旛郡栄町龍角寺古墳群中の龍角寺108号墳、やはり印旛沼東岸の成田市公津原古墳群中の瓢塚41号墳等で検出している。どちらも方墳で、石室は南中央に開口し、構築材は雲母片岩の板石である。龍角寺108号墳は1辺21mで、閉塞石だけには貝化石の切石を使用している。また羨道部には天井を架けていなかった可能性が高い。石室床面の規模は1.90×0.85×0.95m、玄門入口は幅0.40m×高さ0.55mである。瓢塚41号墳は周溝内径で15.5×13.5mの規模である。やはり羨道部には天井を架けていない。石室の規模は1.82×1.13×1.72m、玄門入口は幅0.55m×高さ0.60mである。このほか、佐原市又見古墳の石室は板石を切り抜いて玄門部としているがやはり同種のものと考えられる。玄門の前に1枚、石室西側面に2枚の板石があり、これらは閉塞石、羨道の側壁の可能性がある。石室の規模は1.85×1.35×1.20mである。玄門入口は復原すると幅0.65m×高さ0.45mとなる。これらの古墳の築造の時期については瓢塚41号墳が7世紀第2四半世紀、龍角寺108号墳が7世紀第3四半世紀、又見古墳が7世紀中葉と考えられている。

この他、茨城県つくば市山口古墳群3・4号墳、土浦市石倉山古墳群1・2号墳は石材が遺存しないが同じ形態のものであると推察される。また石倉山古墳群9号墳や新治村武者塚古墳は墓道を持たないが、複室構造である点に横穴式石室の影響がうかがえる。

この様な埋葬施設は時期や分布、構築材の類似、構造などから常総地域に特徴的にみられる 雲母片岩を使用した箱形石棺の影響を受けたことは明らかである。これについては「形態的に は横穴式石室であるものの、機能的には竪穴式石室と何ら異ならないもの」と横穴式石室の機能を否定する意見もある。瓢塚41号墳の場合、掘方内の奥から半分の所までで、石室を構築しており、埋葬後埋め戻してしまえば玄門は機能しないと考えられたためである。また、龍角寺108号墳の場合は玄門入口は羨道部が周溝に接続するが、この場合も玄門入口が小規模であるため、追葬は不可能と考えられるためであろう。しかし、追葬の可能性を否定するにはこの種の埋葬施設と構造上類似する常総地域の箱形石棺から複数の人骨を検出する点を考える必要がある。横穴式石室が普及した時期に常総地域に箱形石棺が使用されたのはこれが横穴式石室の機能をもっていたからではないかと考えられる。したがって古墳060で見られたような埋葬施設についても横穴式石室の機能は必ずしも否定されないであろうし、南辺中央に開口させる点、玄門の外側に羨道壁と考えられる板石を立てる場合がある点、また、長軸を方墳の南北軸に合わせる場合が多い等の意識を考えるとそれまで伝統的に使用していた箱形石棺を横穴式石室に変形させたもの、地域色を受けた横穴式石室の一つの形態と考えるのが妥当であろう。

松向作遺跡の古墳は埋葬施設や副葬品がほとんどなく、関係する出土遺物も少ないため築造時期を判断できる古墳は少ない。この中で古墳060は周溝から8世紀初頭の所産と考えられる土器が出土した。追葬や墓前祭などで使用した可能性も考慮し、方墳であること、石室を南辺中央に開口させ、古墳主軸と石室長軸を同じ方向に構築している等の終末期古墳に見られる特徴をもつ点から、羨道部に天井石を架すなどやや古い要素も見られるが、龍角寺108号墳や瓢塚41号墳と大きく変わらない時期、周溝出土の土器の時期と幅をもたせて7世紀中葉前後に築造されたと考えておきたい。これ以外に確実に古墳に伴うと判断できる遺物の出土状態を呈しているのは古墳032・038・039である。古墳032と038では周溝から須恵器杯を出土しており、いずれも6世紀前半の所産と考えられる。また古墳038と039は隣接しており、どちらからも底部を穿孔した杯や鉢を出土しており、近い時期に連続して築造された可能性が高い。埋葬施設などこの他に時期を判断する資料がないが古墳032・038・039は6世紀前半を中心をする時期に築造されたと考えておきたい。

古墳群については、最大の規模をもつ池向遺跡の整理が途中であり、この分析が進めば岩富 古墳群の形成過程が明らかになろう。

2. 竪穴住居

竪穴住居は15軒で、東側台地縁辺部から斜面にかけて検出した。古墳時代後期の集落である。台地肩部に位置する竪穴住居006の確認面の標高は34.9m、最も低いところに位置する竪穴住居019の確認面の標高は19.4mで比高差は15.5m程である。また周辺の水田の現在の標高は15.0mである。等高線と平行にのびる010や等高線と直交してのびる020は道路として機能していた可能性がある。佐倉第三工業団地内では斜面に立地する集落が、腰巻遺跡で最初に発見され、当時の土地利用について問題となり、平坦部の墓域としての利用、畑としての利用等の推定がな

された。この後、事業地内の調査が進むにつれ、これは腰巻遺跡にのみにみられる特徴ではなく、池向遺跡、松向作遺跡でもみられ、規模は小さいが立山遺跡や栗野 $I \cdot II$ 遺跡でも確認された。立山遺跡・池向遺跡・松向作遺跡・栗野 $I \cdot II$ 遺跡ではいずれも平坦部は墓域として利用されている。また腰巻遺跡を含めどれも東から南にかけての斜面に立地している。

竪穴住居は遺物の出土状態等から大きく3種類に分けられた。

1つは遺物の遺存状態が良く器種が一通り揃っている竪穴住居(002・004・005・006・008)である。台地の肩部に立地し、遺物の出土位置も竈を中心とした床面であった等という点で共通した要素をもっている。出土した土器の様相からほぼ同じ時期に営まれていたと考えられる。便宜的にこれをAタイプと呼ぶ。

2つ目は出土遺物の量は非常に多いが、遺存状態が悪く、図示できたものも復原実測したものが主体である竪穴住居(012・015・017・018)である。主として斜面中位に位置する。遺物は特に集中せず竪穴住居全体に散っており、しかも1つの個体が破損して散らばっている場合が多い。しかし、ほとんどが床面から出土し、竪穴住居の廃棄とそう隔たらない時期に混入または廃棄されたものと考えられる。これをBタイプと呼んでおく。

3つ目は出土した遺物の量が少なく、遺物の遺存状態も良くない竪穴住居(007・009・011・019・023)である。Cタイプとする。

以上3種類のどれにも属さないのが竪穴住居003である。調査区北東端にやや離れて位置する。 遺物の遺存状態は良いが器種に極端な片寄りがみられる。出土遺物のほとんどが小型土器であ り、小型土器以外の須恵器杯身2点と土師器杯1点は完形品であった。また実測できなかった 遺物の破片65点も小型土器の破片であるという特殊な状況を呈している。遺構の形態も横長の 長方形で横並びの3本の柱穴をもつ。焼失住居で下層には暗黄褐色土がほぼ同じ厚さで堆積し ており、故意に埋め戻しをした可能性がある。集落の中での特殊な役割やまた古墳群と時期的 に大きな差がないため古墳との関連などが考えられる。

出土した遺物は土器類が中心である。杯は外面に明瞭な稜をもついわゆる須恵器模倣杯が主体である。須恵器の杯蓋を模倣したものと杯身を模倣したものがあり、この他に、須恵器を模倣しないものの大きく3種類に分類できる。いずれの形態も赤色塗彩したものや無彩のものはわずかで、内外面を黒色処理したものが主体である。杯の77.5%が内外面を黒色処理し、内面のみを黒色処理したものを含めると82.2%が黒色処理を施している。黒色処理の遺存の良いものを観察すると処理は器表面のみで樹脂手法によると思われるものが多い。また内面から口縁部外面を横方向にヘラ磨き調整し、体部外面はヘラ削りするというほぼ共通した技法によっている。以上のことから土師器類は黒色処理が盛行した6世紀後半から7世紀中葉ごろに位置付けられる。

須恵器杯は竪穴住居003・015・017・018・023から9点出土した。復原実測のため口縁部の形

態がはっきりしない竪穴住居023出土のもの以外は立ち上がりが短く、小型化した段階のもので7世紀中葉前後の時期の所産と考えられる。これらは竪穴住居003以外は先にBタイプとした竪穴住居で出土している。このほかBタイプの竪穴住居からは須恵器杯身を模倣の土師器杯中に、稜が認められるものの受部を作り出さず不明瞭で、小型化した新しい様相を持つものが含まれおり、Aタイプの竪穴住居出土の土器より新しい様相をもつものが混入している。この様に先述した立地と遺物の出土状況の差が竪穴住居の使用時期の差を表している可能性が考えられる。また、台地上の古墳群と大きな差がない時期のものであるため、今後古墳群の分析とあわせて検討していく必要があろう。

3. 溝状遺構・陥し穴等

松向作遺跡では溝状遺構を3条検出したが、U字状ないしV字状を呈すいわゆる溝は1条である。なお、この溝は、立山遺跡の1号溝につながる可能性がある。他の2条は、「道」としての機能が考えられようか。伴出する遺物からは古期のものかもしれない。

松向作遺跡の陥し穴・土坑・炭窯については、土坑の一部に土壙墓ないし陥し穴と考えられるものがあるかもしれないが、特別なものはないようである。

ところで、陥し穴に関して、第8表に各遺跡の長・幅・長幅比の平均と(不偏)標準偏差の値が出ているが、この数値はどこまで各遺跡の陥し穴の性格を反映しているのであろうか。試みに第76図に「箱ひげ図」と「はずれ値」を載せたが、第8表の数値と通常のヒストグラムなどと比較してみるのもおもしろいかもしれない。

縄文時代の包含層についても石器については、特に触れるようなこともないが、第99図 2 は 剝離痕の観察が困難な石材のため断定はできないが、有舌尖頭器の基部を再加工したものかも しれない(第111図参照)。

第2節 下層の遺構と遺物

松向作遺跡では2箇所の旧石器時代の集中地点が検出されているが、明確に時期決定できるような特徴的な石器はないようである。もっとも、表面採集や遺構中からナイフ形石器、尖頭器が検出されている。

註

- 1. 『佐倉市タルカ作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1985
- 2. 『佐倉市腰巻遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1987
- 3. 現在整理中。栗野遺跡の西に位置する。古墳時代後期から奈良・平安時代の集落である。
- 4. 現在整理中。立山遺跡の南、大作遺跡の南東に位置する。古墳時代以降の遺構は古墳63基、後期の竪穴住居

49軒の他土壙墓等を検出した。集落は東側の台地縁辺部から斜面にかけて占地しており、平坦部は墓域となっている。古墳は台地中央を南北に並んでおり、30m以上の規模をもつ二重周溝の円墳や帆立貝形前方後円墳を含み、佐倉第三工業団地内では最大規模の支群である。

- 5. 『佐倉市栗野 I・ II 遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1991
- 6. 『佐倉市立山遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1983
- 7. 『佐倉市大作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1990
- 8. 『佐倉市向原遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1989
- 9. 松向作遺跡を含めた報告書刊行済の遺跡で合計96基を数える。土壙墓は陥し穴など誤認されている場合もあるので未整理の遺跡については正確な基数をつかめていない。

佐倉第三工業団地内の土壙墓の検出状況については『栗野I・II遺跡』にまとめたので参照されたい。

- 10. 田中新史「古墳時代終末期の地域色-東国の地下式系土墳墓を中心として」『古代探叢II』 早稲田大学出版 部 1985
- 11. 周辺の古墳の横穴式石室・箱形石棺の規模は以下の通りである。特に幅に違いが見られるようである。

立 山 4 号 墳	円	箱形石棺	$2.00\times0.56\times0.50\mathrm{m}$	(軟質砂岩)
栗野 I 遺跡古墳 049	帆立貝	箱形石棺	$1.90 \times 0.95 \times 1.00 \text{m}$	(雲母片岩)
池向 I 遺跡野中 1 号墳	円	横穴式石室	$2.60 \times 1.50 \times 1.06 m$	(軟質砂岩)
池向 I 遺跡野中 3 号墳	円	箱形石棺	$1.82 \times 0.81 \times 0.65 m$	(雲母片岩)
池向 I 遺跡野中 4 号墳	方	箱形石棺	$1.70 \times 0.65 \times 0.83$ m	(雲母片岩)
池向 I 遺跡野中 5 号墳	帆立貝	箱形石棺	$1.83 \times 0.70 \times 0.64 m$	(雲母片岩)
池向 II 遺跡池向 5 号墳	帆立貝	横穴式石室	$2.50 \times 1.50 \times 1.00 m$	(軟質砂岩)
池向 II 遺跡池向 6 号墳	円	箱形石棺	$1.67 \times 0.45 \times 0.57 m$	(雲母片岩)
池向 II 遺跡池向11号墳	円	箱形石棺	$1.65 \times 0.56 \times 0.75$ m	(雲母片岩)

池向遺跡は整理中であり、計測値は概数である。古墳の名称は調査前の分布調査によるものを使用した。

『佐倉市立山遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1983

『佐倉市栗野 I・II遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1991

12. 墳丘の規模と掘方から推定される石室の規模は以下の通りである。

46号墳 墳丘7.7×7.8m、石室2.0×1.1m

47号墳 墳丘9.6×9.8m、石室3.4×1.1m (複室構造であった可能性がある)

『佐倉市大作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1990

- 13. 『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財)千葉県 文化財センター 1985
- 14. 『公津原』 千葉県企業庁 (財) 千葉県地域振興公社 1975 報告によれば瓢塚44号墳も同じタイプの石室であったらしい。

15. 安藤鴻基他「千葉県佐原市又見古墳の箱形横穴式石室」『古代房総史研究』第2号 古代房総史研究会 1983 この他小見川町御座ノ内遺跡の方墳3基、銚子市野尻遺跡第2・3号方形周溝墳等も石材が抜かれ、既に破壊されてはいるが掘方から推定すると同じ構造のものであった可能性が高い。

「御座ノ内遺跡」『事業報告 I 昭和63年度・平成元年度』 (財) 香取郡市文化財センター 1990 『銚子市野尻遺跡発掘調査報告書』 銚子市教育委員会 1978

- 16. 「平沢・山口古墳群」『筑波古代地域史の研究』 筑波大学 1982
- 17. 『土浦市烏山遺跡群』 茨城県住宅供給公社 1975

石材が抜き取られていたが8号墳がこれと同じ形態、1・2号墳が周溝に通じる墓道をもつ形態のものであった可能性がある。3基とも方墳である。

- 18. 『武者塚古墳』 武者塚古墳調査団・新治村教育委員会 1986
- 19. 『公津原』 千葉県企業庁 (財) 千葉県地域振興公社 1975
- 20. 常総地域の箱形石棺と横穴式石室の関係については先学諸氏が指摘されている通りである。

市毛勳「「変則的古墳」覚書」『古代』56号 早稲田大学考古学会 1973

「変則性をもつ必然的要素」として「追葬を主目的とする横穴式石室との関係で把えることが正しいのでは ないだろうか」と述べられている。

安藤鴻基「「変則的古墳」雑考」『小台遺跡発掘調査報告書』 小台遺跡調査会 1981

変則的古墳の合葬のなかに追葬ではなく改葬の疑いのあるものがかなりの事例に上ることを指摘され「「変則的古墳」が、横穴式石室の普及後もなお、存続したのは、改葬を伴う合葬によって、家族墓として機能を果たし得たからであろう。」として横穴式石室との関係を述べられている。また、玄門が小規模である点は安藤氏が指摘された改葬と関係する可能性も考えられる。本例では検証できなかったのでとりあえず可能性の指摘だけであるが、今後の事例の検討を待ちたい。

岩崎卓也「武者塚古墳の構造をめぐって」『武者塚古墳』 武者塚古墳調査団・新治村教育委員会 1986 また古墳060と同種の埋葬施設の例として本文中であげた新治郡武者塚古墳では 6 体が埋葬されており、「墓道を欠く構造であることから追葬を困難とするならば逆に変則的古墳が同時多葬であることを証明する必要がある。」と述べられて追葬の可能性を指摘されている。

このほか常総型古墳の改葬については次の論文を参考にした。

橋本博文「古墳時代における改葬について」『常陸梶山古墳』 大洋村教育委員会 1981

- 21. 安藤氏は横穴式石室と区別するために「箱形横穴式石室」の名称を提唱されている。
 - 安藤鴻基他「千葉県佐原市又見古墳の箱形横穴式石室」『古代房総史研究』第2号 古代房総史研究会 1983
- 22. 西山太郎「台地斜面に立地する住居跡群の意味と三つのパターン」『研究連絡誌』第9号 (財)千葉県文化 財センター 1984
- 23. 『東金市久我台遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1988
- 24. 竪穴住居015-37・38、017-14~16、018-9等である。007-3や011-5等も同じ形態の物である。

第1表 検出遺構一覧

212-023

遺構番号	遺構の種類	遺構番号	遺構の種類	遺構番号	遺構の種類	遺構番号	遺構の種類	遺構番号	遺構の種類
001	円 墳	014	欠 番	027	土 坑	040	方 墳	052	円 墳
002	竪穴住居	015	竪穴住居	028	土壙墓	041	円 墳	053	欠 番
003	竪穴住居	016	陥し穴	029	土 坑	042	土 坑	054	円墳
004	竪穴住居	017	竪穴住居	030	円 墳	043	陥し穴	055	円墳
005	竪穴住居	018	竪穴住居	031	円 墳	044 A	陥し穴	056	円 墳
006	竪穴住居	019	竪穴住居	032	円 墳	044 B	炭 窯	057	土壙墓
007	竪穴住居	020	溝状遺構	033	円 墳	045	欠 番	058	土壙墓
008	竪穴住居	021	陥し穴	034	土 坑	046	欠 番	059A	土 坑
009	竪穴住居	022	円 墳	035	土壙墓	047	欠 番	059B	炭窯
010	溝状遺構	023	竪穴住居	036	土 坑	048	欠 番	060	方 墳
011	竪穴住居	024	円 墳	037	欠 番	049	欠 番	061	土 坑
012	竪穴住居	025	炭窯	038	円 墳	050	円 墳	062	土 坑
013	溝状遺構	026	土 坑	039	円 墳	051	円 墳		

212-031

遺構番号	遺構の	り種類	遺構番号	遺構の種類	遺構番号	遺構	の種類	遺構番号	遺構の種類	遺構番号	遺構の)種類
001号墳	円	墳	002号墳	円均	003号墳	円	墳	004号墳	円 墳	005号墳	方	墳

第2表 遺構計測表 古 墳

遺構番号	墳形	規模(墳丘内径) m	埋葬 施設	備考	遺構 番号	墳形	規模(墳丘	内径) m	埋葬 施設	備	考
001	円	$11.62 \sim 11.85$	土壙	土師器	051	円	16.52		無	ブリッジ、	石製品
022	円	$10.12 \sim 10.40$	無		052	円	7.10 ~	7.40	無	ブリッジ	
024	円	2.58	無	土師器	054	円	5.50		無	一部保存	
030	円	$8.51 \sim 10.05$	無		055	円	8.35 ~	9.45	無	一部保存	
031	円.	$16.20 \sim 17.40$	無	一部保存、土師器	056	円	6.90		無	一部保存	
032	円	$(7.31) \sim 8.70$	無	須恵器・土師器・鉄製品	060	方	15.15 ~	15.55	石室	一部保存•	鉄製品他
033	円	$9.62 \sim 10.30$	無	土師器	001	円	17.10 ~	18.20	無	保存	
038	円	$8.85 \sim 8.95$	無	須恵器・土師器	002	円	(15.30)		無	保存	
039	円	$11.30 \sim 11.45$	無	土師器・土製玉	003	円	14.15 ~	14.65	無	保存	
040	方	$3.37 \sim 3.47$	無		004	円	15.60 ~	15.74	無	保存	
041	円	8.78	無	一部調査	005	方	6.86 ~	6.95	無	保存	
050	円	$10.94 \sim 11.10$	無	ブリッジ、土師器							

()は復原値、[]は現存値を示す。

土壙墓

遺構番号	長軸×短軸×深さ (上場) m	長軸×短軸 (中場) m	長軸の方位	副 葬 品
028	$1.93 \times 1.10 \times 0.21$	- × -	N - 90°-W	管玉・棗玉
035	$2.56 \times 1.53 \times 0.52$	- × -	$N - 73^{\circ} - E$	鉄鏃
057	$2.92 \times 1.56 \times 0.46$	$- \times -$	N-109°-W	なし
058	$2.90 \times 2.35 \times 1.04$	2.35×1.00	$N - 90^{\circ} - W$	なし

竪穴住居

遺構 番号	平面形態	主軸×横軸 m m	主軸の方位	面 積 m²	貯蔵穴	主柱穴	壁溝	出入口	備考
002	正方形	3.47×3.77	N - 32° - W	13.17	無	無	有	有	
003	横長方形	4.17×8.03	N - 31°-W	31.98	有	3	有	無	火災。
004	正方形	4.88×4.85	$N - 28^{\circ} - W$	23.80	有	4	有	無	火災。土堤。
005	正方形	5.06×5.07	N - 41°-W	25.32	有	4	有	有	火災。馬蹄形の高まり。
006	縦長方形	5.47×5.24	$N - 29^{\circ} - W$	28.85	有	4	有	有	·
007	横長方形	$(5.70) \times 7.00$	N - 31°-W	39.90	有	4	無	無	火災。
008	縦長方形	7.77×6.74	$N - 40^{\circ} - W$	51.07	有	4	一部	無	火災。
009	方 形	$[2.80] \times 5.07$	N - 14°-W	[14.19]	無	[3]	無	無	溝状遺構010に切られる。
011	縦長方形	$5.22 \times (4.82)$	$N-24.5^{\circ}-W$	24.25	無	[3]	有	無	焼土。
012	方 形	$[5.70] \times 6.44$	$N - 122^{\circ} - W$	[33.40]	無	4	無	無	一部破壊。
015	正方形	5.75×6.05	$N - 33^{\circ} - W$	[35.19]	有	4	有	無	火災。一部破壊。
017	横長方形	6.08×6.52	$N - 69^{\circ} - W$	39.11	有	4	無	無	
018	横長方形	4.65×5.46	$N - 60^{\circ} - W$	25.20	無	4	無	有	
019	正方形	4.71×4.90	$N - 64^{\circ} - W$	22.80	有	4	無	無	
023	方 形	$[3.80] \times 5.20$	N - 53°-W	[17.67]	無	4	有	無	一部破壊。

陥し穴

遺構番号	平面形態	長軸×短軸×深さ m	長軸の方位	遺構 番号	平面形態	長軸×短軸×深さ m	長軸の方位
016	楕円形	$2.34 \times 1.56 \times 1.65$	N -90°-W	043	長方形	$2.00 \times 0.82 \times 1.43$	$N-70^{\circ}-W$
021	楕円形	$2.49 \times 1.04 \times 0.68$	N -71°-W	044 A	楕円形	$2.02 \times (1.01) \times 0.74$	N -21°-W

土 坑

遺構番号	平面形態	長 軸×短 軸×深 さ m	長軸の方位	遺構 番号	平面形態	長 軸×短 軸×深 さ m	長軸の方位
026	楕円形	$2.41 \times 2.10 \times 0.83$	N -90°-W	042	楕円形	$3.24 \times 1.58 \times 0.34$	$N-47^{\circ}-W$
027	楕円形	$2.19 \times 1.66 \times 0.47$	N-53°-E	059 A	長方形	$2.22 \times - \times 1.20$	N -35°-W
029	楕円形	$2.41 \times 1.56 \times 0.60$	N-51°-W	061	長方形	$2.33 \times 0.93 \times 0.40$	N-71°-W
034	楕円形	$1.43 \times 0.85 \times 0.26$	N-83°-W	062	長方形	$0.95 \times 0.49 \times 0.46$	N-50°-W
036	長方形	$1.70 \times 1.24 \times 0.36$	N-75°-W	1			

()は復原値、[]は現存値を表す。

第3表 古墳060 金属製品計測表 (第24図、図版50)

弗る	久 口頃00	0 並作	段品計測を	₹(第24図、	図版50))						
挿図 番号	遺物番号	種類	遺存長×	幅 × 厚 (mm)	現存重量 (g)	揷図 番号	遺物番号	種類	遺存長×	幅	× 厚 (mm)	現存重量 (g)
20	0207	直刀	538.0 × 3	27.5×8.0	472.0	53	0019	鉄鏃	23.0 ×	5.3	\times 3.0	1.19
21	0121	鎺	15.0 ×[$13.0] \times 1.2$	0.66	54	0107	鉄鏃	26.2 ×	4.5	\times 3.7	1.32
22	8800	責金具	34.0 × 3	22.1×8.5	6.59	55	0122	鉄鏃	25.0 ×	6.5	× 3.5	1.22
23	0180	鉄鏃	22.0 ×[$[2.7] \times (4.0)$	4.08	56	0170	鉄鏃	27.0 ×	5.0	\times 3.0	0.98
24	0120	鉄鏃	30.0 ×[$[25.0] \times (2.5)$	6.47	57	0187	鉄鏃	23.0 ×	5.0	\times 3.5	0.67
25	0190	鉄鏃	34.0 ×	5.5×2.0	1.20	58	0112	鉄鏃	21.5 ×	4.5	$\times (3.0)$	1.02
26	0127	鉄鏃	31.0 ×	7.0×3.6	2.10	59	0073	鉄鏃	19.0 ×	4.0	\times 2.0	0.79
27	0183	鉄鏃	28.0 ×	6.5×2.0	1.51	60	0075	鉄鏃	20.0 ×	4.0	\times 3.0	0.95
28	0220	鉄鏃	27.0 ×	6.5×2.0	1.22	61	0022	鉄鏃	25.5 ×	4.0	× 3.0	1.21
29	0098	鉄鏃	24.5 ×	6.5×2.0	1.60	62	0179	鉄鏃	17.0 ×	3.5	\times 3.0	0.49
30	0105	鉄鏃	38.0 ×	5.5×5.0	2.28	63	0099	鉄鏃	17.0 ×	5.3	\times 3.8	0.87
31	0059	鉄鏃	41.2 ×	4.5×3.0	2.64	64	0100	鉄鏃	15.0 ×	5.3	× 1.8	0.36
32	0221	鉄鏃	40.0 ×	5.0×3.0	2.48	65	0190	鉄鏃	14.0 ×	5.0	× 3.5	0.49
33	0074	鉄鏃	22.0 ×	5.5×2.9	1.44	66	0200	鉄鏃	10.0 ×	5.0	\times 3.5	0.39
34	0139	鉄鏃	73.5 ×	5.0×2.8	4.41	67	0183	鉄鏃	63.0 ×	4.0	\times 3.5	4.41
35	0043 • 0045	鉄鏃	66.0 ×	4.0×3.0	3.38	68	0126	鉄鏃	65.5 ×	4.0	\times 2.8	2.77
36	0169 • 0172	鉄鏃	58.0 ×	4.0×3.0	3.18	69	0109	鉄鏃	53.0 ×	8.5)	\times 5.8	4.90
37	0116	鉄鏃	59.0 ×	5.5×3.0	3.20	70	0125	鉄鏃	43.0 ×	6.5)	\times 3.0	5.14
38	0110	鉄鏃	54.5 ×	4.2×3.0	2.70	71	0137	鉄鏃	36.5 ×	6.5)	× 2.6	1.60
39	0044	鉄鏃	46.0 ×	5.0×3.0	2.54	72	0140	鉄鏃	36.5 ×	4.5	\times 3.0	1.63
40	0124	鉄鏃	42.0 ×	4.5×3.2	2.66	73	0111	鉄鏃	27.0 ×	6.0	\times 3.0	1.23
41	0182	鉄鏃	41.2 ×	5.0×5.0	3.22	74	0003	鉄鏃	23.0 ×	4.8	\times 4.0	0.70
42	0097 • 0200	鉄鏃	41.5 ×	5.3×4.0	2.29	75	0168	鉄鏃	26.0 ×	5.0	\times 2.5	0.86
43	0220	鉄鏃	41.0 ×	6.0×3.0	3.27	76	0002	鉄鏃	26.0 ×	2.0	\times 2.0	1.15
. 44	0093	鉄鏃	36.0 ×	4.5×3.2	1.60	77	0138	鉄鏃	16.0 ×	2.8	\times 2.5	0.82
45	0193	鉄鏃	33.0 ×	5.0×3.0	1.41	78	0181	鉄鏃	20.0 ×	3.0	$\times (2.5)$	0.43
46	0119	鉄鏃	30.0 ×	4.5×3.0	1.45	79	0123	鉄鏃	15.2 ×	2.5	\times 2.0	0.40
47	0042	鉄鏃	32.2 ×	4.0×3.0	1.52	80	0200	鉄鏃	19.0 ×	4.0	× 3.0	0.53
48	0187	鉄鏃	27.0 ×	$5.5 \times (4.0)$	2.67	81	0161	鉄鏃	12.0 ×	3.0	× 1.8	0.25
49	0046	鉄鏃	24.5 ×	3.1×2.9	1.04	82	0090	刀子	55.0 ×	13.0	× 4.5	6.55
50	0194	鉄鏃	28.0 ×	3.0×3.2	1.37	83	0226	刀子	38.0 ×	8.5	$\times (4.0)$	2.65
51	0091	鉄鏃	26.0 ×	4.3×3.2	1.33	84	0195	燧鉄	73.0 ×			29.64
52	0070	鉄鏃	27.0 ×	4.5×3.0	1.56							
			1					L	L			

()は復原値、[]は現存値を示す。

第4表 土壙墓035 鉄鏃計測表 (第28図、図版51)

挿図 番号	遺物番号	遺存長(㎜)	身 長 (mm)	刃 部(長×幅×厚) (mm)	頸部(長×幅×厚)(mm)	茎部(長×幅×厚)(mm)	現存重量 (g)
1	0001	133.5	93.0	$19.5 \times (13.0) \times 2.5$	$73.5 \times 8.5 \times 3.3$	$[40.5] \times 5.0 \times 1.9$	8.00
2	0001	130.5	93.5	$19.5 \times [13.0] \times 2.0$	$75.0 \times (7.3) \times 2.7$	$[36.0] \times (5.5) \times 2.0$	8.06
3	0001	131.0	95.0	$20.0 \times 11.0 \times 3.0$	$75.0 \times (7.0) \times 2.9$	$[36.0] \times (5.0) \times 1.9$	9.05
4	0002	118.0	92.5	$18.0 \times (11.0) \times 3.2$	$76.0 \times 7.0 \times 3.2$	$[24.0] \times 5.0 \times 2.8$	10.18
5	0001	119.0	99.0	$19.5 \times 11.5 \times 2.0$	$79.5 \times 8.5 \times 2.0$	$[20.0] \times (5.0) \times 2.0$	6.58
6	0004	114.0	_	$17.5 \times 11.5 \times 4.0$	$78.5 \times (8.0) \times 3.3$	$[18.0] \times (5.5) \times 2.5$	9.90
7	0003	106.0	-	$18.5 \times 11.5 \times 3.6$	$76.0 \times 7.5 \times 3.6$	$\begin{bmatrix} 11.5 \end{bmatrix} \times 5.0 \times 2.5$	9.33
8	0005	101.0		$19.0 \times 10.5 \times 3.3$	$76.0 \times (7.5) \times 2.8$	$[6.0] \times (4.5) \times -$	8.73
9	0001	48.0	-	$19.5 \times 11.5 \times 2.6$	$[28.5] \times 7.0 \times 2.8$	- x - x -	3.29
10	0001	36.5	-	$20.0 \times [11.0] \times 2.0$	$[16.5] \times 5.5 \times 2.8$	- x - x -	2.52
11	0001	57.0	_	- × - × -	$[49.0] \times 9.0 \times 2.9$	$[8.0] \times 5.0 \times 2.8$	4.45
12	0001	62.0	_	- × - × -	$[37.0] \times 8.5 \times 3.5$	$[25.0] \times 3.5 \times 2.5$	4.65
13	0001	21.5	_	- × - × -	- × - × -	$[21.5] \times 2.0 \times 1.2$	0.35
14	0001	2.0	_	- x - x -	- x - x -	$[2.0] \times (3.0) \times (1.8)$	0.33
15	0001	22.0	- 1	- × - × -	- x - x -	$[22.0] \times (3.0) \times 1.8$	0.35
16	0001	39.0	_	- × - × -	- × - × -	$[39.0] \times (3.0) \times (2.2)$	0.62
17	0001	34.0		- × - × -	- x - x -	$[34.0] \times (3.0) \times 2.2$	0.60
18	0001	41.0	_	- x - x -	- × - × -	$[41.0] \times (3.5) \times (2.8)$	1.01
19	0001	48.0	_	- × - × -	- x - x -	$[48.0] \times 4.0 \times (2.8)$	1.61

^()は復原値、[]は現存値を示す。

第5表 玉類計測表

古墳039 (第22図、図版49)

挿図番号	種	類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色	調	材	質
5	丸	玉	0008	7.7	6.0	1.5	0.45	明赤	褐 色	土	製

古墳060(第25図、図版49)

挿図番号	種		類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色	調	材	質
85	切	子	玉	0228	16.0	18.0	4.0	5.55	白·	透 明	水	晶
86	切	子	玉	0101	13.0	19.8	4.0	4.25	白 •	透 明	水	晶
87	切	子	玉	0223	15.0	22.1	4.0	6.57	白・	透 明	水	晶
88	切	子	玉	0201	15.0	25.6	4.0	8.60	白・	透 明	水	晶
89	切	子	玉	0206	16.4	26.7	4.8	10.32	白・	透 明	水	晶
90	切	子	玉	0222	17.0	28.2	4.2	11.04	白・	透明	水	晶
91	勾		玉	0227	10.0	19.0	3.1	4.08	橙色	• 透明	瑪	瑙
92	勾		玉	0204	[11.8]	29.8	3.3	7.02	橙色	• 透明	瑪	瑙
93	勾		玉	0202	16.0	31.1	3.8	6.84	橙色	• 透明	瑪	瑙
94	勾		玉	0184	12.0	32.2	4.0	7.90	橙色	• 透明	瑪	瑙
95	勾		玉	0084	12.0	32.0	3.2	9.08	橙色	• 透明	瑪	瑙
96	勾		玉	0203	12.2	34.2	3.2	8.74	橙色	• 透明	瑪	瑙
97	勾		玉	0205	11.0	35.3	3.2	8.14	橙色	• 透明	瑪	瑙
98	勾		玉	0224	13.0	39.8	3.0	13.83	橙色	• 透明	瑪	瑙
99	勾		丟	0225	13.0	39.0	4.0	12.23	緑色	• 透明	緑色	凝灰岩
100	勾		玉	0220	16.0	45.0	4.2	22.16	橙色	• 透明	瑪	瑙

土壙墓028 (第28図、図版49)

//	· (2)		21/1/2									
挿図番号	種	類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色		調	材	質
1	棗	玉	0007	6.7	9.8	2.2	0.40	黒	褐	色	埋	木
2	棗	玉	0003	7.0	11.0	2.5	0.44	黒	裼	色	埋	木
3	棗	玉	0009	7.4	11.2	3.0	0.53	黒	褐	色	埋	木
4	棗	玉	0009	8.0	11.5	3.0	0.57	黒	褐	色	埋	木
5	管	玉	0008	5.7	18.0	2.8	1.07	淡	緑	色	緑色	凝灰岩
6	管	玉	0005	6.0	18.0	2.2	1.08	淡	緑	色	緑色	凝灰岩
7	管	玉	0006	5.9	19.0	2.5	1.23	淡	緑	色	緑色	凝灰岩
8	管	玉	0008	[6.5]	[19.0]	2.8	1.55	淡	緑	色	緑色	凝灰岩
9	管	玉	0008	7.5	20.5	2.5	2.12	淡	緑	色	緑色	凝灰岩
10	管	玉	0004	7.5	26.0	3.0	2.12	淡	緑	色	緑色	凝灰岩
11	管	玉	0002	6.2	22.0	2.1	1.50	淡	緑	色	緑色	凝灰岩

竪穴住居002 (第51図、図版49)

挿図番号	種	類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色	調	材	 質
24	丸	玉	0002	8.2	7.5	1.0	0.59	明赤	褐 色	土	製

()は復原値、[]は現存値を示す。

第6表 土器観察表

古墳001(第21図)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土.	焼	成	色	調
1	29, 31, 32 , 48, 49, 50, 69	杯		(12.5) - - - [3.9]		丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向にへ ラ磨きする。体部外面はヘラ削り後軽く磨いて仕 上げている。		立を含	普通。	,	赤色塗	内外面 彩。
2	60	甕		- 6.2 [2.0]	底部。	平底である。内外面ともヘラ削りしている。	細砂料量に含		良好。		赤色。	
3	7, 14, 19, 20, 24	甕		7.0 [5.0]	底部。	底部は上げ底となる。同一個体と思われる胴部破 片があるが直接接合しない。内面はナデて仕上げ、 外面はヘラ削りしている。 火熱により器面が荒れ る。		·含む。	普通、を受け		内面は 外面は	

古墳022(第21図、図版21・26)

揷図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎士	:	焼	成	色	調
1	一括	杯		(12.8) - - 4.1	1/4周。	底部は、丸底を潰したような形態で、立ち上がり との境が不明瞭である。体部は緩やかに内彎しな がら立ち上がる。口縁部は横ナデをし、内外面は なでて仕上げる。		含	普通。		黄橙色。	
2	8	杯		- - - [3.4]	底部。	丸底である。内面はナデて仕上げ、外面はヘラ削 りする。外面に粘土紐接合痕が残る。	砂粒を含	む。	普通。		黄橙色。	
3	10	杯		(12.4) - - 3.9	1/4周。	丸底で外面中位に稜を作り、口縁部は垂直に立ち上がる。内面から口縁部外面は横方向にへう磨きするが、器面が荒れている。外面はヘラ削りする。			普通。 を受け	,,,,		褐色。 口縁外
4	一括	杯		(14.8) - - [4.2]	1/5周。	丸底で体部外面に稜を作る。口縁部は内傾して立 ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体 部外面はヘラ削りしている。		量	良好。		暗褐色。 面黑色如	
5	13,一括	坩		(7.2) (8.5) - [6.2]		最大径は肩部にある。口縁部は横ナデし、内面は なでている。外面は横方向にヘラ削りする。	細砂粒をむ。	含	良好。		赤色。	
6	3, 7	甕		- 6.0 [1.7]	底部の1/3。	底部は上げ底になっている。内面はなでており、 外面はヘラ削りする。	砂粒を含	む。	良好。 を受け			
7	一括	甕		- (7.4) [2.0]	底部1/2。	内面はなでており、外面胴部はヘラ削りする。底 部外面には木葉痕が残る。	細砂粒を 量に含む		普通。		内面黄柏 外面黒袖	

古墳024 (第21図)

插图	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎:	±.	焼	成	色	調
	1	甕	_		底部の1/4。	底部外面には不明瞭であるが木葉痕が観察できる。	砂粒を/ 含む。	少量	普通。		内面は黄 外面は赤 い黄橙色	っぽ

古墳031 (第21図、図版21 · 26)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼	成	色	調
1	11, 16	杯		(13.6) - 4.2	1/3周。	丸底で、口縁部は外傾して立ち上がる。内外面と もヘラ磨きして仕上げる。	粒子は細か く混和物が 少ない。	良好。		赤色、下赤色塗料部剝げて	影。一
2	14, 15, 16	甕		- (7.0) [3.8]	底部の2/3。	やや上げ底となる。内面はなでており、外面はへ ラ削りする。	細砂粒を多量に含む。	普通。		内面黄木 外面赤(
3	25	高杯		- (8.0) [6.3]	周。	比較的高さのある脚柱部で、脚裾部はハの字状に 開く。外面と脚裾部内面はヘラ磨きする。内面は ヘラ削り後なでている。		良好。		赤色、タ 赤色塗ネ	
4	10, 16	甕		(16.2) 6.2	3周、胴部は	最大径が胴部中位よりやや下に位置する下膨れの 形態で、底部はやや上げ底となる。口縁部は強く 横ナデし、外面に稜を作る。内面はなでており、 外面は縦横にヘラ削りする。	細砂粒を多 量に含む。	良好。		赤褐色。	•

古墳032 (第21図、図版21・26)

揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	2	須恵器杯 身	12.7 15.0 - 5.6	一部を欠く。	受部は横に水平にのびる。口縁部は僅かに内傾する。底部は1/2程を回転ヘラ削りしている。ロクロは右回転。		良好。	灰白色。
2	1	杯	13.7 - - 5.6	く一部を欠	丸底で球形を半截したような体部である。□縁部 は短く僅かに内傾し、外面に緩やかな稜を作る。 □縁部は横ナデし、内外面ともなでて仕上げる。	細砂粒を多 量に含む。	良好。	赤褐色。外面 の底部以外を 赤色塗彩して いる。
3	3, 4, 5, 6, 一括	坩	(10.0) (14.0) - 12.3	と胴部から	丸底で最大径は胴中位にあり、胴部は横長の楕円 形を呈する。口縁部は高さがあり、僅かに外傾し て立ち上がる。口縁部は横ナデし、内外面ともな でて仕上げる。	む。	良好。	赤褐色。外面 と口縁部内面 を赤色塗彩す る。

古墳033 (第22図、図版21・26)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	3, 5, 9	杯		(13.0) - - [4.5]		丸底で体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部と 体部の境は不明瞭。内面はなでている。外面もへ ラ削り後なでている。火熱で器面が荒れ、赤色塗 彩は剝げている。		普通、火熱 を受ける。	赤褐色、外面 の底部以外を 赤色塗彩。
2	5, 6, 一括	杯				丸底で、口縁部は僅かに内傾して外面に稜を作る。 口縁部は横ナデし、内面はなでている。外面もへ ラ削り後なでている。器面は荒れている。			赤色、外面底 部以外を赤色 塗彩。

古墳038 (第22図、図版21・27)

插図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色	調
1	1	須恵器杯 蓋	–	と口縁部の	丸い天井部で、口縁部は外面に稜を作り、直立して立ち上がる。天井部の2/3を回転ヘラ削りする。 ロクロ右回転。			青灰色。	
2	3, 4, 5	鉢	_ _	4を欠損。底	口縁部は、外反して立ち上がる。底部は外面から 穿孔している。口縁部は横ナデする。内面はなで ており工具痕が残る。外面はヘラ削り後なでてい る。	量に含む。	普通。	赤褐色。	

古墳039 (第22図、図版21・26)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	±	焼	成		色	調
1	6, 7	杯			部の一部を 欠損。底部	丸底で外面に稜を作り、口縁部は僅かに外反して 立ち上がる。底部は穿孔している。口縁部は横ナ デし、内面はなでる。外面は横方向にヘラ削りし ている。			普通	i.	5	赤褐色。 の体部 st 外面の口 を赤色質	までと □縁部
2	9, 10	杯		11.2 - - 5.3	口縁部の1/ 5周欠損。	丸底で球形を半分にしたような体部である。外面 に稜を作り口縁部は僅かに内傾して立ち上がる。 口縁部は横ナデし内面はなでる。外面の調整は雑 で粘土紐接合痕が明瞭に残る。		含む。	普通	i.	ã	内面橙色 面黒褐色 部橙色。	<u>4</u> , –
3	1,2	杯		11.4 - - 4.3	底部の一部 欠損。	丸底で、外面に稜を作り口縁部は内傾して立ち上がる。稜は僅かに横に突出する。口縁部は横ナデ し内面はなでる。外面はヘラ削り後なでて仕上げる。丁寧に仕上げ器面に光沢がある。	入する	る微細	焼き	締ま	つ f	くすんだ 色、一部 色。内タ 色処理す	那黒褐 小面黒
4	4,5	鉢		13.3 - - 6.4		口縁部は外反して立ち上がる。底部は外面から穿 孔している。口縁部は横ナデし、内面はなでる。 外面はヘラ削り後軽くなでて仕上げる。	細砂料む。	立を含	良好		ŧ	登色。	

古墳050(第22図)

插図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土	焼	成	色	調
1	5	杯			体部の1/4 周。	外面に稜を作り、口縁部は外反して立ち上がる。 口縁部は横ナデし、外面はヘラ削り後なでている。		含む。	普通。		赤褐色、 面とも。 彩する。	赤色塗

古墳051 (第22図、図版27)

揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	7, 8, 10, 40, 137~ 145, 148 ~156	杯	-	2と胴部・底	丸底で、外面に緩い稜を作り、口縁部は短く内傾 して立ち上がる。口縁部は横ナデし、体部は内外 面ともなでて仕上げる。細かく破砕されていた。		普通。	赤色、内外面 とも赤色塗彩 する。
	18, 21, 23 ~26, 28 ~30, 35, 37, 52他	須恵器独		胴下半部の 1/4周。	丸底である。内面はなでており、外面は平行叩き を行う。底部付近の叩き目はなでて擦り消される。		良好。	暗青灰色。

古墳054 (第22図、図版21·26)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	10	髙杯	9.6 [4.4]		ハの字状に開く短い脚部である。裾部は横ナデし、 外面は縦方向にヘラ削り後横方向になでている。 内面も横方向にヘラ削り後、横方向になでて仕上 げる。	量に含む。	良好。	赤色、内外面 赤色塗彩。

古墳060 (第23図、図版21·27)

口模	(000 (年	72023		1 - 21)				
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼 成	色 調
1	29, 197	須恵器杯 蓋	- - - [2.4]	口縁部欠損。	つまみがある。天井部は回転へラ削りする。ロクロは右回転。	白色粒子・ 雲母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	青灰色。
2	102, 200	須恵器杯 蓋	- - - [2.1]	口縁部欠損。	つまみがある。 天井部は回転へラ削りする。 ロクロは右回転。	白色粒子・ 雲母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	青灰色。
3	10, 104, 118, 133, 135, 136, 143, 200	須恵器杯 蓋	14.7 - - 2.9	口縁部1/8周欠損。	つまみがある。返りは僅かに突出する。天井部の 1/3を回転ヘラ削りする。ロクロは右回転。	白色粒子・ 雲母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	青灰色。
	21, 29, 35 , 48, 53, 79, 81, 82 , 83他	須恵器杯 身	14.0 - 9.0 3.8	口縁部1/3 周欠損。	平底で体部は外方に開いて立ち上がる。器高が低い。体部下端から底部は回転ヘラ削りする。ロクロ右回転。		普通。	明青灰色。
5	49, 94, 200	須恵器杯 身	(14.8) - 5.2 3.9	口縁部2/3 周欠損。	平底で体部は外方に開いて立ち上がる。器高が低い。体部下端から底部は回転へラ削りする。ロクロ右回転。		あまい。	灰色がかった 明黄褐色。
4	16, 36, 52 , 54, 55, 69, 78, 80 , 85, 86他	須恵器杯 身	14.0 - 8.8 3.5	口縁部1/3 周欠損。	平底で体部は外方に開いて立ち上がる。器高が低い。体部下端から底部は回転へラ削りする。ロクロ右回転。		普通。	明青灰色。
7	12, 17, 26 , 30, 34, 200	須恵器杯 身	- - 7.6 2.4	口縁部欠損。	平底で体部は外方に開いて立ち上がる。体部下端 から底部は回転へラ削りする。ロクロ右回転。	白色粒子・ 雲母を含む 砂粒を多量 に混入。	あまい。	明青灰色。
8	130, 131, 132, 146, 147, 148, 200	須恵器杯 身	- 8.4 3.5	口縁部欠損。	平底で体部は外方に開いて立ち上がる。体部下端 から底部は回転ヘラ削りする。ロクロ右回転。	白色粒子・ 雲母を含む 砂粒を多量 に混入。	あまい。	明青灰色。
9	103, 114, 128, 135, 171, 200	杯	14.4 - - 3.8	口縁部1/2周欠損。	平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後ヘラ磨きして仕上げる。 器面に光沢がある。		良好。	黄橙色。
10	173, 174, 191, 196, 200	杯	15.2 - - 3.6	口縁部1/4 周と底部1/ 4欠損。	平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後ヘラ磨きして仕上げる。 器面に光沢がある。		良好。	黄橙色。
11	106, 113, 200, 212	杯	14.6 - - 3.9	口縁部1/2周欠損。	平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後ヘラ磨きして仕上げる。 器面に光沢がある。		良好。	黄橙色。
12	200	杯	(14.8) - - [3.8]	口縁部1/4 周。	平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は緩やかに内障して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後ヘラ磨きして仕上げる。 器面に光沢がある。		良好。	黄橙色。
13	135, 200	杯	13.6 - - - [3.8]	□縁部1/8 周。	平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後ヘラ磨きして仕上げる。 器面に光沢がある。		良好。	黄橙色。
14	13, 14, 38 , 39, 40, 41, 62, 63 , 64, 220	須恵器長 頸壺	- (16.5) - [18.2]	胴部1/2周。	丸底で球形の胴部である。外面の一部に灰色がかった緑色の釉がかかる。	黒色の微粒 子を含む。	良好。	内面明青灰色。 外面黒っぽい 灰色。
	18, 31, 51 , 56, 60, 61, 72, 200	須恵器長 頸壺		く一部を欠	口縁部は有段で、肩部に明瞭な稜を作る。高台は 張り付けている。胴下半部と底部は回転へラ削り し軽くなでて仕上げる。ロクロ回転方向不明。口 縁部内面と肩部に釉がかかる。		良好。	明青灰色。

										1 24 000
揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼	成	色	調
16	58,115, 117,128, 149~153 他	頸壺	10.4 15.1 7.8 22.3		口縁部は有段で、肩部に明瞭な稜を作る。高台は 張り付けている。胴下半部と底部は回転へラ削り し軽くなでて仕上げる。ロクロ回転方向不明。口 縁部内面と肩部に釉がかかる。	を含む。	良好。		明青灰(がかか) はオリー 色。	る部分
17	59, 135, 144, 154, 200	須恵器長 頸壺	(10.8) - - - [4.3]	周。	ラッパ状に開き、口縁部は有段となる。口縁部の 内面から外面にかけて自然釉がかかる。	黒色粒子を 含む。	良好。		内面明常外面暗影	
18	6, 79, 155 , 188, 198 , 200			頸部から肩 部の1/3周。	肩部には緩やかな稜を作る。	黒色粒子を 含む。	良好。		明青灰	<u>+</u> .
19	1, 4, 7, 25 , 66, 167, 189, 200		- 7.6 [5.7]		底部は中央部が僅かに突出する。高台は張り付け ている。胴下半部と底部は回転へラ削りする。ロ クロは右回転。		良好。		内面明書 外面暗書 一部明書	灰色。

竪穴住居002 (第50・51、図版22・28・29)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	20	杯		11.7 12.0 - 4.6	完形。	丸底で体部外面に突出する稜を作り口縁部は外反 する。内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。		良好。良く 焼きしまっ ている。	黒っぽい黄橙 色基調、一部 黒褐色。内外 面黒色処理。
2	8	杯		11.4 11.2 - 4.3	完形。	丸底で体部外面に突出する稜を作り口縁部は外反 する。内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。			黒褐色、一部 暗褐色。内外 面黒色処理、 遺存良好。
3	7	杯		12.2 12.0 - 4.4	口縁部の1/ 4欠損。	丸底で体部外面に突出する稜を作り口縁部は外反 する。内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	3㎜の小石		
4	19	杯		11.5 11.6 - 4.5		丸底で体部外面に突出する稜を作り口縁部は外反 する。内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。		良好。竪緻である。	暗褐色、一部 黄橙色。内外 面黒色処理、 外面は剝げる。
5	13	杯		(13.6) - - [3.3]		丸底で体部外面に突出する稜を作り口縁部は外反 する。内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	砂粒を含む。	良好。	暗褐色、一部 黒褐色。内外 面黒色処理。
6	23, 24	杯		(14.6) - - [4.3]		丸底で体部外面に突出する稜を作り口縁部は外反 する。内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。		普通。	暗褐色、一部 黒褐色。内外 面黒色処理。
7	16	杯		14.3 12.5 - 4.5	1-2	丸底で体部外面に稜を作り、口縁部は大きく開い て立ち上がる。口縁部横ナデする。内面は横方向 にヘラ磨きし、外面はヘラ削りする。内面底部は 使用のためか器面が荒れる。		良好。	内面橙色、外 面暗褐色、一 部黒褐色。内 外面黒色処理。
8	15	杯		14.4 12.2 - 4.5	口縁部の1/ 5欠損。	丸底で体部外面に稜を作り、口縁部は大きく開い て立ち上がる。内面と口縁部外面は横方向にヘラ 磨きし、体部外面はヘラ削り後さらに磨いて仕上 げる。一部粘土紐痕が残る。		良好。	橙色、一部黒 褐色。内外面 黒色処理、遺 存悪い。
9	11, 12, 24 , 25, 29	杯		14.4 12.6 - 4.4		丸底で体部外面に稜を作り、口縁部は大きく開い て立ち上がる。内面と口縁部外面は横方向にヘラ 磨きし、体部外面はヘラ削りする。口縁部に一部 粘土紐痕が残る。		良好。	黄橙色、一部 黒褐色。内外 面黒色処理、 遺存悪い。
10	2-B	杯		11.7 12.5 - 3.7		丸底で体部外面上位に稜を作り口縁部は内傾する。 内面と口縁部外面にかけては横方向のヘラ磨きで 仕上げ、体部外面から底部にかけてはヘラ削り後 ナデている。		良好。	黒褐色、一部 橙色。内外面 黒色処理、外 面は剝げる。

				,				五八正/500
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
11	17, 18, 28	杯	11.4 12.6 - 3.7	口縁部1/3 欠損。	丸底で体部上位に稜を作り、口縁部は内傾して立ち上がる。内面と口縁部外面にかけては横方向のへう磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけてはヘラ削りする。		良好。	黒褐色、一部 橙色。内外面 黒色処理。
12	18	杯	11.5 13.0 - 4.0	体部上半部	丸底で体部上位に稜を作り、口縁部は内傾して立 ち上がる。内面と口縁部外面にかけては横方向の へラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては ヘラ削りする。器面が荒れる。		あまい。	黒褐色、一部 橙色。内外面 黒色処理。
13	1	杯	12.8 14.6 - 4.5		丸底で体部上位に稜を作り、口縁部は内傾して立 ち上がる。内面と口縁部外面にかけては横方向の へう磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては へう削りする。		普通。	黒褐色、内外 面黒色処理。
14	21	鉢	13.2 15.0 6.4 9.3	完形。	平底で、胴部は内質して立ち上がる。外面に突出 する稜を作り、口縁部は内質して立ち上がる。内 面と口縁部外面は丁寧にヘラ磨きし、光沢がある。 外面はヘラ削りしている。	む。小石を	良好。	暗褐色、底部 を除く内外面 黒色処理。
15	10	小型土器	2.2 - 2.8 4.2	完形。	平底で、やや内端して立ち上がる。口縁部は内傾 している。口縁部から肩部は横ナデし、他もなで て仕上げている。		良好。	暗褐色。
16	9, 24	小型土器	(9.0) - 7.8 2.6		偏平で体部は短く立ち上がる。底部に明瞭に木葉 痕が残っている。体部は内外面軽くなでている。	細砂粒を含む。	普通。	橙色、底部外 面は黒褐色。
17	2-A,28	甕	17.4 22.0 5.8 30.4		長嗣形で最大径は胴中位にある。口縁部は外傾する。内面はなでており、工具痕、粘土紐痕がみられる。外面は火熱による器面の荒れが著しいがへラ削りしてると思われる。	砂粒を多量		
18	3	甕	14.4 18.5 5.9 26.6	口縁部の1/ 5を欠損。	長嗣形で最大径は胴中位にある。口縁部は短く外 反する。口縁部は横ナデ、内面は横方向になでる。 粘土紐痕が残る。外面は縦方向にヘラ削り後丁寧 になでている。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	橙色、外面に 一部煤が付着 する。
19	25, 26, 28	甕	- (7.2) [5.0]	底部1/2。	内面はなでており、外面はヘラ削りしている。火 熱により器面が荒れている。	細砂粒を多量に含む。	あまい。火 熱を受ける。	明赤褐色。
20	4	甕	- (7.0) [5.4]	底部。	内面はなでており、工具痕が残る。外面はヘラ削 りしている。	砂粒を多量に含む。	良好。	橙色。
21	6, 24, 25	甕	- (7.0) [3.0]	底部2/3。	内面はなでており、外面はヘラ削りしている。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	内面橙色。外 面暗赤褐色、 火熱により変 色している。
22	5	甑	29.1 - 8.9 21.5	口縁部の一部を欠損。	大きくラッパ状に開き、口縁部はさらに外反する。 口縁部は横ナデし、胴部は内外面とも縦方向にへ ラ削りする。		良好。火熱 を受ける。	橙色、外面に は黒斑がある。

竪穴住居003 (第53図、図版22・30)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼 成	色 調
1	2	須恵器杯 身	10.1 - - 4.6	完形。	受部が横にのび、そこから短い口縁部が内傾して立ち上がる。底部の2/3を回転へう削りしておりロクロは右回転。底部に線を2本並べた箆書きがある。	含む細砂粒		暗青灰色。
2	4	須恵器杯 身	9.3 - - 3.9	完形。	受部が斜めにのび、そこから短い口縁部が内傾し て立ち上がる。底部の1/3を回転ヘラ削りしており ロクロは右回転。		焼きしまっ	青灰色。

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎:	±.	焼 成	色調
3	3	杯	10.4 - - 4.4	完形。	丸底で体部外面に突出した稜を作り、口縁部は内傾して立ち上がる。内面から口縁部外面は横方向にへラ磨きし、外面体部から底部はヘラ削り後軽く磨いているようである。		を含	良好。良く 焼きしまっ ている。	黒褐色。内外 面黒色処理。 内面の遺存が よい。
4	14	小型土器	7.0 - 5.8 3.0	口端部の一 部欠損。	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない偏平な箱形である。内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を含	きむ。	良好。	橙色、内外面 赤色塗彩。
5	15	小型土器	(7.2) - (6.0) 3.5	底部の1/4	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない偏平な箱形である。内外面はなでて仕上げる。 外面には粘土紐痕が残る。	砂粒を含	む。	普通。	暗赤褐色、内 外面赤色塗彩。
6	7	小型土器	(7.4) - (7.7) 2.8	底部の1/2	平底で、体部はほぼまっすく立ち上がる。高さがない偏平な箱形である。内面はなでており、外面はヘラ削りする。外面に粘土紐痕が残る。	砂粒を含	€ 0.	普通。	橙色、一部暗 赤褐色。
7	15	小型土器	(6.8) - (6.4) 3.2	底部の1/2	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない偏平な箱形である。内面はなでており、外面はヘラ削りする。内面に工具痕、外面には粘土紐痕が残る。	砂粒を含	àt.°	普通。	橙色。
8	15	小型土器	8.6 - 7.3 2.9	口縁部から 底部の1/2 周。	平底で、体部はやや外傾して立ち上がる。高さがない偏平な箱形である。内面はなでている。外面は粘土の皺が著しい。	砂粒を含	t.	普通。	橙色。
9	13	小型土器	8.9 - 7.5 2.8		平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない偏平な箱形である。内面はなでており、外面はへう削りする。内面に工具痕、外面に粘土紐痕が残る。	砂粒を含	≩ t.;	普通。	橙色。
10	15	小型土器	(7.6) - (6.0) 2.9	底部の1/3	体部はほぼまっすぐ立ち上がる。内面はなでており、外面はヘラ削りする。外面に粘土紐痕が残る。	砂粒を含	≩ t.,	普通。	橙色。
11	15	小型土器	(5.9) - - [3.0]		体部は内端気味に立ち上がる。内外面なでて仕上 げる。外面に粘土紐痕が残る。	砂粒を含	計 む。	普通。	白っぽ、橙色。
12	15	小型土器	(6.0) - - [3.0]		体部は内罅気味に立ち上がる。内外面なでて仕上 げる。外面に粘土紐痕が残る。	砂粒を含	₹ t.	普通。	橙色、一部白 っぽい橙色。 内外面赤色塗 彩。
13	12	小型土器	6.8 - 6.2 2.8	口縁部の一 部を欠損。	体部は内彎気味に立ち上がる。内面はなでており、 外面はヘラ削りする。 内面は工具痕、外面に粘土 紐痕が残る。	砂粒を含	計 む。	良好。	橙色。内外面 赤色塗彩。
14	11	小型土器	9.4 - 6.5 3.8		平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面ヘラ 削りする。外面に一部粘土紐痕が残る。	砂粒を記含む。		普通。	内面橙色、外面には、橙色。
15	7, 15	小型土器	(7.8) - 6.2 [4.0]	体部2/3周。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なで て仕上げる。内面の底部付近に工具痕が残る。	砂粒を含	きむ。	普通。	橙色。
16	5	小型土器		口縁部の一 部欠損。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なで て仕上げる。内面の体部下半部から底部は使用の ためか器面が荒れる。	砂粒を含	計 む。	良好。	にぶい黄褐色、 一部黒褐色。
17	12	小型土器		完形。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なで て仕上げる。外面に粘土紐痕が残る。	砂粒を含	≩ t.	良好。	橙色、内外面 赤色塗彩。

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	±	焼	成	色	調
18	5, 11	小型	土器	9.0 - 6.0 5.0	口縁部から 体部の1/3 欠損。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なで て仕上げる。外面に粘土紐痕が残る。	砂粒	を含む。	良好。			一部暗 赤色塗
19	10, 15	甕		18.4 18.0 7.0 27.4		長胴形で最大径は口縁部にある。口縁部は横ナデ し、内面は横方向になでる。外面は縦方向にヘラ 削りし、胴部の一部はさらに横方向に削って整形 する。			良好。を受け		内外面	i橙色。
20	1	甑		25.6 - 8.2 26.4	口端部の2/ 3欠損。	胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は強く外反 する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は 縦方向にヘラ削りし、軽くなでて仕上げている。		き含む。	良好。を受け		一部火	(熱によ 色に変

竪穴住居004 (第55・56図、図版23・31・32・33)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	5-B	杯	11.2 - - 4.6	く一部を欠	丸底で体部外面に突出する稜を作り、□縁部は強く外反する。内面から□縁部外面にかけては横方向のへラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方向にへラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	暗褐色。内外 面黑色処理、 遺存良好。
2	27	杯	12.3 - - 5.0	口端部の一 部欠損。	丸底で体部外面に突出する稜を作り、口縁部は強く外反する。内面から口縁部外面にかけては横方向のヘラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	暗褐色、一部 暗赤褐色。黒 色処理、内面 の遺存良好。
3	5- A	杯	13.4 - - 4.8	く一部を欠	丸底で体部外面に突出する稜を作り、口縁部は強く外反する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	黒褐色。内外 面黒色処理。
. 4	2	杯	12.7 - - 3.9	口縁部の一 部欠損。	丸底で体部外面に突出する稜を作り、口縁部は強く外反する。内面から口縁部外面にかけては横方向のヘラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	内面暗褐色、 外面黒褐色。 内外面黒色処 理。
5	24	杯	12.8 - - 3.9	1/2遺存。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。		普通。	内面黒褐色、 外面くすんだ 橙色。内外面 黒色処理。
6	16, 17, 26	杯	13.1 - - 4.6	□縁部の1/ 2と胴部の 一部を欠損。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。		普通。	暗褐色。内外 面黒色処理。
7	4-C	杯	15.6 - - 5.0	く一部を欠	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。		良好。	暗赤褐色、内 外面黑色処理。
8	33	杯	13.8 - - 3.8	く一部を欠	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	を多量に含	良好。	橙色。内外面 赤色塗彩、遺 存良好。
9	4-B	杯	13.7 - - 4.3	く一部を欠	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外及 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	普通。	暗赤褐色、内 外面赤色塗彩。
10	4-D	杯	14.2 - - 4.0	く一部を欠	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面は横方向にヘラ削りし、 工具痕が残る。		普通。	内面黑褐色、 外面暗赤褐色。 内外面黑色処 理。
11	4-E	杯	14.3 - - 3.7	く一部を欠	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。		普通。	内面暗赤褐色、 外面黑褐色。 内外面黑色処 理。

揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
12	30	杯	14.2 - - 3.5	口縁部の1/ 2欠損。	体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反する。 器高が低く偏平な形態である。内面から口縁部外 面にかけては横方向にヘラ磨きで仕上げ、体部外 面は横方向にヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	暗赤褐色、内 外面赤色塗彩。
13	28	杯	13.1 - - 3.4	口端部の1/ 2欠損。	体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反する。 器高が低く偏平な形態である。内面から口縁部外 面にかけては横方向にへラ磨きで仕上げ、体部外 面は横方向にへラ削りする。	砂粒を含む。	あまい。	黒褐色、一部 暗褐色。内外 面黒色処理。
14	4-A	杯	12.4 - - 3.9	底部の一部 欠損。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向のへ ラ磨きで仕上げ、体部外面から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	あまい。	黑褐色。内外 面黑色処理。
15	11	杯	11.8 - - 4.6	く一部を欠	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。外面底部以外はヘラ磨きで仕上げる。底部 には金属を使用したような細い溝状の擦痕がある。	砂粒を含む。	普通。	暗褐色。内面 黒色処理。
16	32	杯	11.2 - - 3.8	口縁部の1/ 4欠損。	丸底で体部外面上位に明瞭な稜を作り、口縁部は 内傾する。内面から口縁部外面にかけては横方向 のヘラ磨きで仕上げるが単位は不明瞭である。	砂粒を含む。	良好。よく 焼き締って いる。	
17	14,31	杯	11.1 - - 3.3	口縁部の一 部欠損。	丸底で体部外面上位に明瞭な稜を作り、口縁部は 内傾する。内面から口縁部外面にかけては横方向 のヘラ磨きで仕上げるが単位は不明瞭である。外 面はヘラ削りする。		あまい。	黒褐色。内外 面黒色処理。
18	22	高杯	- - 12.7 3.8	脚部。	ハの字状に開く脚部で、裾部は上に反る。内外面 はヘラ削りし、脚裾部は横ナデする。	砂粒を含む。	良好。	内面黒褐色、 外面赤褐色。 外面赤色塗彩。
19	12	鉢	20.3 19.9 - 7.9	く一部を欠	丸底で外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反する。 内面から口縁部外面にかけてはヘラ磨きし、胴部 外面は横方向にヘラ削りする。		良好。	内面橙色、外 面暗赤褐色。
20	5-C,30	鉢	16.8 16.1 7.0 9.4	く一部を欠	平底で、胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅 かに外反する。胴部中位に把手がつく。内面はへ ラ磨きし、外面はヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	内面黑褐色 (黑色処理)。 外面暗褐色。
21	15, 26	鉢	16.2 15.6 6.6 8.9	口縁部1/4 欠損。	平底で、胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅 かに外反する。口縁部は横ナデし、内面はなでて いる。外面はヘラ削りしているが器面が荒れ単位 は不明瞭である。		あまい。火 熱を受ける。	
22	3, 7	鉢	17.7 - 7.1 6.7	口端部欠損。	平底で胴部は外方に大きく開いて立ち上がる。口 縁部は横ナデし、内面下半部と外面はヘラ削りす る。外面に粘土紐接合痕が残る。	砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。
23	10	鉢	12.6 14.9 7.4 11.9	口端部の一部を欠損。	胴中位より上に最大径がある。口縁部は外反する。 口縁部は横ナデし、内面はなでている。ナデが強 い部分は浅く窪んでいる。胴部外面と底部はヘラ 削り後なでる。		良好。	内外面赤橙色。
24	8	鉢	15.8 18.5 7.3 17.3	完形。	胴中位より上に最大径がある。口縁部は外反する。 口縁部は横ナデし、内面は横方向になでる。外面 は縦方向にヘラ削り後、下半部はさらに横方向に ヘラ削りする。	砂粒を多量	良好。	暗赤褐色。
25	9	甕	16.0 23.5 8.1 26.5	口縁部の1/ 4欠損。	長胴形で最大径は胴中位にある。口縁部は横ナデ する。内面は横方向になでており、工具痕・粘土 紐痕が所々にある。外面は縦方向にヘラ削り後、 下半部はさらに横方向に削る。		良好。火熱 を受ける。	橙色。
26	7, 22, 23	甕	17.5 23.9 21.4 [22.9]	胴上半部の 4/5周。	長胴形で最大径は胴中位にある。口縁部は横ナデ し、内面はなでる。外面は縦方向にヘラ削りし、 下半部はさらに斜横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	暗赤褐色。

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
27	15, 26	甕	·	- (28.6) - [15.6]		内面は横方向になでており、外面は縦方向のヘラ 削り後軽くなでている。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	暗赤褐色。
28	34	甕	•	- 6.2 5.7	底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	内面赤褐色、 外面暗褐色。
29	13, 14	甕		- 8.1 2.7	底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	赤褐色。
30	1	甑		25.1 21.1 9.1 24.8		底部から外傾しながら立ち上がり、口縁部は大き く外反する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。 外面は縦方向にヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	暗褐色、一部赤褐色。

竪穴住居005(第57・58図、図版23・33・34・35)

揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	2, 22	杯	(12.8) - - [3.4]	体部の1/4 周。	体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は強く外反する。内面から口縁部外面にかけては横方向にヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りしている。		良好。	暗赤褐色。内 外面黑色処理。
2	27	杯	(13.8) - - [3.7]	体部の1/5 周。	体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反する。 内面から口縁部外面にかけては横方向にヘラ磨き する。体部外面はヘラ削りしている。		普通。	黑褐色。内外 面黑色処理、 遺存良好。
3	18	杯	13.2 - - 4.2		丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向にへ ラ磨きする。体部外面はヘラ削りしている。		普通。	暗赤褐色。内 外面黑色処理、 遺存良好。
4	5	杯	13.5 - - 3.4		丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向にへ ラ磨きする。体部外面はヘラ削りしている。		良好。	黑褐色。内外 面黑色処理、 遺存良好。
5	2, 5, 21	杯	13.7 - - 3.5	口縁部の3/ 5欠損。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外面にかけては横方向にへ ラ磨きする。体部外面はヘラ削りしている。	砂粒を含む。	普通。	黑褐色。内外 面黑色処理、 遺存良好。
6	5	杯	(13.2) - - [3.3]	体部の1/5 周。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は垂直 に立ち上がる。内面から口縁部外面にかけては横 方向にヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りしてい る。器面が荒れる。	に含む。	あまい。	黑褐色。内外 面黑色処理、 遺存良好。
7	6	杯	11.7 - - 3.8	く一部欠損、	丸底で体部外面上位に稜を作り、口縁部は外反する。内面と外面体部中位は横方向にへう磨きする。 外面底部付近はヘラ削りする。丁寧な作りで全体 に光沢をもつ。	に含む。	良好。	橙色。内外面 を赤色塗彩。
8	20	鉢	9.7 11.0 5.5 6.8		平底で胴部は内彎して立ち上がり、上位に稜を作って口縁部は強く外反する。内面から口縁部外面はへう磨きするが器面が荒れている。胴部外面は ヘラ削りしている。	砂粒を多量	良好。	橙色。内外面 を赤色塗彩。
9	15	鉢		口縁部の1/ 2欠損。	平底で胴部は内彎して立ち上がり、上位に稜を作る。口縁部は内傾する。内面から口縁部外面はへ ラ磨きする。工具痕が残る。胴部外面はヘラ削り し軽くなでている。	1	良好。	黑褐色。内外 面黑色処理、 遺存良好。
10	16	鉢	14.0 14.4 7.0 8.7	口縁部の一 部欠損。	平底で胴部は内戦して立ち上がり、緩やかな稜を作る。口縁部はまっすぐ立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、工具痕が残る。胴部外面はヘラ削りし軽く磨く。	む。	良好。	内面黑褐色、 外面暗赤褐色。 内外面黑色処理。

			,					笠八生店000
揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
11	24, 25, 26	鉢	14.7 - 6.2 10.6	口縁部の一 部欠損。	平底で胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反 する。内面は器面が荒れ、調整は不明瞭である。 外面はヘラ削りする。	細砂粒を含む。	良好。火熱を受ける。	内面黑褐色 (黒色処理)。 外面暗赤褐色。
12	9	鉢	15.1 15.3 6.4 17.8	胴部の一部 欠損。	平底で胴部は内端して立ち上がり、口縁部は強く 外反する。口縁部は横ナデする。内面は横方向に なで、工具痕が残る。外面はヘラ削りする。	砂粒を含む	,良好。	橙色。一部黒 褐色。
13	23	小型土器	- - -	底部の一部。	内面はなでている。底部外面に木葉痕がある。	細砂粒を含む。	普通。	橙色。
14	17,29,一 括	甕	16.0 19.8 5.7 29.4	5と胴部の	長胴形で胴部中位に最大径がある。口縁部は横ナデ、内面は横方向になでており工具痕が残る。外面はヘラ削り後なでる。火熱により内面は荒れ、外面は付着物が多い。	砂粒を含む	良好。火熱を受ける。	暗赤褐色。口 縁部外面に多 量に煤が付着 する。
15	19	甕	15.7 18.8 5.3 28.1	胴部の一部 を欠損。	長胴形で胴部中位に最大径がある。口縁部は横ナ デ、内面は横方向になでており、外面は上から下 にヘラ削りしている。	砂粒を含む	良好。火熱を受ける。	暗赤褐色。
16	13, 14, 19	甕			長胴形で最大径は中位にある。口縁部は横ナデし、 内面はなでる。外面は縦方向にヘラ削りする。	砂粒を多動に含む。	良好。火熱を受ける。	暗赤褐色、下 半部は火熱の 影響で黒褐色 に変色する。
17	1, 21, 22	甕	18.6 20.1 — [20.2]		長胴形で最大径は中位にある。口縁部は横ナデし、 内面はなでる。外面は縦方向にヘラ削りする。	砂粒を含む	,良好。	暗赤褐色。
18	12, 22	甕	(16.0) - [12.4]		内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を多動に含む。	t あまい。	暗赤褐色。
19	4, 22	甕	- 23.3 7.4 [17.2]		内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。	橙色、一部火 熱により暗赤 褐色に変色す る。
20	7, 10, 21, 23	甕			小さな底部から胴部は大きく膨らみ、最大径は中 位より上にある。火熱による器面の荒れが著しく 調整は不明瞭である。		を受ける。	黄橙色。

竪穴住居006 (第59・60図、図版24・36・37)

<u> </u>	, <u>1</u>	• (/	1300	00,2	J. M/W24	30 31)						
挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土	焼	成	色	調
1	17	杯		14.4 - - 4.4	完形。	丸底で弧状に開いて立ち上がり、口端部は厚くなる。口縁部は歪んでいる。内面はヘラ磨きし、外面はヘラ削りする。器壁が厚くボッテリとした作りで雑な成形である。	に含		普通。		黒褐色、 暗赤褐色 外面黒色	色。内
2	5	杯		(12.2) - - 3.9	体部上半部	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は僅かに外反して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。		を含む。	普通。		黒褐色、 面黒色如	
3	23, 27	杯		_ _	4周と体部	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は外反 して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけては ヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。	砂粒	と 2 ~ の小石			黒褐色。 面黒色如 遺存良如	0.理、
4	22	杯		12.5 - - 3.7	く一部を欠	丸底で体部外面下位に明瞭な稜を作り、口縁部は 外反して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけ てはヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。		を多量			内面明》 (黒色処 外面赤 色塗彩)	理)。 色(赤

挿図	*******	пп тл	34 H ()	·惠士 🕳	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
番号	遺物番号	器形	法量(cm)					
5	9, 20, 22	杯	13.1 - - 4.0	口縁部のご く一部を欠 損。		細砂粒を含む。	良好。	橙色、一部黒 褐色。内外面 黒色処理。
6	19	杯	14.1 - - 4.2	口縁部の1/ 5欠損。	丸底で体部外面に稜を作り、口縁部は大きく開い て立ち上がる。内外面ともヘラ磨きで仕上げる。	細砂粒を含 む。	良好。	明赤褐色、一 部黒褐色。内 外面黒色処理。
7	5	杯	12.8 - - 4.3	口縁部の1/ 5欠損。	丸底で体部外面上位に明瞭な稜を作り、口縁部は 僅かに外反して立ち上がる。内面から口縁部外面 にかけてはヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りす る。	砂粒を含む。	良好。	黑褐色、内外 面黑色処理。
8	4	杯	11.2 - - 4.2	口縁部の1/ 5欠損。	丸底で体部外面上位に稜を作る。口縁部は内傾し て立ち上がる。内外面ともヘラ磨きで仕上げる。	細砂粒を含 む。	良好。	明赤褐色、一部黒褐色。内 部黒褐色。内 外面黒色処理。
9	13, 26	杯	13.5 - - 4.4	口縁部から 体部の1/3 欠損。	丸底で体部外面上位に稜を作る。口縁部は内傾し て立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはへ ラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。		普通。	暗赤褐色、一部赤褐色。内 部赤褐色。内外面黑色処理。
10	18	鉢	11.6 12.8 5.8 8.3	口縁部の一 部を欠損す る。	平底で胴部は内彎する。口縁部は僅かに外反して 立ち上がり、外面に緩やかな稜を作る。口縁は水 平ではない。内面はヘラ磨きし、口縁部は横ナデ する。外面はヘラ削りする。		良好。良く 焼き締まっ ている。	内面黑褐色 (黑色処理)。 外面明赤褐色。
11	21, 29	鉢	15.7 - - [9.2]	口縁部から 胴上半部の 1/3周。		砂粒を含む。	良好。	橙色。
12	24	鉢	12.4 14.7 6.5 12.4	口縁部1/3 欠損。	球形の胴部をもち最大径は中位にある。口縁部は 短く外反する。口縁部は横ナデし内面はさらにへ ラ磨きする。内面はナデ、外面は横方向に丁寧に ヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。良く 焼き締まっ ている。	橙色、底部外 面と口縁部か ら胴部の一部 に黒斑。
13	16	甕	18.3 21.0 6.0 30.5	口端部を僅 かに欠く、 ほぼ完形。	長嗣形で最大径は胴部中位にある。口縁部は強く 外反する。口縁部は横ナデし、内面はナデ、外面 はヘラ削りする。底部中央に支脚痕と思われる火 を受けない部分がある。		良好。火熱 を受ける。	内面橙色。外面上半部橙色、 下半部暗赤 褐色。
14	10~12, 14, 15, 20 , 25~27	甕	17.7 22.7 7.4 31.1	口縁部の一 部と胴部か ら底部の1/ 3欠損。	長嗣形で最大径は胴部中位にある。口縁部は強く 外反する。口縁部は横ナデし、内面はナデ、外面 はヘラ削りしている。		良好。	暗赤褐色。
15	1, 26	甕	20.5 21.9 7.7 27.8		長嗣形で最大径は胴部中位にある。口縁部は強く 外反する。口縁部は横ナデし、内面はナデ、外面 はヘラ削りしている。		良好。	明赤褐色、外 面下半部暗赤 褐色。外面に 黒斑がある。
16	2	甑	26.7 22.8 9.2 22.8	口端部を欠 損する。	底部から大きくハの字状に開いて立ち上がり、口縁部はさらに外反する。口縁部横ナデ、内面はヘラ削り後上半部は軽く磨き、下半部はなでる。外面はヘラ削りする。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。小 石を含む。	良好。	橙色、黒斑が ある。

竪穴住居007 (第60図、図版38)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土	焼	成	色	調
1	2	杯		_	く一部を欠 損、ほぼ完	丸底で口縁部と体部の境に稜をもたず弧状に開い て立ち上がる。内面はヘラ磨きし、外面はヘラ削 りする。外面に粘土紐痕が残る。		2。小			橙色。	
2	12	杯		-	く一部を欠 損、ほぼ完	丸底で口縁部と体部の境に稜をもたず弧状に開い て立ち上がる。内面はヘラ磨きし、外面もヘラ削 り後磨いて仕上げる。一部粘土紐痕が残るが、丁 寧に調整し器面は光沢をもつ。	tr.	立を含	良好。		黒褐色、 橙色。「 黒色処理	内外面

_											32/(1	土店007
揷図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 _	±	焼	成	色	調
3	9, 008-22	杯		(11.4) - - [3.3]	3/4欠損。	丸底で、口縁部が僅かに内彎して立ち上がる。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削り している。			普通。		内面暗 (黒色如 外面橙	理)、
4	9	杯		(14.7) - - [4.5]	3/4欠損。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は僅か に外反する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。 外面はヘラ削りする。						
5	9	杯		(12.8) - - [2.7]	3/4欠損。	丸底で体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は僅かに外反する。内面から口縁部外面にかけてヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。			あまい	,0	黒褐色、 の一部 内外面。 理。	橙色。
6	1	杯		(13.6) - - 3.9	口縁部2/3 欠損。	丸底で体部外面に稜を作り、口縁部は外傾して立 ち上がる。内面と口縁部外面はヘラ磨きし、外面 は横方向にヘラ削りする。			良好。		内面暗(無色如 外面暗。	理)。
7	5,7	鉢		- (16.0) 6.4 [9.0]	部の2/3欠	平底で胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部と 胴部の境が不明瞭である。口縁部は横ナデし、内 面はなでる。胴部外面はヘラ削りしている。	砂粒を含	. T	良好。		橙色。	
8	4, 7, 9, 13 , 14	鉢	·	15.2 16.0 5.8 15.1	縁部から胴 部の1/4欠	最大径が胴中位にある球形の胴部である。口縁部 は横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削りして いる。内外面とも火熱による器面の荒れが著しい。		を含			暗赤褐 部黒褐 熱によ する。	色。火
9	6, 8, 9	甕		- 20.1 6.2 [24.8]	周と底部が	長胴形で最大径は中位よりやや下に位置する。内面はなでており、外面は縦方向にヘラ削りする。 火熱による器面の荒れが著しい。			熱によ	りか		标褐色、

竪穴住居008(第62・63図、図版24・38・39)

_								
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	11, 12, 20 , 22	杯	(12.7) - - - [3.5]		外面に稜を作り、□縁部は直立する。内面から口 縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。 □端部が摩耗する。		あまい。	橙色、内面底 部は黒褐色。 内外面赤色塗 彩。
2	21	杯	(13.7) - - 4.8	1/2周。	外面に稜を作り、口縁部は外方へ開く。口縁部は 横ナデ、内面はナデ、体部外面はヘラ削りする。		良好。	橙色、内面の 底部以外は赤 色塗彩。
3	7	小型土器	2.1 4.6 2.4 4.8	完形。	口縁部が強く内傾し、外面に稜を作る。内外面を なでている。	砂粒を含む。	普通。	橙色。外面赤 色塗彩。
4	21, 22	鉢	(10.6) - - [4.5]	口縁部1/2 周。	胴部は僅かに内彎しながら立ち上がる。口縁部は 横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削りしてい る。		普通。	暗赤褐色。
5	11, 12, 20 , 22	鉢	23.7 - - 8.6		丸底で外面上位に稜を作る。内面と口縁部外面は ヘラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。内面の黒 色処理の遺存は良好。外面も黒色処理していた可 能性がある。		普通。	内面黒褐色 (黒色処理)。 外面暗褐色。
6	10,20	甕	- (17.0) - [16.6]	胴部1/4。	球形の胴部で胴部最大径は中位にある。口縁部横 ナデ、内面ナデ。外面はヘラ削り後なでている。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	
7	1	甕	16.4 22.2 6.5 27.8	く一部を欠 損、ほぼ完	長胴形で、最大径は胴部中位にある。口縁部は横 ナデし、内面は斜方向になでる。外面はヘラ削り しているが、火熱による付着物多く、単位は不明 瞭である。		良好。火熱 を受ける。	

揷図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	±	焼	成	色	調
8	3	甕		15.4 19.9 5.8 27.2	完形。	長嗣形で、最大径は胴部中位にある。口縁部は横 ナデする。内面は横方向になでており工具痕、粘 土紐痕が残る。外面は縦方向にヘラ削りした後な でる。火熱により器面が荒れる。	に含む		良好。を受け		内面暗 外面橙 面に黒 る。	色、外
9	2	甕		15.8 19.9 5.5 28.5	完形。	長胴形で、最大径は胴部中位にある。口縁部は横 ナデする。内面は横方向になでている。外面は縦 方向にヘラ削りする。			良好。を受け		内面暗 外面橙 が付着 黒褐色。	色、煤 し一部
10	4	甑		26.1 - 9.5 24.7	完形。	底部から外方へ違ハの字状に広がって立ち上がり、 □縁部は外反する。□縁部は横ナデし、内面はな でる。外面はヘラ削りする。	砂粒を	を含む。	良好、 焼き締 ている	まっ	橙色。	
11	11, 12	甕		(23.8) - - [15.8]	4と胴部の	□縁部は短く外反する。□縁部は横ナデし、内面 はなでている。外面胴部もヘラ削り後なでて仕上 げる。					内面黄 外面橙	

竪穴住居009 (第63図、図版40)

揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	. 色 調
1	9,6	杯	(11.2) - - - [3.3]	1/3遺存。	体部外面に稜を作り口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。内面はヘラ磨きする。口縁部外面の調整は不明瞭。体部外面は雑にヘラ削りしている。器 壁が厚い。	小石を若干	あまい。	橙色、内外面 赤色塗彩。
2	11	杯	(13.3) - - 3.0	1/4遺存。	体部外面に稜を作り□縁部は僅かに外傾して立ち 上がる。内面から□縁部外面にかけてはヘラ磨き する。体部外面はヘラ削りしている。		良好。	橙色、内外面 赤色塗彩。
3	21	杯	(11.6) - - [3.8]	1/5遺存。	体部外面に稜を作り、口縁部は短く内傾する。内 面から口縁部外面にかけてはへう磨きする。体部 外面はヘラ削りしている。ヘラ磨きは丁寧で器面 に光沢をもつ。	砂粒を含む。	良好。	橙色、内外面 赤色塗彩。
4	1, 12, 19	高杯	(13.2) - 12.5 9.6	部と口縁部	X字形で、杯部・脚部とも外面に稜を作る。杯部 内面はヘラ磨きし、口縁部と脚裾部は横ナデする。 脚柱部外面はヘラ削りし、脚柱部内面はなでてい る。	砂粒を含む。	良好。	黄橙色、一部 黒褐色。杯部 内面は黒色処 理。
5	15	鉢	12.3 - - 7.5		丸底で外面に稜を作り、□縁部は外反する。□縁 部は横ナデし、内面はヘラ磨きする。体部外面は ヘラ削り後磨いているようであるが不明瞭。ヘラ 磨きは丁寧である。			明褐色。内面 は赤色塗彩の 可能性有り。
6	8, 17	鉢	- (7.9) [5.3]	の1/2と 底 部が遺存。	底部側縁部が横方向に突出する。体部内面はなで ているが底部は調整していない。外面は縦方向に ヘラ削りする。		あまい。	暗褐色。
7	4	鉢			底部側縁部が横方向に突出する。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は横 ナデし、内面はなでる。外面は上から下にヘラ削 りする。火熱で器面が荒れる。	砂粒を多量		
8	21	小型土器	(3.1) - 2.8 [2.6]	1/2遺存。	平底で体部はやや内傾して立ち上がる。内外面と も未調整で、内面には指頭痕が残る。	砂粒を少量 含む。	普通。	橙色。
9	5	甕	20.5 24.9 - [13.3]	口縁部の一 部と胴下半 部を欠損。	口縁部は横ナデし、内面はなでている。外面はへ ラ削りしているが器面が荒れ、単位は不明瞭であ る。粘土紐接合痕が残る。		良好。火熱 を受ける。	橙色、一部暗 褐色。
10	4, 6, 21	甕		ら胴下半部 の1/3を欠	長胴形で、最大径は胴部中位にある。□縁部を横 ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削りするが火 熱により器面が荒れ、単位は不明瞭である。			

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
11	3	甕		- 8.4 [2.8]	底部。	内面はナデ、外面はヘラ削りしている。	砂粒を多量 に含む。	良好。	赤褐色。
12	2	甕		- - 7.5 [7.0]		内面はなでており、外面はヘラ削りする。底部外 面はヘラ削り後磨いている。内面の器面は荒れる。		あまい。	内面暗褐色。 外面赤褐色。

竪穴住居011 (第64図、図版40)

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土	焼	成	色	調
	13	杯		12.7 - - 3.9	口縁部の一 部欠損。	丸底で外方に開いて立ち上がり、口縁端部が僅か に直立する。内面はヘラ磨きする。火熱による器 面の荒れが著しく、口端部は摩耗し、外面の器表 面はほとんど剝落する。	t.	左を含	普通。を受け		内面橙色面黑褐色	
2	8, 10	杯		(13.2) - - [3.0]	1/4周。	丸底で外面に明瞭な稜を作り、口縁部は直立する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きする。外面はヘラ 削りする。		を含	良好。		暗褐色、 面黒色如	
3	12	杯		12.8 - - 3.8	損する。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外方に広がって 立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはヘラ 磨きし、外面体部はヘラ削りする。外面に粘土紐 痕が残る。	む。	を含	普通。		明赤褐色	, EF
4	1, 3, 8	杯		13.0 - - 3.8	部は著しく	丸底で外面上位に明瞭な稜を作る。口縁部は短く 内傾する。内面から口縁部外面にかけてはヘラ磨 きし、体部外面はヘラ削りする。内面は器面に光 沢をもつ。		含む。	良好。		明赤褐色 外面赤色 黒斑がる	塗彩。
5	5	杯		- - - [2.6]	体部から底 部の1/3が	外面上位に明瞭な稜を作る。口縁部は短く内傾したと思われる。内面から口縁部外面にかけてはへう磨きし、体部外面はヘラ削りする。内面は器面が荒れ剝落する。		含む。	普通。		内面赤衫 外面暗衫 内外面原理。	曷色。
6	8	甕		(14.0) - - [6.5]	口縁部1/4 周。	口縁部は緩く外反する。口縁部は横ナデし、内面 はなでている。	砂粒、 を含む		良好。		暗赤褐色	4 .
7	10, 11	甕		- (8.4) [3.3]	底部の1/2。	内面はなでており、外面はヘラ削りしている。	細砂粒量に含		あまい 熱を受		黒褐色。	

竪穴住居012 (第64・65図、図版40・41・42)

			7	1 2///		1					
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土	焼	成	色	調
1	14, 36, 49	杯	13.5 - - [4.8]	底部の1/3 周を欠損。	丸底で外面に稜があり、口縁部は僅かに内傾して 立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、 外面はヘラ削りする。	砂粒を	含む。	良好。		暗褐色、 面黒色如	
2	36	杯	(14.7) - - [3.3]	体部の1/4 周。	丸底で外面に稜があり、口縁部は僅かに内傾して 立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、 外面はヘラ削りする。	砂粒をに含む		普通。		橙色。	
3	49	杯	(13.8) - - - [4.0]	体部の1/4 周。	丸底で外面に稜があり、□縁部は外反して立ち上 がる。内面から□縁部外面はヘラ磨きし、外面は ヘラ削りする。		,	良好。		内面、黑 外面暗衫 内外面影 理。遺存	曷色。 其色処
4	28, 34	杯	14.4 - - 3.5	口縁部の1/ 4周欠損。	丸底で外面に稜があり、口縁部は直立して立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、外面はヘラ削りする。			良好。		暗褐色、 面黑色如 遺存良如	几理。

							,——	整八庄店012
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
5	39	杯	(14.8) - - [4.8]	口縁部から 体部の1/3 周。	丸底で外面に稜があり、口縁部は僅かに内傾して 立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、 外面はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色、内外 面黒色処理。
6	16, 35	杯	(15.5) - - 4.0		丸底で外面に稜があり、口縁部は内傾して立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、外面はヘラ削りする。		良好。	にぶい橙色。 内外面黒色処 理。
7	24	杯	(14.6) - - [3.0]	口縁部から 体部の1/4 周。	丸底で外面に稜があり、口縁部は内傾して立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、外面はヘラ削りする。		良好。	内面にぶい橙 色、外面暗褐 色。内外面黒 色処理。
8	40	高杯	(14.6) - - [3.3]	杯部1/2周。	浅い杯部で、外面に稜を作り、口縁部は外反する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削りする。内面の磨きは丁寧で器面に光沢があ る。	砂粒を含む。	良好。	内面黒色処理、 遺存良好。外 面には、褐色。
9	22, 49	高杯	- - - [10.3]	杯部と脚裾 部を欠損。	柱状の脚部で、脚裾部は大きく横に広がる。脚裾 部は横ナデし、内面は横方向、外面は縦にヘラ削 りする。内面にシボリ目が残る。		あまい。	内面暗褐色。 外面暗赤褐色。 赤色塗彩。
10	6, 10, 11, 23, 43	鉢	20.5 - - 8.5	口縁部から 胴部の1/4 欠損。	丸底で外面に明瞭な稜を作り、口縁部は内傾する。 内面から口縁部外面をヘラ磨きする。 胴部外面も ヘラ削り後磨いている。		良好。	にぶい黄橙色、 一部黒褐色。 内外面黒色処 理。
11	9, 15	甕	(18.0) - - [6.5]	口縁部から 肩部の1/4 周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は縦方向 のヘラ削りをする。	砂粒を多量に含む。	良好。	内面明黄褐色、 外面暗褐色。
. 12	5, 49	甕	(16.4) - - [6.5]	肩部の1/6 周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は縦方向 のヘラ削りをする。	砂粒を多量に含む。	良好。	内面明黄褐色、 外面暗褐色。
13	8	甕	(17.6) - - [4.5]	口縁部の1/ 4周。	口縁部を横ナデする。	砂粒・小石 を含む。	良好。	内面明黄褐色、 外面橙色。
14	15, 17, 19 , 35, 45, 49	甕	28.5 — [14.5]		肩部が張っているため球形の胴部になると思われる。内面はナデ、外面は横方向にヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。	明黄褐色、外面の一部橙色。
15	20, 24, 26 , 28, 29, 30, 33, 48 , 49	蓌	(18.8) (24.3) - [26.8]	1/2周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削 りするが、下半部には付着物が多い。	細砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	褐色、一部黒 褐色。外面に 黒斑がある。
16	35	甕	9.4 [13.0]	胴下半部の 1/5と底部。	内面はナデ、外面はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。火熱 を受ける。	暗褐色。
17	18, 20, 21 , 31, 32, 49	甑	- (9.0) [16.0]	胴下半部の 1/3周。	内面はなでた後磨いており、下端部は横方向にへ ラ削りする。外面は縦方向にヘラ削りする。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	良好。	内面橙色、外 面赤褐色。外 面に黒斑があ る。
18	3, 4, 11, 12, 21, 24 , 45, 49	甑	(25.4) - (7.2) 20.9	1/3遺存。	内彎しながら大きく外方に開いて立ち上がり、口縁部は強く外反する。内面はナデ、外面はヘラ削りする。		良好。	暗赤褐色、一 部黒褐色。

竪穴住居015 (第66・67・68図、図版25・41・42・43)

至八	止店 013	00 ER)	- 07 -		版25・41・42・43)			
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
	62, 63, 65 , 66	須恵器杯 蓋	(11.6) - -	1/4周。	天井部は回転ヘラ削りする。ロクロ右回転。	白色粒子を 少量含む。	良好。	青灰色。
	49, 50, 52 , 62, 64	須恵器杯	[3.9] 10.3 —	底部の一部を欠損。	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。 底部は回転ヘラ削りする。ロクロ右回転。口端部 が摩耗する。	微細な砂粒 を含む。	普通。	青灰色。
3	62	須恵器杯 身	4.0 (10.0) -	1/3周。	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。 底部は回転へう削りする。ロクロ右回転。	微細な砂粒 を含む。小	良好。	青灰色。
		er ete on la	[4.0]			石を少量含む。	± /	*
4	63	須恵器杯 身	(10.3) - - [3.0]	1/4周。	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。 底部は回転へラ削りする。ロクロ右回転。	白色粒子を 少量含む。	良好、よく !焼き締まっ ている。	青灰色。
5	67	須恵器杯 身	(9.8) - - [3.5]	1/5。	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。	白色粒子を含む。	良好。	青灰色。
6	95, 178	杯	(13.5) - - 4.1	1/3。	丸底の底部から外方に開いてそのまま立ち上がる。 内外面とも火熱により細かいひびがはいり調整は 不明である。		普通。火熱 を受ける。	暗赤褐色、一 部黒褐色。
	5, 6, 66, 67	杯	12.8 - - 3.6		体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。内面から口縁部外面はヘラ磨きするが体部外面は米面は器面が摩耗し調整は不明である。		あまい。	橙色。黒色処 理していると 思われるが遺 存悪い。
8	8	杯	(12.0) - - - [4.5]	1/3周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削 りする。口端部は摩耗する。	砂粒を含む。	あまい。	黒褐色。内外 面黒色処理。
9	60	杯	(12.2) - - - [4.6]	1/3周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部はやや内傾する。 内面から口縁部外面にかけてはへラ磨きし、体部 外面はヘラ削りしていると思われるが器面が摩耗 し単位は不明瞭である。	微細な砂粒 を含む。	あまい。	内面にぶい黄 橙色、外面明 黄橙色、内外 面黒色処理。
10	62	杯	(10.7) - - [3.0]	1/5周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部はやや内傾する。 内面はヘラ磨きするが、外面は器面が摩耗し調整 は不明瞭である。	細砂粒を含む。	あまい。	内面黑褐色、 外面暗褐色。 内外面黑色処 理。
11	53, 186	杯	(12.8) - - [4.0]	口縁部から 体部の1/2 周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は直立する。器面 の荒れが著しく調整は不明である。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	黒褐色。内外 面黒色処理。
12	140	杯	(13.4) - - [4.0]	1/3遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きする。体部外面はヘラ 削りするが器面が荒れ単位は不明瞭。		普通。火熱 を受ける。	暗褐色。内外 面黑色処理。
13	63	杯		1/3遺存。	丸底で外面に稜を作り、□縁部は直立する。内面 から□縁部外面はヘラ磨きする。体部外面はヘラ 削りする。器面が荒れ単位は不明瞭である。	砂粒を含む。	普通。火熱を受ける。	黒褐色、内外 面黒色処理。
14	58, 85, 91	杯	13.0 - - 4.1	口端部の1/ 4を欠損。	丸底で外面に僅かに突出する稜を作り、口縁部は 直立する。体部外面はヘラ削りするが、他は器面 の荒れが著しく調整は不明である。火熱により変 色する。	砂粒を多量	普通。火熱を受ける。	口縁部は暗褐 色、底部は褐 色。内外面黒 色処理。
15	32,62	杯	13.3	口縁部の1/ 4を欠損。	丸底で外面に僅かに稜を作り、□縁部は直立する。 内面から□縁部外面はヘラ磨きする。体部外面は ヘラ削りしている。		普通。	黒褐色、内外 面黒色処理。
- 1			3.9	l				

4-0							·	竪穴任居015
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
16	87	杯	12.5 - - 4.3		丸底で外面に稜を作り、口縁部は直立する。火熱 により器面の荒れが著しく調整は不明瞭。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	暗赤褐色。内 外面黒色処理、 遺存が悪い。
17	60, 61, 62 , 65	杯	(13.5) - - - [3.6]	1/3欠損。	丸底で外面に突出する稜を作り、口縁部は直立する。内面から口縁部外面はヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。	細砂粒を含 む。	普通。	橙色、一部黒 褐色。内外面 黒色処理。
18	62	杯	(14.0) - - [3.4]	口縁部から 体部の1/4 周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きする。体部外面はヘラ 削りする。		普通。	暗褐色、内外 面黒色処理。
19	161	杯	(16.0) - - [4.0]	1/4周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外反する。火熱 により器面の荒れが著しく調整は不明である。口 端部は摩耗している。	砂粒を含む。		橙色、一部黒 褐色。内外面 黒色処理、遺 存悪い。
20	3, 63, 98	杯	(15.2) - - [4.7]	1/3周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は僅かに外傾する。 火熱により器表面に細かいひび割れがはいり、一 部は剝落する。調整は不明である。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	黒褐色、黒色 処理。
21	17	杯	(12.8) - - [4.5]	1/4周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は僅かに外傾する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削りする。火熱により器面が著しく荒れる。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	内面橙色、外 面黑褐色。内 外面黑色処理。
22	172	杯	(11.8) - - [2.8]	1/4周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削 りする。口端部は摩耗する。			黒褐色。内外 面黒色処理。
23	24, 26, 27 , 63	杯	14.7 - - 4.1	1/4周欠損。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削 りする。口端部は摩耗する。		普通。	暗褐色。内外 面黑色処理。
24	42, 62, 89	杯	15.2 - - 4.1		丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削 りする。		普通。	黒褐色。内外 面黒色処理。
25	23	杯	(15.4) - - [3.9]	1/5周。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。体部 外面はヘラ削りするが、他の部分は火熱により器 面が荒れ調整が不明。			黒褐色。内外 面黒色処理。
26	44,62	杯	(15.2) - - 3.8	1/2周遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削 りする。		普通。	内面黑褐色、 外面明褐色。 内外面黑色処 理。
27	61,62	杯	(14.6) - - [4.1]		丸底で外面に突出する稜を作り、口縁部は外傾す る。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面 はヘラ削りする。器面は火熱で荒れる。		普通。火熱 で荒れる。	黒褐色。内外 面黒色処理。
28	164	杯	(13.8) - - 3.6	1/3遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は大きく開いて立ち上がる。内面から口縁部外面はヘラ磨きするが体部外面の調整は不明。口端部は摩耗している。		あまい。	暗褐色、内外 面黑色処理。
29	62	杯	(13.8) - - 3.9	1/3遺存。	丸底で体部外面の下位に突出した稜を作り口縁部 は開いて立ち上がる。底部は丸底だが偏平である。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削りする。		普通。	褐色、一部黒 褐色。内外面 黒色処理。
30	41, 61, 91	杯	(13.4)	口縁部の2/ 3欠損。	丸底で体部外面の下位に稜を作り口縁部は直立する。底部は偏平である。内面から口縁部外面はへラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。器面が荒れ		普通。	黒褐色、内外 面黒色処理。

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	整穴任居01
31	122	杯	(15.2) - - [3.1]	1/3周。	丸底で体部外面の下位に稜を作り口縁部は直立する。底部は偏平である。内外面へラ磨きする。	細砂粒を含む。	良好。	黒褐色。内外 面黒色処理。
32	63	杯	+	1/4周。	丸底で外面に稜を作り口縁部は内傾する。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。	砂粒を含む。	普通。	黒褐色。内外 面黒色処理。
33	8, 16, 20, 63, 187, 212	杯	_	1/3周欠損。	丸底で外面に突出した稜を作り口縁部は内傾する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削りする。火熱により器面が荒れ単位は不明瞭。 口端部は摩耗する。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	黒褐色。内外 面黒色処理。
34	40, 91	杯	(12.2) - - 3.9	1/2周。	丸底で外面に稜を作り口縁部は内傾する。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。		普通。	暗褐色、一部 黒褐色。内外 面黒色処理。
35	27, 80, 61	杯	12.6 - - 3.5	口縁部の1/ 4欠損。	丸底で外面に突出した稜を作り口縁部は内傾する。 内外面をヘラ磨きで仕上げていると思われるが器 面が摩耗し不明瞭である。		あまい。	橙色。内外面 を黒色処理す るが遺存が悪 い。
36	67	杯	(13.3) - - [3.3]	1/5遺存。	丸底で外面に稜を作り口縁部は内傾する。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘラ削りする。火熱により器面が荒れ単位は不明瞭。	細砂粒を含 む。	普通。火熱 を受ける。	橙色。
37	29, 62	杯	(12.0) - - 3.2	1/2遺存。	丸底で外面上位に稜を作り口縁部は短く内傾する。 内外面ともヘラ磨きで仕上げる。	砂粒を多量に含む。	普通。	橙色、一部黒 褐色。内外面 黒色処理。
38	86, 137	杯	(11.6) - - [3.7]	1/3欠損。	丸底で外面上位に稜を作り口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削りする。ヘラ磨きの単位は不明瞭。口端部が 欠損するが割れ口は古い。		普通。	内面黑褐色、 外面橙色。内 外面黑色処理。
39	16	小型土器	6.8 6.7 5.0 5.1	完形。	体部は直立し、筒状の形態である。内外面ともな でて仕上げる。	細砂粒を多 量に含む。	良好。	橙色。
40	189	小型土器	5.1 6.0 - 4.0		丸底で口縁部が緩く外反する。火熱により器表面 が細かくひび割れ調整は不明瞭である。	細砂粒を含 む。	普通。火熱 を受ける。	内面橙色、外 面暗褐色。
41	61	小型土器	(5.6) - - 3.1	1/3周遺存。	尖った底部で外方に開いて立ち上がる。火熱により器面が荒れ、調整は不明である。	細砂粒を多 量に含む。	あまい。火 熱を受ける。	内面黒褐色 (黒色処理)。 外面橙色。
42	62	小型土器	- 2.4 - 2.0	1/3周欠損。	尖った底部で内端して立ち上がる。	砂粒を含む。	普通。	内面橙色、外 面暗褐色。
43	18, 57	高杯	- 13.1 11.2 [8.6]	口縁部欠損。	杯部外面には稜がある。脚部はハの字状に開く。 口縁部は横ナデし、杯部内面はなでる。外面はヘ ラ削りし、脚裾部は横ナデする。脚部内面に粘土 紐痕が残る。	砂粒を含む。	あまい。火 熱を受ける。	橙色。
44	191	鉢	9.0 - 4.7 4.7	口縁部から 体部上半部 の1/5欠損。	平底で外面に稜を作り、口縁部は外反する。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	内面黑褐色 (黒色処理)。 外面暗赤褐色 (赤色塗彩)。
45	19,63	鉢	(10.8) - - 5.7		丸底で外面に稜を作り口縁部は緩く外反する。火 熱により器面が著しく荒れ、調整は不明である。	砂粒を多量 に含む。白 色粒子を含 む。	あまい。火 熱を受ける。	明赤褐色。

挿図	遺物番号	器	形 法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	竪穴住居018
-								
46	47, 48, 62		9.6 - 6.4 7.1	口縁部1/3 と胴部の一 部を欠損。	平底で口縁部は内傾する。口縁部は横ナデし内面 はなでる。体部外面はヘラ削りする。	砂粒を多重 に含む。	普 .	黒褐色、一部 暗褐色。内外 面黒色処理。
47	121	鉢	12.5 12.8 6.0 12.3	口端部の1/ 2欠損。	平底で胴部最大径は中位にある。口縁部は外反する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。胴部外面はヘラ削り後軽くなでている。	砂粒を含む。	良好。よく 焼き締まっ ている。	明黄橙色。黒 斑がある。
48	33, 62, 91	鉢	(23.0) - - [6.9]	1/3遺存。	外面に稜を作り、口縁部は直立する。内面から口 縁部外面はヘラ磨きし、外面胴部はヘラ削りする。		普通。	黒褐色。内外 面黒色処理、 内面の遺存良 好。
49	55	甕	(11.6) - - [5.0]	1/6周。	□縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は細かく ひび割れし、調整は不明である。	砂粒を含む。	普通。	橙色。
50	129, 167, 196	甕	12.7 15.6 6.7 18.8	胴下半部の 一部欠損。	最大径は胴中位よりやや下にある。火熱により細 かいひび割れが入り、器面の荒れが著しい。調整 は不明である。			暗赤褐色。火 熱により変色 する。
51	62	甕	(11.6) - - [5.6]	口縁部の1/ 2周と胴上 半部の一部 遺存。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削 りする。	細砂粒を多量に含む。	良好。	暗褐色。
52	4	甕	14.7 - - [5.8]	胴上半部。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。火熱により器 面が荒れ、外面の調整は不明である。	砂粒を多量に含む。	普通。火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外面橙色。一 部煤が付着。
53	62, 195	甕	(14.2) - - - [11.0]	胴上半部1/ 3周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。火熱により器 面が荒れ、一部器表面が剝離する。外面の調整は 不明である。			橙色。
54	103, 124	甕	(17.4) - - [5.7]	胴上半部1/ 5周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削 りする。火熱により器面が荒れる。		あまい。火 熱を受ける。	
55	30	甕	(19.2) - - [10.4]	胴上半部1/ 4周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は火熱で 器面が荒れ、調整は不明。	粒子の粗い 砂粒を含む。		暗褐色、一部 橙色。
	41,62,63 ,66,79,9 3,97,102 ~108他	甕			内面はなでており、外面はヘラ削りする。火熱に より器面が荒れ調整は不明瞭である。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。		橙色。外面に 黒斑がある。
	54, 55, 61 , 144, 150		17.7 20.5 6.2 25.4		長胴形で最大径は胴中位にある。口縁部は短く外 反する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面 はヘラ削りする。火熱により器面が著しく荒れる。	砂粒を多量		橙色。外面一 部暗褐色。黒 斑がある。
58	61, 62, 63	甕	- (7.4) [5.1]	胴下半部か ら底部の1/ 4周。	火熱により器面が荒れ、調整は不明である。	砂粒を含む。	あまい。火 熱を受ける。	内面暗褐色、 外面橙色。
59	62	甕	- - 7.6 [3.6]	胴下半部1/ 4周と底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外面黒褐色。
60	102	甕	- 9.8 [3.6]	底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。器面が 荒れている。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	橙色。黒斑が ある。

挿図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
61	1, 21, 115 , 120, 122 , 124, 133 , 183			- (28.8) (9.0) [25.2]		最大径は中位よりやや上にある。内面はなでてお り、外面はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。		橙色。一部煤 が付着。
62	15	甕		$ \begin{array}{c} - \\ 7.0 \\ [2.1] \end{array} $	底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。内面の 一部が剝離する。	砂粒を多量に含む。	あまい。火 熱を受ける。	橙色。
63	63, 66	甕		- (6.8) [2.6]	底部の1/2。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。火熱に より器面が荒れヘラ削りの単位は不明瞭である。			内面黑褐色、 外面暗赤褐色。
64	2	甕		- 7.0 [1.6]	底部の2/3。	火熱により器面が荒れ調整は不明瞭。			内面黒褐色、 外面黄橙色。
65	173	甕	and a	- 6.4 [2.9]	底部の2/3。	火熱により器面が荒れ調整は不明瞭。	砂粒を多量に含む。		内面黑褐色、 外面暗赤褐色。
66	63	甕		- (6.1) [2.4]	胴下半部の 1/2と底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。	褐色、外面の 一部黒褐色。
67	62,72	甕		- (6.1) [4.2]	胴下半部の 1/4と底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	細砂粒を含 む。	普通。	黒褐色、外面 鈍い橙色。
68	60, 62, 63	甕		- (5.6) [3.6]	胴下半部の 1/3と底部。	器面が荒れ、調整は不明瞭。			灰褐色。底部 外面は黒褐色。

竪穴住居017 (第69・70図、図版25・44・45・46)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	56	須恵器高 杯	(16.8) - - [5.3]	杯部1/3。	外面に稜を作り、口縁部はそのまま開いて立ち上がる。口端部は横方向につままれる。内外面ともロクロを利用したナデで仕上げる。			青灰色。
2	2	杯	(13.0) - - 4.8	1/8周。	丸底で体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は 直立する。球を半載したような形態である。内面 はヘラ磨きしているが、外面は器面が荒れ調整が 不明瞭である。	む。	あまい。	赤褐色、内外 面赤色塗彩。
3	1,2	杯	(12.2) - - 5.3	部と体部か ら底部の2/	丸底で器高があり、体部は内彎しながら立ち上が る。口縁部は緩く外反する。器面が荒れ、調整は 不明瞭である。		あまい。	明橙色、一部 暗赤褐色、内 外面赤色塗彩。
4	4, 17	杯	12.4 - - [4.6]		丸底で体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は 直立する。器壁が厚くボッテリした作りである。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、外面はヘラ削 りをする。内面は光沢をもつ。	量に含む。	普通。	橙色、一部黒褐色。内面黒色処理。
5	4	杯	(13.2) - - [4.3]	1/3周遺存。	丸底で口縁部は僅かに直立して立ち上がる。内面 はへう磨きする。外面の調整は器面が荒れ不明瞭 であるがヘラ磨きしていると思われる。		あまい。	暗赤褐色、一 部黒褐色。内 外面黒色処理。
6	1,66	杯	13.6 - - [4.1]	口端部は摩	丸底で口縁部は僅かに直立して立ち上がる。内面 はヘラ磨き、外面はヘラ削りしていると思われる が器面が摩耗し単位は不明瞭である。口端部は摩 耗する。	む。	あまい。	暗赤褐色。内 外面黑色処理。

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
7	1,21	杯	(12.1) - - [3.7]	.,	丸底で体部は内彎しながら立ち上がる。内面から 口縁部外面はヘラ磨き、外面体部は器面が荒れ調 整が不明瞭である。		普通。	暗褐色、内外 面黒色処理。
8	1, 2, 4	杯	(13.0) - - [3.3]		丸底で体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は 直立する。内外面へラ磨きする。	細砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。内 外面黒色処理。
9	1,2	杯	(13.0) - - [3.0]	1/3周遺存。 口端部は欠 損。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。底部 は偏平である。内面から口縁部外面はヘラ磨きす る。体部外面はヘラ削りする。		あまい。	暗褐色。内外 面黒色処理。
10	2, 36	杯	(15.6) - - [3.0]	1/3周遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は外傾する。底部 は偏平である。内面から口縁部外面はヘラ磨きす る。体部外面はヘラ削りする。磨いた部分は器面 に光沢を持つ。		普通。	黒褐色、一部 暗褐色。内外 面黒色処理。
11	35, 51	杯	11.8 - - 3.5	1/3周欠損。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きする。体部外面は器面 が摩耗し不明瞭である。		あまい。	橙色。内外面 黒色処理。
12	1	杯	13.8 - - 3.8	口縁部から 体部の1/4 遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は開いて立ち上が る。内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面 はヘラ削りする。口端部は摩耗が著しい。		普通。	内面黑褐色 (黒色処理)。 外面橙色。
13	1, 2, 38	杯	(12.8) - - 4.7	口縁部の2/ 3欠損。	丸底で内甥しながら立ち上がる。口縁部は僅かに 内傾する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外 面はヘラ削りする。		普通。	内面暗褐色、 外面橙色。内 外面黑色処理。
14	1	杯	(10.8) - - [3.7]	1/4遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外面はヘラ磨き、外面体部は器面 が摩耗し調整が不明瞭である。		普通。	明橙色、一部 黒褐色。内外 面黒色処理。
15	40	杯	12.6 - - 3.6	1/3周欠損。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削りする。	砂粒、大粒 の赤色粒子 を含む。	普通。	暗褐色、内外 面黑色処理。
16	3	杯	(11.6) - - 3.2	1/3周遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外面はヘラ磨きし、体部外面はヘ ラ削り後上半部を軽く磨く。	細砂粒を含む。	普通。	黒褐色、内外 面黒色処理。
17	33	高杯	- - - [2.9]		丸底で杯部と脚部は臍により接合する。内面はな でており、外面はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	内面暗褐色、 外面橙色。
18	3, 4, 63	小型土器	(6.6) - - [6.0]	1/2遺存。	外方に開いて立ち上がる。内外面なでている。	微細砂粒を 含む。	普通	橙色、一部暗 褐色。
19	43	鉢	13.7 - - 6.9	 	丸底で器高があり、胴部は内彎して立ち上がる。 球を半載した形態である。口縁部は横ナデし、内 面はなでたあと軽く磨いている。外面はヘラ削り する。	砂粒を多量に含む。	普通。	橙色、内面の 一部黒褐色。 内面は赤色塗 彩。
20	1,41,49	鉢	(11.6) (12.4) (3.9) 12.7				普通、火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外面暗赤褐色。 火熱により変 色する。
21	39	壺	- 15.8 6.1 [12.3]		平底から大きく膨らみ立ち上がる。胴部最大径は 中位より僅かに上にある。内面はなでている。外 面はヘラ削りし、上半部はさらに軽くなでて仕上 げる。	粒を多量に	普通。	内面淡黄色。 外面暗赤褐色 (赤色塗彩)。

				1				竪穴住居01
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
22	42	甕	(13.2) - - [9.2]		口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は器面が 摩耗し、調整は不明瞭である。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	内面暗褐色、 外面橙色。
23	30	甕	12.9 - - [6.5]	口縁部から 肩部。	口縁部は緩やかに外反する。口縁部は横ナデし、 肩部は内外面ともなでる。	微細な砂粒 を含む。	普通。	淡黄色。
	1, 2, 23, 26, 28, 29 , 32, 53, 54	甕	15.0 21.0 - [16.8]		胴部の膨らみは緩やかで、□縁部は強く外反する。 □縁部は横ナデし、内面はなでる。胴部外面はへ ラ削りする。	砂粒・小石 を含む。	良好。	赤褐色。
	4, 23, 27, 60	甕	- 22.6 8.4 21.6	口縁部と胴 部の一部を 欠損。	口縁部が大きく外方に開き、胴部最大径よりも大きくなると思われる。胴部最大径は胴中位よりやや上にある。口縁部は横ナデし、内面はなでる。 外面はヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	橙色、一部暗 褐色。黒斑が ある。
26	64	甕	(18.4) (21.6) - [15.3]	上半部の1/ 3周。	胴部はあまり膨らまないため長胴形になると思われる。□縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は 縦方向にヘラ削りし、一部横方向にもヘラ削りを 重ねる。		普通。	橙色。黒斑が ある。
	2, 3, 6, 7, 9, 10, 15, 16, 19, 31, 55, 57, 59	甕			胴部は大きく膨らみ、口縁部は外傾して立ち上が る。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はへ ラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	内面暗褐色、 外面明黄褐色。
	1, 4, 24, 25, 26, 29 , 62, 63, 67	甕	(25.0) - - [18.5]	口縁部から 胴上半部の 1/2周。	外方に開いて立ち上がり、口縁部は外反する。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はヘラ削り するが器面が荒れ、単位は不明瞭である。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	橙色。
29	29	甕	- (8.4) [13.2]	胴下半部の 1/3周。	内面はなでる、粘土紐痕が明瞭に残る。外面は縦 方向のヘラ削り後、横方向にヘラ削りするが単位 は不明瞭である。		あまい。	赤褐色。
	1, 3, 4, 9, 10, 12, 13 , 17, 19, 21,52他	甕		胴下半部の 1/3欠損。	口縁部は外傾する。口縁部を強くなでるため肩部 に稜を作る。最大径は胴中位にある。口縁部は横 ナデし、内面はなでる。外面は横方向にヘラ削り する。		良好。	橙色。黒斑がある。
31	1, 2	甕	- 8.6 [3.5]	底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	細砂粒を含 む。	普通	黄橙色、一部 黒褐色。
32	2	須恵器甕	- - -	口縁部の一 部。	口縁部は有段となる。	白色粒子を 含む。	良好。	青灰色。
	1, 44, 45, 46, 47, 52	甑	25.9 - 8.7 21.3		外傾しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。 口縁部がやや歪む。口縁部は横ナデし、内外面は ヘラ削り後軽くなでている。		良好。	橙色。黒斑が ある。
34	32	甑	17.0 - 6.7 13.1	口端部と胴 下半部の1/ 4欠損。	外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は縦方向に ヘラ削りする。			暗赤褐色。

竪穴住居018 (第71・72図、図版46・47・48)

揷図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	1	須恵器杯 蓋	(10.6) - - [3.9]	1/6周。	外面に稜を作り、口縁部内面に沈線が巡る。内外 面をなでて仕上げる。		良好、よく 焼き締まっ ている。	

445 Lot								
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
2	53, 54	杯	- - - [6.4]	口縁部の一 部と体部下 半部が遺存。	丸底で器高があり、口縁部が僅かに内傾する。火 熱のため器面が著しく荒れ、調整は不明。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。		橙色。
3	24	杯	11.8 - - 4.4	口縁部から 体部の1/3 欠損。	丸底で口縁部は直立するため、外面に緩やかな稜ができる。内外面へラ磨きするが、外面のヘラ磨きは雑でヘラ削り痕が残る。		良好。	橙色。
4	2, 4, 15, 29	杯	(14.5) - - [4.7]		丸底で口縁部は僅かに外反し、外面に緩やかな稜ができる。内面はヘラ磨きしているが、外面は火熱により器面が著しく荒れ調整は不明。			橙色。
5	4, 53	杯	(13.8) - - [3.5]	口縁部から 体部の1/3 周。	丸底で口縁部は緩やかに外傾して立ち上がり、外面に緩やかな稜ができる。内外面へラ磨きする。 体部外面にはヘラ削り痕が残る。	砂粒を多量に含む。	良好。	にぶい橙色、 一部黒褐色。 内外面黒色処。
6	33	杯	14.2 - - 4.4	口縁部の一 部を欠損。	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に緩やかな稜ができる。火熱により器面が荒れ、調整は不明である。			暗赤褐色、一 部淡橙色。内 外面黑色処理。
7	50	杯	13.5 - - 4.2	口縁部の一 部を欠損。	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に稜がで きる。内外面へラ磨きする。	砂粒を多量 に含む。小 石を若干含 む。	普通。	橙色。内面黑 色処理。
8	2, 12, 13	杯	14.3 - - 3.7	2/3周。	丸底で外面に突出した稜を作り、口縁部は外反する。内外面をヘラ磨きする。	細砂粒を含む。	普通。	黒褐色、内外 面黒色処理。
9	1	杯	11.8 - - [4.9]	1/2周遺存。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は短く内傾する。 内外面をヘラ磨きしていると思われるが、器面が 摩耗し、単位は不明瞭である。		普通。	内面黑褐色、 外面明黄褐色。 内外面黑色処 理。
10	30	小型土器	(4.2) (6.1) (4.2) 5.4	1/2周遺存。	平底から直立して立ち上がり、口縁部は内傾気味 に立ち上がる。口縁部は横ナデし、体部はなでて いる。	砂粒を含む。	普通。	暗褐色、一部 赤褐色。
11	38	高杯	- - - [5.2]	脚部。	ハの字状に開く脚部。器面が荒れ調整は不明瞭で ある。	砂粒を多量に含む。	あまい。火 熱を受ける。	
12	4, 69	鉢	11.2 - - 5.0	完形。	偏平な底部で、体部は緩やかに外傾しながら立ち上がり、□縁部との境は不明瞭である。□縁部は横ナデし、体部はヘラ削りする。		良好。	暗褐色、一部 橙色。
13	3,55	鉢	12.6 - - [11.0]		内雪しながら立ち上がり口縁部は僅かに外反する。 口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は器面が 荒れて剝落し、調整が不明瞭。		あまい。	内面暗褐色、 外面黄褐色。
14	1~4, 15, 16, 20, 27 , 63, 66	甕		2と胴下半 部の2/3欠	最大径は胴部中位にある。口縁部は外反する。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。胴部外面は縦方 向にヘラ削りするが、火熱で器面が荒れ単位は不 明である。	を多量に含		暗赤褐色。
15	3, 4, 49	甕	- - - [7.2]	肩部から胴 上半部。	内面はなでている。外面は火熱により器面が荒れ、 調整は不明瞭である。	細砂粒を多 量に含む。	普通。火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外面暗赤褐色。
16	4, 32, 37, 40, 45, 46	甕	22.5	胴上半部の 1/2周。	頸部に幅があり、口縁部は横方向に強く外反する。 口縁部は横ナデし、胴部の内外面はなでる。内面 に粘土紐接合痕が残る。		普通。火熱 を受ける。	明黄褐色、一 部暗褐色。

								_				
挿図 番号:	遺物番号	쁆	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	±.	焼	成	色	調
17	3, 4, 48, 49, 52	甕				球形に膨らんだ胴部で、最大径は中位にある。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は縦方向に ヘラ削りし、中位はさらに横方向にヘラ削りする。	砂粒を	含む。	普通。		橙色。	
18	1, 4, 34, 35, 36, 37 , 39, 40, 41, 61, 63			15.2 22.5 — [21.2]	胴部中位の 一部を欠損。	最大径は中位にある。口縁部は横ナデし、内面胴 下半部と外面胴部は縦方向にヘラ削りするが、器 面が荒れ、単位は不明瞭である。内面胴上半部は なでている。	砂粒を	多量				火熱
19	2, 16, 17	甕		- (25.3) (8.1) [28.0]		長嗣形で最大径は中位にある。内面はなでており、 外面はヘラ削りするが器面が荒れてヘラ削りの単 位は不明瞭。			あまい 熱を受		暗赤褐色	30
20	1, 2, 16, 66	甕				長胴形で最大径は中位にある。火熱により器面が 荒れ、調整は不明瞭である。外面は器面が剝落す る。		多量				
21	2	甕		- 7.5 [6.4]	胴下半部の 1/3と底部。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。	砂粒を	含む。			内面暗褐 外面橙色	
22	67	甕		- 8.1 [6.3]	胴下半部2/ 3。	器面が荒れ調整は不明瞭である。	大粒の を含む		普通。		橙色。	
23	1,21	甕		- - 8.8 [2.9]		内面はなでている。外面は火熱により器面が細かくひびわれており調整は不明である。	砂粒を	含む。	普通。を受け			,
24	2, 9, 10, 14	甕		- (14.7) [13.1]	1/3。	火熱により器表面が著しく荒れ、調整は不明瞭で ある。		粒子	熱を受		内面淡黄 内面明黄	

竪穴住居019 (第73図、図版48)

347		(/	710		4702 107							
揷図 番号	遺物番号	器	形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎	土	焼	成	色	調
1	1, 23, 26	杯		13.7 - - [5.0]	体部の1/3	丸底で外面に稜を作り、口縁部は緩やかに外反する。内面から口縁部外面はヘラ磨きしていると思われるが器面が荒れ不明瞭である。外面はヘラ削りする。			普通。を受け		黒褐色、 の一部橋 内外面黒 理。	色。
2	35	杯		(11.7) - - 4.2	口縁部1/2 と胴部の一 部欠損。	丸底で外面に稜を作り、口縁部は内傾する。内面 から口縁部外面はヘラ磨きしている。体部外面も ヘラ削り後、磨いている。			良好。		内面明黄 外面暗视 内外面黑 理。	8色、
3	25	高杯		- - - [5.8]	脚部1/3周。	ハの字状に開く脚部で、内面は横方向、外面は縦 方向にヘラ磨きしている。器面が荒れている。	砂粒を に含む		あまい	٥,	暗褐色。	
4	36	鉢		(15.8) - - 9.0		胴部は内彎して立ち上がる。外面に稜を作り、口 縁部は外反する。内面から口縁部外面はヘラ磨き している。体部外面はヘラ削りする。			普通。		内面黑袍 外面橙色 外面黑色	5。内
5	2, 3, 10, 13, 一括	甕				最大径は肩部にあり、口縁部は緩やかに外反する。 口縁部は横ナデし内面はなでる。外面は縦方向に へラ削りしていると思われるが器面が荒れて不明 瞭である。	砂粒を	含む。			橙色、夕 一部暗褐	
6	1, 20, 21, 30, 31, 32 , 34, 39		·	23.8 22.5 - 25.8	胴下半部の 1/4欠損。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は縦方向 にヘラ削りしているが器面が摩耗し単位が不明瞭 である。						一部黒

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

竪穴住居023(第73図、図版47)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼 成	色 調
1	51	須恵器杯 身	- - - [3.3]	体部の1/5 周。	受部は横方向に突出し、口縁部は内傾する。底部 から体部中位まで回転ヘラ削りする。ロクロは左 回転。		良好。	青灰色。
2	7, 28, 49, 52	杯	13.2 - - 4.0	く一部を欠	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に緩やかな稜ができる。内面と口縁部外面はヘラ磨きするが外面の調整は不明瞭。内外面とも著しく器面が荒れる。	を少量含む。		
3	28, 32, 45 , 48	杯	-		丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に稜を作る。内面から口縁部外面はヘラ磨きするが器面が 剝落している。外面は器面が荒れ調整が不明瞭で ある。口端部は摩耗する。	量に含む。	普通。火熱 を受ける。	橙色、一部黒 褐色。
4	28, 40	鉢	16.2 15.8 - [11.8]	胴上半部。	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反す る。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は縦 方向にヘラ削りする。		普通。	内面暗褐色。 外面赤褐色。

溝状遺構010 (第75図、図版48)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	15	鉢		部しか遺存	平底で体部は外傾して立ち上がる。□縁部は緩く 外反し外面に緩い稜を作る。□縁部は横ナデし、 内面はなでる。外面は横方向にヘラ削りする。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	黒褐色、一部 褐色。
2	18	須恵器杯 蓋	(10.6) - - [3.1]		天井部から器高の2/3程度までを回転へラ削りする。 ロクロ右回転である。	黒色粒子が 混入した細 砂粒を含む。	良好。	青灰色。
3	22	須恵器杯 身			焼き歪みが著しく、底部の一部は潰れている。底部から器高の1/2程度までを回転へラ削りする。ロクロ右回転である。底部に直線を4本交差させたようなヘラ記号がある。	が混入した	良好。	明青灰色。
4	14	杯	(9.8) - - [3.0]		丸底で口縁部は僅かに内彎して立ち上がり、外面 に緩い稜を作る。	細砂粒を多量に含む。	あまい。	赤褐色、内外面赤色塗彩。
5	6	須恵器杯 身			底部から器高の1/2程度までを回転ヘラ削りする。 ロクロ右回転である。	黒色粒子を 多量に含む。	良好。	青灰色。
6	2	鉢	(9.8) - - [3.0]	底部1/2。	内面はなでている。底部外面に木葉痕が観察できる。	細砂粒を含む。	普通。	黄橙色。
7	21	高杯	- - [6.0]	脚部。	裾部は緩やかにハの字状に開く。内面はなでており、外面は縦方向にヘラ削りする。裾部内面に木葉痕が観察できる。		普通。	赤褐色、一部黄橙色。
8	16, 19	甕	- 8.0 [5.4]	底部。	火熱により器面が著しく荒れ、調整は不明瞭である。	粒子が粗い 砂粒を多量 に含む。		赤褐色。

溝状遺構020 (第75図、図版47)

								_		
挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼	成	色 調	
1	3, 5	杯	(12.7) - - [3.8]	部と体部の 1/2周。	丸底で、口縁部は短く僅かに内彎する。内面はへ ラ磨きしているが単位は不明瞭である。外面の調 整は不明である。		普通。			底内%。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

溝状遺構020

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼 成	色 調
2	4	髙杯	- - - [5.5]	脚部。裾部は欠損。	ハの字状に開く。杯部内面はヘラ磨きし、脚部内面は横方向にヘラ削りする。脚部外面は縦方向にヘラ削りする。脚部外面は縦方向にヘラ削りする。		普通。	内面黒褐色 (黒色処理)。 外面明赤褐色 (赤色塗彩)。
3	2	高杯	- - - [3.5]	脚部。裾部 は欠損。	ハの字状に開く。杯部内面はヘラ磨きする。その 他の部分は器面が荒れ調整などは不明である。	砂粒を多量 に含む。	あまい。	赤褐色、杯部 内面の脚部外 面は赤色塗彩。
4 5 6	8	須恵器甕	_ _ _ _	破片。	同一個体と思われる。内面には青海波文が浅く残り、外面は平行叩きを行っている。叩き目は板目に直交するよう彫られている。			にぶい黄褐色。

遺構外(第84図、図版47)

挿図 番号	遺物番号	器形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色 調
1	オ 10-24- 1	杯	(11.4) (10.4) — [2.8]	1/5周。	口縁部は僅かに外傾し、外面中位に稜を作る。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。体部外面はヘラ 削りしている。		普通。	明赤 褐色 、内 面黑色処理。
2	Ø 12-17	杯	(12.6) - - [3.5]	口縁部1/3、 体部1/2。	□縁部は僅かに外傾し、外面中位に稜を作る。体 部外面はヘラ削りしている。□縁部から内面にか けての調整は不明瞭である。			黒褐色、内外 面黒色処理。
3	7 12-17	小型土器	(7.3) - (5.6) [3.2]	1/4周。	内外面をなでて仕上げる。底部に木葉痕が観察で きる。	細砂粒を多 量に含む。	あまい。	くすんだ淡橙 色。
4	オ11-9-1	小型土器	- - - [1.8]	底部の1/3。	内外面をなでて仕上げる。底部に木葉痕が観察で きる。	細砂粒を含む。	普通。	内面赤褐色、 外面にぶい橙 色塗彩。
5	ク12-17	高杯	- - - [4.6]	脚部。裾部 は欠損。	杯部内面はヘラ磨きし、脚部内面はなでる。脚部 外面は縦方向にヘラ削りする。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	杯部と脚部の 内面は黒色処 理し、脚部外 面赤色塗彩。
6	オ12-8-1	高杯	- - - [5.5]	脚部。裾部 は欠損。	杯部内面と脚部内面はなでており、一部工具痕が 残る。脚部外面は縦方向にヘラ削りする。脚裾部 内面に木葉痕が観察できる。		普通。	暗赤褐色。
7	オ 12~10~ 1	高杯	- - - [5.3]		杯部内面はヘラ磨きし、脚部内面はなでる。脚部 外面は縦方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	あまい。	淡橙色。
- 1	オ11-9-2 ,オ12-8 -1	鉢	(9.0) - - [3.7]	1/3周。	口縁部は横ナデし、内外面はなでている。ナデの 工具痕が一部に残る。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	赤褐色、一部 黒褐色。
	051-5, 051-6	須恵器杯 身	- 7.6 [2.5]	底部。	ロクロにより整形している。底部は一方向にヘラ 削りし、底部切り離し技法は不明である。	白雲母微粒 子が混入す る砂粒を含 む。	普通。	灰褐色。
10	Ø 12-6-1	甑	(19.4) - - [9.4]	口縁部の1/ 2と胴上半 部の1/3。	口縁部は横ナデし、内面はなでている。外面はへ ラ削りしているが器面が荒れ、単位は不明瞭であ る。		あまい、火 熱を受ける。	橙色。
11	Ø11-6-2	須恵器長 頸壺	(4.8) (8.2) (5.1) 18.2	1/2周。	細長い胴部で、肩部には明瞭な稜を作る。口縁部は緩く外反する。頸部に接合痕が認められる。底部は回転糸切りしており、調整していない。		良好。	青灰色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

第7表 出土土器破片数一覧 **古___ 墳**

	-74								_											
	遺構番号 器種	001	022	024	030	031	032	033	038	039	040	041	050	051	052	054	055	056	060	合計
	須恵器	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	68	82
	杯口縁	16	4	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	7	37
{	杯体部	54	0	1	0	30	2	0	0	0	0	0	0	19	0	0	0	0	14	120
	杯底部	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
破	高杯杯部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高杯脚部	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
片	小型土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	,坩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	0	0	0	0	26
数	甕口縁	5	5	0	3	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	46
	甕胴部	45	55	0	45	292	0	0	0	0	0	_0	0	5	0	0	0	0	0	442
	甕底部	2	0	0	2	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
	甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合 計	123	65	1	50	378	2	2	0	0	0	0	0	38	26	0	0	0	90	775
	須恵器	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	14	17
	杯	1	4	0	0	1	1	2	0	3	0	0	1	1	0	0	0	0	5	19
	高杯	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
実	小型土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
測	鉢	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	坩	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	_ 0	0	0	0	2
遺	甕	2	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
物	甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合 計	3	7	1	0	4	3	2	2	4	0	0	1	2	0	1	0	0	19	49
	そ の 他						鉄 鏃 1			土製玉1				石製品1					直刀・鉄鏃	

竪穴住居

	で任活																
	遺構番号器種	002	003	004	005	006	007	008	009	011	012	015	017	018	019	023	合計
	須恵器	0	0	0	0	1	0	5	0	0	0	1	4	0	2	0	13
	杯口縁	15	0	3	10	15	10	44	18	6	4	107	55	24	12	8	331
	杯体部	26	0	2	18	19	1	113	5	15	4	135	99	12	26	17	492
	杯底部	1	0	2	3	0	4	14	0	0	4	_ 23	6	0	0	0	57
破	高杯杯部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	髙杯脚部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
片	小型土器	0	48	1	0	3	0	0	1	0	0	0	6	0	0	0	59
	甕口縁	12	6	6	8	20	15	46	20	21	12	102	118	67	22	8	483
数	甕胴部	65	7	62	63	191	83	326	95	91	79	408	776	277	208	63	2794
	甕底部	1	1	3	1	4	9	14	3	3	0	41	35	15	8	0	138
	甑	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	5
	支脚	0	0	18	0	0	0	0	17	0	3	10	0	0	1	0	34
1	その他	0	3	0	0	0	0	0	0	6	0	1	0	2	0	0	27
	合 計	120	65	97	103	254	122	562	160	143	106	831	1103	397	279	96	4438
	須恵器	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	1	0	1	11
	杯	13	1	17	7	9	6	2	3	5	7	33	15	8	2	2	130
	高 杯	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2_	1	1	1_	1	0	8
実	小型土器	2	15	0	1	0	0	1	1	0	0	4	1	1	0	0	26
測	鉢	1	0	6	5	3	2	2	3	0	1	5	2	2	1	1	34
	壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
遺	甕	5	1	5	7	3	1	5	4	2	6	20	10	11	1	0	81
物	甑	1	1	1	0	1	0	1	0	0	2	0	2	0	1	0	10
	支脚	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	7
	合 計	23	20	31	21	17	10	12	12	7	19	68	34	24	6	4	308
	その他	土製丸玉		不明土製品1		_		鉄製刀子1	土器転用砥石3			鉄製鎌 11					

第8表 佐倉第三工業団地内遺跡及び関連遺跡の陥し穴

遺跡名	Lx	s	n	Wx	s	n	L/Wx̄	s	n
星谷津遺跡	2.03	0.59	8	1.25	0.16	8	1.67	0.66	8
立山遺跡	_	_	_			_	_	_	_
タルカ作遺跡	2.40	0.53	2	1.35	0.26	2	1.78	0.05	2
明代台遺跡	1.74	0.19	5	1.30	0.27	5	1.36	0.19	5
向原遺跡	1.91	0.50	25	0.91	0.41	25	2.82	2.32	25
大作遺跡	2.21	0.56	9	1.46	0.61	9	1.65	0.42	9
栗野I遺跡	1.70	0.35	2	0.90	0.18	2	1.90	0.00	2
松向作遺跡	2.10	0.19	3	1.10	0.41	3	-2.01	0.54	3
大林遺跡	2.88	0.72	18	0.83	0.47	18	4.76	3.38	18
空港No.10遺跡	2.54	0.51	57	1.28	0.47	57	2.30	1.17	57
空港No.7遺跡Loc.A	2.33	0.53	16	1.07	0.31	16	2.36	0.90	16
空港No.7遺跡Loc.B	1.86	0.62	10	1.11	0.46	10	1.82	0.74	10
空港No.7遺跡Loc.A・B	2.15	0.59	26	1.08	0.36	26	2.16	0.86	26

陥し穴の計測は完形の資料の開口部で行ったが、当然のことながら開口部の形態は原形をとどめていない。

n ≦10の s は補正。

既報告分のみ

空港No.7遺跡 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書N』千葉、1984

空港No.10遺跡 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 V』千葉、1985

大林遺跡 『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』千葉、1989

第9表 陥し穴の長幅比分布

L	./W×1	10	L	/W×I	10	L	./W×]	.0
	15 •			15 •		5	15 •	
	15*			15*		_	15*	
星谷津遺跡	1	! ~ 明代台遺跡	タルカ作遺跡で	· ~	 - 大作遺跡 	大林遺跡。	~ ~	~空港№10遺跡
	7 •			7 •			7 •	
	7 *			7 *		200	7 *	0
	6 •			6 •		8	6 •	
	6 *			6 *			6 *	
	5 ·			5 •		7	5 •	5
	5 *	Í		5 *		20	5 *	3
	4 •			4 •		9	4 •	
	4 *			4 *			4 *	000
	3 •	ſ		3 •			3 •	69
	3 *	1		3 *		4432	3 *	033
8	2 •			2 •			2 •	6899
	2 *			2 *	14	1	2 *	00111333
765	1 •	6	88	1 •	5579	76	1 •	55555566677777889999
4221	1 *	2334		1 *	124	33	1 *	23344444444
	0 •	J		0 •			0 •	
	0 *			0 *			0 *	
	0 *		-	0 *			0 *	
	0 .			0.]		0.	
3	1 *		432	1*			1 *	2344
	1 •	5	9887666666	1 •	9	8888865	1 .	6699
	2 *	0	4311	2 *	4	4320	2 *	4
	2 •	5	6665	2 •		995	2 .	
	3 *			3 *			3 *	
	3 •			3 •		6	3 •	6
	4 *			4 *			4 *	
	4 •		6	4 •			4 •	
	5 *	}		5 *		0	5 *	
	5 •			5 •			5.	
	l ~ ~		!	! ~ ~	1		l ~ ~	
	! _	- }	1	· _	j		1 _	
	7 *			7 *	ļ		7 *	
	7 •	14 4 4 4 4 4	t my mate	7 •			7 •	
立山遺跡	8 *	松向作遺跡	向原遺跡 0	8 *	栗野遺跡	空港No.7遺跡Loc.A	8 *	空港No.7遺跡Loc.B
	8 •		5	8 •	1		8 •	
	9 *		_	9 *			9 *	
	9 •		5	9 •	1		9 •	

 $* = 0 \sim 4$, $\cdot = 5 \sim 9$

表の中央の数値は階級を表し、左右の数列はその個数が度数を、さらに個々の数字はデータ値を表す。

第10表 縄文時代中グリッド出土遺物属性 (第96・97・98図、図版58・59)

弗 IU	/2C /ING./C PI)	代中グリ	/ Ш.Т.	120万円工	(弗90・97	2012	図版58 • 5	3)	
No.	遺物番号	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	挿図番号	備考
1	ノ10- 9 一括	石 鏃	(16.4)	(14.1)	2.0	(0.55)	黒曜石	第96図 1	仕上げ痕〇型
2	ノ10-19 一括	石 鏃	20.1	17.5	4.4	0.97	黒曜石	第96図 2	仕上げ痕〇型
3	オ10-16 一括	石 鏃	16.2	12.2	3.0	0.54	玉 髄	第96図 3	1
4	オ12-5 1	石 鏃	(27.7)	(22.4)	3.4	(1.70)	安山岩	第96図 4	仕上げ痕〇型
5	オ12-20 2	石 鏃	31.0	(20.0)	3.4	(1.62)	チャート	第96図 5	
6	ノ10-10 一括	楔形石器	(14.5)	(33.5)	(9.8)	(4.84)	黒曜石	第96図 6	
7	ノ10-20 一括	打製石斧	68.9	(41.5)	19.8	(82.82)	花崗岩	第96図 7	
8	オ11- 1 一括	打製石斧	(56.1)	32.6	19.9	(53.52)	安山岩	第97図8	発掘時欠損
9	オ11- 5 一括	打製石斧	78.0	42.5	23.0	114.74	頁 岩	第97図 9	
10	∠11− 9 1	原 石	50.1	24.7	31.1	55.28	玉 髄	第97図10	
11	ノ10-14 一括	剝 片	(26.4)	(26.7)	(7.2)	(3.36)	黒曜石	第97図11	U ー fl か
12	オ10-24 一括	剝 片	(27.1)	(22.3)	4.6	(2.72)	チャート	第97図12	U - fl か、13と 同一母岩、発掘
13	オ11- 2 一括	剝 片	(24.5)	(34.2)	5.6	(4.13)	チャート	第98図13	時欠損 12と同一母岩 発掘時欠損
14	005 21	剝 片	(28.2)	49.8	10.7	(11.61)	砂岩	第98図14	オ11-13
15	ク11- 8 一括	剝 片	23.8	26.0	7.8	4.74	黒曜石	第98図15	R - fl か
16	052 31	砕 片	0.8	0.9	0.6	0.40	黒曜石		井12−11
17	$\sqrt{10-7}$	礫	(61.9)	(51.5)	(34.1)	(148.72)	石英斑岩		
18	ノ10- 8 一括	礫	(38.0)	(70.4)	(46.5)	(151.18)	石英斑岩		
19	ノ10- 9 一括	礫	(58.8)	45.3	15.4	(42.33)	玄武岩?		
20	オ10-22 一括	礫	(49.3)	(43.0)	(25.8)	(59.12)	(凝灰質)		
21	オ11- 1 一括	礫	(38.7)	(34.7)	(21.7)	(49.58)	(凝灰質) レ キ 岩		
22	044 7 a	礫	(39.0)	30.4	(16.1)	(15.52)	安山岩		オ11-4
23	004 7 b	礫	22.2	17.0	1.0	4.05	チャート		オ11-4
24	044	礫	17.3	10.4	11.7	3.81	頁 岩		オ11-4
25	005	礫	31.9	24.3	20.0	19.52	細粒花崗岩		オ11-13
26	007	礫	31.9	22.5	21.4	14.99	流紋岩?		オ11-18
27	008	礫	35.4	31.0	19.4	5.96	軽 石		浮子か オ11-18
28	オ12-14 1	礫	(54.8)	(42.1)	(18.8)	(29.83)	砂岩		
29	ク10-21 1 a	礫	(53.5)	(34.3)	(15.1)	(27.99)	頁 岩		
30	210−21 1 b	礫	15.1	26.7	0.85	3.98	安山岩		
31	ク10-21 一括	礫	(26.6)	(60.1)	(35.3)	(64.58)	花崗岩		
32	$211 - \frac{6}{1a}$	礫	(38.9)	(47.5)	(25.9)	(49.74)	砂岩		
33	211-6 1b	礫	(41.9)	(34.3)	(28.5)	(48.36)	砂岩		
34	211-6 1c	礫	(24.8)	(17.3)	(21.5)	(9.42)	砂岩		
35	111-7 1	礫	(54.6)	(41.5)	(59.0)	(116.51)	安山岩		
36	211-7 ₂	礫	(62.5)	(52.4)	(32.3)	(124.36)	流紋岩		
37	018	礫	(20.6)	17.4	0.9	5.20	花崗岩		ク12-12
	3						L		

第11表 縄文時代大グリッド出土遺物属性(第99・100・101・102図、図版59・60)

新1 .			3 42 4		угшти	Z 127/124 1-1-	(200 10	70 101	102区、区	/12200	
Nα	遺物	番号	器	種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石 材	挿図番号	備考
1	001	69	石	鏃	16.2	15.5	8.1	0.52	チャート	第99図 1	中 9
2	051	80	石	鏃	30.8	11.4	3.5	1.23	安山岩	第99図 2	有舌尖頭器の再 生品か ヰ13
3	031	16	石	鏃	(24.2)	20.5	4.0	(1.27)	黒曜石	第99図 3	/11
4	060	200	石	鏃	(22.6)	22.6	5.4	(2.20)	頁 岩	第99図 4	ノ14 松向作古墳公園
5	022	15	石	鏃	(25.2)	(15.6)	3.6	(1.14)	黒曜石	第99図 5	オ10
6	013	1 a	石	鏃	21.9	(16.8)	4.5	(1.31)	チャート	第99図 6	オ10・11
7	013	1 b	石	鏃	(17.9)	(15.6)	2.8	(0.79)	安山岩	第100図 7	オ10・11
8	0	1	U-	- f 1	(16.4)	19.9	5.3	(1.27)	玉 髄	第100図8	表面採集
9	020	1	打製	石斧	(59.4)	(38.8)	38.9	(66.42)	砂岩	第100図 9	未製品か、オ11 ・12, ク11
10	013	1 c	磨製	石斧	(86.3)	(50.3)	(32.0)	(197.97)	(高度)変成岩類	第100図10	オ10・11
11	031	16	磨	石	(89.8)	(46.8)	(54.6)	(152.11)	安山岩	第101図11	ノ11
12	031	31	磨	石	101.5	70.9	29.2	311.87	砂岩	第101図12	711
13	古墳	公園 一括	磨	石	(80.6)	(55.9)	(43.9)	(269.14)	粗粒砂岩	第102図13	スタンプ形石器 か
14	051	173	剝	片	(22.8)	(17.5)	(8.2)	(3.22)	頁 岩	第102図14	R - fl か、ヰ13
15	031	16 b	剝	片	12.0	20.2	2.2	0.46	粘 板 岩	第102図15	/11
16	013	1 d	剝	片	(20.6)	(23.4)	3.8	(1.73)	頁 岩	第102図16	オ10・11
17	039	3	₹	礫	28.3	12.8	10.2	3.04	安山岩		ウ10
18	031	22	1	礫	85.7	50.4	28.6	113.82	石英斑岩		ノ11
19	022	9	1	躁	66.0	48.5	19.4	65.14	流紋岩		オ10

第12表 旧石器時代A地点出土遺物属性(第105·106図、図版57)

No.	遺物番号	器 種	長(100)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石 材	挿図番号	備考
1	オ12- 3 10	U – f 1	25.9	22.4	12.2	6.50	黒曜石	第105図1	折断剝片素材
2	オ12- 4 4	楔形石器	35.1	48.1	15.1	20.59	黒曜石	第105図 2	
3	オ12-4 6	楔形石器	(9.8)	(12.7)	(5.2)	(0.59)	黒曜石	第105図 3	スポール
4	オ12- 3 9	楔形石器	(11.4)	(16.8)	(3.1)	(0.59)	黒曜石	第105図 4	スポール
5	オ12- 4 1	剝 片	(11.0)	(11.0)	(5.1)	(0.57)	黒曜石	第105図 5	
6	オ12-4 2	剝片	(43.2)	(31.6)	(9.3)	(5.25)	黒曜石	第105図 6	
7	オ12- 4 3	剝片	39.0	(22.2)	4.8	(3.77)	頁 岩	第106図 7	
8	オ12-4 5	剝 片	(10.2)	(11.3)	4.1	0.31	黒曜石	第106図8	
9	オ12- 3 ₇	剝 片	(20.3)	(23.4)	7.0	1.92	黒曜石	第106図 9	
10	オ12-3 ₈	剝 片	22.0	18.7	7.9	3.81	黒曜石	第106図10	·
11	オ12-3 11	砕 片	(9.8)	7.1	1.6	(0.11)	黒曜石		

第13表 旧石器時代B地点出土遺物属性(第107·108図、図版57)

No.	遺物番号	器 種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石 材	挿図番号	備考
1	オ11-8 3	U – f 1	18.7	28.0	10.3	5.05	珪質頁岩	第107図1	
2	オ11- 9 6	U – f 1	26.7	25.7	4.7	2.13	珪質頁岩	第107図 2	
3	オ11- 9 4	剝 片	24.0	21.5	9.1	3.93	珪質頁岩	第107図3	U ー fl か
4	オ11-9 5	剝 片	20.1	23.6	5.2	1.54	珪質頁岩	第108図 4	
5	オ11- 9 ₇	剝片	36.1	35.4	8.5	(7.46)	珪質頁岩	第108図 5	
6	オ11-9 ₃	礫	33.1	17.7	15.8	10.72	安山岩質 凝 灰 岩		

第14表 旧石器時代地点外出土遺物属性(第109図、図版58)

No.	遺物番号	器 種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石	材	挿図番号	備考
1	オ10-17 一括	ナイフ形 石 器	26.6	9.8	6.6	1.16	玉	髄	第109図 1	
2	オ12-5 ₂	ナイフ形石 器	(16.2)	(13.0)	(3.0)	(0.67)	頁	岩	第109図 2	竪穴住居015出 土
3	ウ10-2	尖頭器	(65.0)	17.0	8.0	(8.41)	安山	」岩	第109図3	古墳039出土

第15表 佐倉第三工業団地內遺跡群出土尖頭器

挿図番号	遺跡名	出土地点	出土層位	挿図番号	遺跡名	出土地点	出土層位
112-1	松向作	表面採集	不明	112 - 9	腰巻	Loc. 1	II~III
112 – 2	星谷津	第1ユニット	Ⅲ上	112 10	向 原	Loc. 4 • No. 5 ブロック	Ⅲ下
112 – 3	星谷津	第3ユニット	Ⅲ上	112-11	向 原	ブロック外	不明
112 - 4	星谷津	第 5 ユニット	加上	112-12	向 原	ブロック外	不明
112 - 5	星谷津	第13ユニット	III上	112-13	向 原	ブロック外	不明
112 - 6	星谷津	ユニット外	I	113-14~16	向 原	ブロック外	不明
112 - 7	向山谷津	表面採集	不明	113-17~22	栗野I	表面採集	不明
112 - 8	木戸場	表面採集	不明				

第16表 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器

挿図番号	遺跡名	出土地点	出土層位	挿図番号	遺跡名	出土地点	出土層位
114 - 1	星谷津	第1ユニット	III上	115-44	向 原	Loc. 4 • No. 4 ブロック	IV~V
$114 - 2 \sim 6$	星谷津	第5ユニット	加上	115-45~50	向 原	Loc. 4 • No. 5 ブロック	$IV \sim V$
114 - 7	星谷津	第9ユニット	加上	115-51	向 原	Loc.4 • No.4 • 5 ブロック	IV∼V
114 - 8	星谷津	第13ユニット	III上	115-52	向 原	Loc. 7・No.19ブロック	IV∼V
$ 114 - 9 \sim 12 $	星谷津	第14ユニット	加下	115-53	向 原	Loc.11・No.22ブロック	IV∼V
114-13	星谷津	第15ユニット	加下	115-54	向 原	Loc. 6 • No.16ブロック	VI
114-14	星谷津	表面採集	不明	115-55 • 56	向 原	Loc. 6 • No.17ブロック	VI
114-15	立山	表面採集	不明	116-57 · 58	大 作	第1ブロック	III
114-16 • 17	タルカ作	第3ブロック	III	116-59~62	大 作	第5ブロック	(III∼V)?
114-18	タルカ作	ブロック外	VII a	116-63	大 作	第6ブロック	(III∼V)?
114-19~24	腰巻	Aブロック	III (VIIか)	116-64 • 65	大 作	第8ブロック	VI∼VII a
114-25 • 26	腰巻	Bブロック	VII	116-66~70	大 作	第11ブロック	VII a
114 - 27	腰巻	Eブロック	VII	116-71	大 作	第16ブロック	VII~VIII
115-28 • 29	木戸場	Loc.A・No.4ユニット	III(V~VIか)	116-72	栗野I	第 4 ブロック	$V \sim VI$
115-30	木戸場	Loc.A・No.7ユニット	IV(V~VIか)	116-73	栗野Ⅰ	第5ブロック	$V \sim VI$
115-31	木戸場	Loc. B・No. 2 ユニット	l∐~V	116-74	栗野I	第7ブロック	$V \sim VI$
115-32	木戸場	Loc.Bユニット外	不明	$[116 - 75 \sim 77]$	栗野I	第8ブロック	V∼VI
115-33	向 原	Loc. 1 • No. 1 ブロック	V下	116-78	栗野I	第9ブロック	V∼VI
115-34	向 原	Loc. 2	不明	116-79~81	栗野II	第18ブロック	$V \sim VI$
$115 - 35 \sim 43$	向 原	Loc. 3 • No. 2 ブロック	IV~V	$116 - 82 \sim 83$	松向作	表面採集	不明

第17表 佐倉第三工業団地内検出古墳(報告書刊行分)

墳 形		方		墳			円		墳		他	
規模遺跡名	5 m 以下	10m 以下	15m 以下	20m 以下	25m 以下	5 m 以下	10m 以下	15m 以下	20m 以下	25m 以下		合計
松向作遺跡	1	1	0	1	0	2	7	6	5	0	0	23
星谷津遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
立山遺跡	8	8	2	0	0	2	5	2	3	2	0	32
タルカ作遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
向山谷津遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
明代台遺跡	1	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5
木戸場遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
腰卷遺跡	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	5
向 原 遺 跡	4	3	0	0	0	1	. 7	2	4	0	0	21
大作遺跡	4	4	0	0	0	2	23	13	6	1	0	53
栗野I遺跡	1	0	0	0	0	0	1	1	. 1	0	1	5
合 計	21	22	2	1	0	11	43	24	20	3	1	148

^{*}規模は周溝内径をとった。

図 版







遠景



近 景





古墳001



古墳001



古墳001



古墳022



古墳032



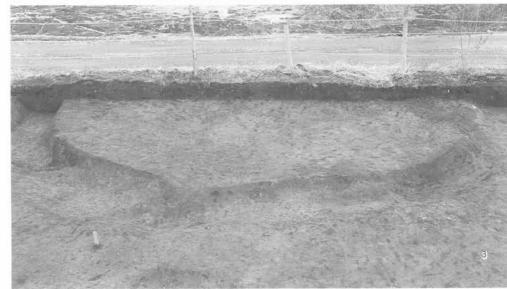
古墳033



古墳038・039



古墳040



古墳041



古墳050



古墳051



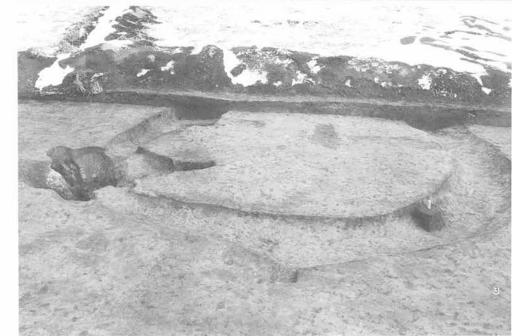
古墳052



古墳054



古墳055





古墳060



古墳060





土壙墓035



土壙墓057



土壙墓058



竪穴住居002



竪穴住居002



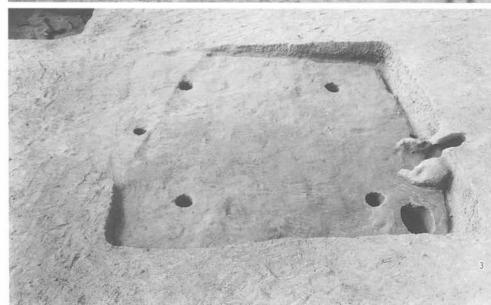
竪穴住居003



竪穴住居004



竪穴住居004



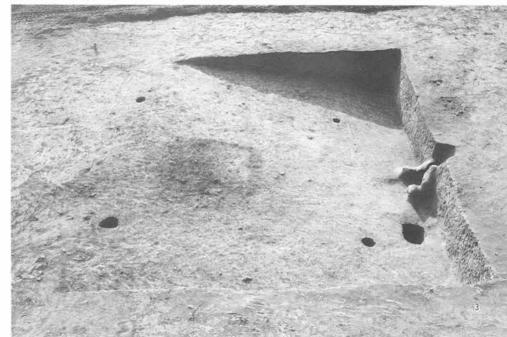
竪穴住居005



竪穴住居006



竪穴住居006



竪穴住居007



竪穴住居008



竪穴住居009





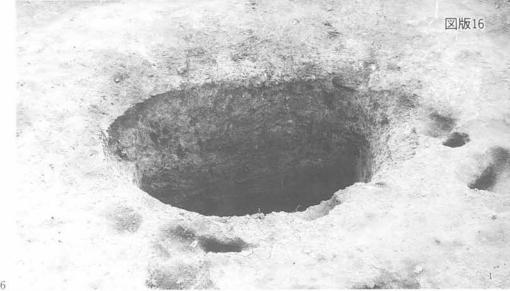
竪穴住居011



竪穴住居018



竪穴住居019

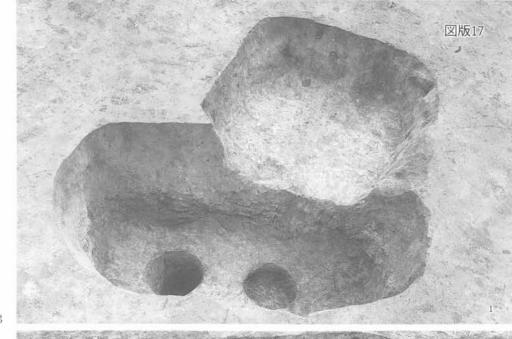


陥し穴016



陥し穴021





陥し穴044A・土坑044B



炭窯025

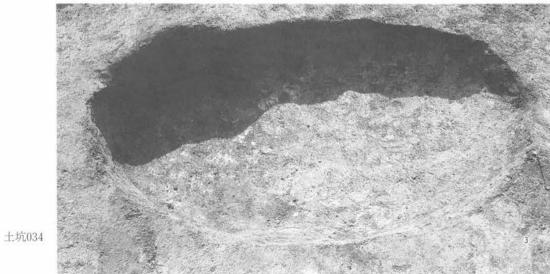




土坑027



土坑029





土坑036



土坑042



土坑059A·炭窯059B



土坑062



旧石器時代A地点



旧石器時代B地点



1. 古墳出土土器





1. 竪穴住居002出土遺物



2. 竪穴住居003出土遺物



1. 竪穴住居004出土遺物



2. 竪穴住居005出土遺物



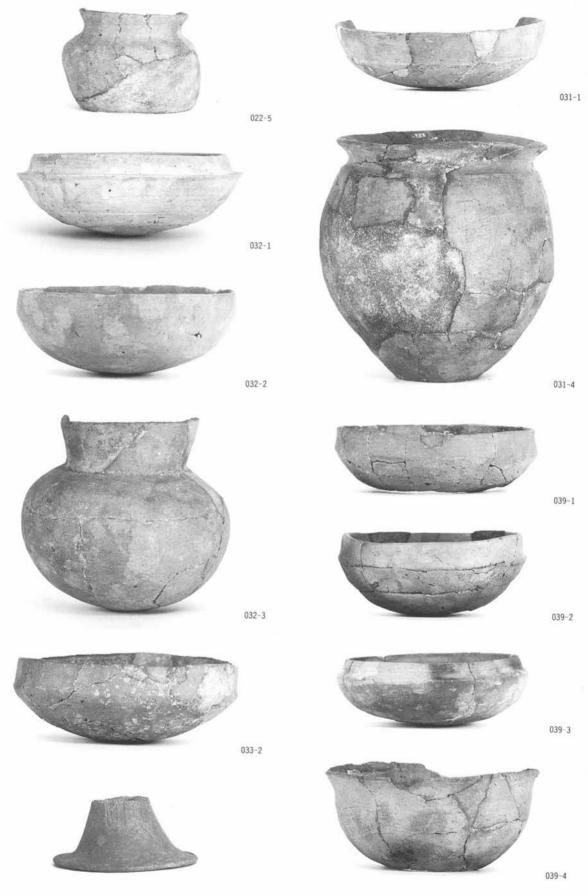
1. 竪穴住居006出土遺物



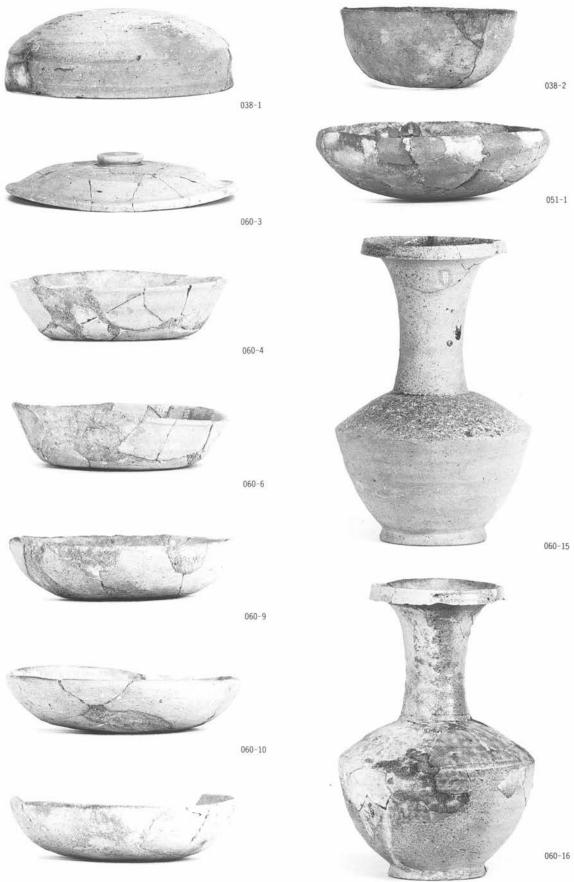


1. 竪穴住居015出土遺物





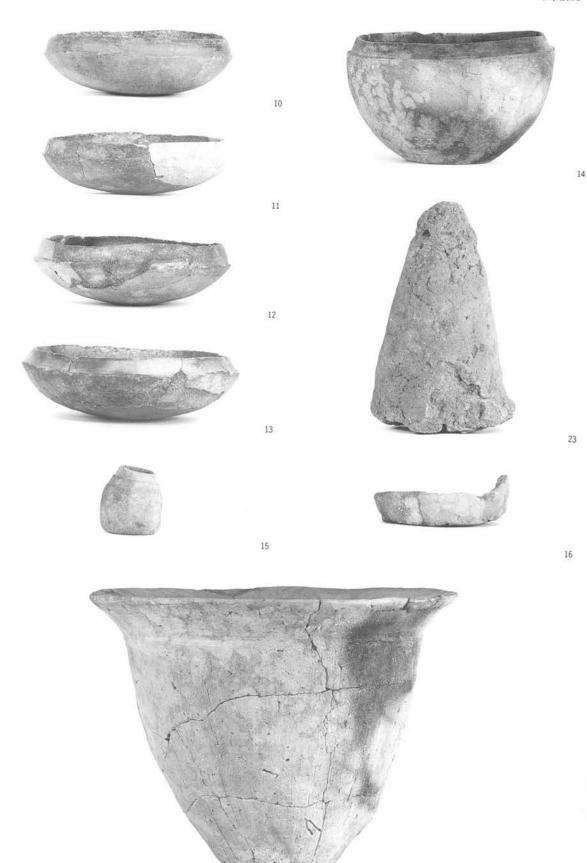
古墳022 • 031 • 032 • 033 • 039 • 054出土土器

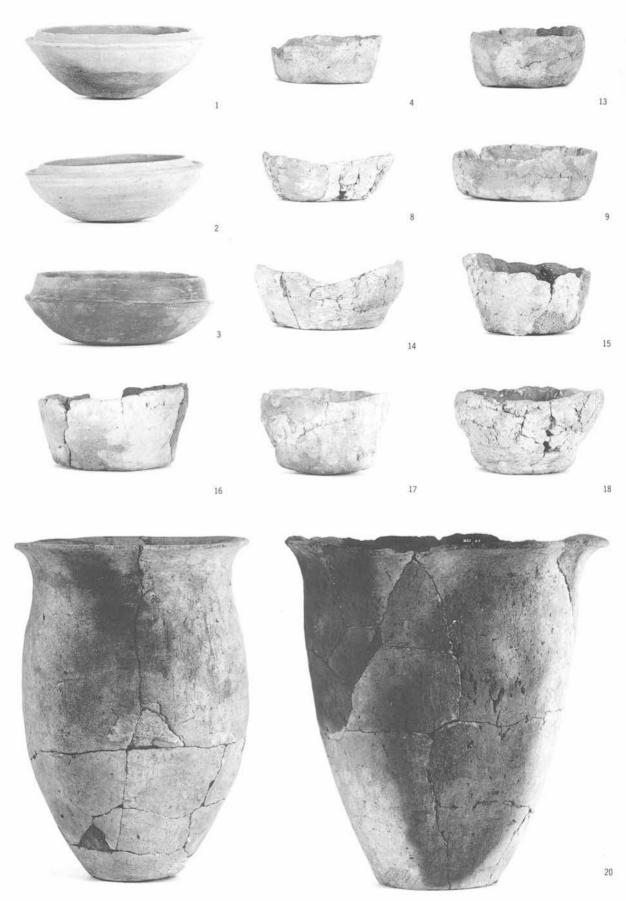


060-11

古墳038 • 051 • 060出土土器



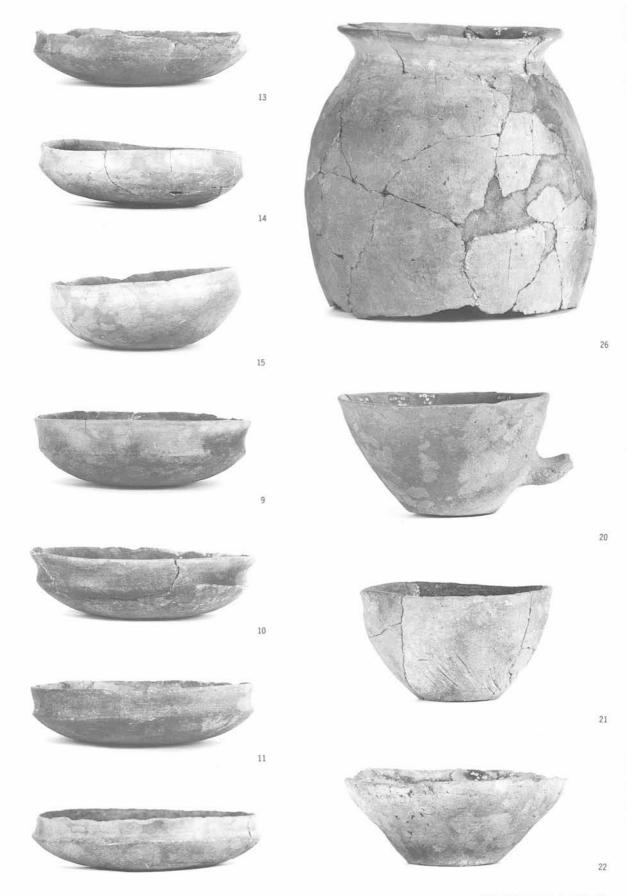




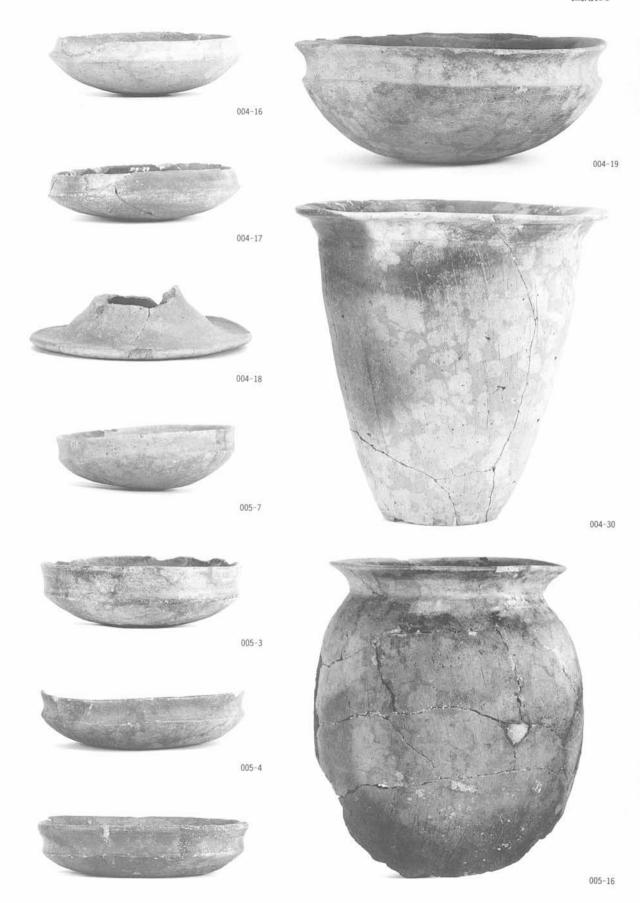
竪穴住居003出土土器



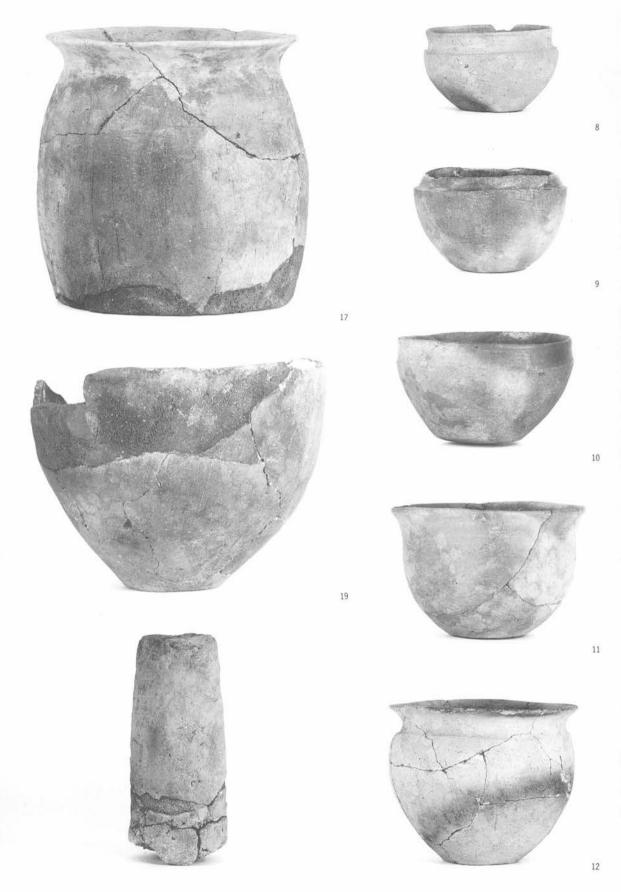
竪穴住居004出土土器(1)



竪穴住居004出土土器 (2)



竪穴住居004 • 005出土土器



竪穴住居005出土遺物



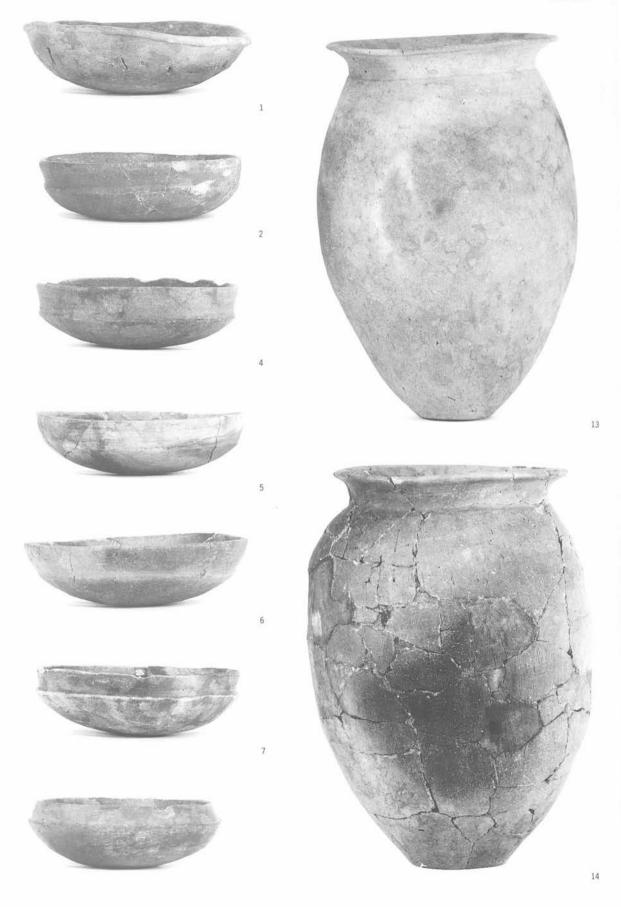


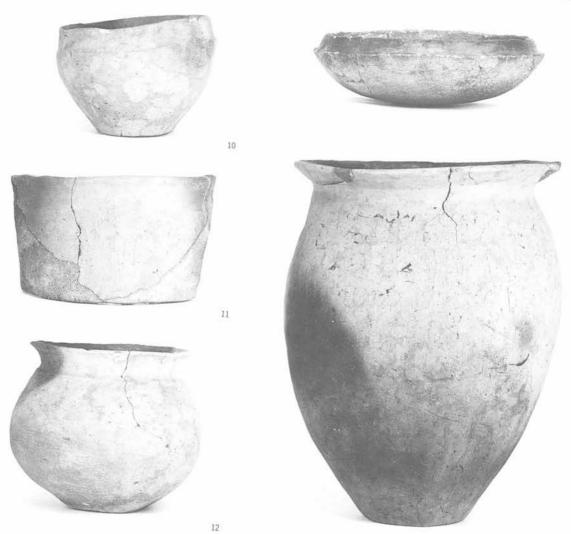
14



20

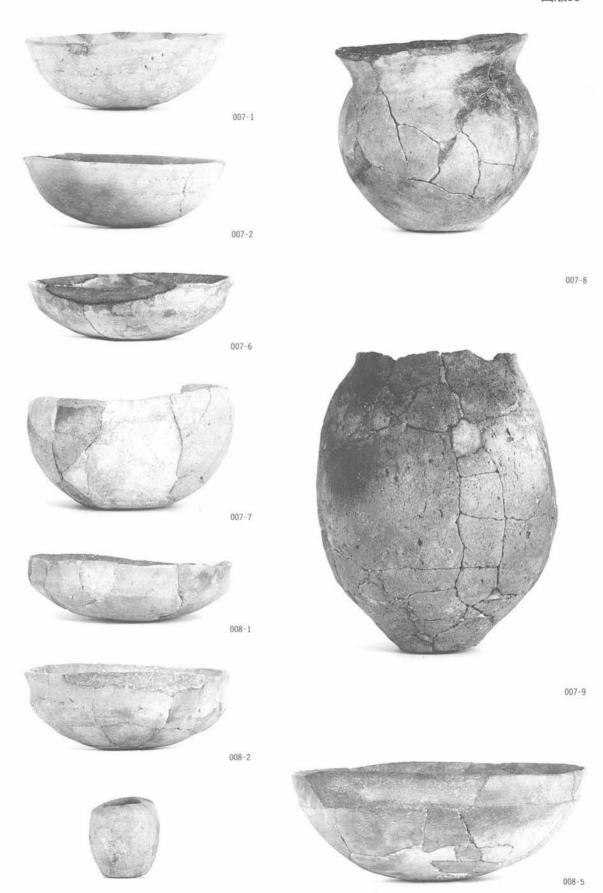
15





15

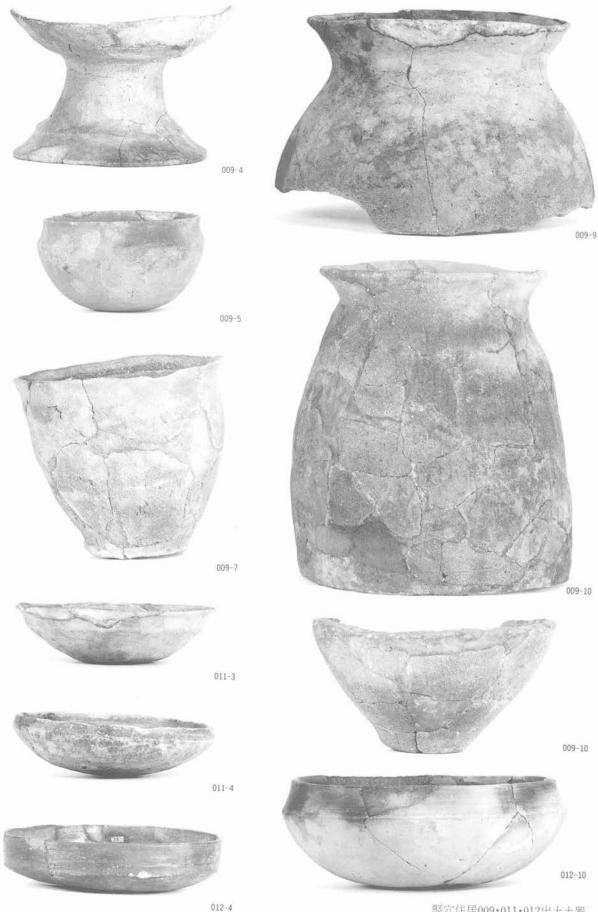




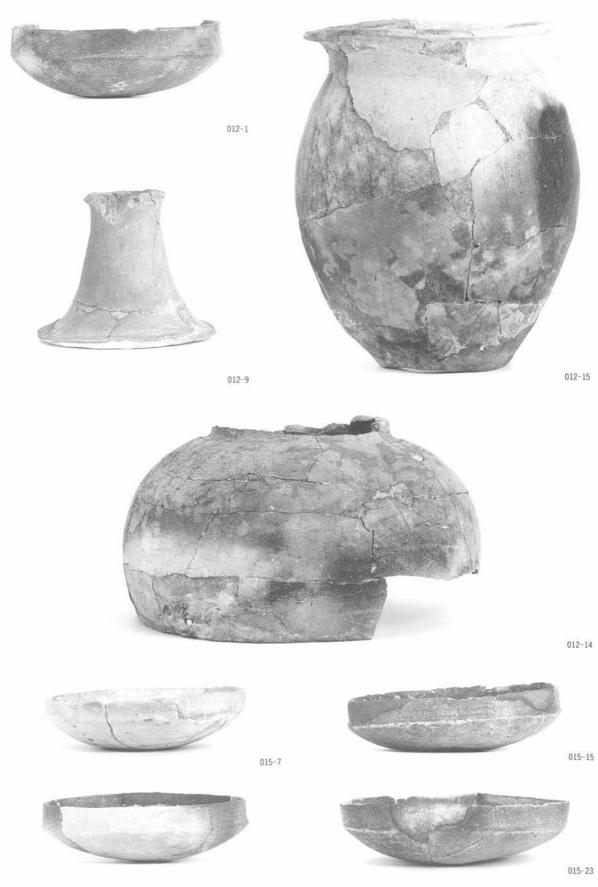
竪穴住居007・008出土土器



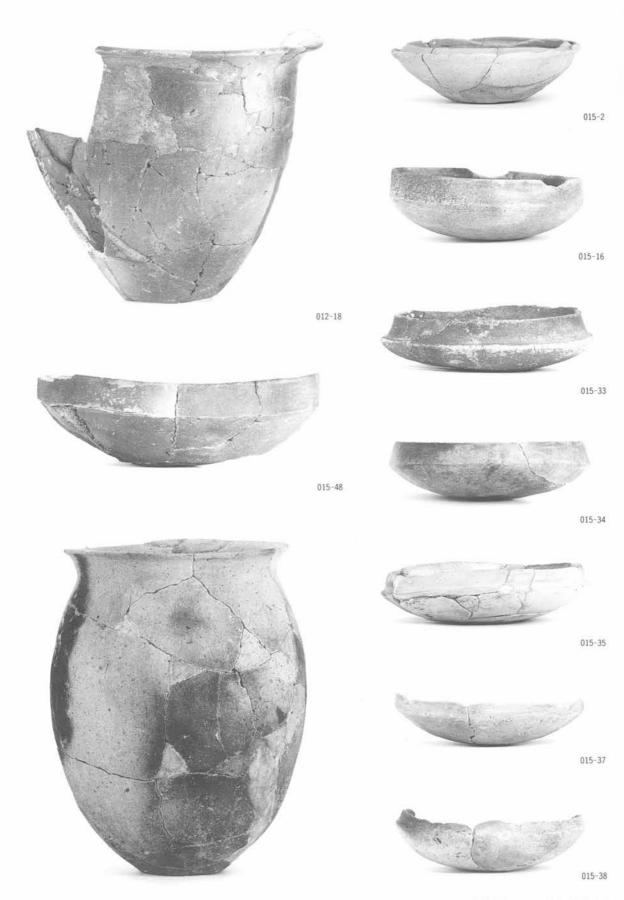




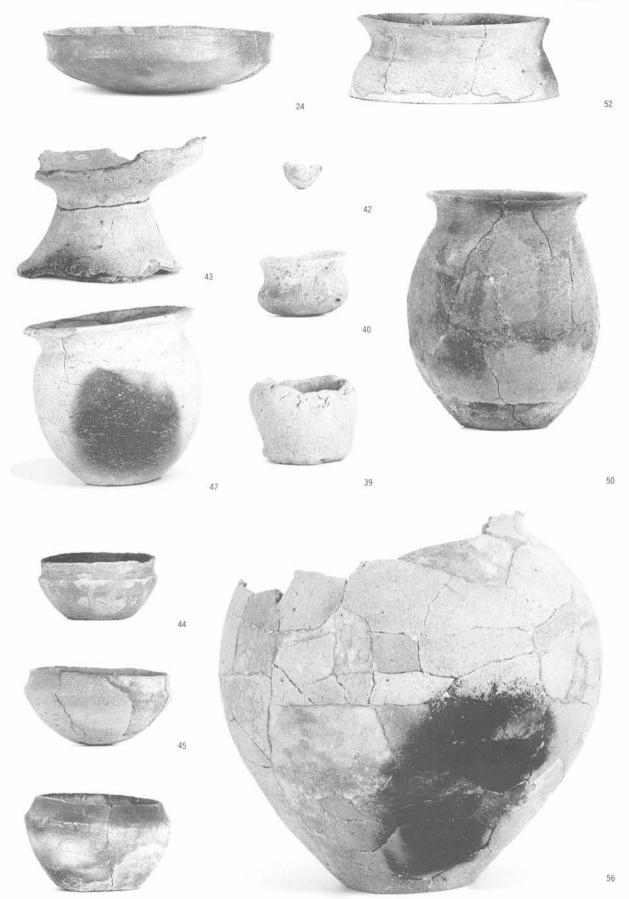
竪穴住居009 • 011 • 012出土土器



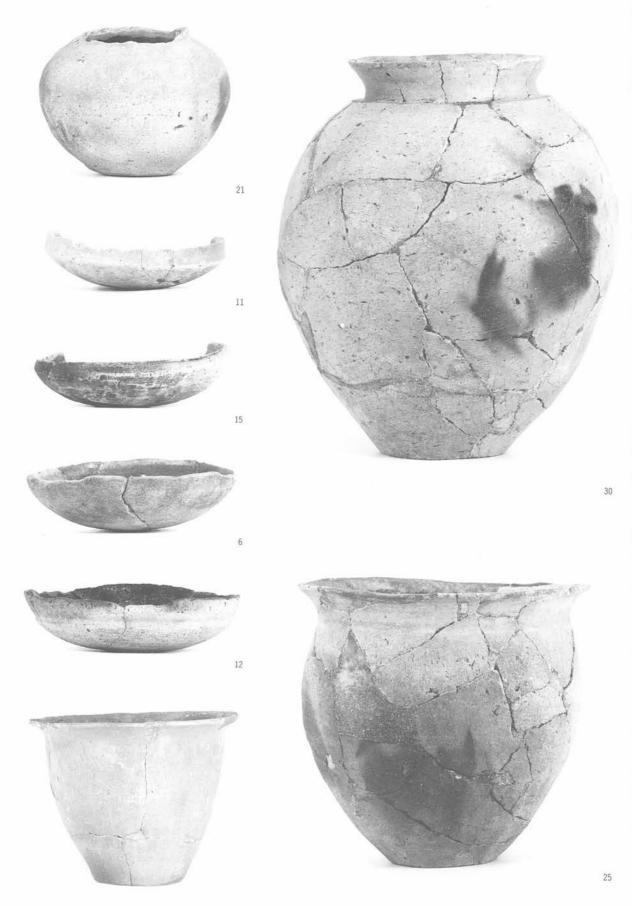
竪穴住居012 * 015出土土器 (1)



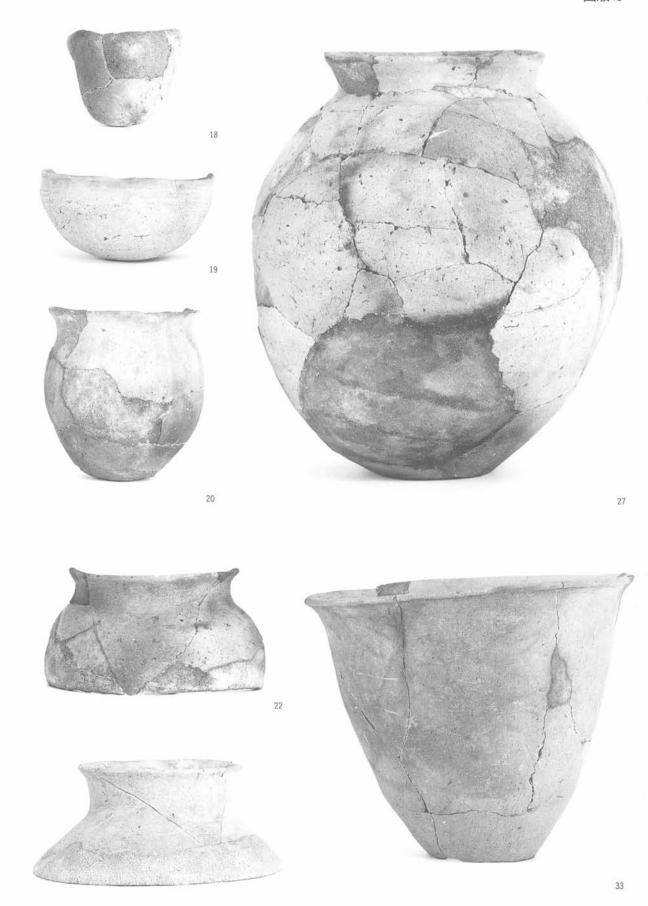
竪穴住居012 • 015出土土器 (2)



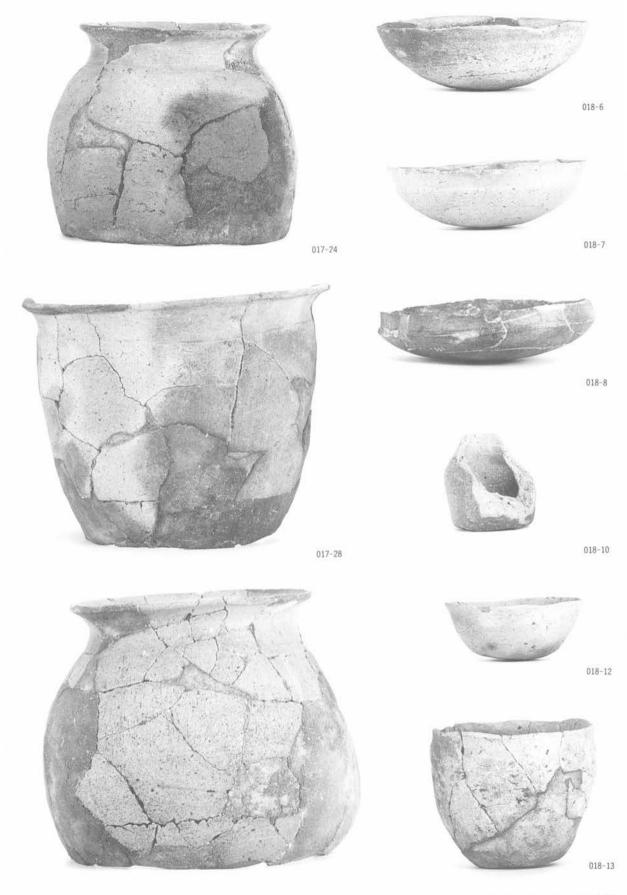
竪穴住居015出土土器



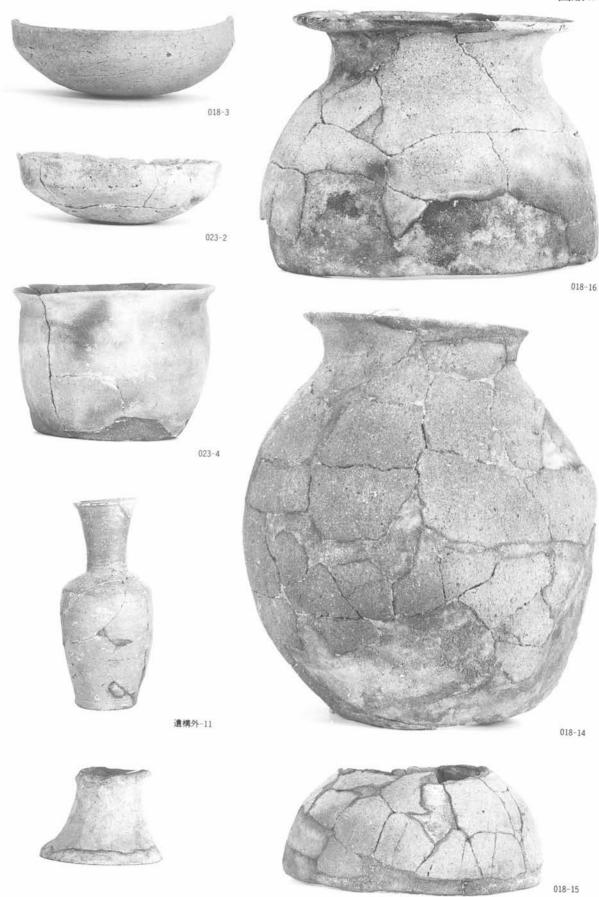
竪穴住居017出土土器 (1)



竪穴住居017出土土器 (2)

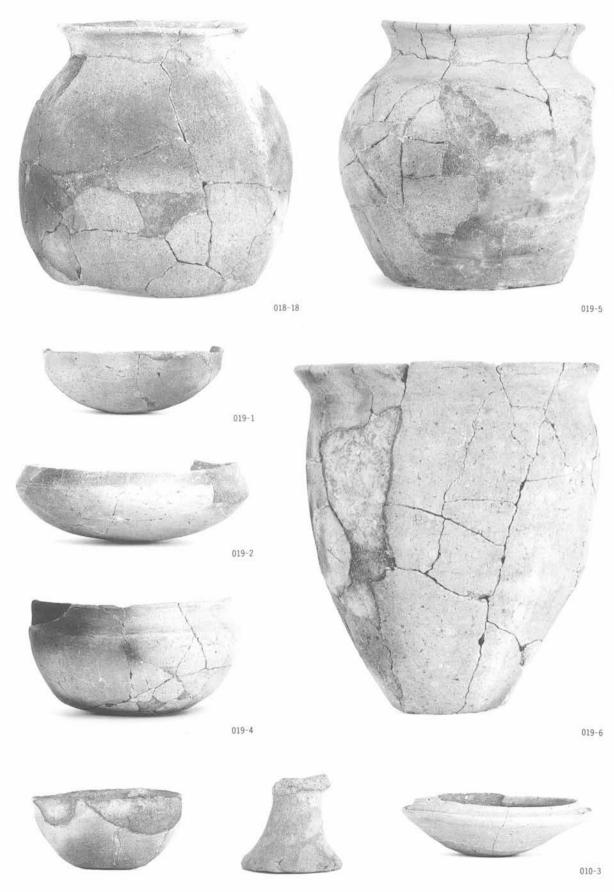


竪穴住居017・018出土土器

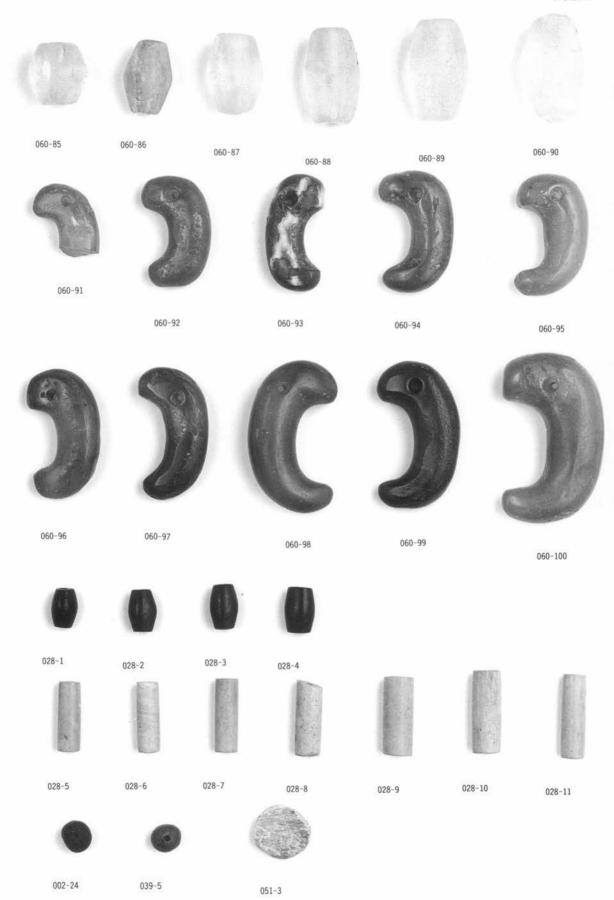


020-2

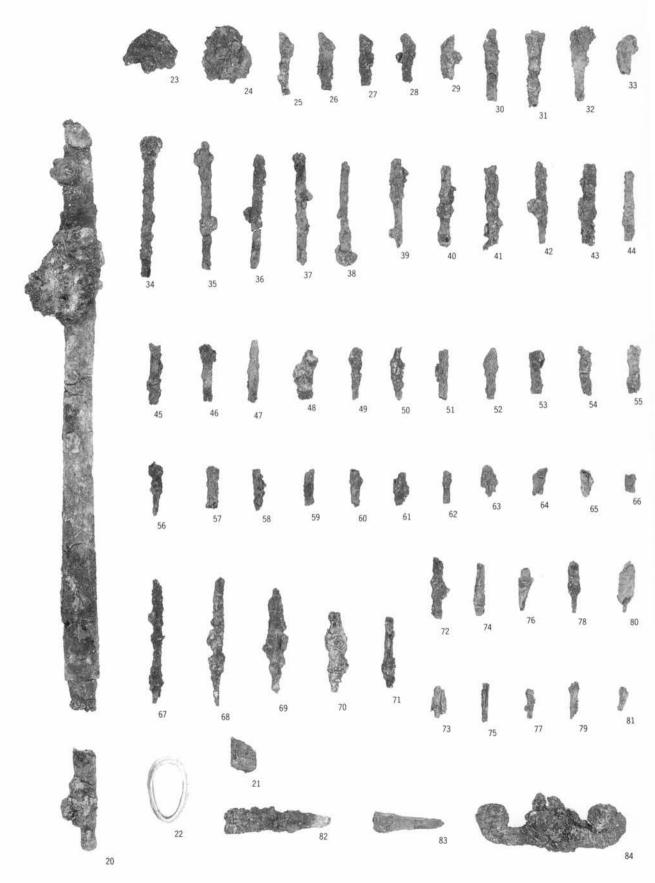
堅穴住居018・023、溝状遺構020、遺構外出土土器

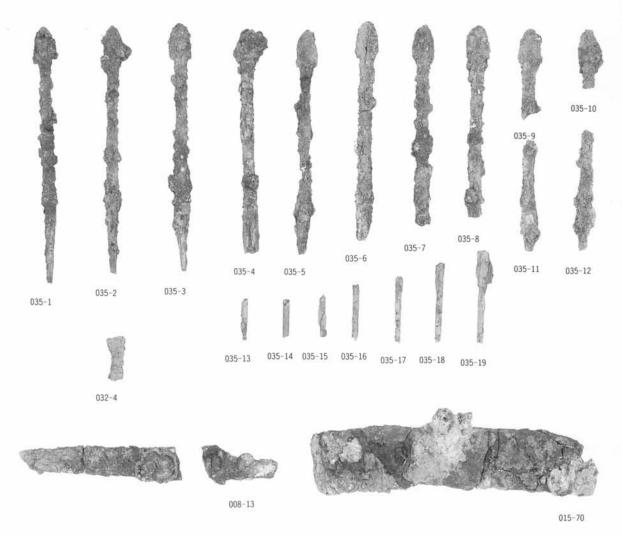


竪穴住居018・019、溝状遺構010出土土器

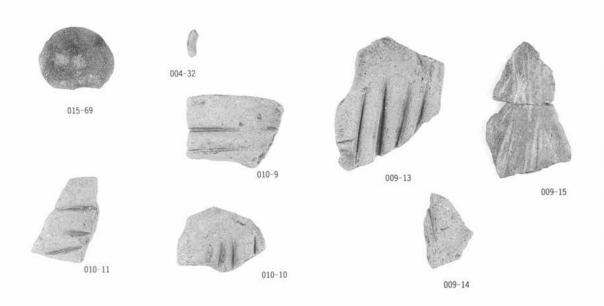


古墳039·060·051、土壙墓028、竪穴住居002出土玉類·石製品

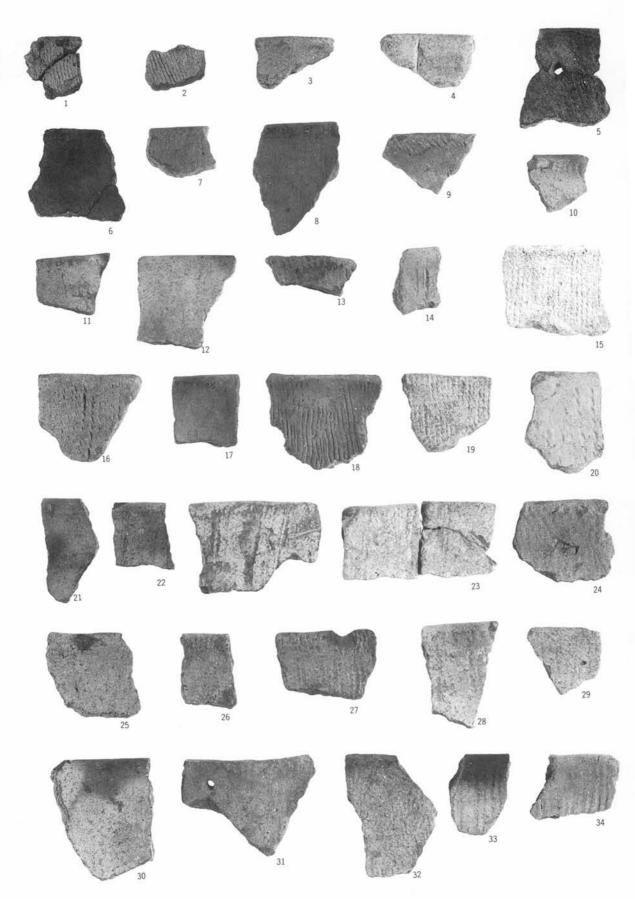




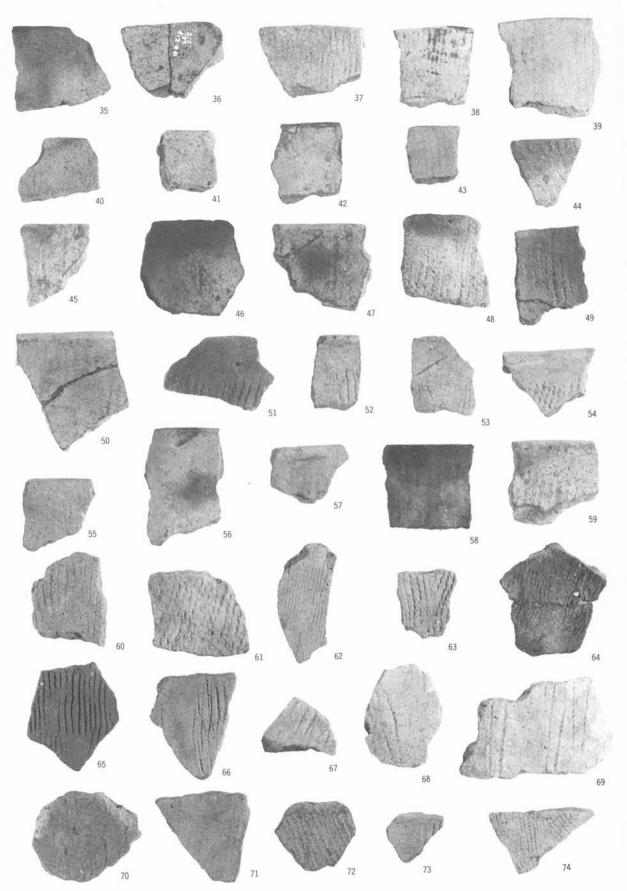
1. 古墳032、土壙墓035、竪穴住居008 • 015出土鉄製品



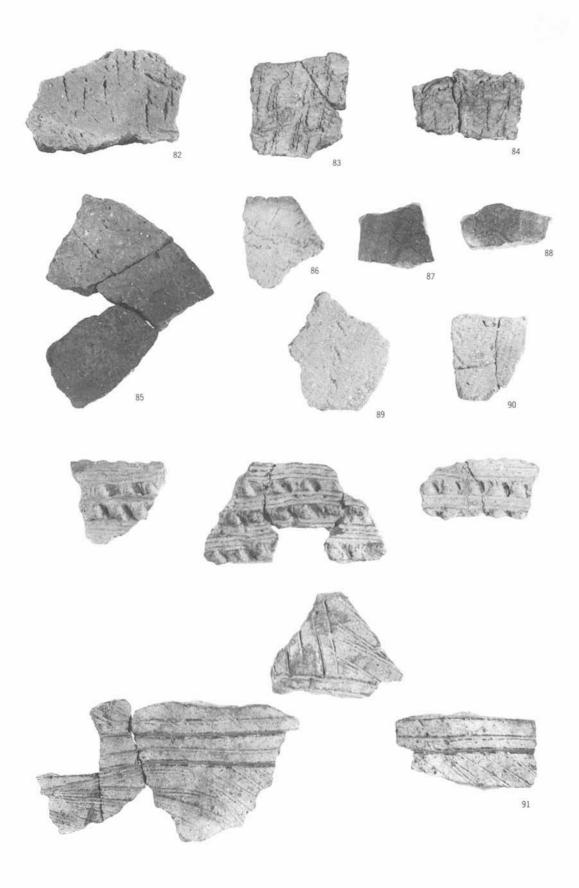
2. 竪穴住居004 • 009 • 015、溝状遺構010出土土製品類

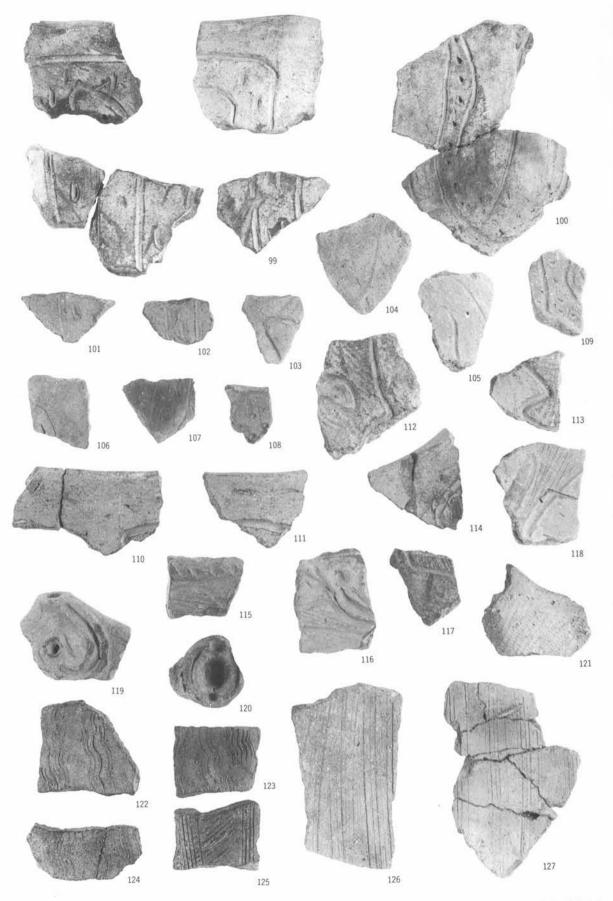


縄文土器 (1)

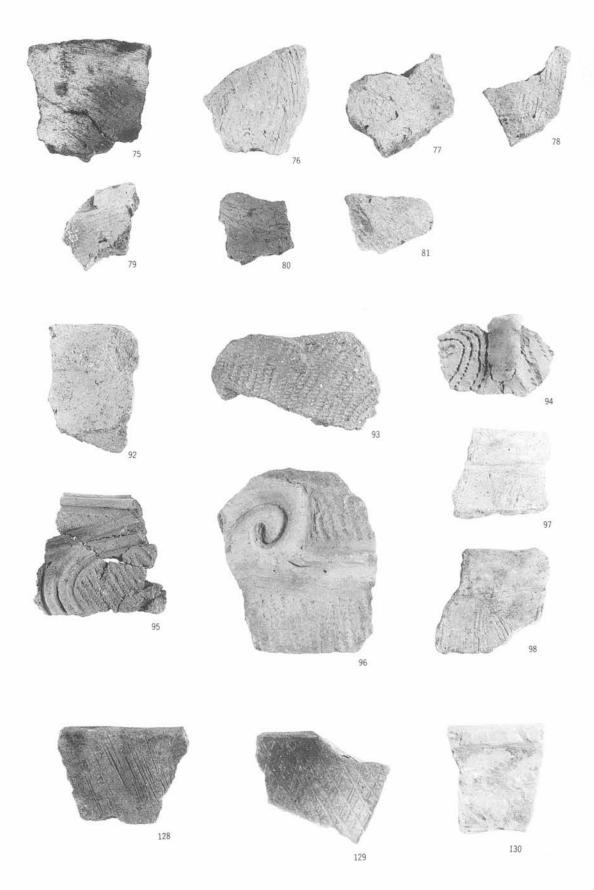


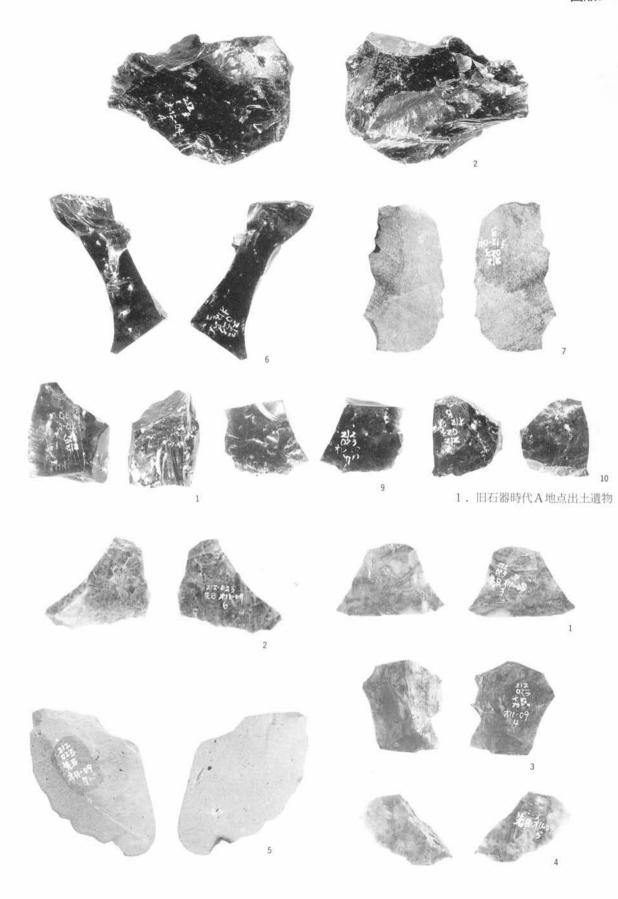
縄文土器 (2)





縄文土器 (4)

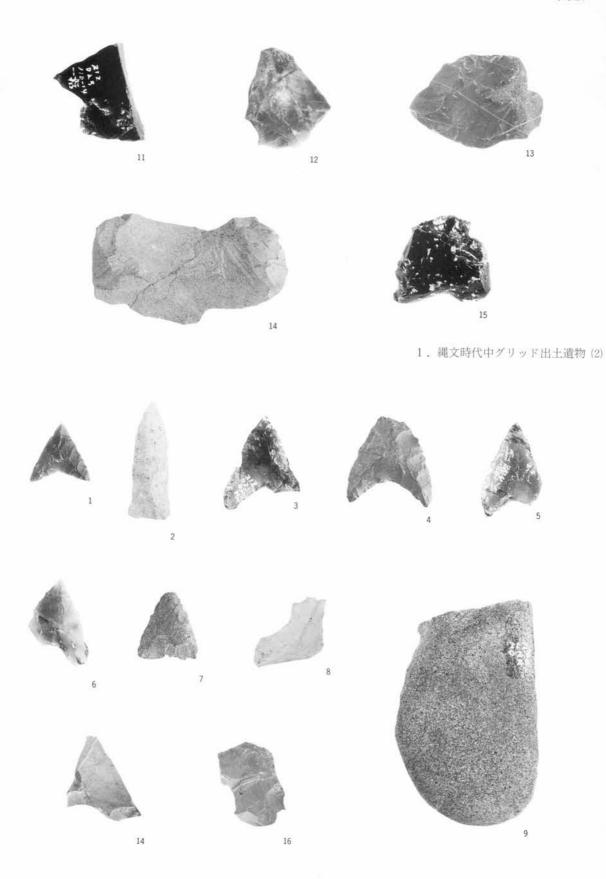




2. 旧石器時代B地点出土遺物



2. 縄文時代中グリッド出土遺物(1)



2. 縄文時代大グリッド出土遺物 (1)



1. 縄文時代大グリッド出土遺物 (2)

千葉県文化財センター調査報告第215集

佐倉市松向作遺跡

── 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX ──

平成4年3月2日 印刷 平成4年3月16日 発行

> 発 行 千 葉 県 土 地 開 発 公 社 千葉市市場町 7-9 ☎0472(22)9106

> 編 集 財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡無番地 ☎0434(22)8811

> 印 刷 株式会社 弘 文 社 市川市市川南2-7-2 ☎0473(24)5977